たきび

たかとりの10年誌

ーともに生きるまちづくりのあゆみー

特定非営利活動法人　たかとりコミュニティセンター

たきび

たかとりの10年誌

ーともに生きるまちづくりのあゆみー

特定非営利活動法人　たかとりコミュニティセンター

目次

はじめに
神田 裕

たきびでたどるたかとり 4
宮沢 之祐

たきびより 75

たきび111号 91

「たかとり」の歩みをつないだもの 104
金冶 宏

たかとりの10年 ー救援活動の中で 106
鈴木 迪子

たかとりと私 107
吉富 志津代

震災の出会いから生まれた
コミュニケーションの豊かさ 108
神田 裕

たかとり救援基地10年誌作成のためのアンケートより 119

たかとりコミュニティセンター10年史 129
金冶 宏（編集）

たかとりペーパードーム、台湾に移築・新たな使命 152
速水 晴子

生活感と自由な空気に魅了されて 154
日比野 純一

かんちゃん日記 asutaiten編 155
神田 裕

あとがき
10年誌編集委員

たきび

たかとりの10年誌

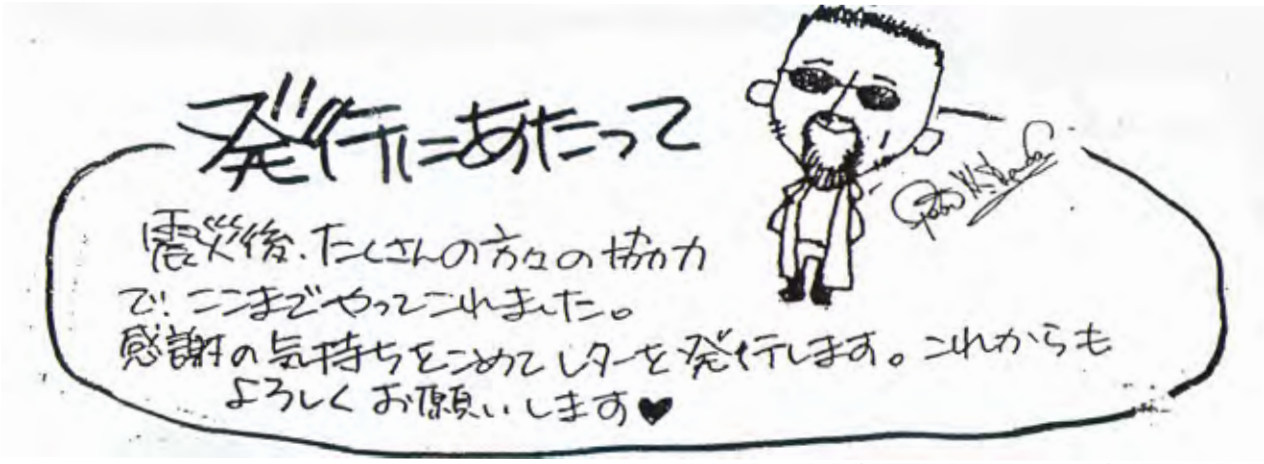
ーともに生きるまちづくりのあゆみー

特定非営利活動法人 たかとりコミュニティセンター

はじめに

ちょうど寝入りばなだった。ベッドの上で体が揺れ動くのを感じた。するとすぐ建物が軋む音が聞こえ、部屋ごと飛ばされるのではないかと思うほどの大きな揺れが始まった。「あかん」とひとこと声に出したのを覚えている。布団を頭からかぶり揺れが収まるのを待った。長かった。怖かった。ベッドから這い出そうとするが真っ暗であらゆるものが床に飛び散り足を置く場もなかった。何とか部屋の戸口まで進んで行き力いっぱい扉をこじ開けた。2階の窓から外を見たが真っ暗闇で何も見えなかった。ただ遠くで火の手が3箇所あがっているのが見えた。夢を見ているのだと思った。夢であってほしかった。ほっぺたをつねったら痛かった。階段を下りようとしたが土壁の残骸で埋まり滑り台のようになっていた。庭に出た。教会にいた8人は無事だった。空が白んできた。聖堂がぺちゃんこに潰れていた。周辺の家々も2階が1階になって傾いていた。大変なことになってしまったんだとやっと正気に戻ってきた。足元を見たら一部地面が陥没し始めていた。部屋から畳をはがし庭に敷き詰めた。門の外には裸足でパジャマ姿のまま布団を頭からかぶった人たちが歩き始めていた。頭から血を流している赤ちゃんを抱えているお母さんもいた。庭の畳の上で休むように呼びかけた。20人ほど集まった。目をつぶってもう一度2階の自分の部屋に戻り靴下を全部取り出した。しばらくすると火の手が迫ってきた。集まった人たちは避難場へとまた歩き始めた。もう一度建物の中に入り大事なものを鞄に詰めた。教会が燃え盛る中、ようやく消防用のホースがたどり着いた。消防士さんがノズルを持って火を消しに掛かるのだがほとんど水が出ない。よく見るとホースの途中が破れて噴水のようになっていた。噴水の出口を肩に抱えて別のところを消した。鎮火すると後は煙だった。夜にはやっと中学校の庭に避難した。一日目のすべては教会の壁の中のことだった。しばらくたってから知ったことがあった。地域の人たちは病院の寝たきりの人やつぶれた家に埋まっている人を救出していた。穴があったら入りたかった。二日目の朝教会に戻ってきた。多くのボランティアの人たちの支えによってこの10年の歩みは始まった。被災者の多くもボランティアだった。救援基地は壁に囲まれていたが、救援活動は壁を越えた。地域とNGOと教会がひとつになってまちづくりひとづくりの小さな芽がつき始めた。夢を見ているのだと思った。ほっぺたをつねったら痛かった。この夢はこれからもずっと見続けてゆきたい。

かんだひろし



■１日の終わり、焚き火を囲んだ

「たかとり」に、人が集まってきた。

カトリック鷹取教会（現・たかとり教会）は、阪神・淡路大震災で聖堂や集会所が焼失した。1月17日午前5時46分の地震発生から9時間も過ぎた午後2時半ごろ、東側一帯を焼き尽くした火が延びてきて、倒壊していた聖堂などに燃え移った。その焼け跡に、信徒やボランティアの手でバラック小屋が次々建ち、救援基地が形作られていった。支援の物資や寄付も全国から届くようになった。

１日の終わり、焚き火を囲んだ。その日、出会った人のことを、うれしかったことを、つらかったことを、語り合った。炎に頬をほてらせながら歌い、ダチ（友達）になった。だから、「たかとり」の今を伝える通信も、「たきび」と名づけた。

全国の支援者への活動報告として震災の年の3月22日に創刊。部数は4000部余りだった。B5版4ページに、数人が近況を書き、毎週発行した。「たきび」を読んだ人たちは、激励の手紙をくれた。「足りないものがある」と書けば、送ってくれる人が現れた。やがて大阪教区本部でも印刷し郵送してくれることになり、鷹取からの発送分は少なくなった。発行の間隔は次第に間遠になったが、震災10年目になっても2カ月に1回、約500部を郵送した。2005年5月17日付の第111号で紙での発行は終え、インターネット・メールでの情報発信を続けることになった。

ここでは「たきび」のバックナンバーを紐解き、「たかとり」のあゆみをたどってみたい。

ちなみに、創刊号が発行されたころ、兵庫県では避難所になお6万人弱が寝起きしていた。3月17日には火災の被害が大きかった密集市街地を中心に、復興土地区画整理事業と復興再開発事業があわただしく都市計画決定された。対象地区の住民は反発し、騒然としていた。神戸市長田区海運町3丁目にある鷹取教会も、区画整理の網が掛けられた鷹取東地区の西端に位置していた。

また、3月22日には、自衛隊によるがれきの撤去作業が海運町3丁目で始まっている。

たきび

カトリック鹿児島教会情報レター

発行にあたって

震災後、たくさんの方々の協力で、ここまでやってこれました。感謝の気持ちをこめて、レターを発行します。これからもよろしくお願いします♥

現場情報 ～ゴリラたちは今～

どかたの話　▼池田健一神父▼

お湯飲みにしますか？

そう言って熱コーヒーを煎茶を入れてくれたのは、A さんのおかあさんだ。ドラム缶のたき火にあたって冷えの出に入った身体をうるおすように、今日の作業で疲れのひとやすみから、足の先まで ポカリにまみれながら飲む。と見ては ダイコーだ。

こんな、毎日のボランティア生活の一番ホッとする時間だ。おばあさん、ラッパちゃんも、花子も、はるちゃんもみんな元気だ。この被災者たちの笑顔と明るい声が、今、大切だと ベッドの上に横たわっている神戸を、きっと元気にさせてくれると思う。

…もう そこまで 春がきている…

炊き出し班より

毎日、お昼は朝から下福公園で行なっている炊き出しは、地域のみんなのあたたかい コミュニケーションの場となりつつあります。はじめて来ての人は、食事がなくなるとトラブルが起きたりして、ヒヤッヤ ドキドキの毎日でしたが、今は みんな仲良くアットホームな雰囲気の中で 炊き出しは続いています。

先日、炊き出しに来ている人たち対象にアンケートをとりました。その結果を少し報告してみます。

- 今、居る所はどこか？ …… 自宅 38%、避難所 37%、仮設住宅 4%
- 食事はどこで食べるか？
  - 朝：避難所 37%、家で調理 6%、家で買って 12%
  - 昼：炊き出しで 58%、避難所 11%、家で調理 6%、家で買って 12%
  - 夜：避難所 38%、家で調理 17%、家で買って 24%
- 材料があれば 家で調理したい…… 70%

アンケートの中では、炊き出しを希望する声がかなりあり、現場での手ごたえと考えあわせてみても、まだ炊き出しは必要なのではないかと思います。なお、最近 このお知らせが、出はじめたことから、今後の炊き出しの方向性を考える一助として、新たにアンケート第2弾を作成中です。炊き出しに、ご協力下さっている みなさん、いつも ありがとうございます。これからも よろしく♥

物資状況

2月から、BRC教会の山田さんと田村さんが物資の管理をして下さっています。

今必要な物資は

女性用下着とハミガキ です。

物資の受け渡し場所は

家庭用品（トースター、ポット、石油ストーブ）etc

をもらっていく人が増えているとの事です。

毎日たくさんの方から、ぬくもりの感じられる数々の物資をいただいて、みんな喜び♥です。手作りのあたたかさ、心のこもったあたたかさに、みんなハッコリ！感謝しています。

ありがとう!!

保健室だより

仮設住宅 2箇所、"まりの保健室"では たくさんの先生方に来ていただいて診察してもらっています。毎週 木曜日には 気功の先生がマッサージなどをして下さっていますし、以前は 婦人看護婦さんが 2人来て下さっていました。

現在、カトリック医療班のボランティアの方々が お手伝いに来て下さっていて、毎日 午前中には 3人ほどで 地域を巡回しています。また 新しい試みとして、外のサロンで被災者の方と一緒にコーヒーを飲みながら、お話を聞いたりしています。

今週は、先月もいらっしゃっていた テルミー（温熱療法）の先生方も来て下さっています。なかなか好評です♥

ベトナム人関係 ～春よ来い～

被災地 神戸にも春が来ました。そして被災直後から、一生懸命活躍されたボランティアの方々との楽しいお別れの毎日がはじまりました。又、仲良くなった被災者の皆さん同志も、ライフラインの復活で、お別れの日がはじまっています。

彼女たちは、被災地に広場で遊びまわり、お母さんたちは テントの中で、内職をはじめ、お父さん、お兄さんは 仕事に出掛け昼はケレン寂しい公園ですが、夕方からは各テントで楽しい夕食のおいしい香りがただよいはじめています。18日には、電気がともり、テント村の人の心も明るくなりました。皆、春の花々に負けないように 頑張っています♥

青年情報

"みんなとつきあうたのしさが ここに僕がいる理由です"

ペンポスタ サーカスの興奮を 入った青年監督が また神戸に戻ってきました。今度は 被災地 鹿児島から 住民ができるまでのドキュメンタリーを 3年ごしで、つくろう というわけです。

今、彼は 鹿児教会のある 野田北部の町で 自治会の集会所 など を撮るため、走りまわっています。ここ、野田は 古い人が、この町を より住みやすい町にと、願い、これから どような町をつくっていくのか。被災者の方が 強く生きていこうとする姿、人間の 精神のしなやかさを 撮りたい という 気持ちで 神戸にいると 言っておられます。

でも、やはり ポイントは "みんなと つきあうたのしさ" なんだって…♥

神ちゃんの動き

神ちゃんは、毎日 多忙な人である。

教会関係の 評議会、自治会の会議、ベトナム人関係の会議 など… 会議づくしの生活。

神ちゃんに会議のない日は "ない" のである。

先日、会議の あい間に カレーを召し上がっておられた 神ちゃんに、若く 美しい お嬢さんが なんか ちょっと 言った。

"くちづけ いりませんか？"

"えっ…!!!" 神ちゃんの目は 輝いていた（ほう…）

しかし、それは 一瞬だった。"フクヨンリケ いりませんか" という 言葉だと 知ったとき、彼の目は 光を失っていた（だよ…）

という事で、神田神父様は 連日 多忙だ。

ではあるが、元気に 走りまわっておられます。

頑張れっ 神ちゃん

出前チーム より

～長楽小学校の訪問で～

長楽小学校に 避難生活している中の ひとり、65才の男性 M氏は、震災以来、一人暮らしをされていましたが、足が不自由なため、食べない、睡眠を 所定通りに 不得意な点が 気になるようです。食事は、同室の方々が してくださるので 心配なんの ですが、話し相手がいないので、私たちが 行くのを 楽しみにして下さっています。私たちは、M氏と 地域の生活や、地域の昔の話をしたり、雑談したりしています。

お知らせ

たかとり教会では、ボランティアを募集しています。

時に

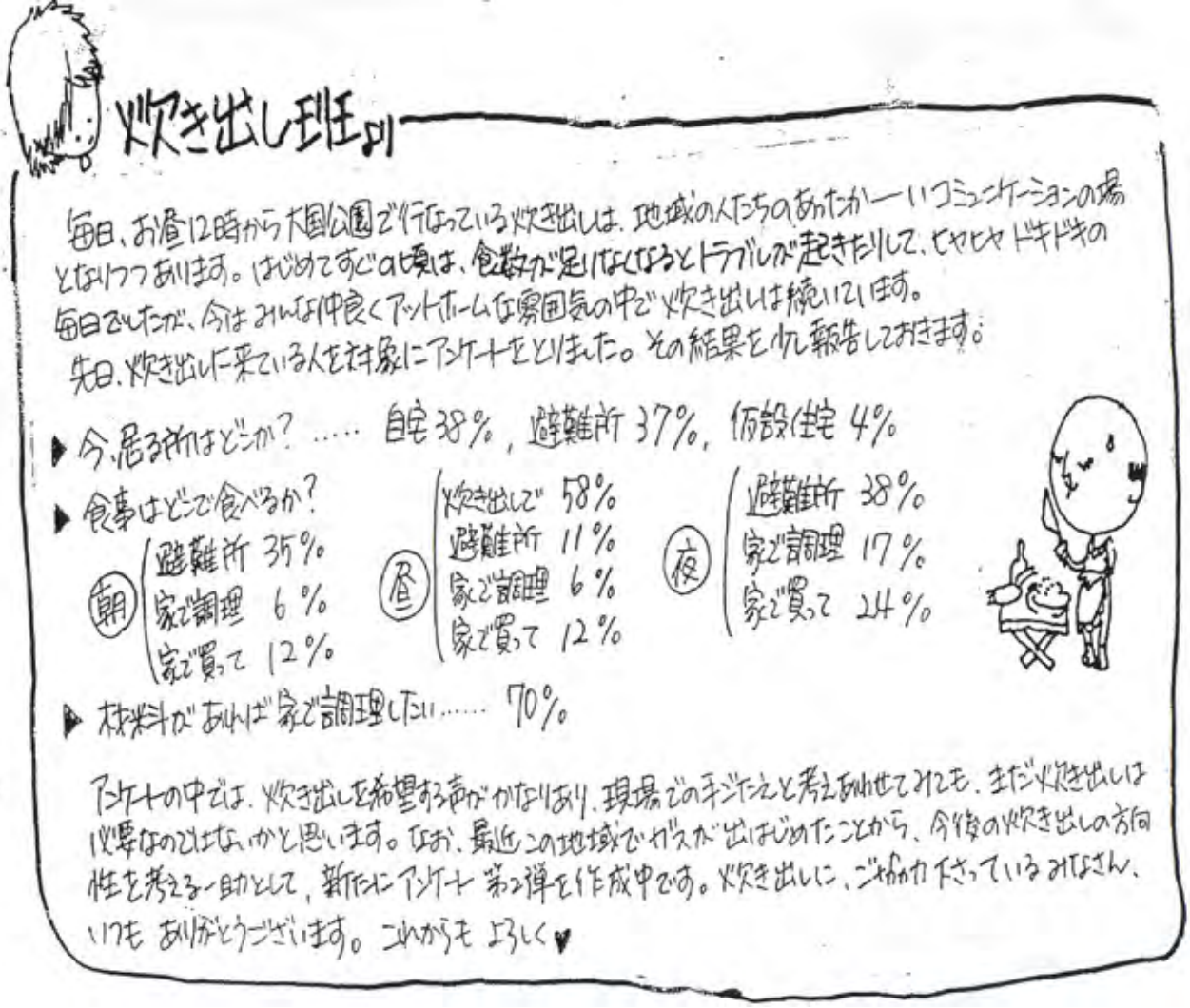
大工技術などの指導をして下さる方

長期のボランティア（自炊、宿泊 どちらでも OK♥）

ボランティアしてみようと思われる方は、まず お電話ください。

▶（078）731-8300　担当：マスダ

お待ちしております～♥



炊き出し班より

毎日、お昼12時から大国公園で行なっている炊き出しは、地域の人たちのあったかーいコミュニケーションの場となりつつあります。はじめてすぐの頃は、食数が足りなくなるとトラブルが起きたりして、ヒヤヒヤドキドキの毎日でしたが、今はみんな仲良くアットホームな雰囲気の中で炊き出しは続いています。
先日、炊き出しに来ている人を対象にアンケートをとりました。その結果を少し報告しておきます。

▶ 今、居る所はどこか？ …… 自宅 38%，避難所 37%，仮設住宅 4%

▶ 食事はどこで食べるか？

朝
- 避難所 35%
- 家で調理 6%
- 家で買って 12%

昼
- 炊き出しで 58%
- 避難所 11%
- 家で調理 6%
- 家で買って 12%

夜
- 避難所 38%
- 家で調理 17%
- 家で買って 24%

▶ 材料があれば家で調理したい…… 70%

アンケートの中では、炊き出しを希望する声がかなりあり、現場での手づくりと考え合わせてみても、まだ炊き出しは必要なのではないかと思います。なお、最近この地域でガスが出はじめたことから、今後の炊き出しの方向性を考える一助として、新たにアンケート第2弾を作成中です。炊き出しに、ご協力下さっているみなさん、いつもありがとうございます。これからもよろしく♥

■１日だけのボランティアのつもりが…

初期の「たきび」は毎週発行だったから、編集チームはネタ探しに忙しかった。その一人、青木（旧姓・浜崎）朋子さんは当時19歳。ショートカットの元気な神戸女子大学1回生だった。大学は震災のために3月22日まで休校になった。

神戸市北区の自宅は、ほとんど被害がなかった。家族ともども鈴蘭台教会の信徒だったことから、母の勧めで地震の10日後、人出が足りないという鷹取教会の応援に訪れた。信者であろうとなかろうと受け入れ、多彩な人たちが集う鷹取教会の雰囲気に親しみがわいた。1日だけのボランティアのつもりだったのが、初めて訪ねた日から泊まり込んだ。朋子さんは大学の再開後も活動を続け、大学を卒業するまでの3年余り、鷹取に通い詰めることになる。

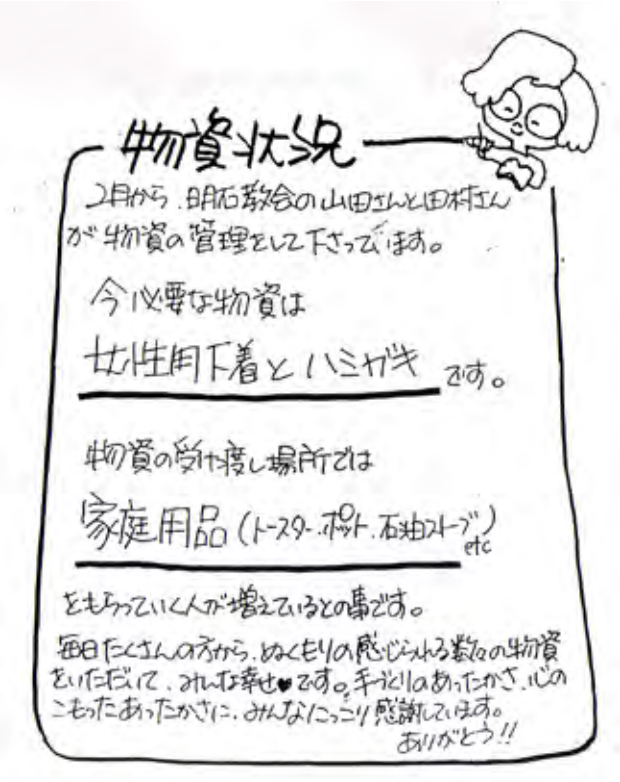
最初の仕事は、年輩の信者と一緒に、下着を配り歩くことだった。被災しながらも避難所になじめなかったり、家財が心配だったりして、ブルーシートを張った自宅に戻った被災者も少なくなかった。避難所を出てしまった被災者には支援が届きにくい。そんな人たちにも救援物資を届けようと、一軒ずつ歩いたのだった。数日すると、噂が鷹取界隈に広まった。「このごろ、孫の男の子と一緒に下着を配って歩くおじいちゃんがいるで」

炊き出しにも思い出がある。朋子さんは毎日通ううち、「炊き出しのプロデュース」担当になった。炊き出しに来てくれる人の日程調整をした。炊き出し当日は、並んでいる人の数を数える。もし列が長すぎて、炊き出しの当たらない人がいたら、代わりに何か援助物資を手渡した。

鷹取教会に近い大国公園で、いつも炊き出しに並ぶおじさんと朋子さんは顔なじみになった。地震で妻と飼い犬を失ったという。おじさんは地震の日の出来事を語り、「助けられなかった」「死にたかった」と言葉を継いだ。そう話すたび、おじさんは涙を流し、朋子さんも泣いた。

「かける言葉が見当たらなかった。何もしてあげられず、つらかった」。朋子さんはそう振り返るけれども、悲しみを共有してくれる人がいたことを、おじさんはきっと忘れないだろう。

教会のある海運町3丁目を含む野田北部地区は、震災前の人口が約2600人だったが、震災による死者は41人に達した。海運町3丁目だけでも5人が亡くなった。地区内の住居の52%が長屋で、住民の5人に1人が65歳以上の高齢化した街だった。戦災を免れ、戦前からある木造の長屋が路地に密集していた。死亡者の大半が圧死だったとみられる。1階部分がぺしゃんこに潰れたり、2階部分が路地に飛び出したりした。地震の直後に発生した火災は火の手を伸ばし、海運町2、3丁目はすっかり焼けてしまった。



■バイク隊、駆ける

当時28歳になったばかりの平松正人さんもカトリック信徒。鷹取教会の神父神田裕さんとは旧知だった。大阪府堺市に住む会社員だったから、1月17日、18日は出勤し、19日に休みを取った。愛用のオフロード・バイクで、西宮市甲陽園にあった司教館に向かった。

「何か役に立ちたかったし、教会の仲間意識もあった。知り合いが困っているのだから」

大阪の信徒仲間7、8人がバイクで集まった。その「バイク隊」が、教会の被害状況と、生活物資をどこに配るかを調べた。被災地の道路はひどい渋滞で、車での移動はとても無理だった。中山手教会（現・神戸中央教会）を被災地救援の前線基地にするため、平松さんは司教館との間を1日に3、4度も往復し、物資を運んだ。

1月22日、夕闇にヘッドライトの明かりを連ね、バイク隊が初めて鷹取教会を訪れた。大歓迎された。平松さんは、神父の神田さんが髪を短く刈ったのを見て、「復興するぞ」と気合が入ったという。一週間後、教会の建物の解体を手伝いにまた鷹取へ。そして、平松さんは毎週末、鷹取に通い、泊まり込むようになった。

小屋の建設などに携り、「救援基地の前夜」にかかわることになった。頼まれて周辺の被災家屋の解体を手伝ったりもした。家の中から必要な物を取り出し、ロープを掛けて倒した。訪ねるのが一週間ごとだから、街の変化がよく分かった。「1週間という刻みがあるから見えた」という。

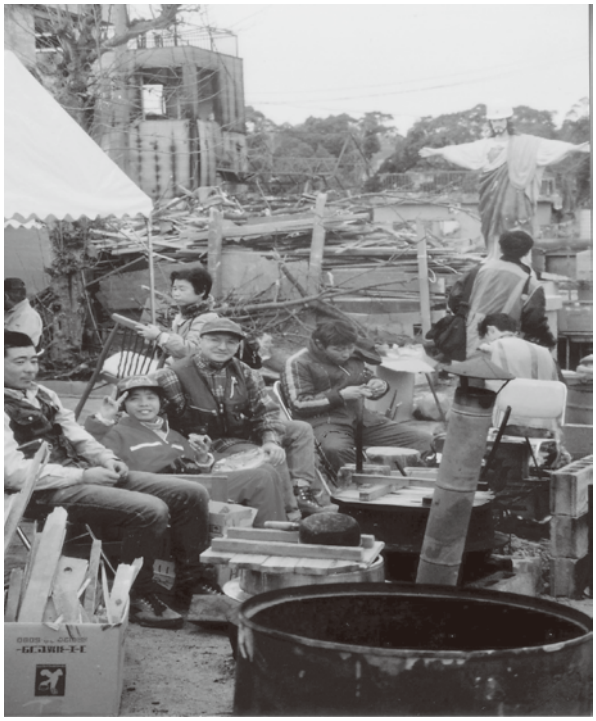
平松さんは「堺の教会の代わりに鷹取教会に来ている感覚」だった。大阪の信徒たちに、見たままの神戸の実状を伝えようとも心がけた。

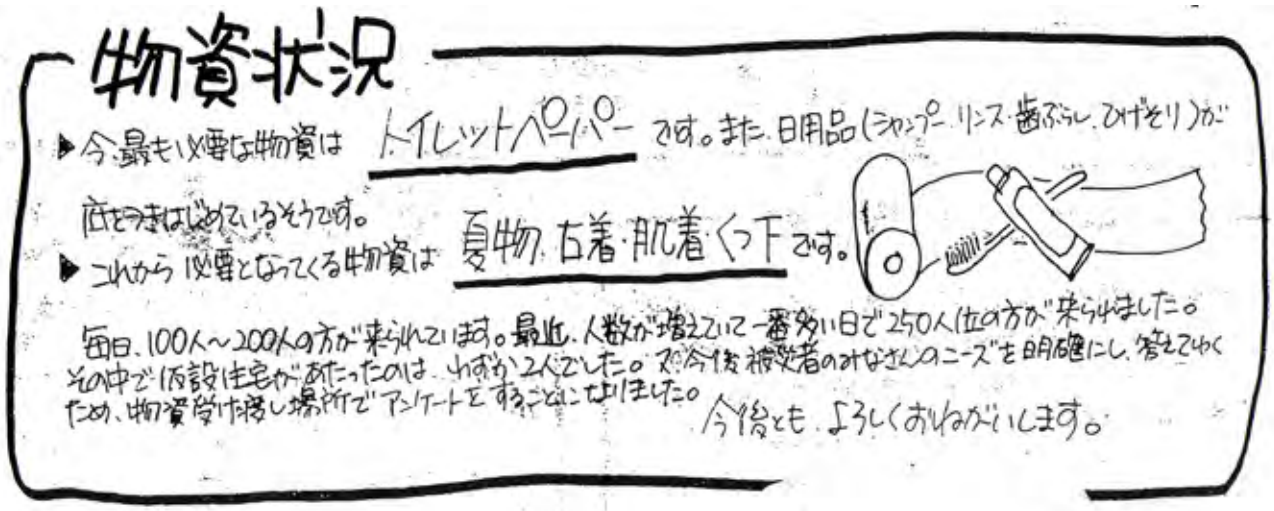
金曜の夜、渋滞をすり抜け、バイクで西へ進むほど街の灯りが消え、道の両側には闇が広がっていた。「でも、『これからやるぞ』という希望と、人の温かさが神戸にはあった。大変な状況なのに、譲り合いや思いやりがあった」。街角で「来てくれたんか、ありがとう」と、見ず知らずの人によく声をかけられた。必要とされていると実感したという。「できるだけ神戸にいたかった。会社で自分が必要とされているのとは、全く違う手応えがあった。大阪の明るさが、うそっぽかった」

鷹取教会は、震災直後から信徒であるなしにかかわらず、ボランティアを受け入れた。むしろ信徒でない者の方が、数の上では多かった。週末に平松さんが訪れると、初めて来たボランティアと勘違いされて「まず名前を登録して」と呼び止められることもあった。それぐらい次々にボランティアがやって来た。

教会がボランティアの集う基地になっていくことを、「自分たちの居場所が削られるようで、信徒の人たちは複雑な気持ちだったかも知れない」と、平松さんは指摘する。「これからも、まだ来るんか」と、教会の信徒に問いかけられたこともあった。一方で、夜、焚き火にあたりながら「ま、一杯やれ」と、信徒から勧められることもあった。

困惑と感謝。そのどちらも平松さんはたかとりで感じた。





■ゴリラ・ネームでたかとりの住人に

被災者に必要な物資は、避難生活の状況や季節の変化とともに変わっていった。震災の2年前から教会敷地内で暮らしていた信徒で、画家の和田耕一さんは、震災直後をこんなふうに振り返る。

「まず物が欲しかった。物が届いたら、次はそれを被災者に届ける力が欲しかった。その次には、医療であったり建築であったり自転車のパンク修理であったり、技術が欲しかった。それと、住んでいる人に必要だったのは希望と夢。そのふたつを呼ぶのは、そばにいてくれる人の笑顔だった。だから、文字どおり『スタンド・バイ・ミー』、それだけでよかった」

全国からやって来た若いボランティアたちを指揮したのは、和田さんだ。

ボランティアに求められた具体的な仕事は当初、大破した建物の解体などの作業だった。男性ボランティアたちがそうした高所での力仕事を担ったが、作業に慣れていない彼らに和田さんは「ゴリラになりきれ」と教えた。「屋根に登るときに、自分を人間やと思うな。立たずに四つんばいでやれ。ゴリラなんだから、落ちるのはあかん」というわけ。和田さんは彼らを「ゴリラ隊」と命名し、その呼び名が定着する。

教会の記録によると、ゴリラ隊は3月に計30件の出動をした。解体の手伝い、荷物の取り出し、避難先への引っ越しが大半を占める。4月の出動も計29件。被災家屋にブルーシートを掛ける作業は、3月には1件だけだったが、雨が多くなった4月には8件に急増した。

10年後の新潟県中越地震では、強い余震が多発したという事情もあるが、ブルーシートを掛ける作業は危険とされ、ボランティア・センターの指導でボランティアの仕事から除外された。「ボランティア元年」のゴリラ隊は、ずいぶんゲリラ的だった。

一方で、女性ボランティアたちは当初、ゴリラ隊たちの食事の用意や洗濯、それに物資の分配、炊き出しの手伝いなどを担った。こちらは「ウサギ隊」と呼ばれるようになる。名付け親は、やはり和田さん。「とくにウサギでないといけない理由はなかったけれど、まぁ、ゴリラと対でそうなった」和田さんは、訪れるボランティアたちのニックネームの命名者にもなった。東京から来たやんちゃな高校生2人には「竜」「虎」だったり、ベビーフェイスの学生だから「ベービー」だったり、会ったときの第一印象による即興の命名だった。

最初から皆がなじんだわけではない。「タロー」は2月初旬、垂水区の児童養護施設「神戸少年の町」から鷹取教会の神父、神田さんを訪ねてきた。ごんたな16歳だった。地震後、加古川市にある職業能力開発促進センターを無期停学になり、少年の町でごろごろしていたら、園長に叱られた。「強制的に、鷹取教会での実習を申しつけられた」という。神田さんは不在で、和田さんにいきなり、「じゃ、おまえはきょうからタローや。釘抜き、しとけ」と言い渡された。まだボランティアが少ない時期で、最年少だったから、最初の若い男の子ぐらいの理由で、命名されたのだろう。でも、そのときは「何、わけのわからんこと、言うてるんや」と、腹が立った。

さぼっていたら、建設中の宿舎の屋根に押し上げられた。当時は高い所が苦手で、大工仕事もしたことがなかった。脚立は外されてしまったから、怖い屋根の上から逃げ出せなくなった。トタンを取りつける作業をした。夕方、帰ろうとしても「まだまだ」と、脚立をかけてくれず、夕食の準備ができてやっと下ろしてくれた。

日帰りのつもりだったタローは、その夜、教会の一室で寝袋に潜り込んだ。帰らなかった理由をタローはこんなふうに説明する。「たき火の周りにいたら、『寒いやろ』って、飲み物をくれた。それがお湯割りで、すげぃおいしかったから」

ガレキの裏で隠れてたばこを吸っていたら、「あほ、火事になるやろ。吸うなら堂々と吸え」と、どやされた。酒もたばこも、叱られない。テレビもないし、風呂もないけれど、そこはなんだかおもしろい場

所だった。タローは3月下旬まで少年の町に帰らなかった。「酒もたばこも、ちっぽけなこと。もっと大事なことがある、ということやったんやろうなぁ」。あとから、そう思った。

朝、6時に起こされて、火を起こす。教えてもらって、できるようになった。湯を沸かす。起きてきた人がその湯でコーヒーを飲む。救援物資は夜中にも到着する。大急ぎで搬入する。宿舎や倉庫など建物を建てる。雨漏りを直す。やるべき仕事はいくらでもあった。

被災した家の解体を初めて手伝いに行った日、その家のおばあちゃんが「どうしても取り出したい写真がある」という。崩れかけの家に入って見つけてきたら、おばあちゃんは大喜びしてくれた。そんなに喜んでくれることがタローには不思議だった。喜ばれるのに、慣れていなかった。

「けんかして、いつ野垂れ死にしてもいいと思ってきた。でも、その日、初めて、生きていてよかったと思った」

父親の顔だけわずかに記憶している。小学1年のときに大阪の施設に入れられ、「問題を起こして」神戸に移った。1年後に地震に遭った。それまでの16年間、邪魔者扱いされているという気持ちがずっとあった。

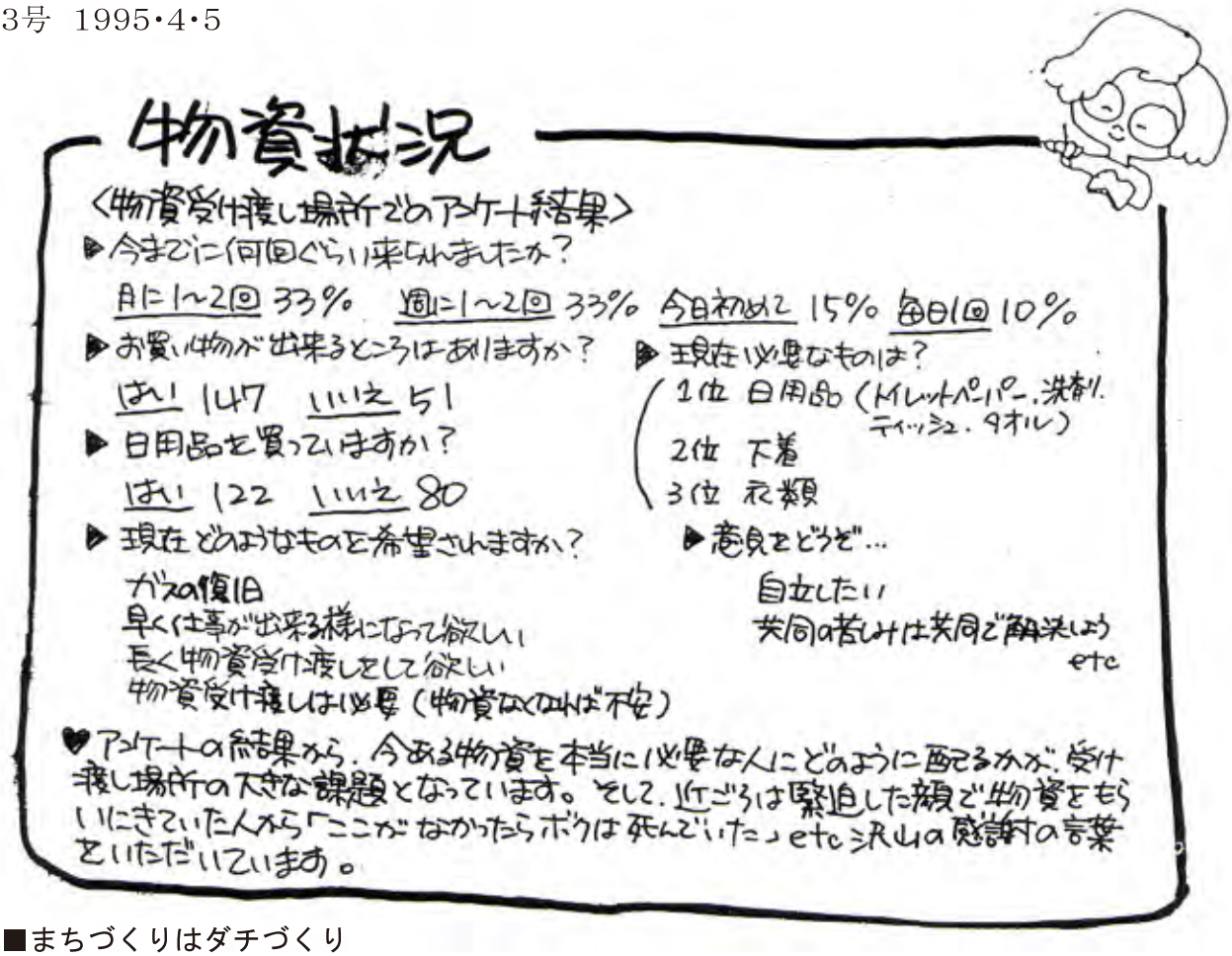
「そんなん言うの、こっ恥ずかしいけど、それまで人に頼られたことがなかった。けんかが強いとか、危ないことできるとか、鷹取では見栄をはらんでいい。自分の居場所があった。ここでタローという新しい人間ができた」

ボランティアたちは、その「ゴリラ・ネーム」をガムテープに書いて、胸に貼ってもらった。皆がその名で呼び合った。ゴリラ・ネームをもらうことで、ボランティアたちは「たかとり」の住人になる。やがて、そんな雰囲気ができてきた。

震災直後の被災地は非日常の世界だった。その価値観を和田さんは、こう表現する。

「材木を2人で担ぐとき、学歴や経歴はご破算になる。6人でテントを持ち上げるときは、一番力の弱い奴に合わせる。でも、6人いないと、テントは動かない」

焼け焦げた釘を使って物を作った。若者たちにとって「たかとり」は、それまでの人生とは違うステージになった。ゴリラ・ネームはその象徴だった。



物資状況

<物資受け渡し場所でのアンケート結果>

▶今までに何回くらい来られましたか？

月に1～2回 33%　週に1～2回 33%　今日初めて 15%　毎日1回 10%

▶お買い物が出来るところはありますか？

はい 147　いいえ 51

▶日用品を買っていますか？

はい 122　いいえ 80

▶現在どのようなものを希望されますか？

ガスの復旧
早くお店が出来る様になって欲しい
長く物資受け渡しをして欲しい
物資受け渡しは必要（物資なくなれば不安）

▶現在必要なものは？

1位 日用品（トイレットペーパー、洗剤、ティッシュ、タオル）
2位 下着
3位 衣類

▶意見をどうぞ…

自立したい
共同の苦しみは共同で解決しよう
etc

♥アンケートの結果から、今ある物資を本当に必要な人にどのように配るかが、受け渡し場所の大きな課題となっています。そして、近ごろは緊迫した顔で物資をもらいにきていた人から「ここがなかったらボクは死んでいた」etc 沢山の感謝の言葉をいただいています。

■まちづくりはダチづくり

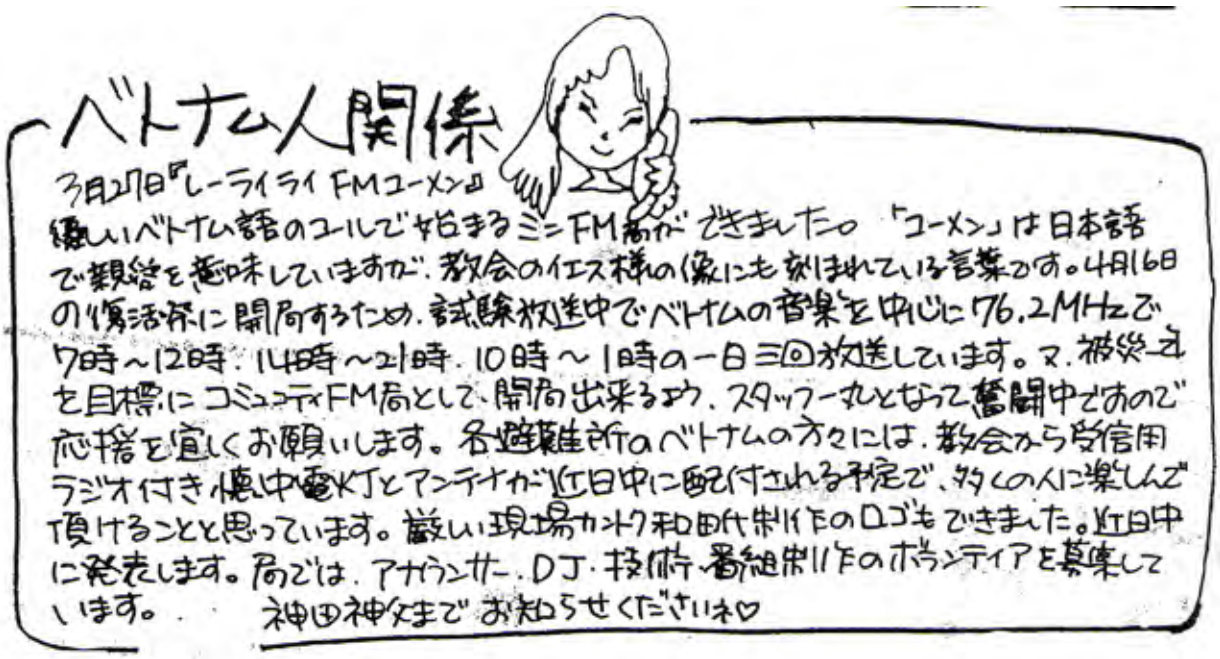
たきび2号で予告した物資受け渡し場所でのアンケートは、約200人が回答した。たきび3号の記事は「アンケートの結果から、今ある物資を本当に必要な人にどのように配布できるかが、受け渡しの場所の大きな課題」と指摘した。「ここがなかったらボクは死んでいた」という、地元の被災者の言葉も紹介した。

どうやってまちを復興させるか、地元の住民組織「野田北部まちづくり協議会」が強いリーダーシップを発揮し、地域の意見をまとめた。協議会は地震当日に復興対策本部を発足させる。後日、4人置かれた対策本部の副本部長に、地元の高橋病院の院長らとともに神父の神田裕さんも就任する。副本部長は地域でのネームバリューを考慮して就任が要請されたという。協議会の会長で、対策本部長でもあった浅山三郎さんは震災前、神田さんとほとんど話したことがなかった。

神田さんは、協議会から復興対策本部への参加を呼びかけられて、すぐに応じた。地震の日、地域での救出活動に十分な動きを取れなかった。「顔なじみがほとんどいなかったから」と、神田さんは悔やむ。地震の2年前の夏、スペインのベンポスタ子どもサーカスを招き、地域との交流を図ったことがある。大国公園での交流会には多くの住民が参加し、催しは成功した。でも、地域と教会との日常的な接点はないままだった。

協議会の復興対策本部は、救出活動から始まり、住民の避難先調査、家屋解体・撤去の調整などに取り組んだ。3月に入ってからは連日のように会合が開かれ、区画整理への対応の話し合いの場にもなった（野田北部地区のうち、焼失した海運町2、3丁目以外は区画整理の対象とならなかった）。神田さんは復興対策委員会には皆勤で、4月27日に開かれた第10回の委員会では「まちづくりは、ダチづくりですね」と挨拶している。

しかし、ダチづくりには大いなる困難がともなった。区画整理は、住民が土地を出し合って、道路を広げ、公園を設ける事業だ。まちづくりに国などの補助金を引き出し、災害に強いまちづくりを進める仕組みとして、兵庫県や神戸市が導入したが、私有地の一部を供出する減歩（げんぶ）への抵抗は強かった。区画整理事業は、借家の人たちが地元へ戻ることに役立つわけでなく、権利の調整が難しかった。対立の構図は「官」対「民」から、「民」対「民」へと変化し、説明会は紛糾した。しかし、事業が遅れれば、建築制限をされたまちの復興も遅れる。まちの協議会は話し合いを重ねながら事業を受け入れてゆく。



■ラジオにベトナムの歌が流れた

１月１７日、ベトナム出身の神父、ファム・ディン・ソンさんは静岡県の教会で、ミサの後、燃える神戸の映像をテレビで見た。神戸に行ったことはなかった。でも、鷹取教会の神父神田さんはカトリック難民定住委員会の知り合いだった。すぐ電話をしたが、つながらなかった。

２月１日、ベトナム人信徒の安否確認などのため、ソンさんは難民定住委員会から神戸に派遣される。肉や水を大量に買って、大阪からバスを乗り継ぎ、最後は徒歩で鷹取教会を目指した。脳裏にベトナム戦争の光景が甦った。倒れたビル、焼け焦げた家やマンションを見て、２０数年も前の恐怖を思い出した。ようやく教会に着くと、「うどんをどうぞ」と勧められ、苦笑いした。何もないだろうと思って買い込んだのに、教会には物資がそろっていた。

震災当時、神戸市には７６０人のベトナム人が外国人登録していた。その大半がリサイクルやケミカルシューズ関連の仕事に就ける長田区に住んでいた。被災した結果、住居と仕事場を失ったが、亡くなった人はいなかった。ベトナム人同士ふだん顔なじみだから、すぐに救出に行った。そういうつながりが命を救ったと、ソンさんには思えた。

長田区の南駒栄公園にベトナム人が百数十人避難していた。公園を訪ねると、「また大地震が来る」「アメリカ軍が来て、ベトナム人をアメリカに避難させる」といったデマに動揺する人たちがいた。ベトナム語での情報がないから混乱に拍車がかかった。

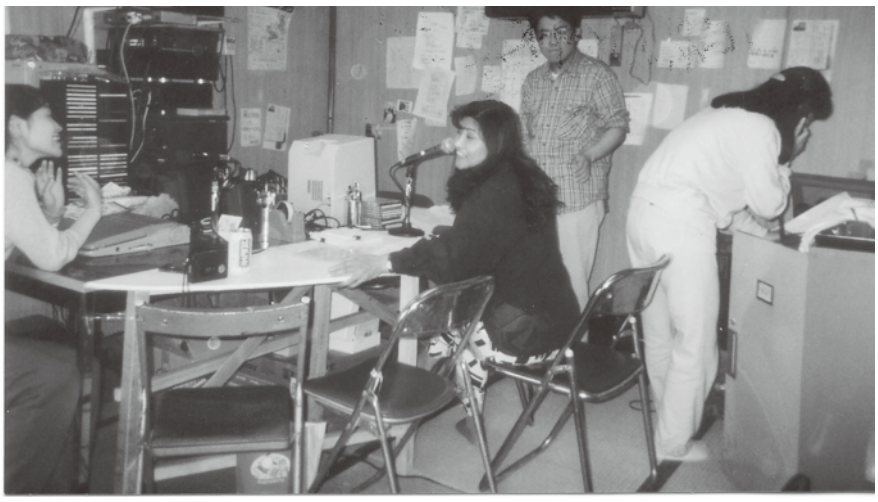
同じ公園に避難してきた日本人との間のトラブルも少なくなかった。ボランティアたちが間に入ったが、言葉の壁もあって仲介は難しかった。ソンさんは両者の通訳をするだけでなく、日本人避難者のテントに進んで入って行き、仲よくなった。そうやって両者の意思疎通が少しずつできるようになった。

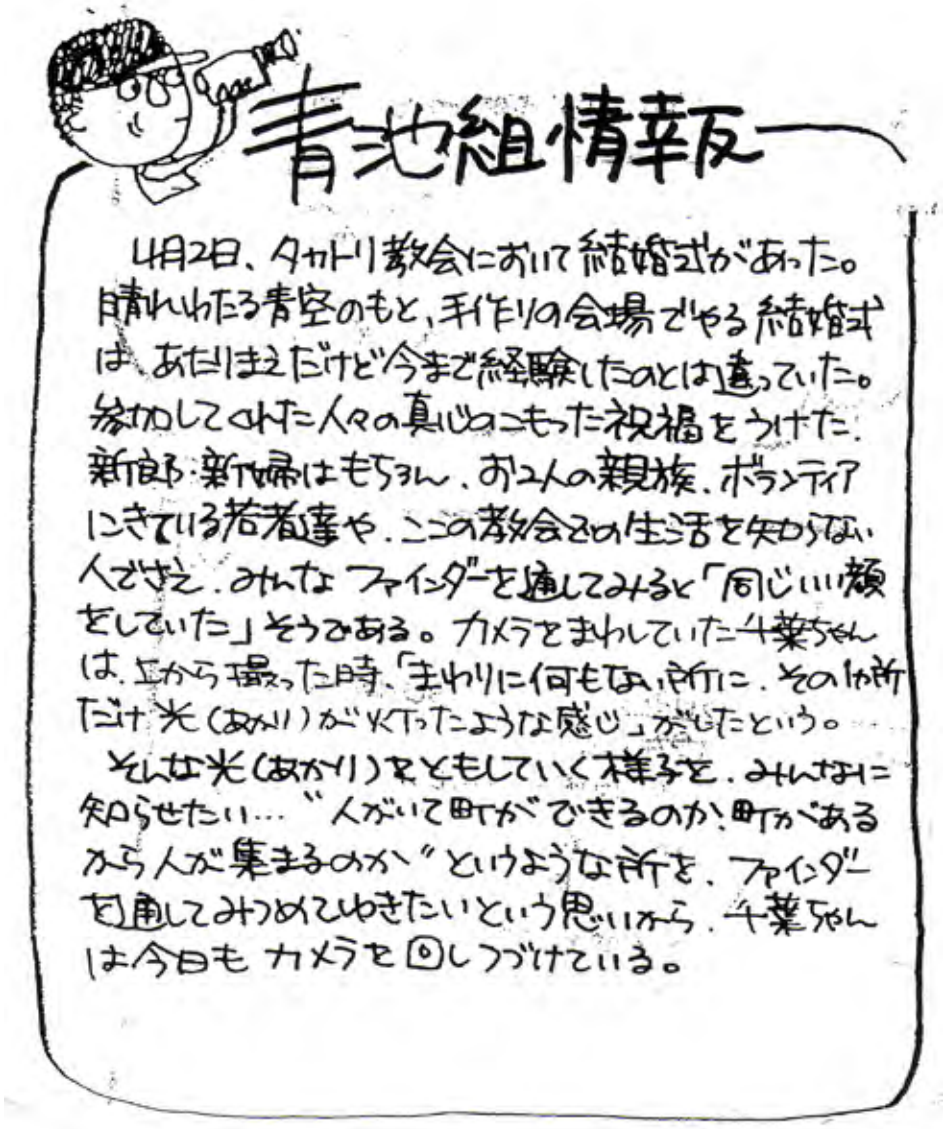
当時を振り返ってもらったとき、ソンさんは意外なことを明かした。「実は、それまで１０数年、ほとんどベトナム語を話したことがなかった」。１７歳だった８１年６月、家族と別れ、木造の手作りの小型船に乗ってベトナムを出国した。学校で勉強がしたかった。ところが船はエンジンが故障し、漂流。死を覚悟した。助けてくれたのは日本のタンカーだった。それなのに、日本政府はボートピープルをすぐには受け入れず、フィリピンで下船させられた。

難民センターのダニだらけの狭い部屋に１８人が押し込められた。米国への出国を望んだが、過酷な環境から一番早く出られる日本へ行くことにした。８２年５月、姫路市の難民定住促進センターに入所。その年１１月、山梨県へ。ベトナム語を話さないようにして日本語を学び、働きながら学校に通った。苦学し、東京の神学校に入学した。来日してから、震災後に神戸に来るまで、ベトナム語で人と話す機会はごく少なかったという。

ソンさんは２月末にいったん静岡に戻り、復活祭の翌日となる４月１７日、つまり、「ＦＭユーメン」の開局翌日に再び神戸入りする。大阪教区から正式要請された。ベトナム人被災者に震災関連の情報を母国語で伝えるラジオ放送への協力を求められ、当初は６カ月間の約束だった。情報が届かないベトナム人の不安をどうにかしなければならないと思って

たから、やりがいのある仕事だった。
「彼がいなければ、放送を続けられなかった」。ボランティアとして南駒栄公園に入り、それ以来、ソンさんと活動をともにしてきた日比野純一さんは説明する。
午前９時から１１時まで２時間の放送を、ソンさんと日比野さんが７月まで受け持った。前半は、震災関連の情報を日本語、ベトナム語の両方で伝えた。ベトナム語はもっぱらソンさんの担当だった。後半は「海を越えてきた仲間たち」。ベトナムの文化や歴史、それに、難民とは何かを、ソンさんが日本人向けに説明した。その放送を通じて、日本人のボランティアたちは「隣人」について初めて知ったのだった。
ベトナム人からの反応もあった。震災関連の情報を流すと、まだ放送しているうちに電話が鳴り、義援金や仮設住宅のことをベトナム語で質問された。ソンさんは、南駒栄公園で同胞にベトナムのＣＤを見せられ、「この歌を放送で流して」と頼まれた。聴いてくれている、と実感できた。「直接、リクエストを言われるなんて、ほかのラジオ局にはできないこと」と、ソンさんは楽しそうに思い出を語る。
日比野さんの印象に強く残る涙がある。ユーメンが開局したころ、車の運転中、ラジオで午後の再放送が流れ出した。一緒に乗っていたソンさんが、ベトナム語の歌を聴きながら泣いていた。
ソンさんも、そのときのことをよく覚えている。神戸に来るまで「難民は人間じゃないと思っていた」という。行きたい場所に行けず、自分の思いを表現すると、「かわいそう」と言われ、くやしかった。「難民だからと、下に見られる体験を日本でいっぱいしてきた」。そんな異郷で、ラジオからベトナム語の歌が流れてきた。胸が締めつけられ、涙が出てきた。





■告発ではなく賛歌を

映画監督の青池憲司さんは千葉県市川市から鷹取に通い、神父神田さんの支援を受け、救援基地に「青池組」の看板を挙げた。「野田北部を記録する会」として、復興の歩みを撮り続け、「記憶のための連作―野田北部・鷹取の人びと」(全14部)を5年がかりで完成させることになる。

鷹取との出合いは、震災の2年前にさかのぼる。青池さんは、世界中の子どもたちが自活するスペインの「ベンポスタ子ども共和国」を記録映画で紹介し続けてもいる。ベンポスタの子どもサーカスが1993年に来日し、神戸で公演した際、大国公園で開かれた歓迎の盆踊り大会の様子を撮影した。その縁で教会や鷹取商店街の人たちと顔なじみになった。

地震発生の10日後、長田区の被害が大きいと知って、鷹取にやってきた。旧知の人たちを見舞うつもりだったから、カメラは持って来なかった。焼け野原で打ちひしがれる人々の姿を想像し、激励しようと思っていた。ところが、たき火を囲み、町の復興を熱っぽく語り合う人たちがそこにいた。逆に励まされた。そんな体験を通して、人とまちの再生を撮りたいと思った。「告発ではなくオマージュ(賛歌)を」。地元の人にホームビデオカメラを借りて、撮影を始めた。

資金も発表の場もあてがなかったが、青池さんはのめり込む。2月10日、鷹取を再訪。地元の野田北部まちづくり協議会に挨拶し、復興対策委員会の第2回集会を撮影した。編集の村本勝さん、撮影の千葉景房さん、音声の青池雄太さん(青池さんの長男)の布陣で、鷹取を繰り返し訪ね、救援基地に泊まり込んだ。本格的なドキュメンタリーづくりを決意した。

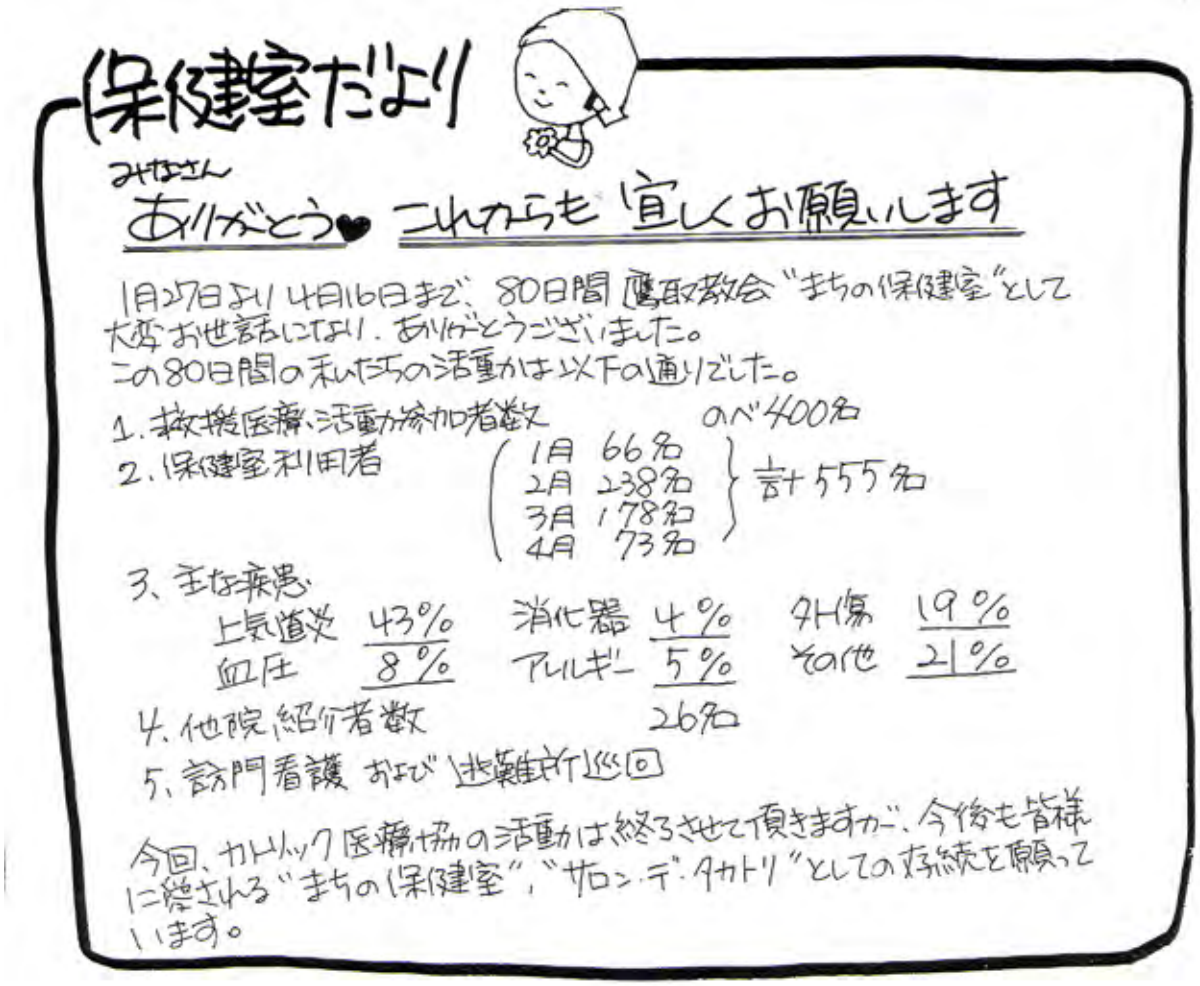
青池組は、町内の家や焼け跡を1軒1軒撮った。がれきの山、ボランティアの活躍、野田北部まちづくり協議会の会合・・・。被災の風景から、人へと、ゆっくりと少しずつ近づき、寄り添った。経済面を理由に使ったビデオカメラでの撮影は、被写体となる人を緊張から解放させることにもなった。

「記憶のための連作―野田北部・鷹取の人びと」の第1部で、延々とがれきの町が映し出された後、こんな場面がある。ゴリラ隊の若者が、被災した家を解体しつつ家財を運び出している。震災の朝、傾いた家から命からがらはい出した主の女性が、その作業を見守っている。

女性が独白する。「人間って、勝手ですねぇ。あー、生きとってよかった思ったんが、だんだんあれ出したい、これもある、言うてしまう」。しみじみ、しかし、朗らかに語る。やがて、へそくりの1万円が見つかる。水槽のカメが66日ぶりに救出される。映像を見る人にも、春の日差しの温かさが伝わってくる。

撮影を始めた当時、青池さんはこんなふうに語った。

「主役はまち。まちの人と同じ視線で撮影し、被災者は悲しくあらねばならないといったイメージを崩し、元気の出る映画をつくりたい」



保健室だより

みなさん
ありがとう♥　これからも宜しくお願いします

1月27日より4月16日まで、80日間鷹取教会"まちの保健室"として大変お世話になり、ありがとうございました。
この80日間の私たちの活動は以下の通りでした。

1. 救援医療活動参加者数　のべ400名
2. 保健室利用者
   1月 66名
   2月 238名
   3月 178名
   4月 73名
   } 計555名
3. 主な疾患
   上気道炎 43%　消化器 4%　外傷 19%
   血圧 8%　アレルギー 5%　その他 21%
4. 他院紹介者数　26名
5. 訪問看護 および 避難所巡回

今回、カトリック医療協の活動は終了させて頂きますが、今後も皆様に愛される"まちの保健室"、"サロン・デ・タカトリ"としての継続を願っています。

■見てしまったら、帰られない

1月17日、東京の聖母病院で看護師として働いていたシスター、是枝邦子さんもテレビから目が離せなくなった。燃え上がる神戸は、母の故郷でもあった。胸の中で「行かなくちゃ、行かなくちゃ」とつぶやいたという。テレビを見て、そんなに心が騒いだのは初めてだった。教会の被災地支援の希望者に登録し、神戸に派遣されることになった。

2月5日、10万円を預かり、リュックサックに缶ジュースや着替えを入れ、東京を立った。ふだんは余分な現金など持たないシスターとしては、緊張するほどの大金だった。

神戸市灘区のザビエルハウスに置かれた「カトリック医療施設協会」のボランティア医療班本部に入った。翌日、避難所になっていた灘区民ホールを訪ねた。診察室のスペースが用意されていたが、ガラスの破片が散らばっていて蹴飛ばして片付けた。祖父母に世話をされている2歳の「ひろ君」がいた。「ひろ君」をかばって母は亡くなり、父も重傷を負った。ミカン箱の上に遺骨があった。異常に興奮し、駆け回る「ひろ君」にどう接するか、専門学校生が保育のボランティアをしており、是枝さんたちはその後、何度もミーティングで話し合った。

是枝さんは、灘区民ホールと灘区の上野中学、それに鷹取教会の3カ所を巡回した。当初は2週間の予定だった。でも、戻らなかった。

「もう少しいさせてください、とお願いしました。『ビルマの竪琴』で、日本に戻らなかった水島上等兵と同じような心境よね。見てしまったら、帰られない」

是枝さんにとって鷹取の最初の印象は、匂いだった。あたり一面、空襲に遭ったような状態で、焦げ臭かった。教会近くの高橋病院の前には黒焦げの車が放置されていた。道端の、欠けた土瓶に生けられた花が悲しかった。鷹取教会にはボランティアがたくさんいて、そこだけ活気があった。

その敷地に震災10日後の1月27日に臨時診療所ができていて、医師が派遣されていた。ブルーシートをカーテンのように掛けて、診察室、待合室、重症の人の寝る部屋、薬品置き場に仕切られていた。ベッドは、段ボール箱の上にコンパネを置き、布団を敷いてあった。

「何もなくても、できるんだ。そう分かって、やる気が起きてきた。私も薬品の棚を段ボールで作ってね、貧しくてもできるって思えたよね。貧しさが魅力だった」

患者がゆっくりくつろげるようにしようと、是枝さんはストーブを拾ってきた。気管系の病気が多かった。寒さと建築物の解体に伴うほこりとが、気管に負担を強いていた。診療を待つ間に「どうやった？」

と会話が始まった。震災の後の日々を語り、大人がおいおい泣き出すこともあった。「初めて泣けた」という人もいた。そんな人たちは治療を受けるためでなく、診療所を訪れた。是枝さんに会いにきた。診療所に立ち寄った人は、カルテを作った人の数よりずっと多い。

忘れられない出会いがいくつもある。字を書けない独り暮しの高齢者がいた。カルテに名前を書いてもらおうとすると、彼女は「あんた、書きなはれ」と突き返した。子どものとき、朝鮮から来て勉強する暇がなかったという。やがて、そんな身の上話を是枝さんにしてくれた。

3月、教会の門の近くに背を伸ばすイチョウの木のそばで、神父の神田さんに声をかけられた。関西弁が忘れられない。「残られへんの」と、尋ねられた。医療班は3月末で撤退することになっていた。

「残っていいんですか」

「残ってもられえますか。もし、気持ちがあるなら、動くから」

当時の安田久雄大司教から管区長に働きかけてもらい、復興の手助けということで、1年間の延長が許可された。

臨時診療所は、4月の復活祭から「まちの保健室」に衣替えをした。横浜から来ていた高校生ボランティアの「街に保健室があったらいいのに」という言葉が由来だ。神田さんは「長い道のり、出来る事からやっていけばええんや」と、是枝さんに運営を任せた。是枝さんは、地域とのかかわりを一つひとつ丁寧に築いていった。保健室で患者を待つだけではなく、出かけていくようにした。避難所に入りたがらない高齢者がいる住宅や、避難所、仮設住宅を訪ねた。建築作業を手伝うボランティアもけがが多く、治療した。

救援基地の通信「たきび」には、「保健室から」というコーナーができた。是枝さんが被災した人々との出合いを綴り、被災地の「今」の記録となった。

炊き出し用 ちゃめ
うさぎさんより愛をこめて

青空レストラン　IN 大国公園

4がつ19にち 水曜日、第2回 青空レストランが 大国公園で行われました。
メニューは… カレー、ちらし寿司、シチュー、スパゲティ、シーフードと なんと5種類。
机に座って BGMを聞きながら、ゆったりとした気分にひたっているところに
料理がはこばれてくる…という 本格的な レストラン形式でした。この青空レストランは、文字どおりの青空の中で、机が足りなくなっちゃうほどの人が集まって
下さり、大好評♥ みなさんは、食後のコーヒーを飲みながら、カラオケや景品
つきのリンゴの皮むきゲームに参加したり、おしゃべりをしたりして、3時すぎ頃
までワイワイ、ガヤガヤ楽しんでおられました。
"久しぶりに楽しい思いをした"
"1年分の栄養とったみたい…"
みなさんの声は、春の風に乗って主催して下さった方々にとどいた事でしょう
本当に、ありがとうございました。

次回は 4がつ26にち 焼肉パーティだ Go!!

■調整役は鈴木さん

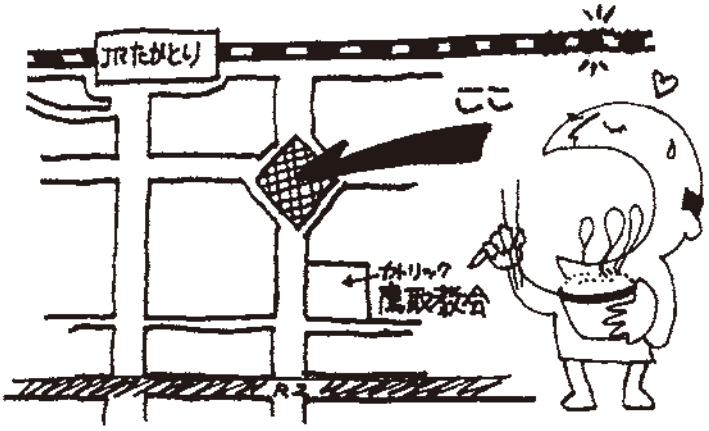
地震の朝、鈴木迪子さんは気づいたら鷹取教会に立っていた。信徒として通い慣れた教会は、自宅から歩いて数分。自宅は、寝室付近を除いて全壊だった。

午後、教会に火が迫り、神田さんや和田耕一さんらとともに教会隣の崩れかけていた空き家を倒し、延焼を防ごうとした。しかし、火は容赦なかった。かつて幼稚園舎だった建物がまず火を噴き、倒壊していた聖堂も炎上した。遅れて登場した消防車は少ししか水が出ず、消防士はホースを置いてどこかに行ってしまった。

鈴木さんはその日、焼け残った司祭館の会議室で寝た。次の日からも教会に通い、すでに定年になっていた夫ともども後片付けを手伝った。1週間もしないうちに、ボランティアが次々と訪れるようになった。当初は、和田さんがかかわっていたアルコール依存症の自助グループの人たちが多かった。ずっと教会にいる鈴木さんが、泊まり部屋の割り当てや、食事する人数の確認などボランティアの登録事務を任された。

炊き出しの申し出も、鈴木さんが調整することになる。電話が次々かかってきて、大国公園での昼の炊き出しは2月上旬から5月5日まで、1日も欠かさず続いた。毎回200人から300人分の食事が用意され、公園は被災した人々とボランティアの集いの場になった。

場所 大国公園



どなたでもお気軽に
おさそいあって おいでください♡♡

お問い合わせは 078-731-8300

特報

みっちゃんの1日をおえ!!

いつも、たきびご愛読ありがとうございます。皆様より、もったいないおホメの声やキビシイおしかりの声もいただけるようになり、編集班は本当に、嬉しく思っております。ありがとう!!
今回は、そのお声の中の"たかとりのシステムを知りたーーい"というのにお答えして、ここたかとり救援基地の動きを、事務所のみっちゃん密着取材(注:トイレにはついていってないケド)という形でお伝えいたします♥ ではでは Let's Go!!

みっちゃん紹介

本名 鈴木迪子(スズキミチコ)(だからみっちゃんなの)

S.ひみつ.6がつ28にち生まれ。
たかとりのうさぎ隊の隊長。
えがおのステキなお姉さんうさぎとして、うさぎ隊内の信望はアツイ。
5年に1度は、おサルに変身するというウワサもあるが さだかではない…

時間	おおまかな流れ	みっちゃんの解説
8:00	おはようございます 今日も1日よろしくね♥ とりあえず 突発で ボランティア2名到着	▶ここまで夜到着したボランティアの人たちにボランティア確認表を記入してもらいながら…確認表は人数把握、安全面などに大活躍するんです。 ▶ボランティアの人が来たら、まず荷物をおいてもらうお宿屋にご挨拶するんです。もちろん、日帰りの人にも確認表は書いてもらいます。
	毎朝の恒例の 昼食(弁当)の確認	
8:30	朝ミーティング お弁当づくりのくふう	▶今日のゴリラ隊のお仕事を確認するため会合します。 ▶ゴリラ班(外まわり)の昼食のおにぎりの富巻をとうさぎさんに伝えます。
	西さんに連絡	▶きのう雨でぬれたシートなどを本日ランドリー行。どんな車で行く、何人乗り、何時間、場所などを確認Telします。
	布団の件の連絡	▶布団をとりにいく件で、ゴリラから連絡をたのまれました…確認します。
	今日のお仕事の確認ミーティング	▶ゴリラ隊のポスとうさぎ隊のポスの話し合い。みんなの安全を守るため念には念を入れないとね。
	ボランティア2名到着 ボランティア希望者Tel	▶うさぎ2名(無事到着。ほっとひと ▶到着日、時間、宿泊、日帰りなどを確認して、おまちしてます。
9:00	ストーンの車のカギを渡す 屋面ループ到着	▶そろそろ、ゴリラ班が準備を始めました。カギをもって…ダッシュ。 ▶にこりのかわいいうさぎ6名到着。屋内中の屋面を拭いてもらいます…がんばれ。
	ゴリラ班出発 内番のボランティアにお仕事を説明	▶今日も1日安全に気をつけてね。 ▶うさぎさん、お仕事みんながいます。みんな よろしくね♥
	物資どしょう地を持ってきてくれました ボランティア3名到着	▶すごくたくさん…こっちおいでねとお願いして―ありがとう!! ▶もう、みんなお仕事はじめちゃってるので指示してあげないと…
9:30	おそい朝ごはん	▶一口たべると口がいっぱい。"スズキちゃん"いっぱい食べれません…しくしく。
	昼食(弁当)人数報告	▶食べられない人が出ないように人数はいるすチェック。まだ、ボランティアがふえそうなので…すこしプラスして。
	たっきゅうどんど～す	▶毎日3回はとどきます。みんなのぶんをいただいて…サインします。
	青空レストランのパン焼き	▶チームになって、ココとココへ行ってねとおねがいします。
10:00	青空レストラン行き 空港	▶イスとれ、コーヒ、プラバンなどを貸しだします…とりにきてください。
	事務所に戻って確認書きちらみ 助手	▶その日のことは、その日のうちに。ノルとても時間のある時に…ごめんなさい。
	神ちゃんと本日の予定確認 事務作業 もうもう	▶今日、神ちゃんはお外で会議。お留守はしっかり守ほへ～
10:30		▶解体現場作業とキチラみあと新聞ルポ。ずっと自分でとっちゃう。

時間	おおまかな流れ	みっちゃんの解説
	さっそく、解体依頼のTelです。	▶はい、どこで、どういう状態か詳しくたずねて、下見をお約束。
11:00	書類に目をとおしマスク キチ合わせ	▶地元ニュース、ボランティアのこと、教会のこと、いろいろ書類はあるんです。 ▶5月1日以降のうごきは?まず、ミーティングの日どりを決定。
11:30	地域の人と挨拶 神ちゃん出発	(もらった車の修理について 結婚式のお花について 教会内の立てまし、外まわり…)etc
	雨が降りだした 布団を取りに戻	伝達事項はいろいろあります。 ▶今日は、みんなに気持ちいい布団で寝てもらいたかったのに…残念。
	大国公園へ様子うかがい	▶青空レストラン、大丈夫かな?雨も降りだしてきって、心配。
12:00	おそい昼ごはん	▶物資をくれた人、寄付をくれたかたへのありがとうレターづくりです。
12:30	物資到着 お食ごはんで～す	▶12コも…どこにおこ～♪ ▶昼食タイムは平均15分。さ、食べるぞっ
13:00	青空レストランへ	▶雨の中にもあって、早くから浪人生。今日は、ボールガランのコンサートうきで、みんな手をとって、1つの円になって歌いました。被災したんも、そうでないんも、男も女も、若いも若きも…1つになって盛り上がっていこう。ステキなレストランでしたっ
14:00	ゴリラに車のカギを渡す ボランティア申しみ "再生"の本 注文Tel	▶池田神父さんの本"再生"!!本だから、みんなに読んでもらいたいな。
	お医者さん ボランティア申しみ	▶まちの保健室、S.さんと話し合い。1つから、何を診てくれるかなどを話す。
14:30	青空レストランのおちつかれる	▶貸し出し物をチェック。次に使ってもらう人のため…これも大切なことなのよ。
15:00	写真の整理	▶カメラマン、パウロ神父さんの話題写真と、保健室の写真展の写真整理。記録を残すという意味で早くしなきゃ
17:30	明日のごはんキチ合わせ 夕食人数チェック 神ちゃんへのTel	▶夕食のうち、一番ゆっくり食べれるごはん。明日のうち、電話し2件、解体もあって…考える余裕もあります。
18:30	ターゴはんだよ	
19:00	ゴリラ班ミーティング	▶仕事のやりくり、どんな仕事をしてもらうか人のふり分け、段どりを話し合います。
20:00	物資到着	▶物資受け渡し場所の状況と問題点についての話し合い。もらう人の立場を考えて、平等ということについて話し合い、意見交換しました。もらう人の中に、平等に行きわたっているかチェックする人もでてきています。どうするか…考えました。
21:00	物資の話し合い	
22:00	明日の予定なにをするかたしか?	
23:00	やっとひといきタイム	▶神ちゃんのお帰りを待つばかりのお時間です。今日あったこと、色々な報告事項があるんです。長くなっちゃ♥
24:00	今日も1日ご苦労さまでした	▶ひとあり、お仕事が終ったので最後のお仕事、ひとまとめをして帰ります。ボランティアのみんな、いい夢みてね♥ オヤスミナサイ

物資状況

5月5日（金） 物資受け渡し場所"閉店"

5月5日、物資の受け渡しは終了しました。今まで大勢の人と出会い、考えさせられた事がたくさんありました。本当に困っている人に、どれだけ援助できたか、全国のみなさんの愛のこもった物資だとわかってもらえたか、また本当の"気持ち"とは少しちがうかも知れないけれど、すごく近いものが知れたようでとても嬉しかったです。

物資受け渡し場所の"閉店"は自立のためだと考えると何だかホッとするのですが、毎日いらっしゃっていたたくさんの人がいらっしゃらなくなると思うと淋しいです。

被災者のみなさん、苦しみの中にあっても"ありがとう"の気持ちは忘れないで持っていて欲しい…。私たちは、その気持ちが希望へとつながってゆくと信じています。

これからも、教会へ来て下さい。"サロン・デ・タカトリ"で会いましょう。

これからも今までのように毎日待っています。

あたたかい愛のしるしいっぱいつまった物資を送りつづけて下さったみなさん、本当に心から…

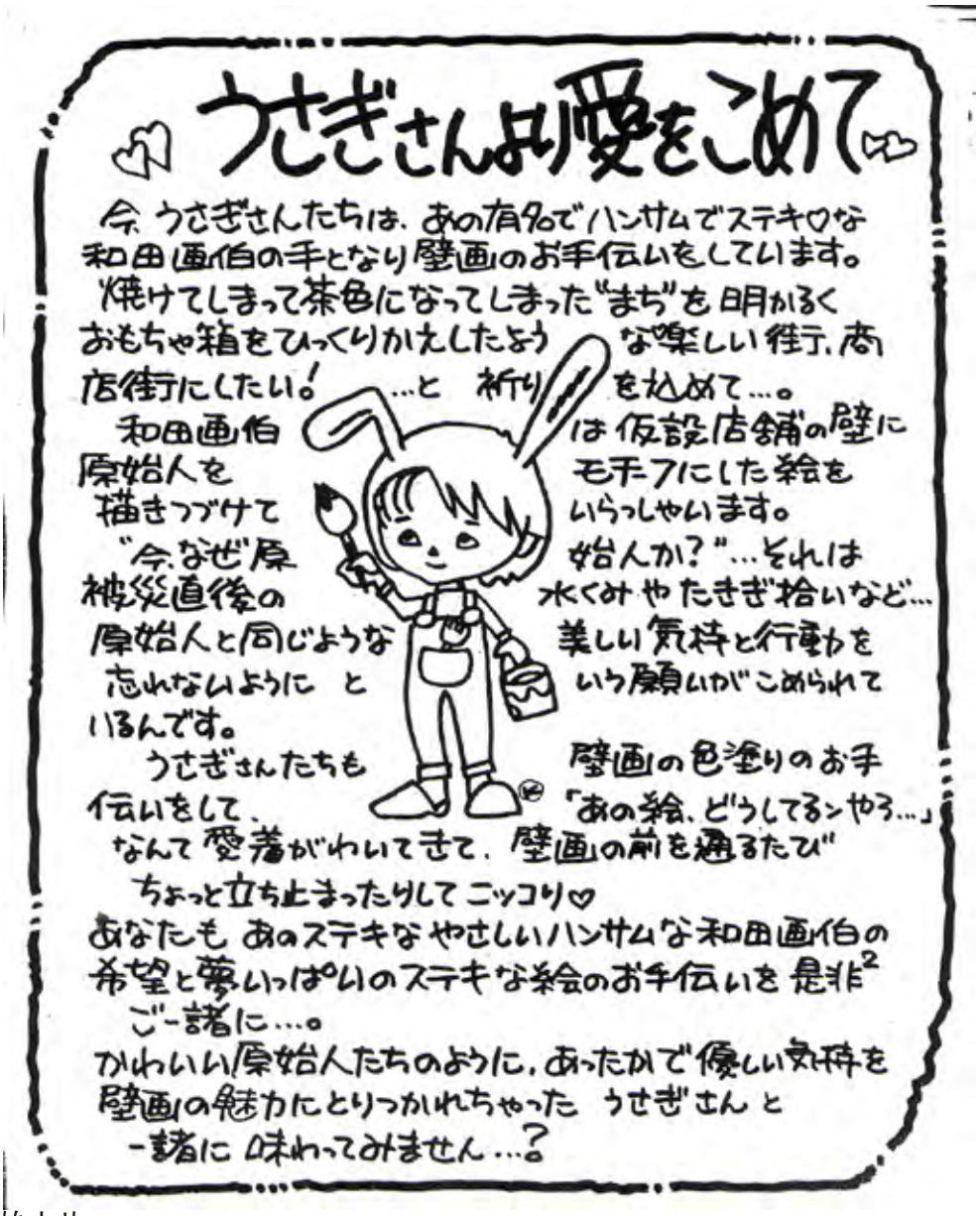
■ゴールデンウイークを区切りに

地震から3カ月余り、ゴールデンウイークを境にまちの雰囲気が変わったと、神田さんは感じたという。連休を利用して初めて帰省したり、観光旅行をしたり、被災地外に出る人が少なからずいた。まだ生活再建はままならなかったけれども、一息ついて緊張感が緩んだ。

カトリック信徒をはじめ多くの人々から救援物資は依然、たくさん届いていた。教会を通した被災地支援はルートが整備され、神戸より西から届く物資がいったん明石教会に集められ、整理されてから鷹取教会に送られた。

支援は必要だった。しかし、物資をどんどん配り続ければいいのか、悩ましい状況も出てきた。商店が再開する中、商品を無料で配ることは営業の妨げになった。ねたみによるトラブルも生じた。「物をあげるのは簡単。でも、それだけですまない。目途を決めた」と神田さん。それが、連休だった。

公園で配ることはなくなったが、被災者一人ひとりの状況を見て物資を届けることは、この後ももちろん続いた。



■君も僕も原始人や

教会のある海運町2、3丁目では、焼け跡のがれき撤去が4月中旬までに終わった。鷹取界隈の更地にはプレハブの仮設店舗が建ち始めた。その壁を、原始人や恐竜が駆け回った。教会内に住んでいた画家、和田耕一さんがボランティアたちとともに、赤や黄、オレンジ色のペンキで描いた。

きっかけは、鷹取商店街で洋品店を営む顔なじみの店主の依頼。「焼け跡に真っ白の店は照れくさい。何か描いてもらえませんか」と、頼まれた。店主は自宅兼店舗を火事で失ったが、震災100日目にプレハブ店舗で営業を再開した。周辺では、たくさんの人が亡くなった。死者の中には、子どももいた。「亡くなった子どもたちが夜に目を覚ましても寂しいやろなぁ。生きている人も寂しい」。そんな話も、店主は言い添えたという。

和田さんは制作を引き受けた。顔を見知っていた子どもたちの死が気になっていた。だから、「おもちゃ箱をひっくり返したような絵を描こう」と思った。

なぜ、原始人なのか。地震の直後、泉を探すように、水道管の壊れたところから水を汲み、信者や地元の人で水を分け合った。たき火であぶって、食事をした。夜も火の周りに集まった。つらいはずが、楽しく思えた。「偉い人も、だめな人もない。原始人みたいやな」。和田さんは「みんな原始人みたいに力を合わせて生きた。あの気持ちを原点に復興を」と、原始人の絵への思いを説明する。

最初は1人で描いた。しかし、制作するたび、別の店から注文が舞い込み、予約待ちが10店を超えることもあった。和田さんの描いた輪郭に、教会に集まったボランティアの若者たちがペンキを塗るスタイルが定着した。通りすがりの人が飛び入り参加したりもした。ボランティアたちは和田さんが考えもしない色づかいをした。「人の出会いで世界が広がる」と実感したという。

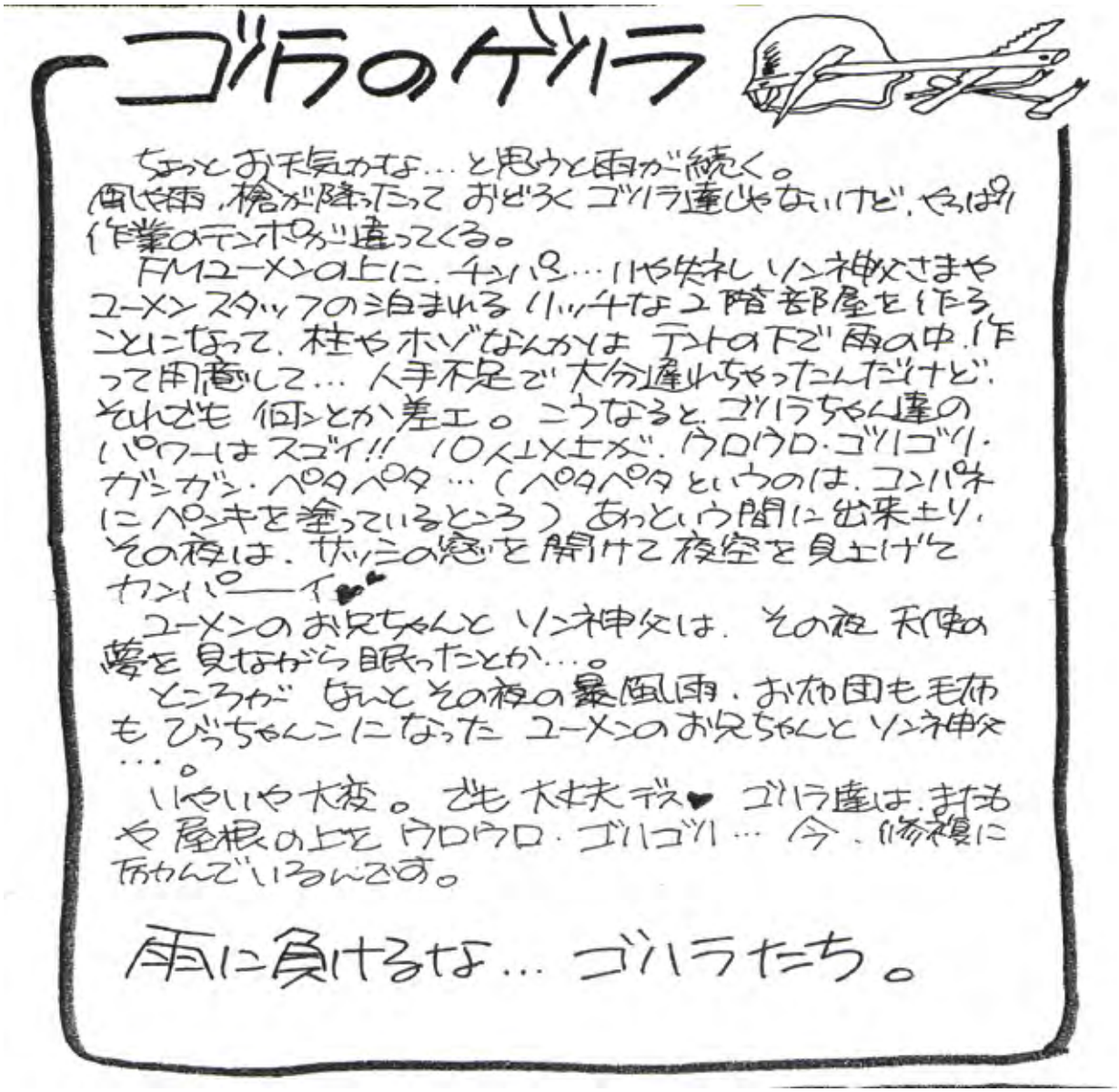
コインランドリーの壁には服を洗濯して素っ裸の男性が、喫茶店の壁にはコーヒーカップの中でく

つろぐ女性が、恐竜や花とともにコミカルに描かれた。店主や家族も原始人の姿で登場した。

「絵を見て、クスリと笑える心の余裕を持ってほしい」

もうひとつ、和田さんは絵筆に思いを込めていることがあった。和田さんはアルコール依存症だが、震災のときでちょうど10年、酒を断っていた。アルコール依存症の被災者が増えている、と聞いていた。「なんとかできないか」。酒に溺れてしまう人たちにも絵を見てほしかった。「アルコールに依存するのを正当化する理由が被災地にはそろっているけれど、だからこそ希望を大事にしたい」。当時、和田さんはそう語っている。

あのころ、色鮮やかな原始人の壁絵は、震災で傷ついた鷹取の再生の象徴だった。



ゴリラのゲリラ

ちょっとお天気かな…と思うと雨が続く。
風や雨、槍が降ったって おどろく ゴリラ達じゃないけど、やっぱり
作業のテンポが遅ってくる。
FMユーメンの上に、チンパ…いや失礼 ソン神父さまや
ユーメンスタッフの泊まれる ちっちゃな2階部屋を作る
ことになって、柱やホゾなんかは テントの下で雨の中、作
って用意して… 人手不足で大分遅れちゃったんだけど、
それでも 何とか差工。こうなると、ゴリラちゃん達の
パワーはスゴイ!! 10人工工ガ、ウロウロ・ゴリゴリ・
ガンガン・ペタペタ…(ペタペタというのは、コンパネ
にペンキを塗っているところ) あっという間に出来上り、
その夜は、ガッシの窓を開けて夜空を見上げて
カンパーイ♥
ユーメンのお兄ちゃんと ソン神父は、その夜 天使の
夢を見ながら眠ったとか…。
ところが なんとその夜の暴風雨、お布団も毛布
もびっちゃんこになった ユーメンのお兄ちゃんと ソン神父
…。
いやいや大変。でも大丈夫ネ♥ ゴリラ達は、まだも
や屋根の上を ウロウロ・ゴリゴリ… 今、修復に
取かんでいるんです。

雨に負けるな… ゴリラたち。

■ベービー、たかとり大学に入学

震災当時、身長183センチ、体重100キロ。大きな体の青木優尚さんだが、和田耕一さんがつけたゴリラ・ネームは「ベービーフェイス・マー」。会えば納得するベビーフェイス。会った人たちの印象には、にかっと笑う顔が刻まれた。「マー」は、本名の「まさなお」の略。でも、いつからか、「ベービー」と呼ばれるようになった。

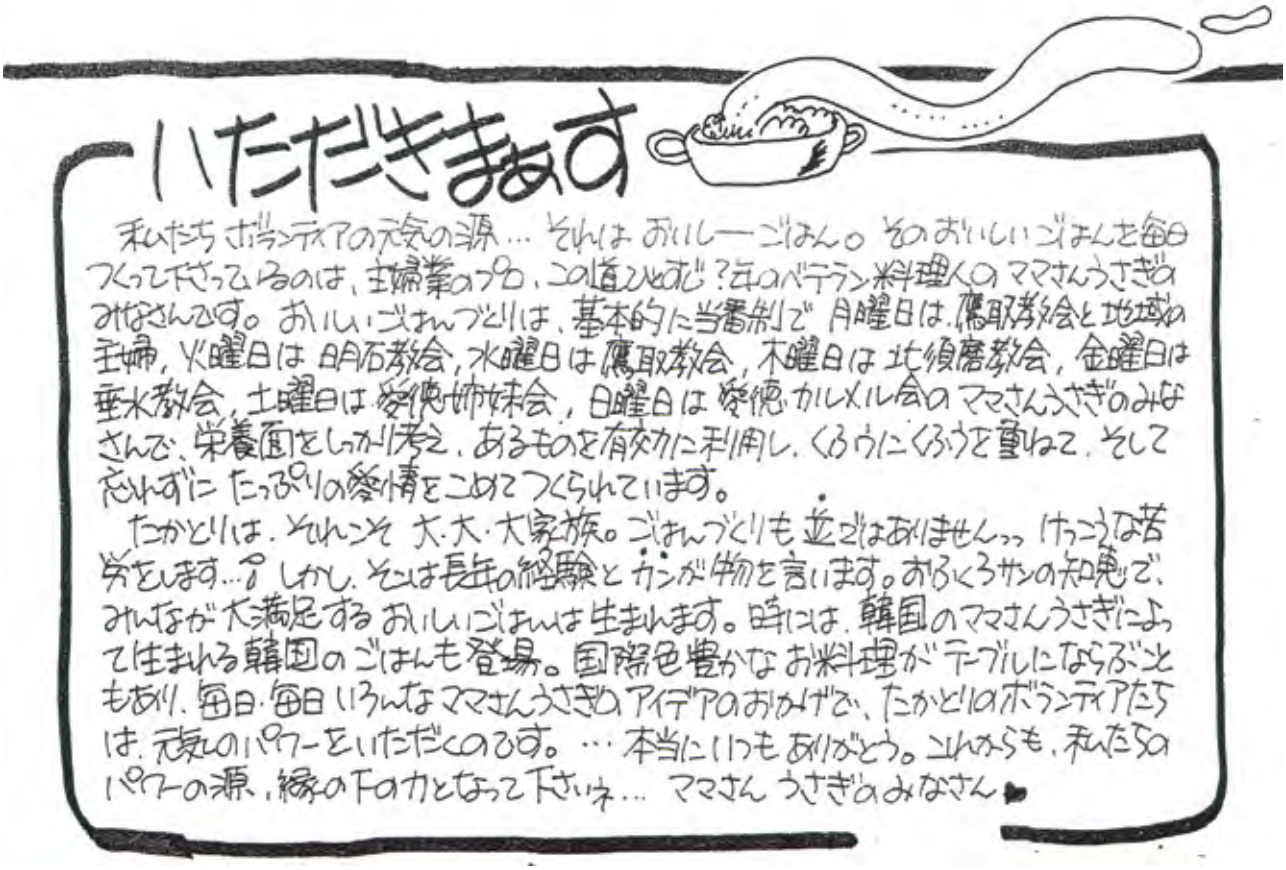
神戸市西区に実家がある。地震のときは与論島から鹿児島に戻るフェリーに乗っていた。鹿児島大学水産学部の学生だった。実家は壁にひびが入った程度の被害で、後期の授業が終わり、春休みになるまで神戸には戻らなかった。

幼児洗礼をしており、教会とは縁があった。帰郷したとき、3日間の約束で鷹取教会に手伝いにきた。春休みだったから、学生ボランティアがたくさんいて活気があった。3日間とも穴掘りをしたという。ごみを埋めるため、教会の敷地を深さ1メートルほど掘るように頼まれた。カンなどですぐいっぱいになり、土をかぶせた。

優尚さんは、もともと学校と違う世界を知りたくて休学をする気持ちがあった。「たかとり」が、その「違う世界」に思えた。いったん鹿児島に戻って、休学の手続きをした。学生係の職員に「君は血税で勉強しているんだぞ」と、休学しないよう説得されたという。

父も当初、休学に反対した。しかし、両親は4月に鷹取教会に通って働いた。父は毎日、庖丁研ぎを、母は料理を手伝った。一週間目、父は優尚さんに言った。「休学せい。たかとり大学のボランティア学科に入学するつもりで」と。

5月から9月までの半年間、休学した。救援基地に泊まり込んだ。家の解体、荷物の取り出し、屋根の修理、仮設住宅や新築の家への引っ越し手伝い。することは、たくさんあった。休学した間、ほとんど家にも戻らず、6月5日の20歳の誕生日には両親が祝いの電報を送ってくれた。



いただきまぁす

私たちボランティアの元気の源…それはおいしーごはん。そのおいしいごはんを毎日つくって下さっているのは、主婦業のプロ、この道ン十年?年のベテラン料理人のママさんうさぎのみなさんです。おいしいごはんづくりは、基本的に当番制で月曜日は鷹取教会と地域の主婦、火曜日は明石教会、水曜日は鷹取教会、木曜日は北須磨教会、金曜日は垂水教会、土曜日は愛徳姉妹会、日曜日は愛徳カルメル会のママさんうさぎのみなさんで、栄養面をしっかり考え、あるものを有効に利用し、くろうにくろうを重ねて、そして忘れずにたっぷりの愛情をこめてつくられています。

たかとりは、それこそ大・大・大家族。ごはんづくりも並ではありませんっ、けっこうな苦労をします…? しかし、そこは長年の経験とカンが物を言います。おろくろサンの知恵で、みんなが大満足するおいしいごはんは生まれます。時には、韓国のママさんうさぎによって生まれる韓国のごはんも登場。国際色豊かなお料理がテーブルにならぶこともあり、毎日・毎日いろんなママさんうさぎのアイデアのおかげで、たかとりのボランティアたちは、元気のパワーをいただくのです。…本当にいつもありがとう。これからも、私たちのパワーの源、縁の下の力となって下さいネ… ママさんうさぎのみなさん♥

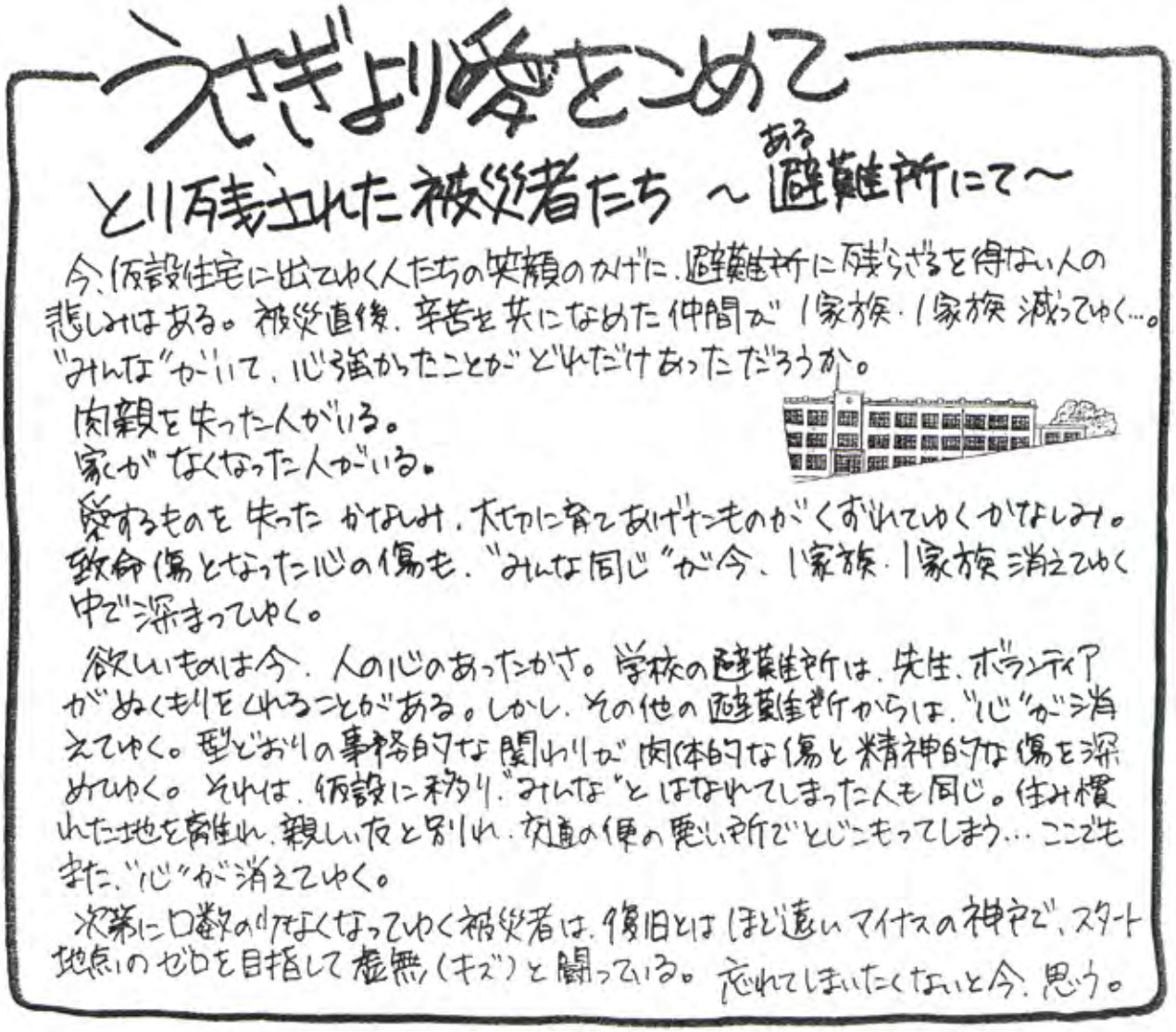
■おいしーご飯が元気の源

救援基地の食事には、野田北部まちづくり協議会の主だったメンバーら住民も訪れた。地元の主婦が炊事を手伝いにやって来るようにもなった。

同じ釜の飯を食べて、ダチ(友達)の輪が広がった。食事は住民とベトナム人信徒との出会いの場にもなった。協議会の会長、浅山三郎さんは「昼と晩、お邪魔して食べるようになった。何もないころだったから、助かった。そこで顔なじみになった人がいる」と振り返る。

野田北部には、教会にあった幼稚園の卒園者が少なからず住んでいる。1980年代半ばに廃園となるまで、教会は幼稚園によって地域に開かれていた。鷹取商店街で理髪店を営む協議会の役員、林博さんは1954年に卒園した第1期生だ。叱られると怖いスイス人の神父さんがいたと記憶する。しかし、卒園すれば教会とは疎遠になった。ベンポスタ子どもサーカスが来たとき、「神父さんを初めて知った」。その神父、神田さんと、林さんが話らしい話をしたのは地震後のこと。「まだ寒いころ、たき火を囲んで呑んだなぁ」。信徒と一般の人とをわけ隔てなくつきあう人柄に感心した。ほどなく、「かんちゃん」と呼ぶようになった。たき火を囲むボランティアたちは「得体の知れん人ばっかり」だったが、被災した家の解体などで活躍するゴリラ隊の活躍に目を見張った。

林さんは地震で家も店も焼け、炊き出しで世話になった」と語る。地震後、閉じこもりがちだった妻が炊き出しを手伝いに出るようにもなった。



うさぎより愛をこめて

とり残された被災者たち ～ある避難所にて～

今、仮設住宅に出てゆく人たちの笑顔のかげに、避難所に残らざるを得ない人の悲しみはある。被災直後、辛苦を共になめた仲間が1家族・1家族減ってゆく…。"みんな"がいて、心強かったことがどれだけあっただろうか。

肉親を失った人がいる。
家がなくなった人がいる。

愛するものを失ったかなしみ、大切に育てあげたものがくずれてゆくかなしみ。致命傷となった心の傷も、"みんな同じ"が今、1家族・1家族消えてゆく中で深まってゆく。

欲しいものは今、人の心のあたたかさ。学校の避難所は、先生、ボランティアがぬくもりをくれることがある。しかし、その他の避難所からは、"心"が消えてゆく。型どおりの事務的な関わりが肉体的な傷と精神的な傷を深めてゆく。それは、仮設に移り"みんな"とはなれてしまった人も同じ。住み慣れた地を離れ、親しい友と別れ、交通の便の悪い所でとじこもってしまう…ここでもまた、"心"が消えてゆく。

次第に口数の少なくなってゆく被災者は、復旧とはほど遠いマイナスの神戸で、スタート地点のゼロを目指して虚無(キズ)と闘っている。忘れてしまいたくないと今、思う。

■市街地に住みたい

学校や体育館などの避難所で生活する人は2月以降、減っていく。まず、ライフラインの復旧によって自宅でなんとかやっていける人たちが出た。さらに仮設住宅の建設が進んで、引っ越す人が増えた。

仮設住宅の募集は、第1次が2月2日に締め切られた。神戸市発行の「神戸市復興誌」によると、募集2022戸に59449件の応募があり、高齢者や母子家庭の被災者が優先された。鍵渡しは2月15日。当選したのは高齢者ばかりだった。

それ以降、3月7日に第2次、4月11日に第3次、5月14日に第4次の募集が締め切られる。仮設住宅は市外や市街地から遠く離れたニュータウンに大量に建てられた。ところが、避難者たちの希望は、市街地の少ない募集枠に集中した。もとの居住地から離れることへの不安や、通勤や通院が難しくなることを理由に、郊外の仮設住宅への入居希望は少なかった。

神戸市によると、市内の避難所で就寝する避難者の数は、地震翌日の1月18日が最多で、約22万2千人にもなった。それが1月末には約15万5千人に。2月末に約8万4千人、3月末に5万1千人、そして6月末には約1万9千人になった。自力で出るに出られず、仮設住宅の抽選に落選し続けるストレスを抱えた人たちが避難所に残っていた。

しかし、春が過ぎるころには、「いつまでも、ただで住んでいる」「学校の授業の邪魔」という厳しい視線が避難者に向けられるようにもなっていく。

うさぎさんより涙をこめて

～今、まだ…～

窓から外を見ていた。雨が降っていた。私の窓の外は、焼け跡の窓の外だ。
ずっと広がる焼け跡には、たったひとり傘をさしたおじいさんが歩いていた。
足で焼け跡の地面をつついた。ちょっとしゃがんで指で何かをほじくっている。
「あそこは、整地された跡なのに… おじいさん 何してるンやろ？」
「あちこち ほじくったって 何も あれへんのに … 」
おじいさんは、立ち上がって、そこを後に歩き出した。
すぐ立ち止まって そこを振りかえった。
また、もどって しゃがみこんだ。
「なんも あれへんやろ… 金目のもんでも あるんやろか…」
おじいさんは、ゆっくり立ち上がった。そして 二・三歩 歩いて、また振りかえる。
…そして、又 そこへ戻った。
傘の上に、雨が落ちている。
黒い上着のポケットから白いハンカチを出して、おじいさんは顔をおおった。傘が小さく、細くゆれた。
窓の中で、私も いっぱい いっぱい泣いた。

1

■がれきに花を

鷹取教会の東側に広がる焼け跡は、がれきの撤去が進んだ。地震から半年を控えたこの時期にも、あちらこちらに花束が手向けられ、毎朝夕、手を合わせに来る遺族もいた。

海運町2、3丁目の更地には5月28日、「ガレキに花を咲かせましょう」運動として、ヒマワリの種がまかれた。阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワークの呼びかけで、住民、救援基地のボランティア、そして区役所職員らが協力して汗を流した。種は芽吹いた。

瓦礫の中から…

シーズンと重なって電気屋さんが大忙がしである。
クーラーの取り付けの注文でパニック状態だ。
軽トラで久し振りに仲のよかった電気屋さんのご主人が走って来られたのと出合った。
荷台に山ほど道具を乗せて陽に焼けてお元気そうだ。
「まいど！」「元気？」焼け跡の道をバタバタと軽トラは走り去った。

ちょっと走って軽トラはちょっとスピードをゆるめ、止ったように見えたが又走って行った。
あの場所はお店のあった所。
…そして奥さんが…そこだった。

カチンコ　青池組情報

南駒栄公園の子供たちは元気だ。テントが張られ、クルマが止められた公園を砂煙を立てて走りまわっている。自転車に跨り、滑り台に駆けあがり、水鉄砲を持ち、雄叫びをあげている。ノコギリを片手にケンカの相手を捜しまわったりもする。カメラをみつければ「ピース、ピース」である。家が潰れているのに。三つか四つぐらいの女の子が真剣な眼差で糸ノコをもって竹を切り、おもちゃの弓を作っている。そんな中で「ノコギリはやめい」とか「弓は人間に向けない約束やろが」という声も飛ぶ。彼らのなかには押し付けではないルールがある。夕方、炊き出しが始まり母親たちが顔をみせるとさすがの彼らも大人しくなってしまう。カメラの前でふざけていた子も、ひとこえでシュンである。
砂煙のおさまった公園で、ベトナム風うどんを食べる彼らの顔は、ちょっと大人だった。

■夜が寂しいねん

後日の出来事があって、神父の神田さんにとって忘れがたい人がいる。

地震で家族を亡くした男性が懸命に働き、98年に店を再び開いた。なのに、翌年の夏、亡くなった。その数日前、神田さんは男性に会った。「神父さん、僕、夜が寂しいねん。一緒に寝たいわ」と男性は言った。神田さんは、冗談口で「何、言うてんの」と切り返した。それが最期の言葉になってしまった。「ほっとしたとき、張り詰めていたものが切れてしまったのか」。心残り、だった。

■ＤＪになった

「たかとり」でのボランティアに参加し、ベトナムに出会った人たちがいる。たとえば、神戸市須磨区のニュータウンに住む井上浩恵さん。震災時は派遣会社に勤め、教育関係の公営施設でコンパニオンをしていた。子どもたちと接する仕事は気に入っていた。ところが、震災による休館で解雇を迫られた。同僚と組合を立ち上げるが、会社との折衝は心身の重い負担になった。同僚が次々と自己退職した。ある夜、部屋で観葉植物の声が聞こえたという。「楽にしていいよ。十分、頑張ったんだから」。思い切り泣いて、心が晴れた。3月末、会社に退職を告げた。

そんなとき、ベトナム人の支援をしていた友人にFMユーメンを紹介された。「コンパニオンやって、マイク持ってたやん」と、放送の手伝いを頼まれた。

ユーメンはまだ試験放送の段階だった。司祭館の2階が放送局。そこではボランティア・スタッフの日比野純一さんが寝袋で寝ていた。「こんなとこから、放送しているのか」と驚いたが、皆で何かを始めようとする雰囲気がおもしろそうだった。

4月初旬、井上さんはDJを引き受ける。最初は早朝の2時間番組を毎朝受け持つことになった。スタッフが朝の6時半に家まで迎えに来てくれた。あまりにも大変で、1カ月目からは週3日にしてもらった。

ベトナム出身の神父ファム・ディン・ソンさんとペアで放送も始めた。仮設住宅の入居など神戸市の情報や、被災者支援のコンサートなど地域情報を、井上さんが日本語で紹介し、それをソンさんがベトナム語で語った。ソンさんはベトナム人の避難者が多い南駒栄公園で番組の宣伝をして回った。ベトナム人たちが聞いてくれていると実感できた。

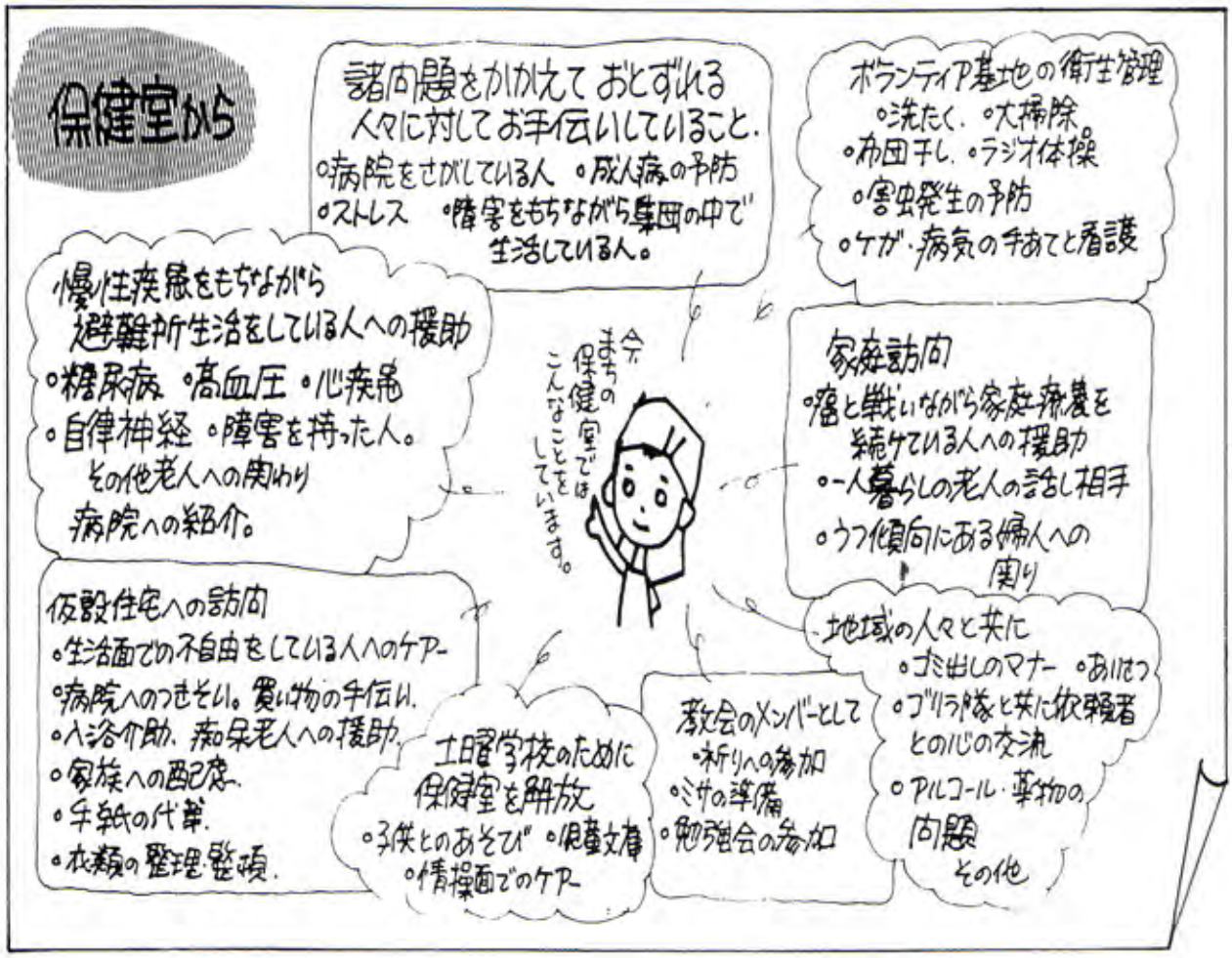
「たかとり」にくるまで、井上さんは「ベトナム」と聞いて思い起こすことはベトナム戦争ぐらいだった。ソンさんから、難民として命からがら祖国を脱出した話を聞いた。ボランティアをして、ベトナム人と一緒にベトナム料理の炊き出しを味わった。ベトナムがどんどん身近になっていった。

6月からは「気分はベトナム」という週1回の1時間番組を始めることになる。ベトナムの文化を日本人に知ってもらおうと、企画した。料理の作り方を紹介し、ベトナムに関係のある活動をしている人をゲストに呼び、自分で取材して番組を制作した。一方で、ベトナム人向けの日本語学習の番組も作った。

井上さんは5年8カ月、ユーメンからわぃわぃへと「たかとり」発のラジオ放送にかかわるが、「最初のころが一番楽しかった」と振り返る。ボランティアの数がまだ少なく、担当以外の番組にもゲスト出演した。自前のCDを持ち込み、番組で流した。同じ長田区で放送していた韓国語のFM局「ヨボセヨ」に手伝いに行くこともあった。月1回の交流会には、ベトナム、韓国・朝鮮、中国、ペルー、フィリピンなど、いろんな国の人が集まってきた。それぞれの番組の報告をし、民族料理をふるまい合った。

「多文化共生って、こういうことなんだなぁって思いました」

井上さんは、その後もベトナムとのかかわりを深めていく。



■再会の涙

「まちの保健室」の看護師として活動したシスターの是枝邦子さんは、保健室で待つだけでなく、避難所や仮設住宅を訪ねた。必ず2人以上で、ベールを被り、割ぽう着を着て、往診鞄を手に出かけた。

避難所で、毛布をよけながら歩いていたら「そんな気を遣うなら、金を使って」と怒鳴る「怖いおばちゃん」がいた。避難所には、弱い人と意地を張った人とが残った、と感じた。あっけらかんとした大らかさもあった。是枝さんは避難所での活動をこんなふうに言う。

「何かやってあげるという気はなくて、共存していた。一緒に何かを発見する喜びがありました」

ある避難所で出会った60歳ぐらいの男性は、毛布にくるまり、衰弱しきっていた。やせ細り、自分で缶詰さえ開けられなくなっていた。是枝さんは避難所から高橋病院に連れて行った。体重は28キロだった。30年来、長田区の製麺所で働いていたといい、「(製麺所の)大将に会いたい」と病床で繰り返した。

是枝さんたちは製麺所の経営者を探した。電話はつながらなかった。製麺所もやはり被災していた。1カ月がかりで見つけた「大将」の妻が、すぐ見舞いに来てくれた。男性は無言で、その女性の手を強く握り、ただ涙を流した。是枝さんも泣いてしまった。

是枝さんは聖母病院で内科婦長を務め、数え切れないほど見舞いの場に立ち会ってきた。

「でも、あんなに美しく見えたのは初めて」

夏になり、避難所は人数が減ってきた。是枝さんは、避難所にいた被災者が入った仮設住宅に、ボランティアが訪問しやすいように道筋をつけたりもした。

聴いてる？ FMわいわいより

震災半年後の7月17日、FMユーメンは在日韓国・朝鮮人向けのFMヨボセヨといっしょになり、「FMわいわい」として生まれ変わりました。これまでのベトナム語、スペイン語、タガログ語、英語、日本語に、韓国・朝鮮語が加わり、放送言語は"6か国語"に!! 電波の向こうでいろいろな眼の色、肌の色の仲間達が、このラジオを聞いているのかと思うと、本当にワクワクドキドキ。とっても嬉しいです。朝7時から夜12時迄、いろいろな国の人々がイそわるイそわるスタジオにやってきて、母国語で「チャオ」「オラ」「アンニョイハシムニカ」…とマイクにむかう姿はみんなとっても生き生きしていて本当に楽しそう。もちろん地域の日本の皆さんも、がんばっています。いろいろな国の人達が、気軽に集えるステーション。身近な国際化ってこんなところから始まるのかもネ！

よろしくー!!

■わぃわぃ誕生

被災地・長田に生まれた2つのミニFM放送局、「FMヨボセヨ」と「FMユーメン」とが合併した。両局とも被災した外国人市民に母国語で生活情報を提供し、日本人には外国人の置かれた状況を伝えてきた。

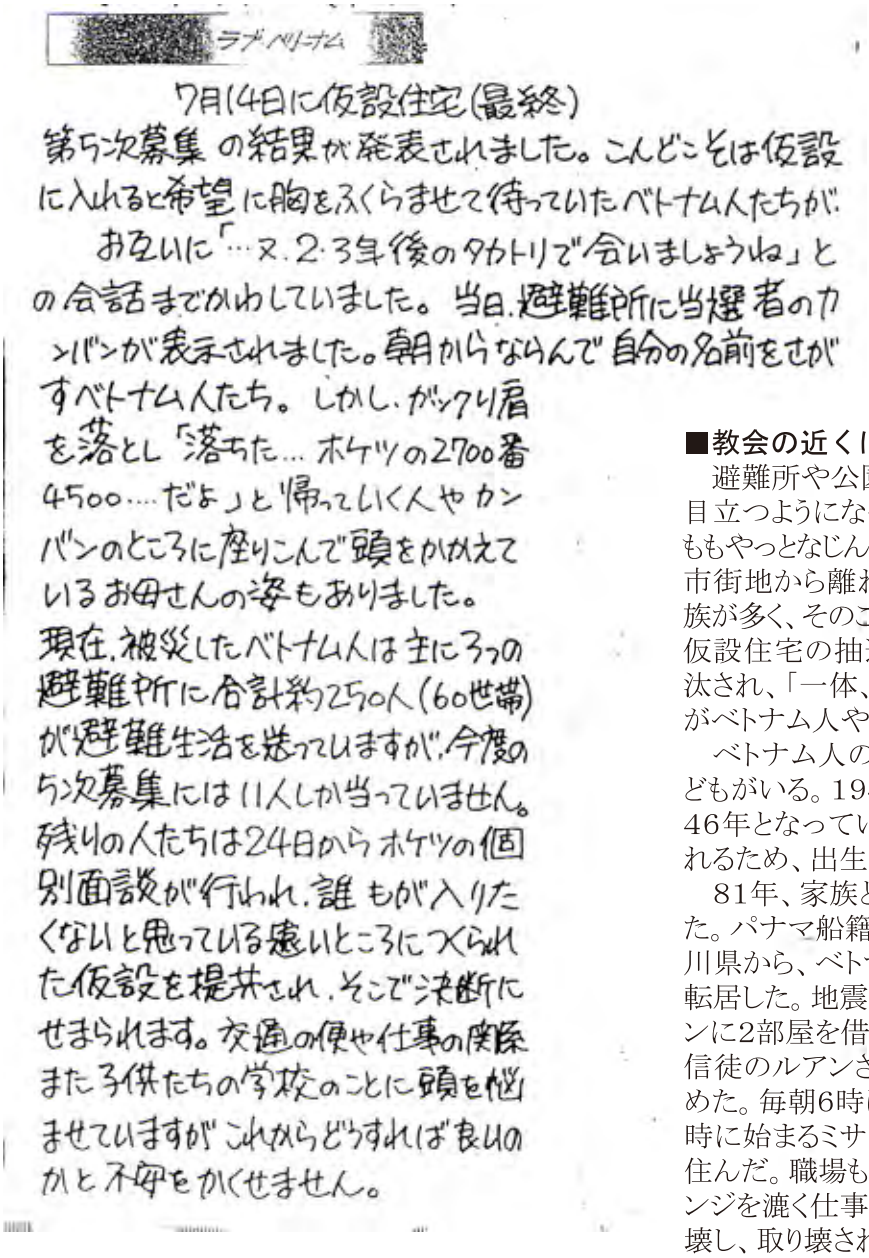
先行のヨボセヨは1月30日に開局した。長田区は人口の10％弱が韓国・朝鮮人。韓国民団西神戸支部に設けられた対策本部は、流言蜚語に惑わされない正確な情報を伝える必要を感じていた。そんなとき、同じ多住地域の大阪・生野で放送しているミニFM局韓国・朝鮮人「FMサラン」のスタッフが駆け付け、同胞支援の放送を提案。西神戸支部に放送機材が持ち込まれ、韓国語と日本語とで放送が始まった。救援物資や炊き出しの情報、罹災証明や義援金の手続きといった情報を発信した。

ユーメン開局のきっかけはヨボセヨ側からの提案だった。3月、「ベトナム語の番組を持たないか」と、被災ベトナム人救援連絡会に呼びかけがあった。救援連絡会のメンバーがサランのスタッフと相談した結果、ベトナム語の独自放送局を鷹取救援基地内に開設することに。中南米人のためのスペイン語、フィリピン人のためのフィリピン語の放送も加わることになり、多言語放送局として4月16日に開局した。ユーメンは、ベトナム語で「友愛」の意味だ。

場所の確保が難しいヨボセヨに対し、ユーメンには鷹取救援基地という「安住の場」があった。両局を一本化させて、郵政省（当時）認可のコミュニティ放送局を目指すことになった。新しい局名は、ユーメンのスタッフ吉富志津代さんが提案した。両局の頭文字を合わせ、また、「人々が国籍を越えてにぎやかに集う場となるように」との願いを込めた。

7月16日の前夜祭には地元に住む外国人や兵庫県、神戸市の関係者も出席して、合併を祝った。わぃわぃの代表に就任する神父の神田さんはこんなあいさつをした。

「まちづくりといえば、ハード面に目が向きがちだが、FMもまちづくりの役割を担える。人と人の出会いのきっかけになる放送をしたい」



ラブ・ベトナム

7月14日に仮設住宅(最終)
第5次募集の結果が発表されました。こんどこそは仮設に入れると希望に胸をふくらませて待っていたベトナム人たちが、
お互いに「…又、2・3年後のタカトリで会いましょうね」との会話までかわしていました。当日、避難所に当選者のカンバンが表示されました。朝からならんで自分の名前をさがすベトナム人たち。しかし、がっくり肩を落とし「落ちた…ホケツの2700番4500…だよ」と帰っていく人やカンバンのところに座りこんで頭をかかえているお母さんの姿もありました。
現在、被災したベトナム人は主に3つの避難所に合計約250人(60世帯)が避難生活を送っていますが、今度の5次募集には11人しか当っていません。残りの人たちは24日からホケツの個別面談が行われ、誰もが入りたくないと思っている遠いところにつくられた仮設を提供され、そこで決断にせまられます。交通の便や仕事の関係また子供たちの学校のことに頭を悩ませていますがこれからどうすれば良いのかと不安をかくせません。

■教会の近くにいたい

避難所や公園に取り残されるベトナム人の姿が目立つようになった。長田周辺に職場があり、子どももやっとなじんだ学校を転校させたくない。だから、市街地から離れた仮設住宅は敬遠された。大家族が多く、そのことも仮設住宅の選択の幅を狭めた。仮設住宅の抽選が外れ、避難所の閉鎖も取り沙汰され、「一体、どうすればいいのか」と、焦る空気がベトナム人や支援者の間に漂った。

ベトナム人のブ・ユイ・ルアンさんには8人の子どもがいる。1943年の生まれだけれど、書類上は46年となっている。ベトナムでは当時、兵役を逃れるため、出生の年を遅らせたという。

81年、家族とともに木造船で命懸けの脱出をした。パナマ船籍の船に救われ、日本へ。84年、香川県から、ベトナム人の仲間が住んでいる神戸に転居した。地震の日まで、鷹取教会に近いマンションに2部屋を借り、住んでいた。信心深いカトリック信徒のルアンさんは、ベトナム人信徒の代表を務めた。毎朝6時に教会に行き、お祈りをしてから、7時に始まるミサに参加した。だから、教会の近くに住んだ。職場も長田区。ずっと同じ町工場で、スポンジを漉く仕事をしていた。しかし、マンションは全壊し、取り壊されることになった。

ルアンさんは地震の日、同胞の安否を確認した後、鷹取中学に避難した。技術室での避難生活が続いていた。市街地に近い仮設住宅に何度も応募したが、当たらなかった。鷹取中学に最後まで残った避難者になったが、8月末、ようやく学校を出ることができた。神田さんの紹介で、JR新長田駅に近い信徒の土地に建てさせてもらったプレハブ住宅に移り住んだ。

一方で、長田区内の公園でテント生活を送るベトナム人たちの生活再建は、先が見えないままだった。

トラン・ティ・バンさんとトラン・ティ・ツエットさん、名前が同じ2人の女性は、同じ神楽小学校（現・長田南小）にそれぞれの家族とともに避難した。両家族ともカトリック信徒で、鷹取教会での日曜ミサに必ず参列する。

バンさんは住んでいたアパートが崩壊し、頭を8針縫うけがをした。夫は約13時間、生き埋めになった。3人の子どもが「お父さんが死んでしまう」と泣いたが、畳を抜いてやっと救出できた。子どもは当時、15歳から7歳で、避難所になった学校で兄弟げんかをしたり騒いだりし、苦情を言われたという。

ツエットさんは1歳の長女がよく泣いた。やはり避難所に居辛くなった。車があれば、その中で過ごしただろうが、当時、車は持っていなかった。

地震から2週間ほどして、両家族は長田区役所に近い川沿いの新湊川公園に引っ越した。家族ごとにブルーシートを張ってテントを作った。水は公園の水道から汲んだ。幼児に飲ませる水は煮沸消毒をした。電気はなく、ろうそくをともした。神父の神田さんがストーブを届けてくれ、たくさん服を着こんでもいたが、寒くて仕方なかった。それでも、言葉や習慣の違いでストレスが溜まる避難所の集団生活よりは気楽だった、という。

2人のつれあいは、会社は別だが、2人とも長田区にあるゴム関連の会社に勤めていた。家計を助けるため、バンさんも、ツエットさんも、靴の飾りを作ったり、それを貼り付けたりする内職をしてきたが、テントに移ってから再開できた。

仮設住宅の抽選は、申し込みを長田区周辺に絞ったせいか、落選続きだった。長田を離れたくない理由として、2人はまず通勤のしやすさを挙げた。さらにバンさんは、子どもたちを転校させたくなかった。同胞もいて、日本人の友達もいる学校だから安心できた。ツエットさんは東京から長田に移ってから日が浅く、生活面の相談をできるベトナム人が身近にいないと不安だった。

もちろん教会のミサも大切で、「一番大事」と2人は声をそろえる。「ミサに行かないのは罪になる。行かないと、落ち着かない」とバンさん。震災後、お祈りをして、神様に助けてもらったという。「元気が出ますように」「子どもがいい人になりますように」「早く市営住宅があたりますように」…。お願いすることはいくつもあった。

■紙の建築

トウケイダイとは、東京経済大学のこと。95年3月に教員、学生の有志が「ボランティアをする会」を結成した。代表となった助教授の森反章夫さんが鷹取救援基地を訪れ、活動の拠点とすることに決める。学生たちは夜行バス2泊、現地1泊の「強行週末ボランティア」を続け、3カ月でのべ150人余りが現地入りしたという。

夏、紙の管を建材にした仮設の「紙の建築」計画が始まった。ファックス用紙の芯になっている紙の管を巨大にした物と言えばいいだろうか。

その管を防水・不燃加工して柱とし、震災で焼失した鷹取教会の聖堂跡地に集会所を建てる。また、紙の管を丸太のように使ってログハウス風の仮設住宅もできる。工法を開発した東京の建築

家、坂（ばん）茂さんが1月末、鷹取教会を訪ね、「建築家として被災地の復興に役立ちたい」と援助を申し出た。

神田さんは最初、「火災にあった被災地に、紙の建物なんて冗談じゃない」とあきれた。坂さんは国連難民高等弁務官事務所のコンサルタントへの就任が決まっており、紙を使った工法による難民用シェルターの開発を手がけていた。東京から週末、鷹取教会でのミサに通い、神田さんに思いを伝えていく。

「紙の建築というと驚かれるが、加工が可能だし、性能も安定している。雨にぬれることで逆に強度が増すことも分かった。安価で軽量なので、移築も簡単にできる」

坂さん自らが資金1000万円の調達をすることで神田さんらの了解を得た。集会所は面積約170平方メートルで、直径33センチ、高さ5メートルの紙の管の柱58本がテント張りの屋根を支える。200人の収容が可能。9月の完成を目指して作業が始まった。

「紙の建築」の話が持ち込まれたことで、公園に取り残されたベトナム人の支援策も動き出す。

瓦礫の中から…

鷹取教会の仲間の一員であるネコのマリコを紹介します。マリコは地震のため飼われていた家を離れ、もう長い間教会に身を寄せています。少し前に子どもを産み、先日可愛い子どもたちを連れて教会にやって来ました。今では子どもを含めて5匹、教会でお世話になっています。

マリコは子どもを産む前は私たちの大切な食料を荒したりして、みんなを困らせていましたが、最近は母親になったためか、人に対して優しく接するようになりました。

また、この間、震災以来ずっとマリコを捜していた本当の飼い主が、この教会にマリコがいることを知って、かけつけて来られ、久しぶりに顔を合わせ、涙の対面をしました。　今では当然のように母になったマリコは、ボランティア基地を巡回しています。新しい小さな生命の誕生によって、みんなの心に安らぎをもたらしてくれています。

このようなかたちでマリコも神戸の復興に希望の光を与えているのかニャー？

■来る者に門を開ける

ネコのマリコの話題は、その後も「たきび」に登場する。95年9月8日発行の18号には、教会の隣にあったたかとり診療所の解体されたときのエピソードが載った。

鉄骨だけになった診療所の屋根裏に、ハトが巣を作っていたのを救援基地の人々は知っていた。その廃屋の解体工事中、マリコが「まちの保健室」に何かをくわえて入ってくる。小さなハトの死体。シスターの是枝邦子さんは気づいて、足がすくむ。コラム「保健室から」に、是枝さんはこう綴った。

〈ピアノの足元に冷たくなった小バトが小さな羽根を広げて仰向けになって死んでいました。マリコは巣から落ちた小バトを自分の子供をつれて来た時のように保健室に保護して欲しいと思ってつれて来たのだろうか。悔やまれてならない。「マリコ、せっかくつれて来てくれたのに助けてあげられなくてごめんね。」小バトは保健室の前の花畑に埋めて頂きました。震災によって、住む家も家族も、持ち物すべてを失った人々と、弱い小さな生き物たちがこの暑い夏、一生懸命に生きていました。希望という丈夫な翼を育て、自由に生きられる街づくりに参加したいと思うのです。〉

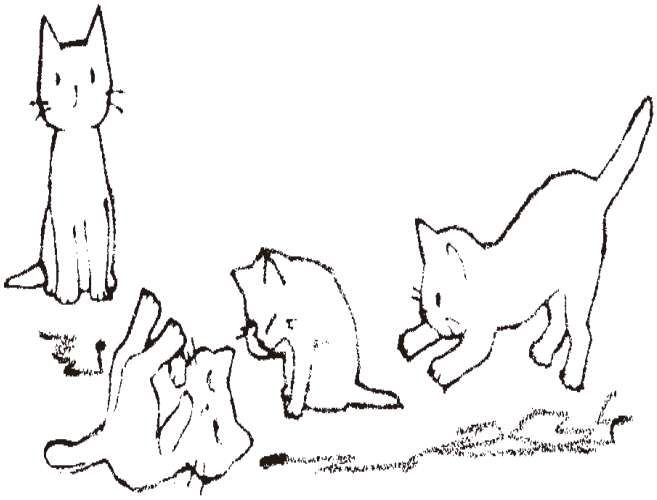
マリコは保健室の常連だった。

是枝さんは、鷹取に個人でやってきた震災ボランティアたちがマリコと同じに見えるという。

役に立てるかどうか分からない、「何様のつもり」と思われたらどうしよう、でも、やむにやまれず来てしまった。そんな若者が「私も置いてもらえますか」と、緊張して先住の人に尋ねる姿は、マリコと一緒だったのではないか。震災3年目か4年目か、関東の学生が夕刻に救援基地に着き、「こんなときに来てごめんなさい」とあいさつされたことがある。是枝さんは「泊まっていきなさい。でも、何か働かないとだめよ」と声をかけた。数日、彼は復興住宅で草むしりをして帰った。

「私も受け入れてもらったのだから、来てくれた人は抱きしめてあげたい。信者かどうかなんて気にならなかった。それが、たかとりでしょ」

来る者がいれば、門を開けて、受け入れる。「その姿勢をたかとりに学んでいきたい」と、是枝さんは語る。



たかとりのおいしい　お・や・つ

100人分のベトナムのおやつ
チェー　ダウ　サファン
（緑豆のデザート）

材料

緑豆：大さじ８０

タピオカ：
大さじ４０

千切り昆布：少々

ココナッツ：１０缶

スティックタピオカ：４００ｇ
（短く折って水に浸しておく）
さつまいも：６００ｇ
砂糖：１２０ｇ
水：２０リットル
バニラ：少々

作り方

１
緑豆・タピオカ・芋はゆでておく

２　鍋に７杯くらいの水を入れ、火をつける。沸騰したら砂糖を入れて溶かしてから１を入れる。仕上げにココナッツミルクと昆布を入れる。火を止めて、バニラを入れて完成。

★材料はNGOベトナム in KOBEで
購入することができます。
TEL　０７８－７３６－２９８７

■出て行くときは「いい奴」だった

このころ、「ボランティア元年」という言葉を耳にするようになった。春休みが終わって減ったボランティアが、夏休みになって再び増えた。さまざまな若者がやって来て、「たかとり」で人と出会い、成長した。一方で、トラブルもあった。評価はさまざま、だ。

バイク隊として、大阪・堺から通った平松正人さんは、鷹取で出会ったボランティアについて「皆が皆では決してないけれど、心構えができていない人が少なくなかった」と評した。言われた仕事しかしない。地域に溶け込もうとしない。「ミサの間は休憩時間」といった感じで雑談にふけるボランティアも気になった。カトリックの信徒でもある平松さんは「教会を基地にする以上は信者の気持ちも大切にしてほしい」と思った。

鷹取救援基地でボランティアたちを指揮した和田耕一さんは「被災地にボランティアに来たのは、みんな社会的には立派でない。だって本来の仕事があったら、そちらをやるでしょ」と、過激な評価をする。「盗難もけんかもあった。女と会えると聞いてきたやつもいた」という。「それでも」と、和田さんは言い添えた。「動機はどうでも、みんな被災者の役に立った。鷹取を出て行くときは善意であったのは間違いない」と。

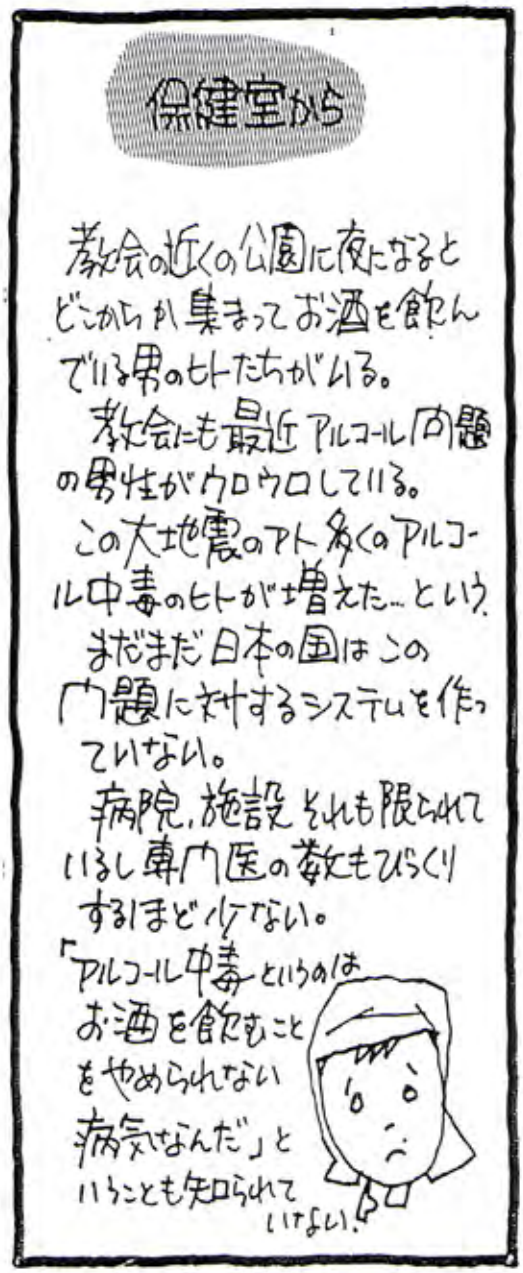
和田さんがゴリラネームを「竜」「虎」と名づけた2人の高校生がいた。二人ともいわゆる「不良」だった。春休みに、異性との出会いを楽しみに東京から神戸にやって来た。ところが、高齢者や障害者が暮らす地域型仮設住宅を回り、おばあちゃんたちと出会い、「やつら、本気になった」と和田さん。学校に戻り、関西への修学旅行のおり、涙ながらに「神戸に寄ろう」と訴えたという。

大学を休学し、救援基地に泊まり込みでボランティアをしたゴリラネーム「ベービー」、青木優尚さんに「女の子にもてたのは、どんな男の子」と尋ねた。「ひとつのことに、どろどろになってでも取り組むことが女の子に評価された。一生懸命かどうかが大事だった」とのこと。一生懸命を「かっこ悪い」と評価されかねない「日常」とは、違った空気が被災地にはあったのかもしれない。ちなみに、青木さんは震災の7年後、ボランティアの浜崎朋子さんと結婚した。

オフィス情報

オフィスでは毎日100人以上のボランティアの食事、宿泊所のチェック割り振りでキリキリと頭を悩ましている。朝礼の時と昼食の時では頭数が違っている。朝礼のあと、予約なしに来る人、お客さん、オジャマムシ E.T.C。だまって帰るヒト、だまって入ってるヒト。帰ったと思ってたら残っていたヤツ。いきなり夜遅く、「ボランティアに来ました～♡」と団体で来るモノ。あげくはせっかく割り振った部屋から勝手に移ってしまうヤロー。　オフィスでは一日中パオロ神父サマがコンピューターをたたき スズキさんがメモ用紙を片手に次々に来るボランティアの方々と応対…。

大変なんです。せめてルールだけはきちんと守ってください。



■シスターに会えてよかった

「まちの保健室」のシスター、是枝邦子さんは、震災支援に来る直前まで、アルコール依存症や拒食症の人たち15人が集う東京都内の施設にかかわっていた。病院で看護師として働いていたが、患者が来てくれるのを待つだけでなく、外へ出ていきたかった。そんな願望があって、その施設に通うようになった。

苦しみの根底に葛藤がある。葛藤を本人が自覚し、癒されないといけない。施設は、そういう考え方で運営されていた。ミーティングでそれぞれが思いを吐き出す。「でも、生きていてよかった」と感じられるまで。

「私はただ見守り、話を聞くだけだった」と是枝さんはいう。

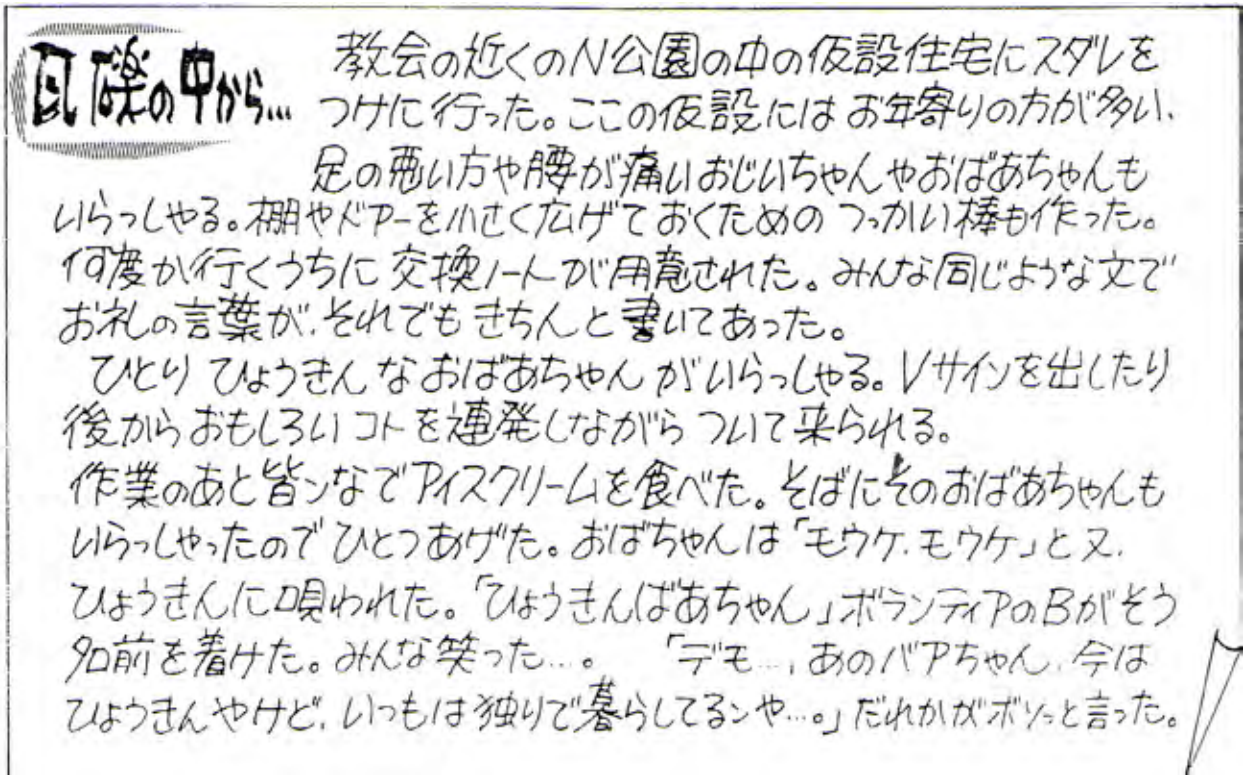
そして、是枝さんは被災地でもアルコール依存症の人々と出会うことになる。

JR新長田駅に近い避難所で出会った男性は人と会話せず、やがて、ビールの缶や空いたコップ酒で自分のスペースを囲むようになった。ろくに食事もとっていない様子で、顔は黄色く、髪はばさばさ。炊き出しの弁当を届けるうち、是枝さんとは雑談をするようになった。訪ねるたび、ピアニカやキーボードといった楽器や、おもちゃのロボットが並ぶようになった。店で買った、という。でも、本人が演奏するわけではなく、箱に入ったまま。救援物資らしい布団も、袋に入ったまま置かれていて、開けようとしなかった。是枝さんが「どうして」と問えば、「面倒くさいから」とごまかした。布団を汚したくなかったのだと、是枝さんは後日、思い返すことになる。楽器も、多分、甥か、姪か、誰かにあげようとしていたのではないか。

ある日、避難所から連絡があって是枝さんが駆け付けると、警察の人が来ていた。男性が亡くなっていた。

後日、親せきの女性が「使ってください」と、キーボード2台と電気あんま、パソコンをまちの保健室に届けた。是枝さんは「これはどなたかにプレゼントしようと思っておられたはず」と受け取ることを躊躇したが、相手は「どうぞ」と譲らなかった。

「彼は、シスターに会えるのを楽しみにしていました。鷹取の皆さんを頼りにしていた。自分たちは助けられなかったけれど、シスターに見舞ってもらい、人間らしい生活ができてよかった」。女性はそう語ったという。



瓦礫の中から…

教会の近くのN公園の中の仮設住宅にスダレをつけに行った。ここの仮設にはお年寄りの方が多い。足の悪い方や腰が痛いおじいちゃんやおばあちゃんもいらっしゃる。棚やドアーを小さく広げておくためのつっかい棒も作った。何度か行くうちに交換ノートが用意された。みんな同じような文でお礼の言葉が、それでもきちんと書いてあった。

ひとりひょうきんなおばあちゃんがいらっしゃる。Vサインを出したり後からおもしろいコトを連発しながらついて来られる。

作業のあと皆んなでアイスクリームを食べた。そばにそのおばあちゃんもいらっしゃったのでひとつあげた。おばちゃんは「モウケ、モウケ」と又、ひょうきんに唄われた。「ひょうきんばあちゃん」ボランティアのBがそう名前を着けた。みんな笑った…。「デモ…、あのバアちゃん、今はひょうきんやけど、いつもは独りで暮らしてるンや…。」だれかがポツっと言った。

■黙認してくれた

ゴリラネーム「ベービー」の青木優尚さんは、夏になって仮設住宅への引っ越しを手伝うことが多くなった。

印象に残っているのは、車いすの身障者が仮設住宅へ入居したときのことだ。入口に、スロープと手すりを付ける作業をしていたら、市職員に「強度がない」「仮設住宅は再利用するから困る」という理由で止められた。丈夫に作っていたし、段差があるままではどう考えても不便だった。

「手すりがだめなら、それがある所に入れてください」と反論すると、職員は黙ってしまった。青木さんたちは、その間に手すりを取り付けてしまった。黙認してくれた、と青木さんは感じている。

被災者の側に寄り添ったとき、「官」となじまないことも出てくることになった。

■紙のログハウスを公園に

「紙の建築」計画には、鷹取教会内の集会所建設と、もうひとつ、紙の管を丸太のように使ったログハウス風の仮設住宅を公園でテント生活をするベトナム人のために活用することも含んでいた。被災ベトナム人救援連絡会の依頼で鷹取救援基地が動くことになった。

紙のログハウスは4メートル四方。ビールケースを並べて土台を作るので通気性に優れ、テントよりは断熱効果もある。1戸20万円程度でできる。猛暑の中、幼い子どももいる家族がテントで暮らすことは大変だった。長田周辺で働くため、市街地から遠い仮設住宅は敬遠され、近くの仮設住宅は落選し続けた。公園での簡易住宅建設は不法占拠にあたるが、現状を放っておくことができなかった。私設の仮設住宅として建てるが、本来の公設の仮設住宅に入居できれば、すぐ撤去できる。そんな思いもあった。

問題は建てる場所だった。まずは6月に南駒栄公園で倉庫用として建てた。しかし、簡易住宅を建てることに、南駒栄公園に避難した日本人らが反発した。公園の人間関係は、日本人とベトナム人という対立関係だけでなく、ベトナム人同士も北か南か出身地で反目することがあり、坂さんの提案はなかなか受け入れられなかったという。

そのため、まず、互いに顔見知りのベトナム人だけが避難していた新湊川公園に建てることになった。鷹取救援基地のボランティアたちは8月3日、新湊川公園でテント生活をするベトナム人のために紙のログハウス6棟の建設作業を始めた。新湊川公園は長田区役所のすぐ目の前だ。ログハウス建設は大半のボランティアにも当日まで内密にされた。事前に可能な限り組み立てておき、前夜から公園の一角で「場所取り」をし、早朝、一気に建てた。建ててしまってから、行政は黙認し、撤去にくることはなかった。

トラン・ティ・バンさんとトラン・ティ・ツエットさん、名前が同じ2人のベトナム人女性は、それぞれの家族とともに新湊川公園でのテント暮らしを続けていた。冬の寒さもこたえたが、夏の暑さと虫もつらかった。カが多かった。ムカデに刺され、腕が腫れたこともある。紙のログハウスは朗報だった。仮設住宅は落選続きで、とても恒久住宅に移る余裕はなかった。雨露をしのげるログハウスは、テントに比べずっと楽だった。

9月17日、紙を建材に使った集会所「ペーパードームたかとり」が完成し、記念式典が開かれた。7月末から大学生ら延べ1000人以上が建設作業

続けてきた。

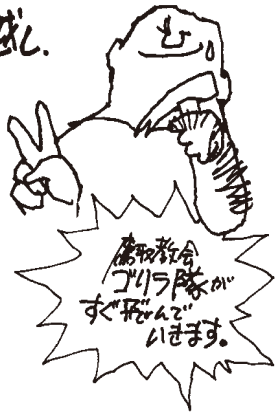
ペーパードームはさまざまな使い方をされることになる。住民の集会、青池憲司さんたちの撮った記録映画の上映会、コンサート、結婚式、修学旅行生の受け入れなど。ただ教会のミサを開く聖堂の代わりとしてではなく、宗教、国籍を越えた人々が集う場となった。

建築家坂茂さんは、もともと難民支援として「紙の建築」を考案した。震災の被災地で、まさにその用途で紙の建築は使われることになった。後の物語ではあるけれど、2001年9月11日の米中枢同時テロで崩壊したニューヨークの世界貿易センタービル周辺の跡地を利用する方法のコンペに、坂さんが参加するグループの設計案が最終選考まで残った。結局、採用はされなかったが、網の目に見えるデザインの超高層タワー案は世界の注目を集めた。また、2004年10月の新潟県中越地震でも避難所内のプライバシー確保に紙の建物を提案した。

お手伝いします。

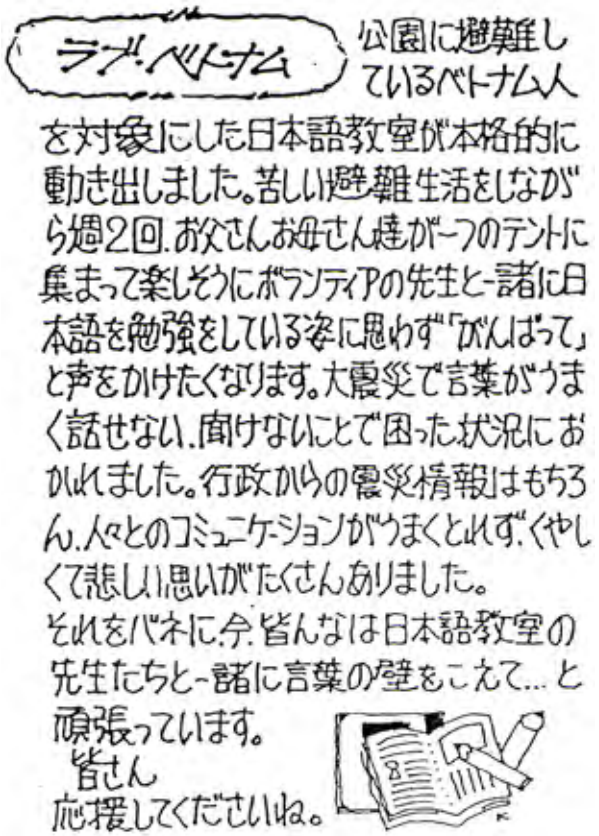
♡暑さに負けず皆さま頑張ってください
鷹取教会ボランティアグループは、今ちょっとしたお手伝いの用意があります。
お気軽に連絡ください。

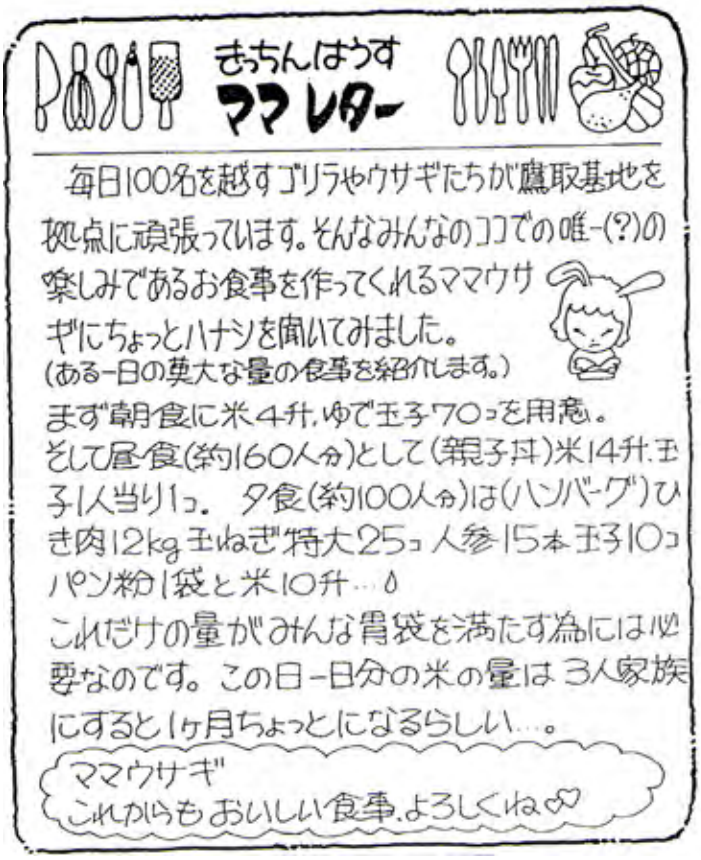
- 仮設住宅等への引越し.
- 荷物の取り出し
- 屋根のブルーシート掛け
- 解体作業
- 物置等の建設
- 棚作り.台作り等
- 病院への送り迎え



その他お手伝い出来るようなコトがありましたら、どうぞTELして下さい。

〒653 神戸市長田区海運町3-3-8
カトリック鷹取教会 金木まで
078・731-8300





■私のがない

「ベービー」青木優尚さんは、4月から9月まで、鷹取救援基地のボランティアとして活動した。9月中旬、大学に戻った。最後の仕事は長楽小学校から仮設住宅への引っ越しの手伝いだった。

青木さんは、鷹取での半年間を「人間的に成長させてもらった」と振り返る。神戸で育ったが、それまでベトナム人や在日韓国・朝鮮人のことはまったく知らなかった。生活苦ということも、実感としては分からなかった。

シスターの是枝さんと一緒に、ベトナム人の家族が住む須磨区の仮設住宅を訪ねたことがある。狭い部屋に子ども3人と両親、祖父母が住んでいた。発表会があるという長女のために是枝さんが徹夜で服を仕立て、それを届けるのについて行ったのだった。新しい服をもらった女の子は喜んで、早速試着した。でも、末っ子の女児が「私のがない」と泣き出した。是枝さんが「あした、必ず持って来てあげるからね」となだめた。子どもの服を買う余裕がない生活を目の当たりにして、なぜか青木さんは涙が出た。サングラスをしていたから、多分、誰にも気づかれなかったけれど。

■一緒に食べることから

一緒に食べることが多文化共生の第一歩。ベトナム出身の神父、ファム・ディン・ソンさんは震災後の神戸で活動し、そう確信するようになった。避難所になった鷹取中学でのベトナム料理の炊き出しが忘れられない。

ベトナム人の被災者たちが暮らした鷹取中学では当初、避難者担当となった教員の中溝茂雄さんに日本人からの苦情がいくつも寄せられた。先生やボランティアが事情を調べて苦情の主に説明すると、納得されることも少なくなかった。「救援物資の子ども服をたくさん持ち返るベトナムがいる」「ベトナムがトイレにカップ麺の残りを捨てた」…。日本人の側は、そのベトナム人の家族が子だくさんだということを知らず、また、残飯の件も、流しではなくトイレに捨てるように注意され、したことだった。

ベトナム人の側にも、誤解による不満を抱く人がいた。鷹取中学から南駒栄公園に移ったベトナム人が「学校は私たちにバナナ1本もくれなかった」と語ったというが、地震発生の当初は日本人も同様の状況にあった。

言葉の壁によって溝はいっそう深まり、夜のうち

に「ベトコンは出ていけ」と張り紙がされた。校舎に設置された無料の電話を長時間独占していたベトナム人が、日本人に殴りかかられるトラブルも起きた。そのベトナム人はもともと学校の避難者ではなかったらしく、すぐ逃げたが、中溝さんは「関東大震災のときの朝鮮人虐殺みたいなことにならないか、本気で心配した」という。毎日開く班長会議で、中溝さんは訴えた。

「生活習慣の違いがあるのは当たり前で、大目に見てほしい。地震で大変な思いをしているのに、ささいなことでやいやい言うのはどうか。問題があれば、私に言ってほしい。必ず話を伝える。暴力事件になったら、どっちも出てもらうことになる」

中溝さんは、鷹取教会にも出向き、被災ベトナム人救援連絡会のメンバーやソンさんに相談をし、ベトナム人たちに「要望は聞くが、集団生活のルールも守って」と伝えてもらった。「ベトナム」と呼び捨てていた日本人たちが、いつしか「ブさん」「ガーさん」と名前で呼び始め、トラブルは減った。そうなってから中溝さんは、ベトナム人の避難者たちに「一度、ベトナム料理をみんなにふるまってもらえへん？」と提案した。

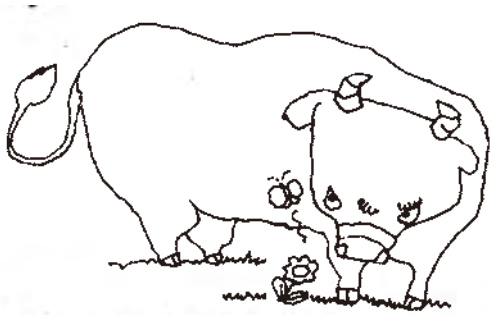
ベトナム人の女性たちが「お世話になったお礼をしよう」と引き受けた。米の粉で作る平打ち麺「フォー」を作ることになった。ソンさんも手伝うことになり、肉や野菜を調達した。運動場のブルーシートを張った調理場でスープを前日から仕込んだ。ちょうどサリン事件が発生したばかりで、「毒を盛られたら大変」と、鍋を徹夜で見守った。

当時はまだベトナム料理は一般的でなく、「口に合わず、食べてもらえないかも」と心配するベトナム人女性もいたという。最初にやって来たのはボランティアだった。「おいしい？」。ソンさんが「もちろん」と応じた。麺をすすったボランティアの「うまい」という言葉をきっかけに、まわりで見ていた避難者も手を伸ばしてきた。「ベトナム人も箸を使うんや」という感想が聞こえてきて、ソンさんは一瞬さびしく感じたが、出会いの場ができたことをうれしくも思った。

お客さんが次々訪れた。作り手が追いつかないと見て、日本人の女性たちが野菜を切るのを手伝ってくれた。ベトナム人と日本人の女性が並んで包丁を握り、調理場に笑い声が響いた。フォーの作り方を聞いてくる日本人もいた。

「食べることで心を開くことができる」と、ソンさんは思った。その後、転勤先の神奈川県川崎市の教会でベトナム料理の屋台を開くのも、神戸での経験があったから。震災の10年後、ソンさんはこんなふうに思っている。

「神戸を原点に、人と人がつながる素晴らしさを伝えていきたい。神戸で終わっては意味がないでしょ」



瓦礫の中から

鷹取商店街の中ほどに"しあわせ湯"というお風呂屋さんがある。6階ぐらいの高さのビルの風呂屋だ。このビルの壁に「お絵かき隊」は取り組んでいる。足場の上で作業が続く。「おっちゃん、ワシにも色ぬらしてや…」パンチパーマの40歳ぐらいのオッさんが風呂上りに声を掛けてきた。「どうぞ」。赤いペンキを持ってオッさんは2階の足場に上がった。道路に面した壁に描いてあった花の中心部をぬりだした。花びらは黄色をぬらせてやろうとペンキを持って足場を登っていったが、ハッとして足が止まった。赤いペンキをぬっているオッさんの目から涙がポロポロ…。「ありがとヨ」ニコっと笑ってオッさんは置いてあった洗面器を持って帰っていった。あとで知った。オッさんの家族が死んだコトを、そして、その場所は赤いペンキが見える所だと。

■絵がなくなるのが復興やろ

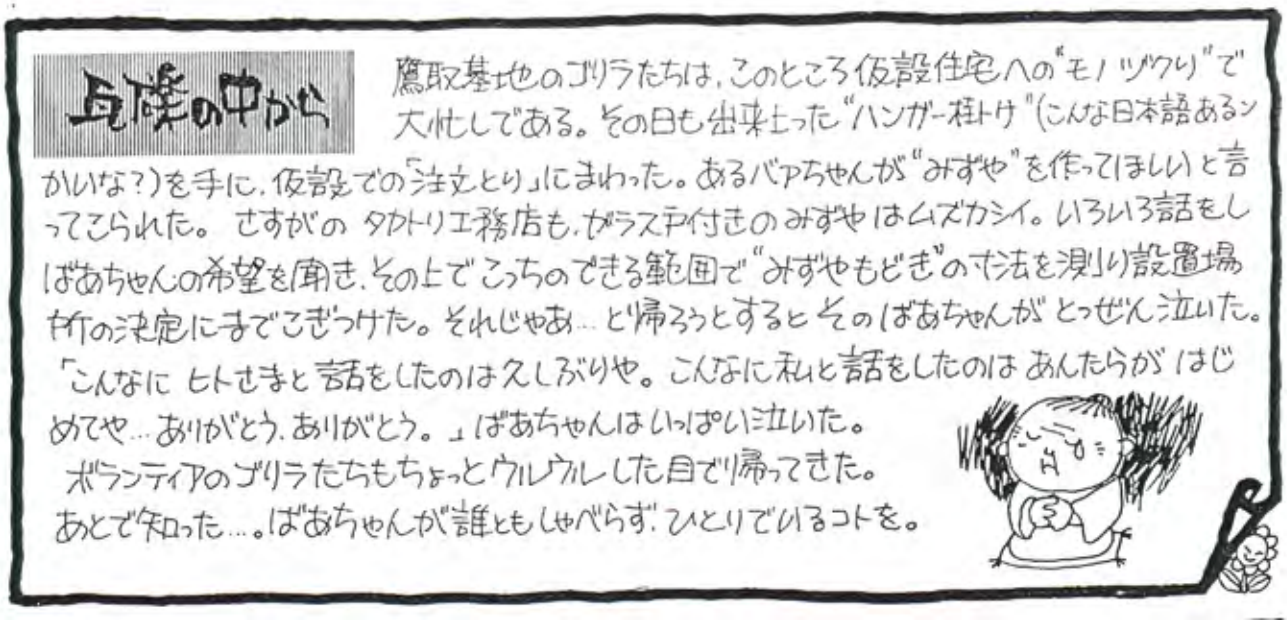
被災したまちをカラフルに彩った原始人のペンキ絵は、鷹取周辺で約60カ所にもなった。野田北部まちづくり協議会の役員で、黒板製作会社を営む河合節二さんも、隣家が倒れてきて傾いた倉庫の跡地に置いたコンテナに絵を描いてもらった。7月のこと。図案は、地震後に親しくなった画家の和田耕一さんに任せた。震災直後の夜警のとき、教会のたき火の周りで酒を飲んだ。節二さんも教会にあった幼稚園の卒園者だが、久しぶりに教会の敷地に入った。炊き出しに通った時期もある。

家族の写真を見て、和田さんが下絵を描き、そこにボランティアたちが1週間ほどかけて色を塗った。炎天下、コンテナの前で若い女性が大の字になって寝転がって、ひと休みしていたのが懐かしい。母と兄の俊造さんを含む6人が原始人の姿で描かれた。ひとり裸にされてしまった俊造さんは「なんでおれだけ」と、ちょっと機嫌が悪かった。

ペンキの絵に絡んで、節二さんがもうひとつ、おぼえている光景がある。しばらくして、店の本格的な再建が始まると、絵がひとつひとつ減っていった。「せっかく描いた絵がなくなるのは、さびしいなぁ」と言うボランティアに、和田さんが怒鳴った。「あほ。絵がなくなるんが、復興やろ」と。

震災10年を迎え、絵が描かれたコンテナがなお数カ所に残っている。節二さんのコンテナもそのひとつ。中に製品や工具を収納している。「忘れたらあかん」「ひと区切りつけよう」。震災10年に、ふたつの思いが交錯する。「母に『いつまでも、みっともない』と言われるんですが…」。節二さんは苦笑する。

2001年、俊造さんが病気で亡くなった。ショックだった。兄の思い出とともにコンテナがある。「震災から10年たって、まだあるのだから、置いておこうと思います」。絵のあるコンテナの行く末を、節二さんはそう語る。



■「タロー」に生まれ変わる

職業訓練の学校に通っていたとき、停学になったのをきっかけに鷹取に滞在したゴリラ・ネーム「タロー」。95年の春から復学を認められ、休みの日に鷹取に通う週末ボランティアになったが、けんかをして5月には、また停学になってしまう。再び救援基地に泊まり込んだ。

鷹取に来たときは高所恐怖症だったが、和田耕一さんの「スパルタ教育」のおかげもあって、1週間ほどで屋根に登ることには慣れた。大工仕事は当時、ボランティアで鷹取に来ていた神父の池田雄一さんが教えてくれた。手際よく仕事する池田さんにタローはあこがれ、「この人のやってることを、おぼえたろ」と考えた。お互い口が悪いから「あほか、釘1本打つのに、3本も曲げんな」「やかましい」といった具合のやりとりが日々繰り広げられたのだけれど。

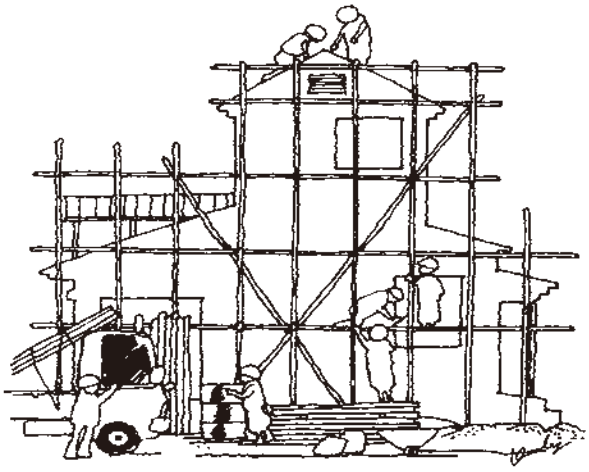
大雨の日、救援基地に泣きながら駆け込んできた高齢の女性がいた。雨漏りするという。「行くぞ」とタローが声をかけ、ボランティア数人でブルーシートを掛けに走った。雨風が吹き荒れていたが、トラックの荷台から屋根にはしごをかけて登った。「別に誉めて欲しいからするんやない。やらなあかんと思ったら、する。ふつうの事を、当たり前にしただけや。鷹取は、おれにとっては遊び場。だから、ボランティアって言われるのは嫌い」

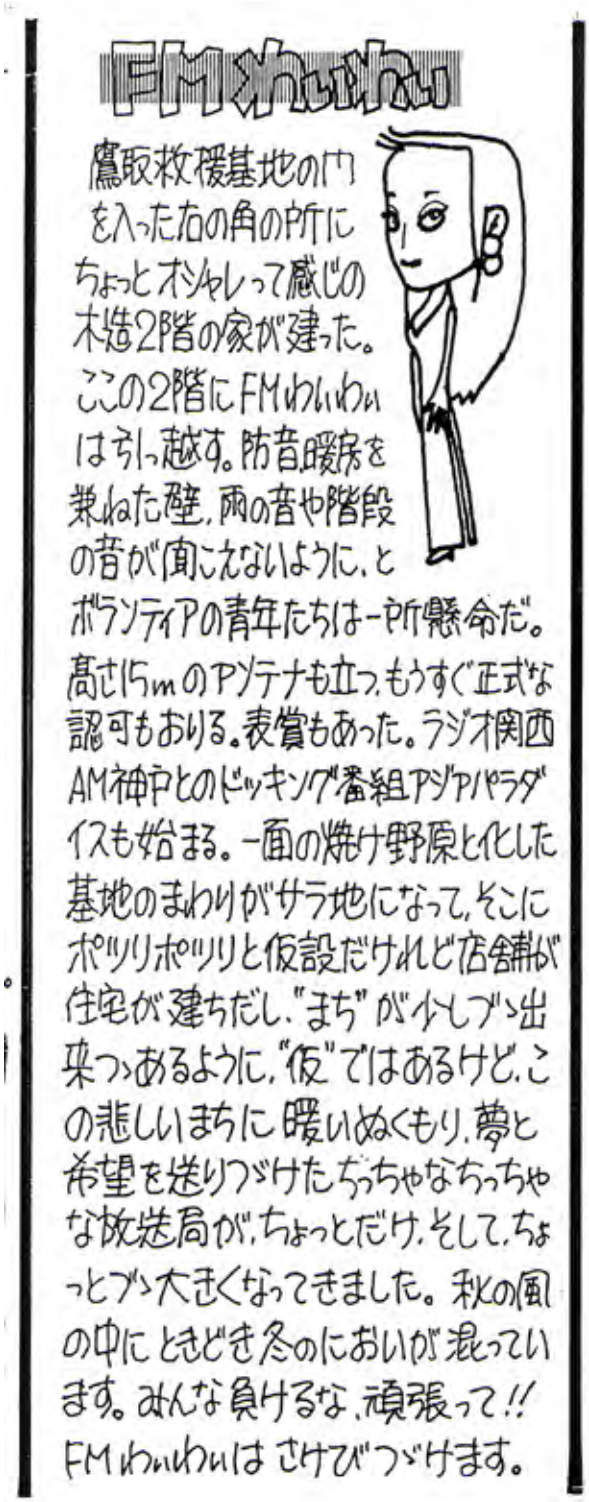
タローは仮設住宅の訪問もするようになる。週に1度の訪問を1度休むと、「なんで来なかった」と、高齢の女性に泣かれた。

「親のおらん子は、かわいそうと見られるか、批判の目を向けられるか、どっちかしかない。勝手にかわいそうと思われるのは、ごっつう腹が立つ」。タローの心情は、仮設住宅の被災者が感じる悔しさと似ていたかもしれない。「かわいそう」と声をかけられて、うれしい人はいない。

鷹取で学んだことは何か。「自分が心を開かないと、相手も開いてくれない。だから、人を信じることを大事と思うようになった」。自分しか信じない、とかたくなに思っていた。そんな自分が鷹取での人との出会いによって変わった。「おれは問題児やけど、鷹取では優等生だった」とタローは自慢する。

救援基地にかかわりながら、学校の2年のコースを無事卒業した。機械工や大工を経て、23歳で独立し、水道工事の自営業を始めた。





FMわいわい

鷹取救援基地の門を入った右の角の所にちょっとオシャレって感じの木造2階の家が建った。ここの2階にFMわいわいはうっ越す。防音暖房を兼ねた壁、雨の音や階段の音が聞こえないように、とボランティアの青年たちは一所懸命だ。高さ15mのアンテナも立つ、もうすぐ正式な認可もおりる。表賞もあった。ラジオ関西AM神戸とのドッキング番組アジアパラダイスも始まる。一面の焼け野原と化した基地のまわりがサラ地になって、そこにポツリポツリと仮設だけれど店舗が住宅が建ちだし、"まち"が少しづつ出来つあるように、"仮"ではあるけど、この悲しいまちに暖いぬくもり、夢と希望を送りつづけたちっちゃなちっちゃな放送局が、ちょっとだけ、そして、ちょっとづつ大きくなってきました。秋の風の中にときどき冬のにおいが混っています。みんな負けるな、頑張って!!
FMわいわいはさけびつづけます。

■名前は自分自身

発足したばかりのFMわぃわぃに「ハイスクール・ベトナム」という番組があった。ベトナム出身の神父、ファム・ディン・ソンさんが企画し、地元に住むベトナム人の高校生とともに自ら出演した。

女子生徒たちのおしゃべりや好きな曲の紹介など、内容は高校生の希望を受け入れた「軽め」だったが、どうしてもソンさんがこだわったことがある。初回の録音を始めたら、1人が自己紹介で日本式の通称名を名乗った。ソンさんは録音を止めて、「なんで」と叱った。本名を使うように指示したが、その子は抵抗した。「友達に聞かれたら、いじめられる」と、心配していたという。

「名前は自分自身。カーテンを引いて、本当の自分を隠しては生きていけない」。ソンさんは説得を重ねた。「いじめられたら、ぶつかっていったらいい。自分を見失う方が、もっと大変」とも話した。数日話し合って、その子は本名を使う決心をする。

しかし、震災後10年、ソンさんの思いに反し、学校で本名を使わないベトナム人生徒が増えていく。99年4月から神奈川県川崎市の鹿島田教会を拠点にベトナム人の支援活動をするソンさんは、中学の卒業証書の名前を日本式の通称名にするか、本名にするか、相談されたことがある。学校の先生と生徒本人は通称名を望んだ。在学中、ベトナム人であることを隠してきたのに、今さら本名にはできないという理由。日本語をほとんど理解しない母親は、それを知って怒り、泣いた。母親は息子の通称名さえ知らなかった(在日ベトナム人の場合、親が子の通称名を知らないことは珍しくない。在日韓国・朝鮮人とはずいぶん事情が違う)。また、入学のとき、親が先生から「いじめられないように日本の名前にした方がいい」と勧められるケースもあるという。

NEWS

10/15(日) 救援基地入口横に「兵庫県定住外国人生活復興センター」引越。基地の中が又ひとつ充実したものとなる。

10/16(月)17(火) 地域・基地関係者8名が長野県南木曽町へ去る9月30日運ばれてきた木材のお礼に行った。南木曽町役場での親睦会、交流と今後の支援を願う上の成果のひとつとなった。尚建物の2階にはFMわぃわぃが入る。室内は防音壁が作られるなど基地のゴリラ隊の腕が発揮された。

★ 文通ボランティア、順調に進む。現在80組強の文通が行なわれ、これからも大きく発展していくもよう。尚、基地では切手、葉書などを集めている。皆様の協力を得たい。

★"ペーパー・ドーム・たかとり"の申し込みが増えている。多目的に利用してほしい。

10/29(日)"神戸地区国際協力の日"鷹取教会内でバザー開催。多くの方の参加を望んでいる。

■「鷹取木工所」を支えた南木曾町との交流

誰が言い出したか、たかとり救援基地が「鷹取木工所」と呼ばれた時期がある。仮設住宅への引っ越しを手伝ったボランティアたちは、高齢の人々が住むには不便な面が多々あると感じた。不便さを補うにはどうしたらいいか、アイデアを出し合って、入口の段差を緩和する踏み台、室内の手すりなどさまざまな「仮設グッズ」をボランティアたちが発明した。倒壊した建物から引っ張り出した木材などを材料にした。

そんなとき、長野県の南木曾町は町を上げて、救援基地への木材支援をしてくれた。林業の町だから、木材を神戸に送ろうと、支援先を探していたという。95年9月、10トントラックが10数台、木材を満載してきた。トラックのガソリンは、町のガソリンスタンドが提供してくれた。教会内には収まらず、周辺の空き地にも置かせてもらった。大量の材料を得て木工所は活気づき、ベンチや犬小屋まで作ってしまった。震災10年まで使われるFMわぃわぃの局舎も、この木材を使って建てられた。

南木曾町との交流は続き、鷹取と南木曾の間を何度か人が往来した。96年6月には救援基地のメンバーが木材をいただきに南木曾を訪ね、歓迎された。懇談会のおり、南木曾町の木材業界が決して楽ではなく、倒産する会社もある状況を知ることにもなる。「余っているから木材を出したのではない。苦しんでいる神戸のため、痛いところから出しているのだ」「木材だけの関係で終わらず、人と人との結びつきのある長いお付き合いを…」。メンバーは、そう言葉をかけられた。

96年7月6日発行の「たきび」32号に、南木曾訪問の報告が載った。「南木曽の方々に私たちはただ頭をたれるのみだった。大きな愛と力を、トラックに積んだ材木の何十倍、いや何百倍を同時にいただいた。大切に、このモノの心を使っていきたい」

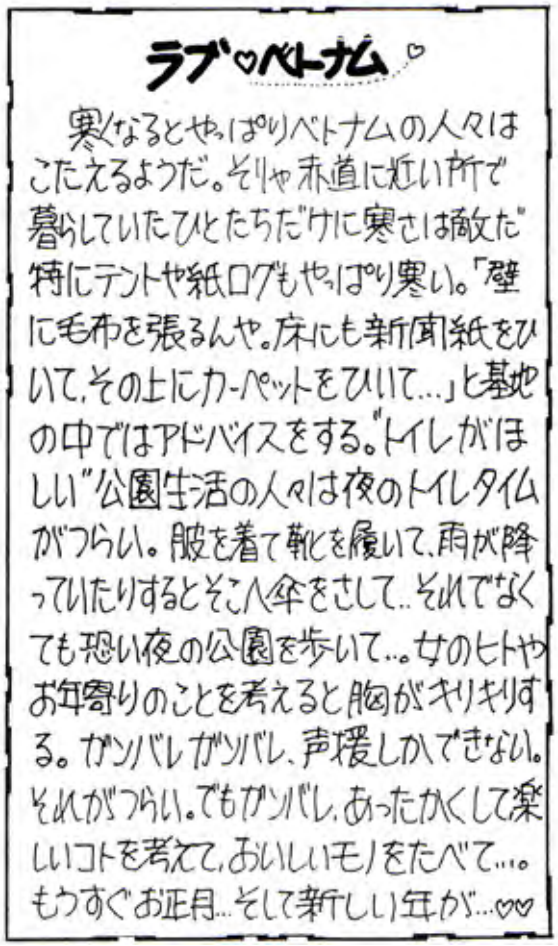
■「文通ボランティア」

郵便ポストに入っているのはダイレクトメールと請求書ばかり。めったに手紙が届かない。仮設住宅を訪問するボランティアが、そんな高齢者たちの寂しさを思いやって、「文通ボランティア」の取り組みが始まった。「たきび」を通して手紙を送ってくれるボランティアを募った。一方で、仮設住宅でも手紙の受け取りを希望するかどうか聞いて回った。仮設住宅の希望者1人に対して、ボランティア3、4人を割り当てた。そういった段取りも信徒の鈴木迪子さんが仕切り、95年夏から手紙のやり取りが始まった。

文通が続いて、実際に会うことになった人たちもいる。須磨区友が丘の仮設住宅に住む男性には、文通相手の若夫婦が新生児を連れて北海道からやってきた。目の不自由な被災者は、録音テープを送ってくれた人を訪ね、広島にまで旅行した。

仮設住宅側の手紙の希望者は約200人になった。ボランティアの登録は北海道から沖縄まで4000人にもなり、96年1月には断わりの手紙を送ることになった。

鈴木さんのもとには、文通を続ける県外のボランティアから「返事が来ないけど、大丈夫だろうか」と心配する電話がかかってくることもあった。鈴木さんは「手紙と通して、新しい結びつきができてよかった」と振り返る。



ラブ♡ベトナム♡

寒くなるとやっぱりベトナムの人々はこたえるようだ。そりゃ赤道に近い所で暮らしていたひとたちだケに寒さは敵だ"特にテントや紙ログもやっぱり寒い。「壁に毛布を張るんや。床にも新聞紙をひいて、その上にカーペットをひいて…」と基地の中ではアドバイスをする。"トイレがほしい"公園生活の人々は夜のトイレタイムがつらい。服を着て靴を履いて、雨が降っていたりするとそこへ傘をさして…それでなくても恐い夜の公園を歩いて…。女のヒトやお年寄りのことを考えると胸がキリキリする。ガンバレガンバレ、声援しかできない。それがつらい。でもガンバレ、あったかくして楽しいコトを考えて、おいしいモノをたべて…。もうすぐお正月…そして新しい年が…♡♡

■ほかに行く所がない

震災1年のとき、神戸市内の公園で生活する被災者は400人余り。その4分の1近くを長田区のベトナム人が占めた。南駒栄公園に18世帯79人、新湊川公園に5世帯23人がログハウスなどで暮らし、そこから地元のケミカルシューズ関連の工場などに通っていた。市はテント村の早期解消を求めたが、ベトナム人側は「ほかに行く所がない」。引っ越しできない背景には、就職や入居時の差別もあった。一方で、公園のベトナム人避難者の一部が窃盗や麻薬所持容疑で逮捕され、いっそう周囲の視線が厳しくなった。「テント村が誤解を受けるのが悔しい。すべてのベトナム人が犯罪者ではない」。そんなため息が避難住民から漏れた。

ボランティア

♥基地の作業年末の30日から来年1月5日までは内部の建設の仕事や棚(仮設グッズ)の製作等の作業は休みます。外部から依頼の荷物運び、仮設住宅、独り暮しの方の訪問等をします。特にお正月を独りですごされる方を訪ねたり救援基地に来ていただく為のボランティアが必要となりました。又、お正月だけの食事の順備、基地内のおそうじ等をしてくださる方を求めています。事務所の鈴木さんに連絡してください。いつでも結構ですが、できれば早目にお電話ください。(078-731-8300)お正月ボランティアプロジェクトを組みたいと思います。

♥毎月第2土曜日は大国公園から元気な子ども達の声が聞える。ボランティアが子ども会を開いているのだ。彼らは震災によって離ればなれになった子ども達と一緒に遊びの場を共有し、おたがいのつながりを深め、再び神戸の地が活気にあふれた地になってほしいと願い、7月に結成。現在約15名、8月に行なわれた夏まつりのだんじり作り、すいかわり、水鉄砲遊び、ひこうき、風車などの工作しゃぼん玉、犯人をさがせゲーム…と様々な活動をしてきた。子ども会は壁画と一緒でやっているのを見るのも楽しいし、やっているボランティアも楽しい♡子ども達も、どんどん明るくなってきた。どんどん話すようになった。知らない子どもたちとも話すようになった。「これからもいっぱい子供たちとの和を開き広げていきたいデス。」ボランティアのメンバーはそう語る。

■だんじりが街を横断した

高齢者だけでなく、子どもたちにも支援が必要ではないか。ストレスを抱えながら、生活再建に忙しい親に面倒をかけられないと思う子どもたちが少なくなかった。東京から来ていたボランティアたちの提案で子ども会が始まった。

夏まつりは8月5日、実行委員会の主催で大国公園を中心に開かれた。まつりを発案した神田さんには思惑があった。日ごろ一緒に活動することが少ない両地区の住民組織に、教会という第三者的な立場から呼びかけ、両地区共同のイベントをできないか、と思った。

住民やボランティアが準備した屋台には長い列ができた。子どもたちが作っただんじりは、公園を出発し、野田北部と旭若松の両地区を練り歩いた。両地区の住民が力を合わせ、まつりを成功させた。

■こだわりのタオル

首にかけたタオルが、神父の神田さんのトレードマークになった。地震の直後からマフラー代わりに巻き始め、なんとなく使い続けていた。しかし、クリスマス・プレゼントをきっかけに、気持ちを改める。

プレゼントの贈り主は、大分県の老人ホームで暮らす女性。「神田さん、はじめまして。でも、私はテレビで見て、よく知っています。いつもタオルを巻いているけれども、ちゃんと洗っていますか」。そんな手紙とともに、タオル20枚ほどが箱に入っていた。タオルはそれぞれ違う柄で、1枚ずつ集めてくれたらしい。「うれしかった。神戸にいる間は、タオルを離さんとこうと思った」。以来、「こだわりのタオル」を神田さんは身につけ続けている。

■最後の１人が戻るまで

鷹取教会のもう一人の神父、スック・ジョバンニ・パオロさんはイタリア人。日本語が巧みで、ボランティアや地域の人々に「パオちゃん」と親しまれた。写真の腕も確かで、被災した人々のたくましい笑顔をとらえた。カメラを手に「パオロの目」で鷹取の復興の足取りを記録した。

地震発生から1年、生活再建の格差は広がり続けた。神戸市内の待機所や学校、テント村などで約780人が不自由な生活を余儀なくされ、仮設住宅には約9万人が暮らしていた。一方で、立ち直れない被災者への批判や、無関心も芽生えてきた。

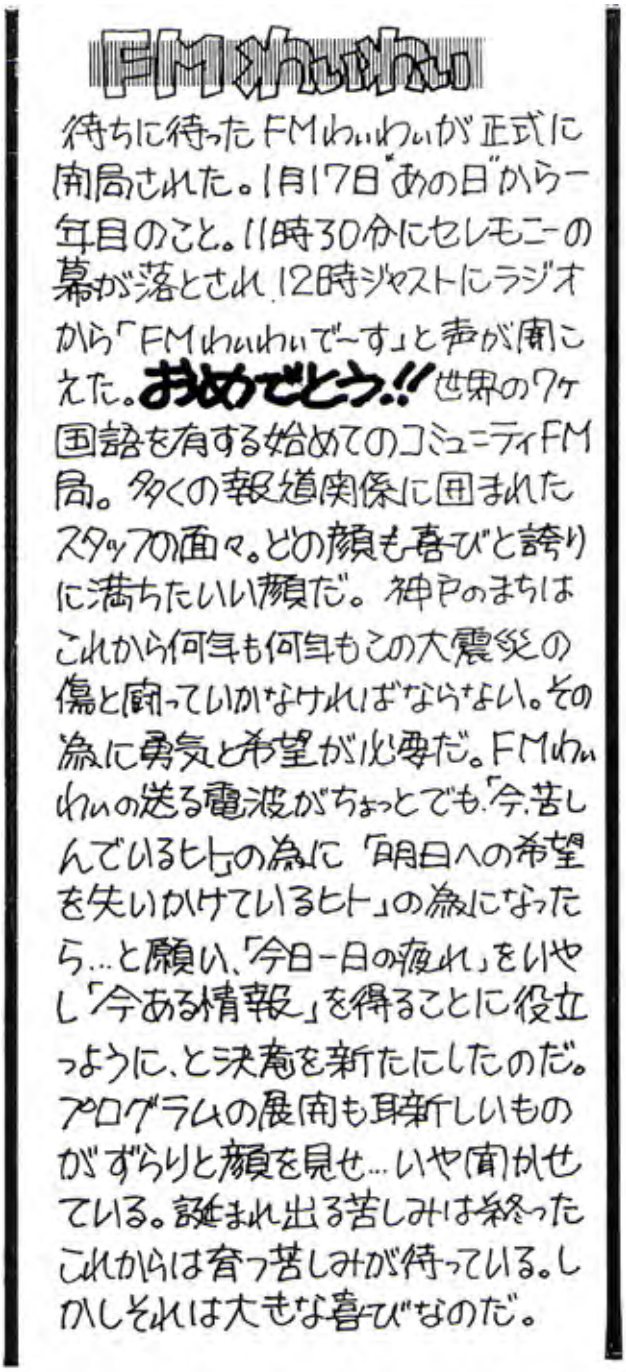
震災1年の日、FMわぃわぃの正式開局の日も重なり、救援基地にはたくさんの懐かしい顔がそろった。

震災後いち早く駆け付けたバイク隊の平松正人さんも久しぶりに鷹取を訪ねた。渋滞をかき分けて進んだ道で、「よー来てくれた」と声をかけられ、人々の思いやりを感じることも多々あった。「人間も捨てたもんやない」。1・17は、そういう気持ちを思い起こさせてくれる日となった。

神父の神田さんは、震災に向き合い続ける思いを綴った。

「鷹取教会救援基地は多くの仲間に支えられてここまできました。一人一人が聞いたもの、見たもの、そして感じたものをかたちにしてきました。人々は寂しさや悲しさをひとつず喜びに変えてきました。片付けは少しずつ進みますが、最後の一人が町に戻ってくるまで地震は終わりません。ここは、忘れ去られようとしている人々と共に歩む救援基地です」

決意の文は、教会のキリスト像の脇にずっと掲げられることになった。



FMわぃわぃ

待ちに待ったFMわぃわぃが正式に開局された。1月17日"あの日"から一年目のこと。11時30分にセレモニーの幕が落とされ、12時ジャストにラジオから「FMわぃわぃで～す」と声が聞こえた。おめでとう!!世界の7ケ国語を有する始めてのコミュニティFM局。多くの報道関係に囲まれたスタッフの面々。どの顔も喜びと誇りに満ちたいい顔だ。神戸のまちはこれから何年も何年もこの大震災の傷と闘っていかなければならない。その為に勇気と希望が必要だ。FMわぃわぃの送る電波がちょっとでも「今苦しんでいるヒト」の為に「明日への希望を失いかけているヒト」の為になったら…と願い、「今日一日の疲れ」をいやし「今ある情報」を得ることに役立つように、と決意を新たにしたのだ。プログラムの展開も斬新しいものがずらりと顔を見せ…いや聞かせている。誕まれ出る苦しみは終ったこれからは育つ苦しみが待っている。しかしそれは大きな喜びなのだ。

■垣根は低く

震災1年になる1月17日正午、コミュニティ放送局「FMわぃわぃ」が正式開局し、その第一声が電波に乗った。

当初の使用言語は、韓国・朝鮮語、ベトナム語、スペイン語、タガログ語、英語、中国語、それに日本語の7つ。地域情報やニュース、各国の料理や音楽を紹介する番組が放送された。形態としては株式会社となり、その社長となった神田さんは「震災から1年がたち、単なる復旧作業ではなく、新たなものをつくっていく時期が来た」と語った。放送を支えるのは80人余りのスタッフで、大半がボランティアだった。

大阪・曽根崎新地で母親とともに美容室を営む美容師、乾敦子さんは開局以来10年、勤務の合間を利用し、ずっとボランティア・スタッフを続けている。スタッフをしていた知人の吉富志津代さんから誘われ、最初は吉富さんと一緒におしゃべりする番組を受け持った。正式開局後は「敦子の気まぐれミュージック・タイム」という1時間番組を企画、出演した。ベトナムの曲を流し、中国や香港、タイを旅する知人が現地で買って来てくれたテープやCDも活用した。ホームステイしていたオーストラリア人の高校生をゲストに招いたこともある。その後は、韓国・朝鮮語と日本語による番組などのDJをしてきた。「いろんな人と友達になれるから、楽しい。週1回、鷹取に出てくることは私自身のリフレッシュになる」。それが続けられた理由。

「FMわぃわぃは、垣根が低い」と、乾さんは評する。そこに座っている人、あそこを歩いている人、それぞれ国籍が違い、「お国はどこですか」と気安く問いかけられる。

美容室の客には、水商売の外国人が少なくないが、気軽に声をかけてきた。「鷹取に来てからいっそう国籍の違いに身構えなくなった自分がおもしろい。親の世代とはずいぶん違うと思う」。地震のとき、乾さんは35歳だった。

いろんな国の人がいるのが当たり前。そんな雰囲気がFMわぃわぃの周りから広がっていって欲しい。乾さんは、金子みすずの詩が好きだという。「みんな違って、みんないい」。そう思う。

特別報告!! どうすればいいの!?

去る2月22日付の神戸新聞は「神戸市は待機所、旧避難所、テント村などを3月末を目標に解消し、仮設住宅のあっせんも原則的に終了すると発表した。」「場合によっては法的な措置も検討する」と報道しました。そして南駒栄公園に暮らす避難者に対し3月末までに公園生活を解消するようにと文書をもって「お知らせとおねがい」という形で言ってきました。文書による理由は「当施設も、かねてより、もとどおり復旧し、通常利用を再開することが急がれています。」ということです。

- 神戸市災害対策本部
- 長田区災害対策本部
- 神戸市公園管理者

となっております。日付けは平成8年2月23日となっていました。

被災ベトナム人救援連絡会議ではこの問題を重視し、神戸市長に対し、避難者の希望にそって仮設の斡旋、強制退去のないよう要望書を提出しました。

神戸市長
笹山 幸俊 殿

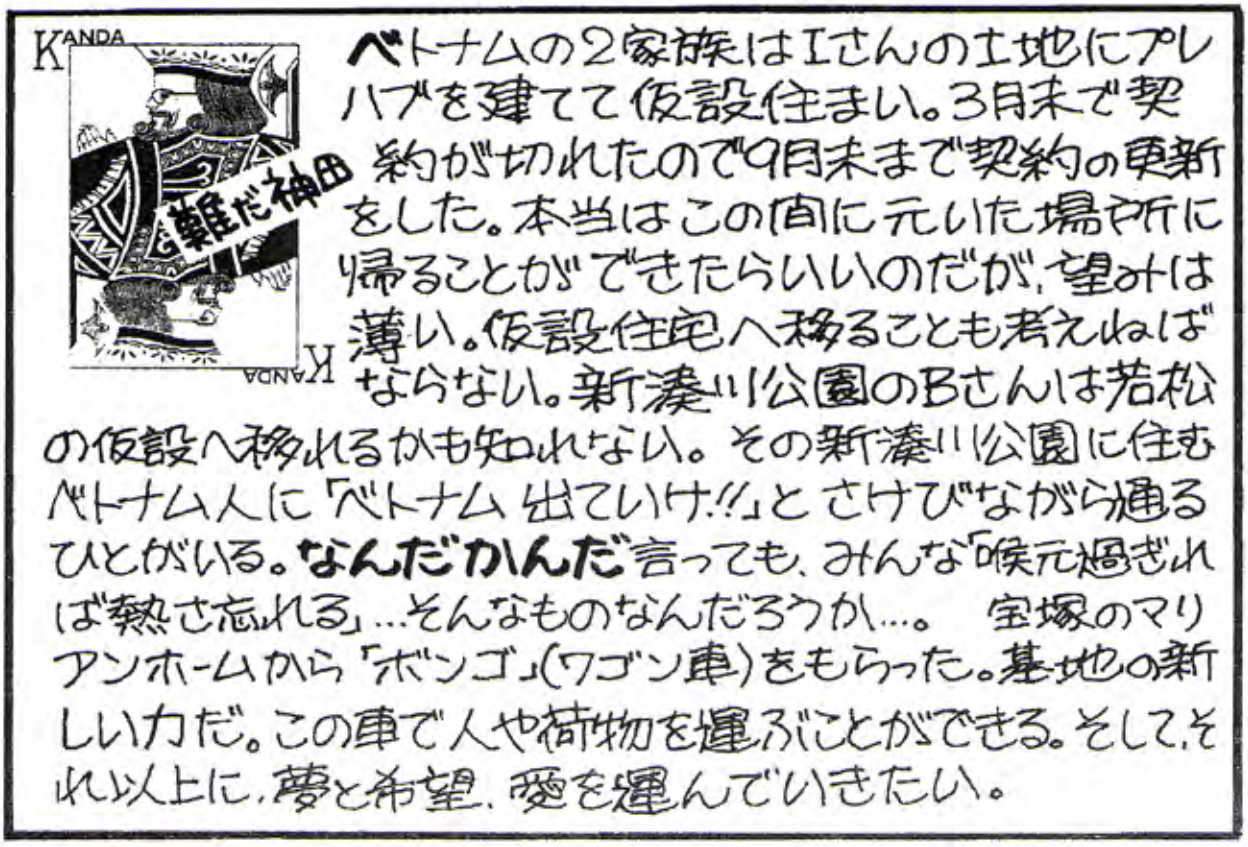
―要望書―

震災から1年以上が経過しましたが、この間貴職には被災者の救援と街の復興のために日夜ご努力されていることに対し敬意を表します。（中略）被災者が安心して暮らせる場所を用意しないまま、待機所や公園での生活を解消させるというこの発表は、未だに安定した住居を確保できない被災者を不安にさせるばかりでなく、支援ボランティアや一般市民にとっても理解し難いものです。まだ公園等に残っている人々は、仕事や家庭の問題などで遠くの仮設へ行けず、やむを得ず2度目の冬を避難場所で過した人々です。特にベトナム人達は、震災当初から言葉の壁に阻まれて命にかかる情報も得られず、その後も仮設を含めた生活再建情報に手が届きにくい状態が続きました。（中略）生活環境が劣悪な公園等での生活を一日でも早く解消することは、被災者自身が一番強く願っていることであり我々支援者もそれを一つの目標として頑張ってきました。この問題の解決は、それを実現させるためにはどのような条件が必要かということを考えることから始まります。以上のような理由から神戸市に対して、公園等で暮らす人々の状況をより理解し、上記の発表を再検討するとともに、次の点について切に要望します。

1. 避難者の希望にそって仮設住宅を用意すること。
2. 行く先のない避難者を強制的に退去させないこと。

1996年2月26日

被災ベトナム人救援連絡会議
代表 神田 裕



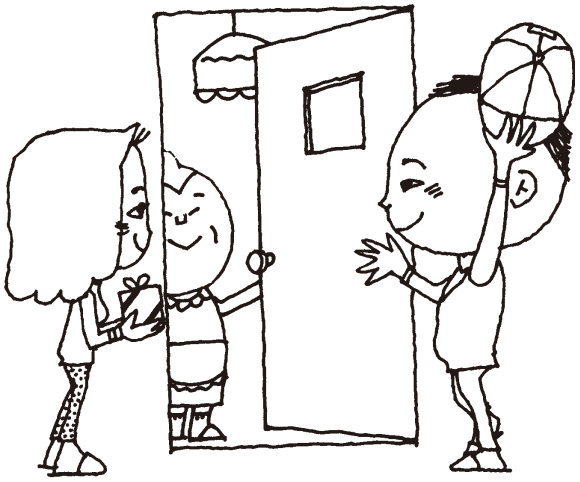
■紙のログハウスで

新湊川公園の紙のログハウスで、トラン・ティ・ツエットさんは家族とともに避難生活を続けた。震災時に1歳の長女がいたツエットさんは96年3月、2人目の女児が生まれた。ログハウスには水道も電気もなく、湯を沸かして赤ん坊を風呂に入れるのは大変だった。神戸市の配慮で96年5月、長田区内の空いた仮設住宅に入居できた。

同じ公園のログハウスに家族6人で住むトラン・ティ・バンさんは、仮設住宅の抽選に外れ続けた。97年11月、ようやく市営住宅に当選するまで公園での生活が続いた。新湊川公園を最後に出るベトナム人となった。

ログハウスには電気も水道もなく、公園の水道を拝借した。公園に置かれた仮設トイレは当初、すぐいっぱいになってしまった。そんな避難生活は大変だったけれども、90年、ベトナムを離れるとき、木造の小船で大海をさまよった経験を思えば、我慢できたという。バンさんは船上で3週間、飢えと乾きに耐えた。

ベトナム人被災者の支援活動をした神父、ファム・ディン・ソンさんは96年春まで救援基地に滞在し、静岡に戻った。FMわぃわぃのベトナム語の番組は、地元のベトナム人が引き継いでくれることになった。とはいえ、支えがなければ継続は難しかった。ソンさんが毎朝、新聞などをベトナム語に翻訳し、ファクスでわぃわぃに送り、96年は毎月1回、神戸に通った。



・まちの保健室

地震で家屋全壊、子どももなく、仮設住宅にひっそり身を寄せ合うMさん老夫婦。おじいさんが肺炎で入院中は、おばあさんが献身的に看病する姿が見られた。そして今年の春、今度はおばあさんが肺ガンに。入退院を繰り返し、『できるだけ家で過ごしたい』という希望に、おじいさんは美味しい物を求めて長田の町を自転車で走り、一口でも食べて欲しいと懸命に看ていた。たった一部屋は不思議な静けさと明るさで、訪問する度に、『お二人ともお幸せそう…』と思わず言ってしまった。

５月の２９日天に召された。小柄なMさんの姿がますます小さく見える。『力がぬけてしまって何もする気が起こらない』という。焼けてしまったアルバムや、仏教哲学、お謡の本が残っていればと思う。『大変でも、あれの看病をしている頃はよかった。』と遺影を前にポツリと言う。また、心静かにお謡を楽しむ日がくることを信じて、私たちはMさんを訪ねる。

■家族の風景

震災の日々、家族のつながりの大切さにあらためて気づいたという声をよく耳にした。一方で、気持ちがすれ違い、いがみ合うことになる家族もあった。

ベトナム人の家族の風景は、日本人とどこか違って見える。もちろん人によって違いはあるけれども、ふだんから「家族が第一」との思いが強い。神父のファム・ディン・ソンさんは少年時代、祖国を脱出した。兄弟４人で出国しようとしたがかなわず、ソンさんひとり木造船に乗り込んでしまう。その船が漂流する。死の恐怖に脅えていたとき、「船に乗れなかった兄弟は助かる。死ぬのは僕だけですむんだ」と気づいて、涙が止まったという。

地震でマンションが全壊し、鷹取中学で避難生活をしたブ・ユイ・ルアンさんも、死の覚悟をした経験がかつて2度ある。ベトナム戦争に兵士として送り込まれたときと、家族10人全員で祖国を捨ててボートピープルとなったとき、だ。どちらの方が恐ろしかったか問うと、答はすぐ返ってきた。「兵隊のときは死んでも自分だけ。一番怖かったのは船の中。家族皆が死んでしまう」

震災のとき、高校2年生だったルアンさんの娘、トゥイさんは2004年2月、浅岡康さんとペーパードームたかとりで結婚式を挙げた。奈良市に住んでいる。

２人が出会ったのは震災の年、避難所となった鷹取中学。明石市に住む高校3年生だった康さんは、震災で休校になったので、友達とボランティアをした。「そんなに熱心じゃなかった」というが、物資を搬入したり、避難者の肩を揉んだりした。技術室で暮らしていたルアンさんの肩を揉み、家族とも親しくなった。トゥイさんは、避難所でベトナム人同士の言い争いにたびたび直面した。ベトナム人のコミュニティーとのつきあいには消極的になった。短大を卒業し、結婚まで向井杏樹（あき）という通称名で銀行に勤めた。本名で就職したが、窓口に座ると、名札を見た人からいろいろ聞かれるのが嫌で、高校のとき同級生と考えていた「かっこいい名前」に代えた。「好きな名前をつけられるんや」と、同級生に羨ましがられたという。今は浅岡杏樹という名前をおもに使う。

04年8月、長男の勇ちゃんが生まれた。子どもに伝えたいベトナム的なものがあるだろうか。トゥイさんに尋ねたら、「ベトナムの習慣や言葉を教えたい。興味を持ってくれたらうれしい」と答えてから、一番伝えたいことをこう力説した。「ご飯をみんなそろって食べること。家族一緒に食べた方が、楽しいでしょ」

自分がそう育ってきた。いつからだったか、どうやら日本人の家庭はそうではないらしいと気づいた。会社勤務の康さんも幸い、帰宅は遅くならない。夕げの食卓を3人で囲む。

３２号

• 難だ神田

広島での講演の日、時間があった。その時間をカンダは〝広島平和祈念資料館〟での見学にあてた。

形、スケールは違えど、カンダは今の神戸とオーバーラップしてこの５０年を見た。震災の後１カ月ぐらい不思議な体験をした。何もない中で皆が協力しあえた。しかし多くのモノが集まり、不思議な体験は次第に薄れてきた。戦後という時期であり、５０年者というモノのない時代に広島の不思議な体験は３年だったとある人が言った。どっちが良いのか悪いのか、皮肉な話だ。

被爆地は生き残った人々すべてがひどい後遺症を受け、健康でない状態のまま〝まちづくり〟をしなければならなかった。広島の痛みに少しは近づくことができるだろうか。その夜遅くカンダは独りみんな寝静まった基地に帰った。

■広島は３年、神戸は１カ月

地震後の1カ月を、神父の神田さんはまぶしそうに振り返る。

「人と人を隔てる壁がなくなった。だれ一人、人が人として見捨てられることがない。神の国を垣間見たように思う」

96年6月、神田さんが広島市での講演でそう話すと、高齢の女性が「私らはそういう状態が3年もありました」と感想を語った。どう応じたらよいのか、神田さんは困ったという。

7月、神田さんは今度は山形県鶴岡市に呼ばれ、講演した。旧知の神父がカトリック鶴岡教会にいた。気になっていた「広島は3年、神戸は1カ月」という話をしたら、仲のよいその神父はうなずいた。「山形では、冬がその優しくなれる時間なんだ。冬になって、たとえば車の接触事故なんかがあっても笑ってすましちゃうことがある」。仲のよいその神父はそんな話をした。

「冬の厳しさを共に持つ、同じ痛みを持つことで人は優しくなれるのか」。旅の空で、神田さんは「やさしさ」について考えをめぐらせた。

• 難だ神田

７月２７日（土）ＪＲ新長田北側は『まるごとアジア』くつのまち長田のアジアタウンのイベントで賑わっていた。大変な人数だった。あちこちのＴＶ局や新聞者の顔が見える。我々の青池組の面々も負けじとメンツをそろえていた。ちょうどカンダがその前を通りかかったので、基地のワダはふざけて落ちていた棒を拾い、マイクに仕立てカンダに向けた。青池組のカメラがそれを追う。ふざけたハプニングが始まった。いくつかのちょっと軽いノリの質問の後、「カンダはこのイベントの中でナニか生まれることを期待しはりまっか？」と棒のマイクを向けた。『そうですネエ…。この会場には多くのアジアの人々が集まっています。その中に今、私たちはいる訳ですから、ここで、それぞれの人がひとりでもいい、外国の人と友達に…、手をつないでほしいですネ…。』今まで仲間内のニコニコ顔がこの言葉の時は真顔になった。震災前からカンダは人と一緒に食事をすることを大切にしてきた。隣の人と手をつなぐその大切さを常設のアジアタウンにむけて、と、今神田はギラギラ照りつける夏の太陽の下で祈るようにみているのではないか…。捨てた棒のマイクが神戸中に聞こえるマイクであったら、とワダは思った。

■ベトナムと、花と

「震災がなければ、神戸にこんなにベトナムの人たちが住んでいるなんて、ずっと知らないままだったかも知れない」。井上浩恵さんはFMわぃわぃでDJのボランティアを始め、ベトナムについての紹介番組「気分はベトナム」を担当し、ベトナムへの関心を深めていった。

ベトナム人ってどんな人たちかな、と思うようになり、自然に接してみたくなる。気づけば、ベトナム人の友達ができていた。番組を通して、そんな出会いがあればいいと思っていた。ちょうど、自分がそうであったように。

95年10月、番組を一緒に受け持っていた内町智美さんと2人で初めてベトナムを旅行した。7泊8日のベトナムは「エネルギーがわきたつよう」だった。空港からの道はバイクがあふれ、町も人も活気に満ちていた。番組の中で聞き知っていた歴史や文化、習慣がそのまま目の前にあった。「スコールが来たら、子どもは裸になって走り回る。傘なんてささないよ」と、神父のファム・ディン・ソンさんがいつも言っていたが、本当にそのとおりだった。ソンさんの兄の家にも泊めてもらった。ソンさんの叔父も神父で、路上で暮らす子どもの支援をしていた。その子どもたちに、内町さんと協力して「大きな栗の木の下で」を紹介した。振り付けを一所懸命おぼえて、上手にできるようになった。「子どもが純粋で、みんな勉強をしたいと思っている。なのに、事情があってできない」

帰国後、番組で旅での見聞を紹介した。「ベトナムの話をすると、止まらなくなってしまった」。そのころを思い出して井上さんは笑う。「震災までは型にはまっていたけれど、ベトナムで気持ちがほどけて、感性を大事にしたいと思うようになった」

96年4月からは毎週水曜、「ひろえのフラワーパレット」という30分間のコーナーを受け持った。震災直後、解雇問題で心身ともに疲れ切った井上さんは、植物に癒された経験がある。鷹取界隈では被災して大変なはずの家に新しいプランターが並び、花が植えられていた。花が癒しになる、とあらためて思った。植物の話題を中心に「癒し」をテーマに番組を作った。96年夏、花屋でのアルバイトも始めた。「中途半端にしたくなかった。花に没頭していった」。番組の準備を通して、栽培方法など植物について勉強した。

ベトナムと、花と。97年2月、ベトナムを再訪したとき、その2つが結びつくことになった。ホーチミンのホテルの玄関に置かれた鉢の木に、鮮烈な黄色の花が咲き誇っていて、ときおり花びらがはらはら舞った。花の名前を聞くと「ホアマイ」。名前は聞いたことがあった。長田に住むベトナム人が「ベトナムには黄色い梅の花がある。テト（旧正月）に咲く特別な花」と教えてくれた。戦争に始まる祖国での苦難の生活をホアマイが励ましてくれたといい、難民として国を捨てた人々にとっての望郷の花だった。

「花を見て、体に電流が走った。これを日本で咲かせたい。というか、咲かさなければならない、と思ってしまった」。神戸のベトナム人にも、日本人にも見てもらいたかった。種からは育たないと聞き、そのときは持ち返ることを断念するが、あきらめたわけではなかった。

・オフィスじょうほう

基地の北側の道路が６ｍ道路になるために、ペーパードームの移動が必要になり、食堂があるラッパハウス、男性の宿泊所ボーイズ、女性の宿泊所レディース、一番初めに出来たＶＩＰルーム、道具置き場が壊される。ボランティアの人たちと建てたものが次々壊されていく。復興して本当に救援基地が無くなって良いのなら嬉しいけれど、まだまだ基地の存在は必要のようです。基地での「物づくり」は影を潜めているが仮設住宅訪問に一役も二役も担ってくれた。多くのボランティアが仮設住宅を訪ねてくださって、いろんな人、いろんな事に出会えた。この宝物を大切に次のステップを歩みたい。災害公営住宅に当たった人は私たちが関わっている仮設でたった５件、市は高齢者・障害者のことを考えていると聞いているがどういう計画があるのでしょうか？　仮設住宅もそれぞれ違ってきている。一人二人と仮設を出て行かれ、一棟に２軒という所があり、シーンとしている。その中で残っておられる方の不安な気持ちがあります。何時行ってもにぎやかな声がする所、住民同士でお互い心配しあって生活している。時には荒々しい声にもなる。失禁の症状が出ている人が増えている。ある所は必ず何人かがベンチに腰掛けて話をしている、ふれあいセンターでいろんな集まりがあるけれど、集まる人は決まってきている。ミニ運動会を仮設住宅でします。皆さん是非来てください。待ってまーす。

■先生になったボランティア

ゴリラネーム「ベービー」の青木優尚さんは95年9月、鷹取から鹿児島大学水産学部での学生生活に戻った。水産科と理科の教員免許を取った。3級海技士の免状も取った。

「体験」と「経験」は違う。そう話した大学の先生がいたという。ただ何かするのが体験。したことによって、自分の知らない世界に出合い、主義、主張が変わるのが経験。「僕にとって、鷹取は『経験』。子どもに鷹取の経験を話すことができる」。そう語った後で、青木さんは「震災なんてない方がいいのだから、こういうボランティアもいない方がいいのかも知れないけど」と言い添えた。

青木さんは非常勤講師を経て、2001年春、教員に正式採用された。兵庫県立香住高校で水産を教えている。

学校の先生になりたいという夢を抱くようになった。「震災があって、人とかかわる仕事がおもしろそうと思えた。鷹取に来なかったら、先生になっていなかった」。

もう一人、先生になったボランティアがいる。

神戸市北区の自宅から救援基地に通った浜崎朋子さんは、神戸女子大学の2回生になった96年、ほぼ毎日、鷹取に姿を見せた。週末には仮設住宅の被災者を訪問した。待ってくれている、と感じた。自分も週末が待ち遠しかった。顔なじみになった人たちに「お久しぶり」と言い合えるのがうれしかった。「半分は、自分のため」だった。訪問は、出会った人々が復興公営住宅に引っ越して後も続いた。

もともと教職志望だったが、大学に入って熱が冷めたという。ところが、震災に遭って、人とかかわる仕事はおもしろそうと思い直した。卒業した98年、小学校の教員に採用された。「鷹取に来なかったら、先生にはなっていなかった」。

2002年、青木さんと朋子さんは結婚する。05年2月、長男の健祐（けんすけ）君が生まれた。

３７号

• 瓦礫の中から

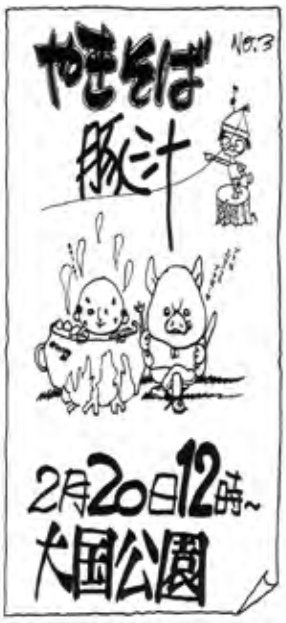
３７歳の男性が仮設住宅で１０カ月前に亡くなっているのを誰も気づかなかった。救援基地では、地域型仮設を中心に仮設を訪問している。ついつい高齢者、障害者に目を向けがち、高齢者、障害者だけでなく、お隣の人のことも、きっと元気に働いていると思い込んでしまうのが落とし穴かなと思った。この方の死を無駄にしないよう、元気な人にも声をかけることも必要では…

■孤独死は男性が女性の2倍以上

「孤独死」という言葉が被災地で使われるようになった。仮設住宅で看取られることのない死をそう呼んだ。孤独死は仮設住宅が2000年1月に解消するまでに230人を超えた。被災後の生活苦や、夏に暑く、冬に寒さが厳しい住環境だけでなく、入居時に地域コミュニティーを考慮しなかったことも影響したとみられる。

孤独死は、男性が女性の2倍以上を占めた。男性は50歳代、60歳代が際立って多く、女性は80歳代など高齢者が多いのも特徴だ。アルコール問題も指摘された。神戸大学の上野易弘教授の調査では、男性の死因のトップは肝疾患（36％）。そのうち68％がアルコール性と考えられるという。

孤独死の正確な数字はわかっていない。就寝中に亡くなったケースなどを孤独死と呼ぶべきか、孤独死の定義づけも議論になった。連日のように孤独死が見つかり、新聞記事もごく小さな扱いしかされなくなった。いずれにせよ、公式発表の震災死者6433人に、孤独死の死者は含まれていない。



・瓦礫の中から

秋晴の１０月１５日の朝、基地のと言うよりこの場合は教会と言った方が正しいだろう塀が壊された。地域の区画整理に基づく塀位置の移動だ。続いて１０月２２日より東面の道具部屋、ＶＩＰルーム、レディス・ルーム、ボーイズ・ルーム、さらに北面の食堂が壊されたＶＩＰルームは被災後初めて基地内の建物として作られた。文字どおり老若男女で力を合わせ重い鉄骨を土台に運んだ、雪のチラツク中夜遅くまで足場材を利用して柱を立てた。まだ経験のないボランティアが屋根の上にあがりトタンを打ち付けた。屋根は間借り、床はボコボコだった。しかし被災者としての私たちにはそれは安心して生きる場所だった。壊されていくＶＩＰルームを見てボランティアたちは泣いた。建物はこの基地で一番みすぼらしかった。それなのにどの建物よりも大事に感じた。壊されていく今、強く感じた。レディース、ボーイズ・ルームも食堂も姿を消した。あいつがあのこが、あの人が語ったり飲んだり、笑ったり、泣いたりした思い出の場所が消えていった。

でも、今から1年１０カ月前、あの日大きな大きな被災地はその深い思い出と共に壊れていったのだ。教会の塀も、基地の建物も新しく造られる、そしてその建物の外に内に又新しい思い出を作る為の行動と人と物が集まってくる。あいつが去って、あいつが違う顔でやってくるように…。いつか、まちが…帰ってくる…。

■進む区画整理

復興土地区画整理事業の対象となった教会周辺8・5ヘクタールは、鷹取東第一地区と命名された。被災地の18地区の中で最も早い1995年11月、住民の意見がまとまり、事業計画が決定した。土地を公園や道路など公共用地に供出する減歩率は9％とされ、反発は大きかったが、大半の家屋が焼失するという物理的な条件に加え、震災前から住民の間にまちづくりへの機運が高まっていたことで、話し合いが進んだ。

鷹取教会はもとの面積が2145平方メートルあったが、減歩により1980平方メートルになった。

なお、土地の配置換えが済み、総事業費約百億円で区画整理事業が完了するのは2001年2月のこと。やはり18地区の中で一番早かった。細い路地は消え、幅25メートルの道路が延べ4000メートル、4カ所の公園、2基の100トン防火水槽などの公共施設が完成する。ただし、その段階で人口の回復は8割程度にとどまり、マンションなどに入居した新住民と旧住民のコミュニティーづくりが新たな課題となった。

• まちの保健室

Ｓ仮設に住む60代のオッチャンの名前です。1度ならずこの仮設を訪問した方は「うるさい」とか「来るな」「何しに来た、帰れ」「偽善者」と悪態をつかれ悲しい思いをして、仮設訪問なんてもういやという苦い経験をおもちの方が何人かおられるでしょう。若い人を怖がらせてしまったこのオッチャンは、実はアルコールの病気でとても苦しい状態でした。膵炎も併発していて痛みが激しくなると荒れるのです。人を避け、2階の窓から洗面器や植木鉢のお皿などベランダにあるものを投げ飛ばすので、いつのまにか「空飛ぶ円盤」がね、と私たちの間で呼ぶようになってしまいました。さぞ一緒に住んでいる方たちは大変だろうと思いますが、それなりに心得て仲良く付き合っておられます。「飲まなきゃ本当にいい人なんですよ」と厳しい避難生活の中で会得された人々の知恵と行動力は驚くばかりです。住まいは仮設でも、生きる日々は仮設ではないのですね。ここを訪問するたびに共生の真の意味を教えられる思いがします。花が大好きなオッチャンは具合の良い時だけ植木鉢がベランダに並ぶので調子の善し悪しが分かります。少しずつ少しずつ集まりに顔を出すようになりました。心のケアセンターに立ち寄っておしゃべりしていく日が続いています。頑張れオッチャン！

■空飛ぶ円盤の行方

まちの保健室の看護師を務めたシスター、是枝邦子さんは、人づきあいの苦手な被災者たちと積極的にかかわった。その1人、仮設住宅の年輩の男性は、是枝さんたちが炊き出しやイベントをしていると、「うるさい、出ていけ」「おまえの自己満足だろ」と怒鳴った。植木鉢を置く皿を投げつけることもあった。そのたび、是枝さんは「おじさんも、出てらっしゃいよ」と呼びかけた。怖かったことが1度ある。腕をつかまれ、「ヤソ教がいつまでも何している」とすごまれた。一緒にいたボランティアが間に入り、助けてくれた。逃げ込んだ車内で、震えが止まらなかったという。

それでも、是枝さんはその仮設住宅を訪問した日には、必ず男性に声をかけた。「あれはお酒のせい。本来の彼じゃない」。そう思った。ふだんは植木鉢を並べ、花を育てている。膵炎の痛みがあるとき、酒で痛さを紛らし、彼は暴れるのだった。

ある日、彼が「あんた、エエ人やな」と、是枝さんに声をかけた。「そうよ」と、笑って応じた。「食べてないんでしょ」と、食事を持って行くと、達筆な字で礼状をくれるようになった。

その彼の隣に、まったく他人と話をしない女性が住んでいた。40歳前後に見えた。是枝さんが入浴するように勧めに行き、声をかけたら、流しの下に潜ってしまったことがあった。

ところが、いつごろからか、彼だけが女性と話せるようになり、何かと女性の面倒をみるようになった。

後日、2人は一緒に暮らすようになり、新居の市営住宅に、是枝さんは招かれた。「よく来てくださいました。一番最初のお客さんです」と女性はお茶を出してくれた。

「人は変われるよ」と是枝さんはきっぱりと言う。

「だって人は愛したい、愛されたいって思っているんだから」

たかとりのおいしいご飯

100人分の豚汁の作り方

豚汁

１００人分

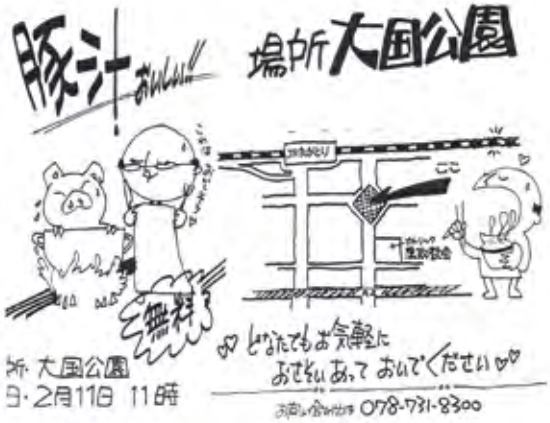
豚の薄切り	2400ｇ
ごぼう	500ｇ
にんじん	500ｇ
さといも	3000ｇ
大根	1500ｇ
白菜	6000ｇ
ねぎ	160ｇ
こんにゃく	1200ｇ
豆腐	２０丁
みそ	1500ｇ
こぶだし	100カップ
しお	少々

作り方
すべての材料を切ります。
豆腐、ねぎ、さといも以外の材料＋だし汁で柔らかく煮ます。
やわらかくなった後、さといもと豆腐を加え、さといもに火が通ったら味噌で味付ける。

＊量が多くなってくると”何グラム？？なんて言ってられませんよねー（＾０＾）

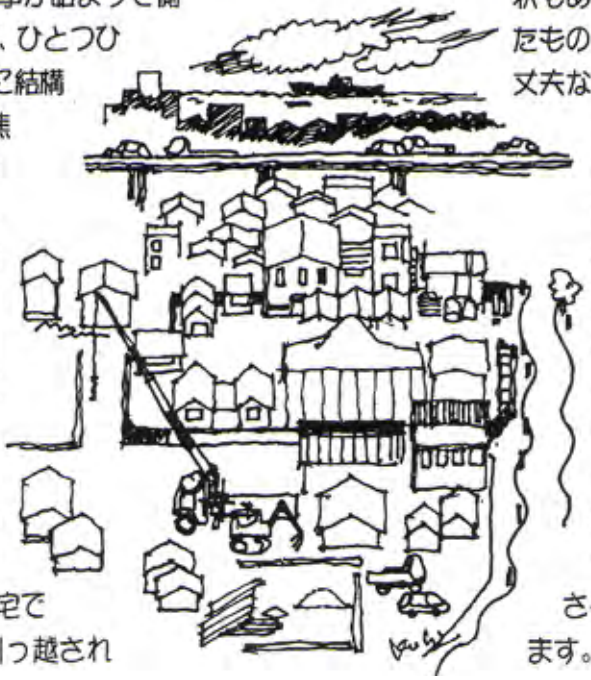
ポイント★★★

目安の量
白菜（大）３００ｇ
にんじん　１本　１５０ｇ
ごぼう１本　　１２０ｇ
さといも　１個　６０ｇ
大根１本　　１．５キロ
こんにゃく１枚　２５０ｇ



FAX・078・731・4104　オフィスじょうほう　FROM OFFICE
※番号をよくおたしかめのうえ おかけください。

基地内に次々プレハブが立ちました。これから中に畳を入れたり、電気を引いたり、水道工事をします。いざ家を建てるとなると色々な専門家の方の力が必要ですね。区画整理がスタートして、道路工事が始まって側溝が出来ていくのですが、ひとつひとつ出来上がっていく為に結構時間がかかるようです。焦らずに無理をしないで歩まなければなりません。希望、目的、可能性があるからこんなことを言っておられるのですが、目処が立たない方にとっては大変な冬になります。将来が見えてこない望みを失ったと言うより望みが持てない方がまだまだ居られます。長楽仮設住宅ではだんだん恒久住宅に引っ越されています。歯抜け状態の中で、仮設での暮らしに慣れて日常生活がマイペースになり、隣の人のことを忘れがちな生活になっています。警報が鳴っていても周りの方が出て来ないような現状もあります。引っ越されたものの、一人での生活大丈夫なのかという心配もあります。だから電話のある方には時々電話などしたり、訪問をしています。震災当時のままで自分の家で細々暮らしておられる方もまだまだ居られます。これから少し活動内容が変っていきますがボランティアしてくださる方お待ちしております。・・・・・・・・



■非日常から日常へ

「引き際のことが、いつも頭の隅にあった」と、まちの保健室を担ったシスター、是枝邦子さんは明かす。

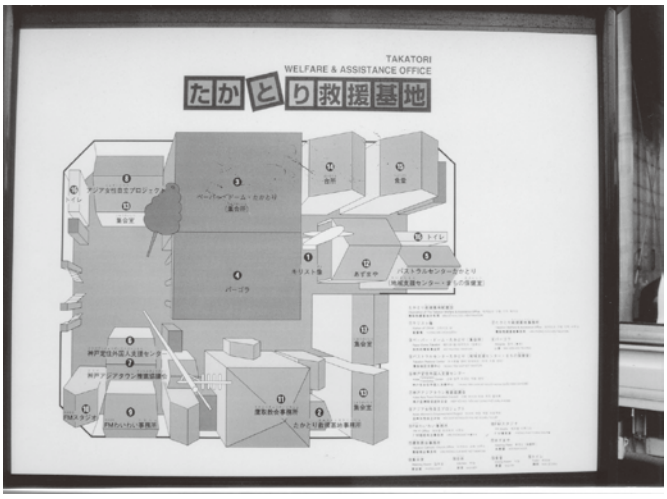
保健室には地域の子どもが遊びに来た。「おやつちょうだい」というベトナム人の子どもたちに、「勉強したら」と、算数や国語を教えたこともある。大国公園でイベントがあると、是枝さんに必ずテントがひとつ用意された。

「地元の人たちが、自分たちと一緒にいる大事な人と私のことを思ってくださった。居心地がよかった。でも、私はボランティア。ずっといるつもりはなかった。住民票は鷹取に移したけど、ね」

被災地は、非日常から日常へと移行していった。「たかとりは常に前進し、人の立ち上がりに応じて変わっていく。来るボランティアの量と質も変わる。変わるとき、神父さんはけじめをつけて、進んでこられた」

まちの保健室も、再建の邪魔にならないようにしたかった。「ずっと、というわけにいかない。自立したとき、と言えば、失礼だけど、明け渡していくのが当然」

鷹取教会の敷地に住んでいて被災した画家の和田耕一さんは地震から2年して、鷹取を去ることになった。救援物資の紐やブルーシートを切ったナイフは、毎日、研いだから2年で5ミリほどやせた。和田さんの意識では「焚き火がともされなくなったとき、救援基地が終わった」。非日常から日常への変化とともに、たかとりの顔ぶれもまた変わっていった。



・オフィスじょうほう

ペーパードームの移動も何とかクリスマスに間に合った。二階建てのプレハブが４つ、平屋のプレハブが１つ、保健室もばらして移動させた。プレハブの本体は業者のプロにしていただいたが、中の仕切りをしたり、床にコンパネをもう一枚引いたり、ひさしを付けたり久しぶりににぎやかに、和田さんの美声を聞きながらボランティアで作業が始まった。基地の中は急に活気付いた。次々と入れ替わりにボランティアが来てくださってお正月を迎え、長楽仮設の方々の招待を受け新年の集まりに参加できた。食堂も少しずつ荷物が入り台所の移動を待つばかりになっている。平屋のプレハブが保健室になる。今保健室の中を三つの部屋に分けて、素晴らしい暖かい部屋ができていきそう。ニックネームを変えて新たに来てくれたボランティアとバイトをしながら時間のあいている時に来てくれている二人で頑張っている。仮設、個人の家の訪問は、日帰りのママさんボランティアとシスターがしてくださっている。

募集した文章が少し届いています。送ってくださった方ありがとうございました。震災三年目を迎えて気づいたこと、感じたこと、得たことなど文章にして送ってください。

■震災２年の格差

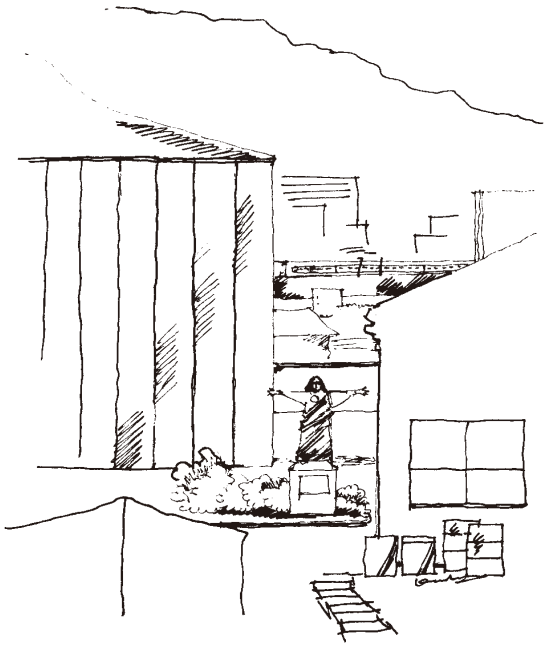
震災2年を迎えた神戸は、高速道路や鉄道、港はすっかり回復し、三宮や元町を歩いても地震の爪跡を見つけるのは難しくなった。被災地外での震災への関心も低くなっていた。

とはいえ、仮設住宅で6万6千人が3度目の冬を過ごした。神戸新聞社が仮設住宅で実施した調査では「転居のめどが立たない」との回答が7割近くを占めた。借家人だった人の多くが、元の街に戻ることを断念した。住宅再建は進まず、一歩、路地に入れば更地ばかりが目立った。自力で立ちあがれる人と、壁に阻まれる高齢者、離職者らとの格差は広がっていった。

被災者への公的支援を求める声は依然強かったが、国の反応は鈍かった。支援の内容は不十分ながらも「被災者生活再建支援法」が成立するのは、ようやく98年5月になってからだ。

兵庫県外に避難した被災者は、震災2年の段階で、兵庫県は5万5千人と推定した。正確な数字はわからない。市町から県外被災者に郵送されている広報紙にアンケートを同封した兵庫県が、その調査結果を兵庫県が当時、公表した。「県内に戻りたいが、戻れない」「県内に戻るつもり」との回答が、それぞれ40％ずつあった。戻りたいが、戻れない理由としては「希望する住宅が見つからない」「公営住宅に当選しない」など住宅問題が真っ先に挙がった。

ベトナム人のブ・ユイ・ルアンさんの家族8人は、鷹取教会の信徒が提供してくれた長田区内の土地にプレハブ住宅を建ててもらい、95年8月、長く避難生活を送った鷹取中学を出た。そこを1年借りた後、須磨区の仮設住宅へ。スポンジを漉く仕事は震災後も続けられたが、もと住んでいたマンションは全壊し、再建されても家賃が高くなっては入居できない。公営住宅に入る以外、仮設住宅を出られそうになかった。JR鷹取駅北の市営住宅に入居できたのは、99年のことだ。その間、キリスト教の聖人を描いた絵を大切にしてきた。ボートピープルとなって嵐に遭ったとき、抱えて涙ながらに祈った絵だという。ルアンさんは安住の場を求めて祈り続けた。



４２号

• 遅ればせながら、あけましておめでとうございます。

多くの方々からいただいた年賀状の返事を「たきび」での挨拶でお許し下さい。

神戸は３年目に突入しました。「石の上にも３年」と言う諺もあれば、片や「３年目の浮気」と言う唄もあります。「ここまで来たんや、頑張るで。」か、それとも「もう、あかん」なのか。大切な時を迎えることになりました。

まだまだ家が立てられずに更地が広がっています。４万世帯近くもの家族の人たちがまだ仮設住まいです。皆さんがいつも側に居てくださったからここまで来ることが出来ました。

この１年もどうぞよろしくお願いします。

神田裕

■本当の復興は

97年1月17日午前5時46分、ペーパードームたかとりで、鷹取教会の「追悼と新生ミサ」に参加した約80人が黙とうした。神父の神田裕さんはこう語りかけた。

「地震直後は力のある者と、力のない者とが、助け合えた。2年たって力ある者は元に戻り、ない者は戻ることができない。その差は地震の前よりも大きい。本当の復興は、最後の1人が街に戻ったときです」

周辺の更地では、夜明け前の暗がりに線香の火がいくつも浮かんだ。遺骨を拾ったその場所で、手を合わす遺族たちがいた。

・編集後記

区画整理事業にともなって始まった救援基地内の建物の解体と大移動はようやく終盤を迎えようとしている。四角だった敷地もこんな形になった。これから始まる新しい基地のあり方も少しずつ見え出してきた。未来へ向けてすべてが少しずつ新しくなって行く。しかし、例の像だけはそのままだ。取り残されて行く人々と心を合わせるために。

■奇跡のキリスト像

震災で焼けた鷹取教会の聖堂の脇に、キリスト像は立っていた。正面の司祭館は焼け残り、両手を広げた像が、あたかも火を止めたかのようだった。

台座の御影石には「互いに愛し合いなさい」との聖句が、日本語、ベトナム語、韓国・朝鮮語の3つの言語で刻まれている。ペンキ塗りの等身大の像は、ベトナム人信徒たちが募金し、故国から取り寄せた。キリスト教は偶像崇拝を戒めているが、ベトナムではマリアやキリストの像の前で祈るのが習慣だという。ちょうど神父の神田裕さんが鷹取教会に赴任した1991年春、像を置くことに日本人信徒が反発し、議論になった。結局、韓国・朝鮮人やベトナム人が定住する多文化共生を象徴するモニュメントという意味合いで設置されることに落ち着いた。

そんな来歴のキリスト像に、地震の直後、マスコミの取材が相次いだ。「キリストが火を止めた」という物語が流布したが、コメントを求められた神田さんは「いや、消火したのは、人間です」と言い続けた。神田さんも自ら消防のホースを延ばすのを手伝った。「神の奇跡」があるなら、もっと早く消して欲しかった。神格化されることに抵抗し、一時期、像に工事用のヘルメットを被せたこともある。

ただし、ヘルメットは1週間ほどで脱がせた。教会関係の新聞に写真が載ったら抗議が寄せられ、ベトナム人信徒からも苦情が出た。ベトナム人の信徒は「像が焼け残ったのは、やっぱり不思議。みんな奇跡を信じている」と語る。

後に神田さんは「実は、キリスト像は奇跡を起こした」と、話すようになる。「キリスト像が、おいで、おいでをしたから、人が来た。人を呼ぶのは火を消すより難しい」というジョークだけれども。

・ＫＦＣ

２月１１日にセンター発足の集いと旧正月を祝うパーティーを、教会内で開催しました。

集いはベトナムのお正月の飾り付けがされたペーパードームで行われました。まずは挨拶をセンター代表の神田神父が行い、次にセンターの前身の組織である被災ベトナム人救援連絡会と兵庫県定住外国人生活復興センターの活動の歩みを、それぞれ中村通宏氏と金宣吉氏が紹介しました。その後、協力団体である被災ベトナム人日本語教室の歩みと運営委員のメンバーを紹介しました。パーティーの方は爆竹の威勢のいい音で開始し、ベトナム語で乾杯挨拶をしました。その後中国の獅子舞演舞や韓国・朝鮮のサムルノリ演奏を行い、屋外では中国、韓国朝鮮、ベトナムの各料理に舌鼓をうちつつ参加者同士が交流しました。

皆様のご協力のおかげで、このように楽しく意義のある一時を過ごせましたことを感謝いたします。

神戸定住外国人支援センター

■ＮＧＯ集う

経済的に苦しいのが相場のNGOにとって活動拠点の確保は切実な課題だ。「多文化共生」という目指す方向を同じくするNGOが「フリースペース」の救援基地に身を寄せた。神戸定住外国人支援センター（KFC）もそのひとつ。金宣吉さんは震災を機にKFCの前身の兵庫県定住外国人生活復興センターを、故郷の神戸に発足させ、事務所を借りた。しかし、家賃の支払いが大変で、95年10月に鷹取に移ってきた。

金さんは在日韓国・朝鮮人を支援してきた経験を生かし、ベトナム人救援連絡会と協力して、ベトナム人に対する入居や就職の差別、未払い賃金の問題にも取り組んだ。「何件解決したかこそが大事」と金さん。

97年2月、震災救援という枠を超え、日常の生活支援に取り組むことを目指して、両団体が統合された。

４４号

• かんちゃん日記

仮設住宅で一人暮らしをしていたおばあちゃんは元気でした。一人でいるのは寂しいから皆が集まっている此処へ遠いところからよく来ていた。足元が覚束ないので人の二倍も三倍も時間が掛かる。しばらく見なかった。腕にギプスを付けていた。転んだのだった。またしばらく見なかった。今度は肋骨を折っていた。それでも元気にやってきた。今度は来なくなった。尾てい骨を折って入院していた。さすがに動けなかった。先月、親戚の人たちの親切な呼び掛けで横浜に越していった。少したって電話が掛かってきた。「其処に行きたい」。おばあちゃんにとって本当の心の安らぎは一人でいてもやっぱり神戸なのかなぁ。

■神戸は聖地

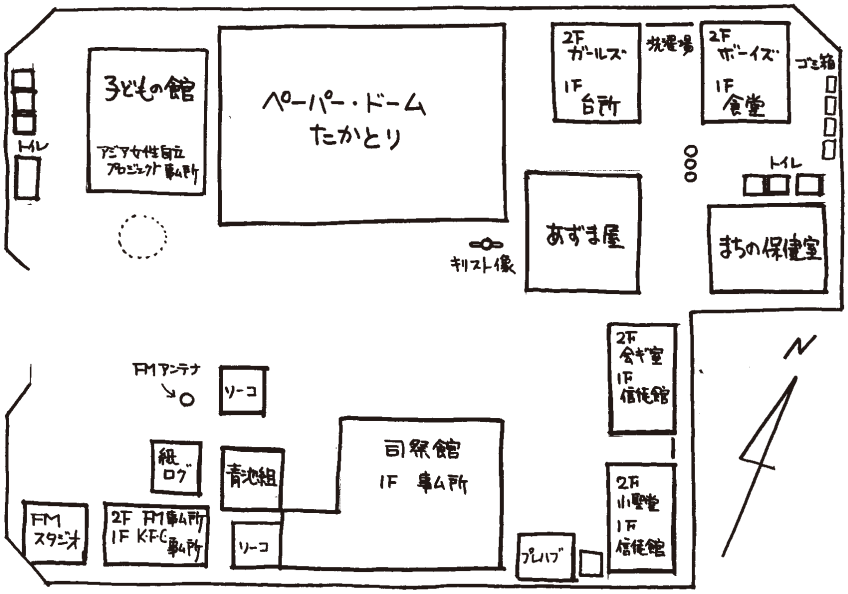
是枝さんは鷹取に5年留まった。横浜市の修道院に移り、老人福祉施設で働いた。

03年夏、せきが止まらず、診察を受けた。「悪性リンパ腫の4期」と告知された。体内に悪性細胞が広がっていた。「もし、神戸に行っていなかったら」と是枝さんは語る。

「仕事をできないのは人間失格、なんて落ち込んでいたかもしれない。すべて失っても、自分まで失わない人に神戸で会った。今、しゃきっとしていられるのは、神戸に力をもらったおかげ」

抗がん剤が効き、奇跡的に体力が回復した。

「神戸は聖地ね。だって、神戸で新しい自分に出会ったのだから」



・かんちゃん日記

お坊さん、宮司さん、牧師さん、そして神父のけったいな取り合わせの集まりが始まった。その名も"ワルガキ会"。震災で出会った仲間たちだ。1回目はお寺の仏像の前で、2回目は神社の社務所の中で、銘々が食べ物と飲み物を持ち寄っての所謂飲み会だ。実に面白い。宗旨も違えば年齢も違う。お互い同志が知らないことの多さにもビックリさせられる。学ぶことがたくさんある。新しい発見もたくさんある。

乗り越えなければならないのは国籍だけではない。宗教の違いもだ。乗り越える為に必要なことはただ二つ。出会いが楽しいこと、違いが豊かなことじゃないかしら。

3回目は鷹取教会でする。

■宗教の垣根を越えて

97年1月17日、市民団体のフォーラムをきっかけに、仏教、キリスト教、神道、それに一般市民の代表がそれぞれの服装でろうそくをともし、震災の死者を追悼した。その準備中、神父の神田裕さんや浄土宗済鱗寺住職の明石和成さんらが意気投合。震災における宗教の責任や役割について考える場を継続的に持つことになった。

まず、済鱗寺で第1回の会合があり、以後、鷹取教会、臨済宗瑞龍寺、弓弦羽神社、有馬湯泉神社などを会場に月1回のペースで有志が集った。所属する宗教、教団にとらわれず語り合おうとの意味を込めて「ワルガキの会」と命名。食事を共にし、さまざまな話題を自由に話し合った。他の宗教の批判ではなく、互いに理解し合うことを心がけた。

集まり始めて約半年後、震災3年の98年1月に会としてメッセージを発信することになった。会の正式名称を「震災を生きる宗教者つどい」とし、約4カ月かけて「いのり　追悼と新生―宗教者による神戸メッセージ」 をまとめた。全文を以下に紹介する。

《笑如襲った阪神・淡路大震災は、私たちに未曾有の被害と絶望をもたらしました。犠牲になられた方々への無念は尽きることがありません。それと同時に、残された私たちの日常も苦渋に満ちたものでした。生きることの苦しさを嫌というほど味わいました。しかし私たちは、それにもめげず微かな希望に支えられて、これまで生きてきました。その希望の源になったものは何か。それは自分の隣にいる人々との出会いそのものでした。

私たちは、不思議な体験をしました。成す術が分からない、そんなさ中にもお互い助け合うことができました。優しく声をかけることもできました。そこには普段、人と人とを隔てている壁のようなものは無くなっていました。隣との壁、国籍の壁、そして宗教の壁です。お互いが助け合うという自然にできた優しさが、そんな壁をも打ち壊したのです。そこには生きるために国籍や宗教の別は必要ありませんでした。生きていることそのものがすべてでした。

しかし、それは束の間の出来事でした。時がたつにしたがって街は少しずつ復興し、それと同時に人と人とを隔てている壁も戻ってきました。家族を越え、地域を越え、国籍を越え、そして宗教を越えて声を掛け合うことが難しくなってきました。つまり普段に少しずつ戻ってきたのです。

私たちすべての願いは地震から早く立ち直り、まちが復興することです。しかし今、復興という言葉にだんだんと取り残されてゆく人々がいます。私たちは決してそんな仲間たちのことを忘れてはなりません。最後の一人が震災から立ち直るまで地震は終わらないからです。

私たちは宗教者として、今一度この3年を振り返り心を合わせたいと思います。自分が責任を持つ教団の利益や信徒への奉仕にのみ留まってはいなかったか、そして世に開かれた宗教の働きを自らの生き方として担い得たかを問い直すことから始めなければなりません。そこからひとりひとりが壁を取り払い優しく声をかけ合い、わかち合えるひとづくり、まちづくりを目指してその働き（教化や布教、宣教）を担ってゆかねばならないと、こころざします。さらにまちが復興し単に普段に戻ることを願うのではなく、地震の中で体験した不思議な出来事に希望をおき、新しい世を創ってゆくことを願いそしていのります。それが宗教者としての共通の使命と考え、そのことが犠牲になられた方々への追悼となり残された人々の新生となると固く信じるからです。

市民の皆さん、宗教を持つことは、一人一人の生き方が分けへだてられるのではなく、宗教の壁を越えて、つながり合いわかち合うことなのです。自由な選択の中で人がよりよく生きる道を探す希望の宝箱を持つことなのです。また宗教者は、そのことを教えるだけの教師ではなく、共に考え共に

歩む人生の仲間です。もし宗教を持つことが一人一人の心を狭くしたり、他を排斥したり権力や名誉に走るようなものであるならば、残念なことです。もしそうなら、それはそれぞれの宗教に携わっている私たち宗教者が宗教による壁の中で、それぞれのしきたり等に心を奪われているところに問題があるようです。それを本来の宗教として私たちは理解したくありません。私たち宗教者も完全ではありません。被災地にあって復興を創ろうとする、すべての人々と共に震災を生きる者として、私たちも一つになりたいと願います。

地震に負けないで、勇気を持って新しい世を一緒につくってゆきませんか。》

メッセージは98年1月17日、神戸市兵庫区の湊川公園で、被災地の160の団体、個人から賛同を得て採択された。

その後も例会は月1回のペースで続き、神道、時宗、バプテスト派の宗教者も賛同者として参加するようになった。神田さんは積極的に参加している。「本音で語り、相手を知って、仲よくなるほどに、自分が神父らしくなってきた。迎合するわけでなく、自分が磨かれる」と自己分析する。「自分とは違う他者との交わることで自分を磨いていく。日本人とベトナム人の関係もまた、そういう関係になればいいのと違う？」。神田さんは、そう言い添えた。

• ＦＭわぃわぃ
わぃわぃの電波、やっと長田区全域をカバー！？
開局してからはや1年８カ月が経過しましたが、当初からの問題は、地域、つまり長田区の放送局を自負しながら、実は地域全域に電波が届いていないという欠点を持ち続けていたことです。開局当初ですらわぃわぃの電波は、地域の１／３にしか届いていなかったのです。その後地域の復旧に伴ってそのエリアは、どんどん狭められて現在では、相当の地域が難聴取状態になっています。その原因は、実はアンテナの高さにあります。現在長田区海運町の地上１５メートルから電波を発信しています。そこに原因があります。難聴取の解消には、アンテナを高い所に移して、そこから電波を発信することです。アンテナの移設が検討されはじめてから一年が経過しています。わぃわぃの死命を制するこの計画は、移設先の問題や資金面で幾度か頓挫の状態を繰り返してきましたが、今やっと実現の見通しがたってきました。しかし、資金面でも７００万円からの投資が必要で、この問題も完全に解決しているわけではないのです。しかし区民のラジオ局としては、地域を１００％カバーするにはアンテナの移設しかないのです。今、実現に向けて最後の追い込みに入っています。どうか皆さん、ご支援ご声援をぜひともお願いします。

■アンテナ高く

ＦＭわぃわぃが扱う言語は当初の7言語から、96年4月にポルトガル語が加わり、8言語になった。鷹取教会の敷地内にアンテナを立て、10ワットの出力で電波を飛ばした。しかし、聴取可能な地域は長田区の中南部と、須磨、兵庫区の一部に限られ、しかも建物の再建が進むほど聴き取りにくい地域が増える皮肉な現象が生じた。そのため、アンテナの移設が課題となり、紆余曲折の末、98年3月、長田区房王寺町の市営住宅に設置されることになった。

また、98年1月17日にはわぃわぃのインターネットでの聴取が可能になる。テレビ報道でFMわぃわぃについて知ったプログレッシブ・ネットワークス日本法人社長（当時）のジェームス比嘉さんが協力を申し出てくれ、インターネットを通してリアルタイムで世界中に発信されるようになった。

・まちの保健室

この夏、わぃわぃは燃えています。初めての試みである地域イベントの番組化であり、７時間にわたる生放送の実現です。その第一弾は、7月２２日に神戸祭り第１日目（７／１９）の6時間にわたる長田区民フェスティバルの模様を90分にまとめて放送したこと。それに地元企業、商店がスポンサーとして協賛してくれたことは画期的なできごとでした。

これに気をよくした第二段は、8月３日の長田七夕まつりを６０分にまとめて放送。金プロデュサーをチーフに正岡、有田、永井の高校生トリオが大活躍で、すばらしい番組をつくりあげました。スタッフは来年以降レギュラー化したいと、今から張り切っています。

そして締めくくりは、8月１０日の須磨海岸からの７時間生放送です。日曜日のレギュラースタッフ１５人（若手のバリバリ）を中心に、かげのスタッフを加えると３０名が参加するという、開局以来の大掛かりな大型番組になりました。本人たちの張り切りようが番組にぶつけられて、予想以上の評価が得られました。

■ホアマイの花咲く

FMわぃわぃのボランティアDJだった井上浩恵さんは、ベトナム旅行で見た可憐な花「ホアマイ」に心を奪われる。97年10月、園芸の番組で培った知識を生かして、ハーブの栽培、山野草などの寄せ植えの販売や指導を職業とした。「寄せ植えアーティスト」としては「ホアマイ」という名前を使う。DJのボランティアは続けた。

ホアマイをなんとか日本で咲かせようという夢もあきらめなかった。99年2月、3度目のベトナム旅行。海外から土は防疫の面で持ち帰れないから、ホアマイの若木の根に日本から持参した水ゴケを付着させ、土の代わりにした。自宅に運び込み、室温を25度に保った。春になって外へ出した。6月22日、花が咲いた。

7月、鷹取教会のミサに届けると、ベトナム人たちが「まさか日本で見られるなんて」と喜んでくれた。わぃわぃの番組で報告すると、リスナーからお祝いのメッセージが届いた。

井上さんは2000年1月でFMわぃわぃを去る。その翌年からは、苔を球状に育てる「苔玉」の制作を始める。独自に混ぜ合わせた土を中心に苔を張り合わせ、黒い木綿糸で縛る。直径2センチから10センチと、大きさはさまざま。完全な球形にするのが難しい。作って3週間で苔玉は緑に彩られ、淡く光を帯びる。

「小さな緑も、自分本来の姿を出し切るから光り輝いている。私たちも力を出し切って、一瞬一瞬を生きたい」

井上さんは、90年に姉を亡くして以来、生と死の意味を考えてきたという。震災を経験し、たかとりでの出会いを経て、答にたどり着いた。

５１号

・ＫＦＣ

長い夏が終わり、朝晩冷え込むようになっています。１０月１２日は震災がおこってからして１０００日目です。大きな節目です。

さて、当センターは震災の直後から活動を続けており、これまでの活動はさまざまでした。やりきれないほどいっぱいありました。９７年9月1日現在、神戸市在住外国人数は41,997人で９８カ国もの人がいるのです。９６年６月末では41,916人だったのが少し増えました。そのうち、ベトナム人の場合は７４８人から８０３人にもなっています。震災時と比べて５５人も増え、大きな震災を受けたにもかかわらず神戸を離なれられないのは、やっぱり神戸が大好きなのでしょうね！約２００世帯もの人々が神戸市を第二の故郷にしています。仮設住宅には一番多い時（９５年１０月）５８世帯でしたが、現在は４４世帯で、１６世帯が市営か県営住宅などに入居することが出来ました。第4次住宅募集には皆さんに当たればうれしいです。一歩一歩で前向きに復興しています。これからの神戸を応援してください。

■地域とともに歩む

外国人とともに暮らす多文化共生社会を「たかとり」は目指してきた。地域とともに歩む姿勢にもこだわってきた。では、外国人との共生を豊かさとするメッセージを、地域の人々は心地よく受け入れてきたのか。

神父の神田裕さんは「震災直後は盛り上がっていて、とりあえずOKだったけれど、落ち着いてきたら、共生なんて迷惑と感じる人が出てくる。マジョリティー（多数派）は、マイノリティー（少数派）を迷惑と思うところがどこかある」と指摘する。実際に意見がぶつかったこともあるという。

「そんなとき、はっきり主張すると、積み上げてきた関係が崩れてしまわないか、悩んだ。でも、譲れない部分がある。マイノリティーの側に立った多文化共生を、主張してきた。お互いの主張があって、こちらの主張を分かってもらえないとしても、語り合ってきた。迎合するのではなく、接点を持ち続ける。それが地域とともにあゆむ、ということ。そんな場が、震災前にはなかった」

震災10年を機に神田さんはそう振り返った。この先また、ぶつかる局面を迎えることもあるだろう。地域の住民との話し合いが結局、かみ合わなかったにしても、10年のつながりはご破算にならないのではないか。「けんかしても、また一緒に酒を飲める」関係を、神田さんは「ありがたい」と喜ぶ。「好きや嫌いではなく、地域を愛している、という感じかな」

５１号

・かんちゃん日記

１０月１２日に震災後１０００日を迎えた。鷹取教会救援基地は「パストラルセンターたかとり」と名称を改め再出発。そして基地内の全てを総称して「たかとり救援基地」と呼ぶようになった。日常へつなげてゆく大きな節目だ。泣顔から笑顔へ。

ところで「忘れんとってね。１・１７」が笑顔を募集しています。同封の葉書いっぱいに素敵な笑顔を色鉛筆で書いて神戸に贈ってください。よろしく。

■震災１０００日の再出発

震災1000日となる97年10月12日、「鷹取教会救援基地」は「たかとり救援基地」に名称を改めた。

救援基地は教会を基盤に始まったが、教会も地域もNGO（非政府組織）も一緒に歩んできた。その姿勢を確かなものにしようと、名称から「教会」を外し、ひらがなにした。

3年後の2000年8月には、さらに「たかとりコミュニティセンター」へと発展し、特定非営利活動法人（NPO）資格を取ることになる。「教会の事情でセンターの運営が左右されないように、一方で、教会が場所を提供するだけのテナント貸しの状態にならないように、しっかり歩んでいきたい」と神父の神田さんは説明する。

教会だけでなく地域やNGOの視点での考えも取り入れ、目指すべきものをともに作り上げていく。その後の「たかとり」の原点が、震災1000日の日に掲げられたのだった。

５２号　１９９７・１１・７
・ＦＭわぃわぃ
いまＦＭわいわいの周辺が実に騒々しい。連日騒音と振動に悩まされ苦しめられています。サラ地には新しい住宅が次から次と建ちはじめ地域の復興が急ピッチで進められています。それに伴って水道の配水管やガス管などの埋設や道路の整備が急ピッチで進んでいます。
非情にも大型のショベルカーや掘削機が朝から夕方まで休むことなく道路を掘り起こし埋め戻しを繰り返しています。塀一つ隔たった路上での作業ゆえに、決して頑丈とはいえないわいわいのスタジオでは想像を絶する振動に放送機器は悲鳴を上げ続けています。思わず大震災の恐怖が甦ってきます。
そのうえ悲しいかな防音が十分とは言えないスタジオゆえに騒音が電波を通して直接リスナーの耳に飛び込んでいきます。苦情やら問い合わせの電話やＦＡＸが入ってきます。対応するスタッフはただただ平身低頭。「もうたまらん。何とかしてくれよ」と、スタッフの悲鳴が聞こえてきます。

・キッチンハウス　ママレター
新体制となって、１ヶ月程経ちました。
救援基地は、全国の方からの義援金と、物資でここまでやって来ました。その事を忘れない為にも、食事代として各自１回１００円を頂くことになりました。そのお金は救援基地活動の一部として使われます。今までに、鷹取教会救援基地に来られて食事をされた方、これから来られる方、今までどうり台所は、愛情こめて、食料を大事にし、体に良い美味しい食事を作って待っています。
ところで台所には最近虫達の仲間が増えました。その名は＊＊＊。今までいなかった虫達も帰ってきて少しずつ台所も日常に戻ってきました？嬉しいやら悲しいやらです。

PS　沢山の物資、食器、ありがとうございます。これからもお願いいたします。

５３号　１９９７・１２・１７
・キッチンハウス　ママレター
去る11月14日に、明石にて24名の参加をいただき、ママさんうさぎ懇親会がありました。時間的な事もあって、まず美味しい食事をいただきました。
その後、神田神父より話をとなりました。が　曜日ごとに、たかとり救援基地へボランティアに来ていただいている為、この機会に顔と名前を覚えようと自己紹介となりました。
最初の人が自己紹介をします。二人目は一人目の人の名前と自分の自己紹介、５人目の人は４人の名前を順番に言って、自分の自己紹介というふうにしました。
ソッ！　ラストの人は２３人の名前を言わなければならないのです。１０人目あたりから
のん気に座っている人と、メモをとる為にその都度頭を動かす人（笑）など和やかにスタート。そんな中、２２番目の守さんは、逆周りで名前を間違えずに言いました。
２４番目は神田神父、（一番覚えたかっった？）見事に名前と所属名を言いました。途中難しい話もありましたが、次回はお花見にでも行きたいネと、鬼が笑うような話も出たりして、楽しい一日を過ごし、又、明日からと元気が出た日でした。

５５号　１９９８・２・１７
・まちの保健室
神父さんが木にのぼった。震災で大やけどを負ったイチョウの木は、焼けただれた黒い肌をさらしながら基地にあって苦楽を共にしてきた。三年間、のび放題にのびた枝に、神父さんが手を入れることになった。久しぶりの春の装いである。季節には緑の葉にバッタが生存し、黄金色の時にはスズメの大合唱も聞くことができる。ネコは爪をとぎ、木登りを楽しんでいる。クリスマスには容赦なく幹に釘が打たれ、ペンキに染まったツリーに変わる。さんざん遊ばれてきたイチョウの木、強いなーと見上げていると汗の滴が額にあたる。小枝も降りそそぐ、やがて小ざっぱりときまったイチョウの木はちょっとテレているのではないかな。地域から花の苗がたくさん届けられた。木の周りにならべてみると、パンジーの花がよく似合う。病院帰りの人、散歩中の人、配達の人が気軽に立ち寄って手を貸してくれる。話にも花が咲き、タクシーの運転手さんもお客さんをおろすと「私も」と輪に入ってきた。つぼみがいっぱいついている赤い花の苗を一つ手に取って、暖めるようにしてから、丁寧に土の中に移した。「私は、末の娘をこの地震で亡くしましてね…娘は、障害を持ていました…成人式を迎えて…」とつらい胸中を語ってくれた。こうして汗と涙と人の輪で花壇は出来上がった。春が待ち遠しいこのごろです。

５６号　１９９８・３・１７
・オフィスじょうほう
すっかり基地の入り口から足元がコンクリートになり、点字ブロックがまちの保健室まで一直線に伸びている。また保健室と食堂、台所の間は三角の地面を残してコンクリートになった。その三角の地面は、高校生のボランティアによって切られた杉の木の丸太がフェンスとなり、愛知県の角田セナリーからいただいたすみれ、除虫菊、コツラをならべて花壇となった。８匹のねこ達は肌触りのよい土の花壇に喜んで入っていく。猫のあれで花が枯れてしまってはと、「これ！」と追い出されたり、時々トイレ中見つけられて出される。猫も生活しているのだから気持ちよくトイレができるようにと、猫のトイレを作り、屋根をつけた。福岡からたくさんの衣類が届いたので、岩岡第二仮設でバザーをすることを計画したとたんボランティアに行きますと電話が入る。ありがたいことです。ごく自然に活動ができるのがいつも不思議です。多くの人たちに見守られているのでしょうね。高校の卒業式前の一番リラックスできる時期に、２０日間滞在して活動してくださった人がこんな感想を残してくれました。「人はやっぱり笑顔が一番いいなあ。学校、家庭を離れ社会を眺めた私、確かにあると思っていた『自分らしさ』というものを何一つ発揮できなかったと思う。いろんな事があった。一生忘れない経験だった」・・・。長楽仮設は第一、第三水曜日、下中島の仮設では土曜日に昼食サービスをしています。シルバーハイツ松風第二も４月１日から自治会発足でーす。

５７号　１９９８・４・１７
・かんちゃん日記
震災3年3ヶ月。兵庫県下の仮設住宅の入居率は50％を割って21,471戸（1998,4,1）になった。まだそんなんや。仮設住宅の過疎化が進む。それも一人暮しの年寄りが取り残される。残り短い人生。もしかしたら仮説住宅で終わりかも知れへん。死にきれん。でも待っててもしゃあない。精一杯みんなで花見でも楽しまんと。そや、諦めたらあかんで。今が一番ええ時かもしれへんで。

５８号　１９９８・５・１７
・ＫＦＣ
神戸定住外国人支援センターより
まだ5月の初めなんですが、梅雨のような雨になっています。被災者の仮設生活は、また大変な時期に来ようとしています。入居当時には誰も３～４年も仮設にいるとは思いませんでした。４月２４日～５月１４日まで住宅募集があって全部で６，９５３戸があります。なかなかコレという所はあまりありませんが、今回の当選はとても期待しているようです。今までの落選の気持、残された気持はもう十分です。今度こそ全員が希望通りの住宅に当たるよう願っています。大震災という出来事が、ある面では大変だったけど、私に対してはとても貴重でありがたい体験でした。このおかげで外国人のさまざまな問題は取り上げられ、周りの人々は外国人を知るようになりました。外国人の私達は震災があったため住宅は全壊し、仮設を与えれる対象になって、恒久住宅や公営住宅に入れるチャンスが出来ました。（震災前は公営住宅に住む家族は数えられるぐらいしかなかったが、安くて広くて入居差別もない公営住宅は大変人気で理想的でした）おかげさまで今までの募集で３７家族が公営住宅に入ることが出来ました。これはとても大きい数字です。本当にありがとう！

５９号　１９９８・６・１７
・まるごとアジア
昨年度は街の多言語化プロジェクトで、地域の案内標識や市場の案内看板などのサイン施設を設置してきました。今年度からはこれまで行った成果を踏まえて、長田区全体の多言語サイン計画を立案していきたいと考えています。これまでの活動は街に多言語の情報を増やすためのきっかけ作りでしたが、それを更に発展させていくためには、街の全体像をしっかり立案したうえで、個々のサイン計画を進める必要があると考えからです。長田区には、街の情報整備の方針を示したサイン計画はありませんので、それを我々で作って実際のまちづくりにつなげていきたいと思います。これらの活動は昨年度のようなイベントと組んだ派手さはない活動ですが、将来に向けて外国人と日本人が共生できるまちづくりを進めるための土台の一部となるような計画ですから、ぜひとも実現していきたいです。（TF）

６０号　１９９８・７・１７
・かんちゃん日記
今日（7/17）でちょうど3年半になった。4万8千戸ほど作られた仮設住宅には現在3割を切る1万3千世帯ほどの人々が暮らしている。来年春には4千世帯になる見通しだがまだまだだ。仮設以外の方々で公営住宅が必要な世帯も4千世帯。しかし、忘れてはならない。数を数えて復興を願うのではないってことを。

６２号　１９９８・９・１７
・まちの保健室
ようやく住宅が当たり引越しを終えたＫさんは、「私が先に出てしまって申し訳ない」と言いつつ、疲れが出たのかどっと寝込んでしまいました。寝ていても仮設に残っているお年寄りのことが気にかかり、出かけていっては無事な姿を見て安心して又横になる。主人に触れてもらえない家具が無雑作に置かれ生活のにおいがありませんでした。半身不随のＫさんにとって室内の配置はとても重要な意味を持ちます。ボランティアの若い力を借りてＫさんの新しい住居づくりをやってみました。健側に置いたら便利？看側では不利。何度もやり直しながらやっと雰囲気が出てきました。「これがほんとうの部屋よね」。Ｋさんにも笑顔が戻ってきました。地震による火災ですべてを灰にしてしまったＫさんはすべての人からの贈り物、ゴリラ隊が作った棚、踏み台、腰掛、すのこ、ベッド、タンス、食器など必要最小限、不揃いの物でしたがＫさんはそれらを大切に使ってきました。「どうしても手放せなかったの」「住宅が当たったらきれいさっぱり何もかも新しく出直そうと心に決めていたけどできなかった…」。Ｋさんが地域型のＳ仮設に入居してきた時は、杖なしでは歩行は無理でした。ところが気がついたら杖を手放し率先してお年寄りの世話をし、杖ではなくお茶碗やおなべを片手に、弱っている人々を訪問して元気づけておられた。日常生活そのものがリハビリなんだと気がついた。彼女はどんどん力をつけ住民を守ってきました。彼女にとって生きる張りでもあった仲間と暮らした3年半、最後の一人が仮設から出るまでＫさんのリハビリは終わらないでしょう。(KK)

・まるごとアジア
アジアタウンでは、１０月３日、４日に明石公園で開かれる「ふれあいの祭典」に屋台を出店します。今回は大規模に３０店舗のお店を出しますので皆さんぜひ来て下さい。お店の内訳は世界各国の料理や物販の屋台に加え、民族衣装の着せ替えコーナーやタイの伝統工芸カービングの実演コーナーがあります。更に、今回の目玉としてベトナムの人力車シクロの試乗コーナーがあります。シクロは、この日に備えベトナムから輸入したもので、分解されて基地まで運ばれて来ました。組立はみんなで行いましたが、ベトナムの人々にも手伝ってもらったので、あっという間に２台のシクロが組み立てられました。中にはベトナムで実際にシクロをこいでいた人もおり、みんな目を輝かせて手伝ってくれました。いつかは、ふるさとの乗り物を長田の町中でも走らせたいです。(TF)

６５号　１９９８・１２・１７
・まるごとアジア
大阪ＮＰＯアワード’９８が１１月２９日に大阪市北区民センターにおいて開かれました。アジアタウン制作のＦＭわいわい番組「まるごＤＥわいわい」はこの賞に選出されプレゼンテーションを行いましたが、結果的には残念ながら最優秀賞をとることが出来ず、「みんなが主役の街づくり賞」の受賞となりました。しかし、アジアタウンに来て３カ月の僕にとっては学ぶことの多いものになりました。社会貢献の活動をしている団体が思いのほか多いこと、そしてその活動が多岐にわたっていることなどが特に印象深いものです。そんななかで、僕らのプロジェクトが社会的にある程度認められ、プレゼンテーションが出来る８団体に選出されたことだけでも光栄なことだと思います。ただ、このプロジェクトは僕らだけでなく丸五市場や真陽地域の方々が主役ですので、僕にとってうれしかったのはやはり、市場や地域の方々に喜んでもらったり、激励されたことでしょうか。これからも、そんな人々の笑顔や活力を糧に僕らも成長し、飛躍していかなくてはならないと思いました。僕らの番組”まるごＤＥわいわい”にご期待下さい!!(S.N.)

６７号　１９９９・２・１７
・まるごとアジア
アジアタウンを始め、ＦＭわぃわぃ、ＫＦＣなど、震災から始まった多民族・多文化社会実現に向けた動きを撮ったドキュメンタリー映像「多民族社会の風」が完成した。製作はもちろん青池組。これまで開いた３回の上映会での評価はなかなかのもの。震災後、数多くのテレビ局が撮影に入り、私たちの活動をテーマにした番組を制作したが、結果は「う～ん…」と落胆してしまうものばかりであった。「多民族社会の風」は、救援基地の仲間として４年間しっかりと見据えてきた青池組だから撮れた、スピリットのこもった作品に仕上がっている。特に「人間のまち野田北部・鷹取の人々」と併せてみると、鷹取のまちづくりが別の角度から浮き彫りになり、青池監督の「まだ見ぬまち へ」という言葉の持つ意味をあらためてかみしめてしまう。多文化・多民族共生のまちづくりは、まだまだ道半ば…。でも震災が生んだこの新しい息吹を、今回の映像を通してできるだけ多くの人に感じて欲しい。それが私たちの願いだ。
ドキュメンタリー映像「多民族社会の風」のビデオは一部2、000円です。
申し込みは、TEL.078-737-5544（神戸アジアタウン推進協議会）まで。
参考:http://www.jp.real.com/kobe/(ﾋﾋﾞﾉｼﾞｭﾝｲﾁ)

６９号　１９９９・４・１７
・青池監督の眼
散歩に行く。救援基地を出て大国公園でたばこを一服。新緑の葉をそよがせる樹々。まだかたちを成していない鷹取商店街を通る。肉屋のコーちゃんに声をかけ、かけかえせれ、北條八百屋でトマトを２個買い、よもやま話。「この辺りが元のようになるには10年かかるだろうが、それまでこっちの体がもつかねえ」。話は暗いがそれに続く笑い声は元気だ。庶民はいつだっていまの今の暮らしを生きている。米屋のナオちゃんが配達途中の車を止めて話しかけてくる。やっと元の場所に家を建てられることになったとうれしそう。70年代ヒッピーがそのまま中年前期を迎えたような長髪の顔がほころんでいる。震災で焼け、新しく建てたお地蔵さんの前で佇んでいると、自転車やのゴンちゃんがやってきて、「カントク、いろいろあったけどこれからや」という。いろいろとは住民同士のすったもんだで、それを何回くりかえそうが、すべてはこれからやというのが、庶民の行き方である。近くの小公園でトマトをかじりながらビールを飲んだ。人の気持ちと人の声がアルコールと一緒に、わたしの躰にしみわたった。
(ｱｵｲｹｹﾝｼﾞ)

７０号　１９９９・５・１７
・キッチンハウス　ママレター
タカトリの台所はゴールデンウィークの一週間お休みになりました。ママさんうさぎはそれぞれの家庭でリフレッシュの時を過ごし、休み明けに新たな気持ちで「さあ、やるぞ！」と集まりました。いつもの朝一番の仕事、在庫調べから始めようと野菜の棚を見ると、今までに見たことのない物が箱に入ってました。休みボケの目を覚ましてよくよく見ると、ジャガ芋の芽が伸びに伸びて20cm程になっているのでした。それも箱の中のジャガ芋全部から出ていて、まるでバケモノ萌やしでしたが、あるだけの材料で食事を作ることをモットーにしているママさんうさぎは、おばけ退治とばかり早速ジャガ芋の芽とりを始めました。本日のメニューはポテトサラダ。明日はコロッケ。その次は肉ジャガ…。頭の中はジャガ芋の料理でいっぱい！　♥今日もコロッケ　明日もコロッケ～♥　ではないですが、しばらくはジャガ芋料理が続くかも。すみません。いただいたものを大事に使っていますので…。(ﾀｶﾊｼｱｯｺ)

・青池監督の眼
むかし、ネイティブアメリカンの老人からきいた歌がある。

そこで男は告げられた
自分の見たことをおぼえておけ
忘れたことはみんな、つむじ風へと
帰っていってしまうのだから、と

ナヴァホの風の歌の一節だという。阪神大震災の人とまちの再生を撮りつづけながら、ときどきこの歌を思い出していた。歌のなかの「告げられた男」はわたしであり、「自分の見たことをおぼえておけ」と告げたのは、被災地の人たちであり、その人たちが生きる日々の暮らしの状況であった。そして、自分の見たことをおぼえておけ、という言葉は誰よりも大震災を体験した人たち自身が、わが心に刻みつけたものであったろう。救援基地のある野田北部の人たちが、自分たちの編集で『野田北部の記憶（震災後３年のあゆみ）』を出版した。そのお知らせに、「忘れたい、でも忘れることが出来ない、というおもいから本のタイトルを記録ではなく記憶にしました」とある。みなさんもぜひ読んで頂きたい一冊である。お問い合わせは、野田北部まちづくり協議会（078-735-9388）まで。

７１号　１９９９・６・１７
・復興の街
地震が起きた時、僕はまだ、高校2年生だった。停学になり、施設から「鷹取に行ってこい」といわれた。いざ采てみると、汗水を垂らし泥だらけになって、大人と一緒にボランティアをしている自分があった。それが、3年間も続いた。普通なら、友達と遊び、彼女と手を繋いでデートをして楽しんでいるはずなのに、僕は、ここで、青春を過ごした。でも、震災があったお陰で、自分の新たな一面を発見できた。力のある者が弱い者を助け、知恵のある者が知恵の無い者に知恵を貸し、そんな人達を見て、素の自分を見つめ直せた。人に対して嘘をついて、人をあざ笑い、人を憎み、人に対して怒りを覚え、人に対して見栄を張らず、人に対して信頼を置けずの自分が嫌になった。その時、「そんなもんは、いらん」と思った。その時に逢えた友達が、今でも大切に思っている。でも、現実、震災から4年も経った今、元の自分に戻っているのが嫌だ。あの時に出来た事が、なぜ、今出采ないのだろうか？時々、あの時一緒にボランティアをした友達に逢うと、あの時の自分に戻れる。どちらが、本当の自分なのだろうか？答えは…。タロウ (ﾊｼﾓﾄﾋﾃﾞｱｷ)

７３号　１９９９・８・１７
・ＫＦＣ
神戸学生青年センターで難民の子に振興券を支配しないのは難民条約に違反ではないかとの『地域振興券の外国人差別を問う』集会がありました。約６０人ぐらい(県と市の職員も)の参加者が２時間ぐらいで不満の訴えの場になりました。ある在日韓国人のは私に深く印象に残りました。それは在日韓国人は今まで十分差別された。しかし、今回は自分は差別する側（もらえるから）の立場になってしまったので、もらっても素直に喜べないことでした。私個人いろんなところ、いろんな形で今まで差別されて来ました。相手は個人また民間団体などでした。まあ仕方が無いと思って我慢したが、今回の相手はなんと国・政府です。しかも、対象は子供なんです。いったい何故子供まで差別されなくてはならないのか分かりません。許せない！振興券で物を買った子供がもらえない子に自慢する。もらえない子の気持ちを考えたことがないだろうか。同じ思いを持っている方がたくさんいたので心強くなりました。皆と一緒に声を上げて少しでも改善したいと思います。　ところで、２年半前にKFCが立ち上がる時に作ったパンフレットは活動するうちに内容が少しずつ変わりました。訂正して、新しいパンフが出来ましたのでたきびと同封させてもらうことにしました。宜しくお願いします。(ﾊ･ﾃｨ･ﾀﾝ･ｶﾞ)

７４号　１９９９・９・１７
・救援基地の新しい仲間の紹介
こんにちは。救援基地の中に生まれたばかりの「ツール・ド・コミュニケーション」です。といっても、メンバーのほとんどは基地に関わりの深い者ばかり。だから、どうも「はじめまして」と爽やかに書き始めることが恥かしくて・・・。ずいぶん前にテレビで、まだ十分使えるパソコンが山のように棄てられていくのを見て、「なんでこれが自分達のところに届かないんだろう」と思ったことがあります。同じ頃に、この号の焚き火に同じく新登場するAWEPのパソコン教室を覗いた時に、世代、性別、国籍を越えた数人が和気あいあいと学習しているのを見て、子供の頃、原っぱで遊んでいるうちに自然と友達が増えていったことを思い出しました。情報化時代の必要なツールとしてパソコンは語られていますが、そんな難しく考えずに、仲間を増やしていく玩具を棄てられた山から拾ってきて、修理を施し「コミュニケーションの道具」として使っていこうというのが、私たちツール・ドが始めようとしていることです。多くの方の参加を願っています。(ﾋﾋﾞﾉｼﾞｭﾝｲﾁ)

Asian Women's Empowerment Project(AWEP)
はじめまして。私たちは80年代～90年代前半にアジア各国から仕事や結婚で日本に来た女性たちが様々な問題を抱えて帰国していることを知り、日本にいる私たちが自分の問題として、国境を越えて共につながりたいと考えました。簡単に解決することではないけれど、お互いの状況や社会の構造を知るなかで、経済的な問題が大きいことに気が付きました。そこで、女性たちが力をつけて技術を身につけ仕事を確保していくサポートをしていくことを目的として始まりました。グループは1994年8月に発足。その半年後に兵庫県南部地震が起きたのです。地震後に在住外国人とのつながりもでき、活動の拠点を捜していました。たかとり救援基地に事務所のスペースをお借りしたのが、1997年2月です。ＡＷＥＰはここに拠点ができたことで、新たな出会いと広がりを得て今に至っています。これから少しずつ、具体的な活動をお伝えできたらと思います。(ｲﾅﾀﾞﾀｴｺ)

・ＫＦＣ
９月よりＫＦＣでは地域に多く住む在日韓国朝鮮人高齢者の豊かな老後の場づくりに取り組む事業を始めました。在日韓国朝鮮人の高齢者と若者が集い、一緒に料理を作って食べたり、民族楽器を演奏し民謡を歌ったりして楽しい時間を過ごします。高齢者には民族文化の中で楽しい時間を過ごしてもらうだけではなく、料理やお話を通じて同じ在日韓国朝鮮人の若者に民族文化を伝えていってもらいます。一方、若者には高齢者とのふれあいを通していろんなことを学んでいってもらい、高齢者問題とともに民族文化の継承、自身の民族的アイデンティティの形成につながればと思います。第１回目は９月９日でした。おばあさんには事前に案内はしたのですが、本当に来てくれるのかがとても不安で落ち着かなかったのですが、結局２１人のおばあさんが来てくれて大変楽しんで帰られました。おばあさんが孫より年下の若者と楽しそうに話したり踊ったりしている姿を見ながら、ひと安心しつつも、在日韓国人の一人としてこの事業を継続していく重要性をひしひしと実感した１日でした。(ｷﾑﾁﾞｭｻ)

・キッチンハウス　ママレター
この夏、久しぶりに150人もの人が泊まりました。台所への手伝いも多数の方が来て下さりました。2時ごろから子どもたちも手伝いに加わり、春巻を作りました。夕食はベトナムうどんと、子どもたちが巻いたベトナムの揚げ春巻。日曜日のお昼は定番のカレーライス。ジャガイモの皮を剥いていた人が「始めのころはこれぐらいの人数が毎日で、ジャガイモならジャガイモと、来て帰るまでにらめっこしたわネー」と昔ばなしに。少し前の事なのに遠〜い昔のことのような気もする。今のこの日に感謝した一日でした。(ﾃﾞｸﾞﾁｻﾁﾖ)

７６号　１９９９・１１・１７
・ＦＭわぃわぃ
台湾大地震で被災したより多くの外国人に震災関連情報が届くようにインターネットを通じて６言語の台湾大地震情報番組の放送を開始しました。
放送は月曜日から金曜日の
午前9時-9時半（台湾では午前8時-8時半）
午後2時-2時半（同午後1時-1時半）
午後9時-９時半（同午後8時-8時半）
＊台湾とは時差1時間（日本が先）
放送言語は台湾語、タイ語、インドネシア語、タガログ語、英語、日本語の6言語。
外国人地震情報センター台湾のニュースを中心に放送します。
インターネットで放送を聞く場合のホームページアドレスは
http://www.jp.real.com/fm-yy/
なお、聴くためには無料ソフトのReal Player Ｇ２が必要になります。
Real Player Ｇ２は次のサイトから無料でダウンロードできます。
http://www.jp.real.com/
台湾でインターネットから音を拾ってその情報番組をオンエアしてくれるラジオ局については１、２の候補があって現在、調整中です。
この番組の制作には本当に沢山の人が関わっています。
１）台湾で外国人の電話相談を受けている人
２）伝えるべき情報を収集する人
３）それぞれの言葉の翻訳者を探す人
４）原稿を受け取って翻訳する人
５）各言語のスピーカーを探す人
６）翻訳された原稿を各言語で読む人
７）それを録音する人
８）一つのラジオ番組に仕上げる人
９）インターネット中継の技術作業をする人
10）台湾のラジオ局探しをする人
いま挙げてみただけで１０種類の仕事があり各々に沢山の人がいます。こうして、台湾→神戸→台湾という流れで届けられている番組です。このことをより多くの人に広めてください。そうすれば、言葉の壁で困難を強いられている台湾の外国人被災者に震災情報が届くから・・・・。よろしくお願います。(ﾋﾋﾞﾉｼﾞｭﾝｲﾁ)

77号　1999・12・17

・復興の街

震災直前、築67年、老朽化の進んだ木造の鷹取教会の聖堂をどうしようかという話し合いをした。築100年まではなんとか修理してでも使おうと皆で決めて数日後、教会は震災で全壊全焼した。その後ボランティアが集い、教会の廃材や、解体した廃材を用いて鷹取救援基地が少しずつ出来上がっていった。ペーパドームもFMわいわい事務所他も加わった。手作りの基地は人々のいろいろな支えで暖かさが加えられていった。今、TCC（たかとりコミュニティーセンター）設立に向け、将来の鷹取での建物を考えはじめている。ある建築専門家に「将来どのような建物がよいですか？」と問いかけたら、「今のたかとり基地が一番いい」と・・。いまでも「たかとり」では新しい動き、かかわりが生まれている。それにあわせ建物の使い方も変わっている。「いつも作り、いつも変化成長している…。そうや！100年たってもいつまでも作り上げている、そんないつまでも完成しない建物を考えよう！ところで、それって、???」（ﾊｼﾓﾄﾔｽﾋｺ）

・まるごとアジア

震災から5年、日本語の苦手な人達に母語で生活情報を届ける活動に取り組んできた。その間に、何人かの人に「外国語で情報を流すよりは、日本に住む外国人が日本語を覚えるべきではないか」ということを言われたことがある。確かに日本語はこの国で生活していく上での大切な道具には違いない。でも、難民として渡ってきて、僅か3、4ヶ月の日本語学習の機会しか保証されずに日本社会での自立を求められる人たちに、同じことを言えるのだろうか。多言語環境の整備は、日本語学習制度の不備を補うという後ろ向きの姿勢から出発するものではない。日本に住む外国人は180万人を超えた。国境を越えた人の移動はもはや誰も止められない。それならいっそ、いろいろな国から渡って来る人が最大限に力を発揮できるまちづくりをすべきではないか。多くの人が新しい習慣、言語、思考を携えてやってくれば、閉塞しつつあるこの社会は変わっていく。アジアタウンづくりの狙いはそこにある。この間の活動で培われた翻訳者のネットワークが、台湾大地震の支援活動にもほんの少し役に立った。やっぱり「一様」より「多様」の方がいい。（ﾋﾋﾞﾉｼﾞｭﾝｲﾁ）

78号　2000・1・17

・まるごとアジア

ちょうど5年前、私は200人を越える人たちがテントを張って避難していた長田区のある公園でボランティアとして活動をしていた。200人の半分はベトナムの人たちで、藁をも掴みたい困難の中、言葉の壁により必要な情報を得ることができずにいた。私を含めたボランティアはベトナム語ができるはずもなく、山のような情報の中から可能な範囲で、それをひらがなでできるだけ簡易な表現に書き直し、それを回覧版でまわしていた。今思えば、それがすべての始まりだった。あれから5年、ここ鷹取には、多言語の街の案内板やゴミ出し看板が建ち、地域情報を8言語で放送するコミュニティ放送局ができ、多言語の生活情報誌も発刊された。これら街を多言語化していく取り組みは、主に救援基地のFMわいわいと神戸アジアタウン推進協議会が、震災復興のまちづくりの中で、それぞれが必要性を感じて進めてきた活動だ。非常時から日常へ。街の多言語化の取り組みは今年、救援基地の一つのプロジェクトとして動いていくことになる。（ﾋﾋﾞﾉｼﾞｭﾝｲﾁ）

79号　2000・2・17

・KFC

神戸テト（テトはお正月の意味）が2月6日マリスト国際学校で行われました。当日、雨で会場も分かりにくかったにもかかわらず、250人位の参加者がありました。11店舗でいろんなコーナーが準備してありました。珍しく、面白い物などを発見して、真剣な顔で説明を聞く姿もありました。神戸テトはベトナム人の手で作るのはこれで2回目。少し慣れたと思ったけれど、やっぱりトラブルもありました。一番大きいのは、ある事情で開幕時間がな～んと1時間も遅れました。毎年の行事だから来年はもっとちゃんとしたいと思うし、周りの人々とのこの交流の場を大切にしたいと思います。この2月11日でKFCは満3才。4年目に向けて活動も続くのですが内容が少し変わります。実は1月10日に在日ベトナム人連絡協議会発足しました。それで、今後この協議にもっと会は力がつけば、現在KFCのベトナム人の相談コーナーを切り離してそちらに入ることになります。未熟な会ですが頑張りますのでぜひ見守って下さい。（ﾊﾝ･ﾃｨ･ﾀﾝ･ｶﾞ）

８０号　２０００・３・１７
・ＫＦＣ
これまで８０号も発行した『たきび』を数日前に全号を初めて見た。読みながら思い出して胸がいっぱいになった。こんなにも活動していたことと、こういうわけであんなに変化したことも初めて知ることもあった。私は、1983年ころからずっと鷹取教会に通っている。だが鷹取救援基地の活動内容がこんなにも豊富なのに驚いて、なさけない気持。今からでもと思ってるので、出来るだけ活動を続けたいと思います。年度末の報告や決算などで皆お忙しい。そんな中、また未払い賃金が発生。今回は61歳のベトナムの女性、彼女はレストランの洗い場の仕事をして3年半ほど。給料はきちんと払えないのは16ヶ月前からだが、年もとったのでなかなか他の仕事も無いだろうと思ってずっと我慢した。会社の倒産した時には彼女の未払い賃金は20数万円もあったのでKFCまで相談に来ました。労働監督所の協力で約10万円ぐらい（一部の書類が見つからないから）国から払ってもらえるようになったが、労働者の立場からでは残念で納得出来ません。（ﾊ･ﾃｨ･ﾀﾝ･ｶﾞ）

・復興の街
平成７年１月の終わり頃。野田北部の夜。地域の男たちは闇の中、提灯・拍子木手に取って、自分のまちを守ってた。ひとけもない、明かりもない、静寂につつまれた我がまち。瀕死の傷を負いながらも、生きつづけるまち。その鼓動を、男たちは肌で感じていた。その闇の中。灯る明かり。語らう声。ギターの音色。そうそれが、たかとり救援基地との出会いである。教会としての顔。いや、地域にとっては、懐かしい幼稚園の顔。しかしもうそこに、学び舎はない。そのかわり暖かい顔が、そこにあった。それから、５年。汗も涙も、いっぱい出して。気が付けば、みんな等しく年食って。それぞれの、中身も立場も進化を続け、時間と共に融合してゆく。４月から『たかとり救援基地』は『たかとりコミュニティセンター』となり、野田北部まちづくり協議会も参画する。地域に、より開かれた市民活動集合体として共に歩んでいくために。しかし考える。もしも地震が、なかりせば。私は、なにをやっていた？想像すれども、答えは出ない。最後にお礼をいっておきたい。ありがとうたかとり救援基地！（カワイセツジ）

８１号　２０００・５・１７
・たかとりコミュニティセンター　いよいよスタート！
震災から５年と４ヶ月がたちました。一時は４万数千世帯もの人々が生活していた仮設住宅も今年はじめに解消され、見た限りでのひとつの節目をむかえました。5年前、多くのものを失って仮設生活が始まりましたが、その間にも多くの出会いがあり新しい仲間もできました。苦しい中で出会った友達はこれからの生命の糧になって行くのでしょう。しかし生活の糧はまだまだ思うように手に入れることは出来ません。受けた傷跡は５年では癒えそうにありません。そんな中、たかとり救援基地は大きな節目を迎えることとなりました。ボランティア基地からＮＧＯセンターへ。『たかとりコミュニティセンター(TCC)』として新たなスタートを切りました。夏ごろにはＮＰＯ法人格も取る予定です。国籍や年齢、そして障害などによって疎外されることのない『ひとづくりまちづくり』を目指す活動をサポートしてゆくセンターです。現在、TCCの中には、多言語で地域情報を伝えるＦＭ放送局（ＦＭわぃわぃ）を始め、定住外国人の相談窓口や日本語教室（神戸定住外国人支援ｾﾝﾀｰ）や（在日ベトナム人連絡協議会）、多言語による情報誌や案内板作成（神戸ｱｼﾞｱﾀｳﾝ推進協議会）、多言語翻訳･通訳企画（多言語ｾﾝﾀｰ・FACIL）、多国籍な子供のプログラム(ﾜｰﾙﾄﾞ･ｷｯｽﾞ･ｺﾐｭﾆﾃｨ)、コンピューターの教室やリサイクル(ﾂｰﾙ･ﾄﾞ･ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ)、国籍を越えた就労支援（ｱｼﾞｱ女性自立ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ）、外国人支援ネットワーク（MISDON）などの活動が続けられています。この春には老人介護の部門（ﾘｰﾌｸﾞﾘｰﾝ）も立ちあがりました。これらは震災の救援活動の中から生み出されたものです。そしてこれからも生み出されて行くでしょう。地震で幕を閉じようとしている２０世紀。しかし、その中で出会った多くの人達のやさしさの中で生み出された新しいいのちを２１世紀に伝えて行きたいと思います。

・アジア女性自立プロジェクト
三ノ宮のサンパル広場で13日に「地球村フェスティバル」が開かれました。　アジア女性自立プロジェクトは取り扱っているアジアの製品販売とフィリピンバーベキューの販売で出店。多くの人たちが声をかけてくださいました。当日のプログラムのファッションショウではアジアの民族衣装の紹介で　タイ、ベトナム、中国、フィリピン、インドと色鮮やかな服に加え今年は　男性と子どものモデルさんが登場しました。で、何か足りない？と思ったのはチョゴリが無かったこと。最も身近な国の衣装が紹介できなかったのが心残りです。身近過ぎて気が付かなかったり、見のがしたりすることがあります。うまく自分を表現できない子どもの気持ちをくみ取ることは難しいけれど、何とか理解しようと接します。文化や価値観が異なるからこそ見えてくるものもあります。日本語がまだ不自由なメンバーとの意志疎通も似たような感じでしょうか。誤解や失敗もお互いの理解の第一歩かもしれないと感じるこの頃です。（ｲﾅﾀﾞﾀｴｺ）

８２号　２０００・７・１７
・プレハブ事務所のとある一日
ワールドキッズコミュニティや多言語センターＦＡＣＩＬの事務所のある土曜日の様子をみなさんにお知らせしましょう。
９：３０
ＦＡＣＩＬコーディネーターの平田さんとＦＡＣＩＬの「東西南北」（多言語情報誌）担当&キッズの小島ちゃんが出勤してきた。まもなく吉富が事務所に来た。
■３人の会話「さあ午前中に仕事を片付けとかなくっちゃ！」「午後は嵐がくる。」
１０：００
東西南北の原稿の中国語翻訳のチェックをしてくれた陳さんが、ＦＡＸではでは読みづらいからと言って持ってきてくれた。もうすぐ始まる台湾地震の支援のための情報番組（ＦＭわぃわぃ）についての打ち合わせをする。
１０：３０
キッズのスタッフでブラジル人のマリナさんがやってきて、急ぎの翻訳の仕上げにかかる。マリナさんの娘で、キッズのラジオ番組「子どもワールド」（ＦＭわぃわぃ）の初代ＤＪゆかちゃん（在日ブラジル人で初めて慶応大学に現役で合格しました。）が、週末を利用して震災に関するレポート作成のために帰省していて、資料室からなにやら持ってきてコピー中。
１２：１０
今日のお昼は、加代さんとさっちゃんの韓国風冷やしうどんと冷やししゃぶサラダ。
■３人の会話「今日のご飯もおいしいねえ。いつもいろんな国のご飯が食べられてしあわせ。」
１２：３０
インドネシアのエレンさんが、同じく急ぎの翻訳の清書をするためにやってきた。久しぶりに鷹取のご飯を食べて仕事に取りかかる。別の翻訳のデータ入力のためにＦＭわぃわぃのＤＪで韓国の留学生のヨンス君がやってきて黙々と作業をしている。
１３：００
ペルー人のギジェルモやパメラたちがやってきた。ツールドコミュニケーションのパソコン教室が始まる前に、キッズが支援して３日前にここで印刷した自分たちの情報誌〔スペイン語〕のことで相談している。創刊号には、思い入れが特に強く、盛りだくさんの情報で勢い込んでいる。
■３人の会話「創刊号だけで、終わらずに続けてほしいなあ。」
１３：１０
マリナさんは午後から明石で開催しているブラジル人のための母語教室の講師をするためにでかけた。
１４：００
ゆかちゃんと一緒にＤＪをしていたベトナムのミミちゃんと２代目ＤＪのユミちゃんも事務所にやってきて、久しぶりのゆかちゃんとの対面の後、おもむろに英語の試験勉強を始める。ゆかちゃんやエレンさんに教えてもらいながら。
■３人の会話「あの子たち、大人っぽくなったなあ。。。」
ＭＡＮＧＯ（家庭教師派遣）のボランティアの報告会は、場所がなくて庭の「あずまや」ではじまる。

１７：００
そこにまた地域の市場の活性化プログラムの「丸五でわぃわぃ」のスタッフがミーティングのために集まってきた。ＫＦＣの金ちゃんも戻ってきて、ひとことつぶやく。「土曜日は自分の事務所なのに知らないところにきたみたい。。。」かくして、私たちの事務所の一日が楽しく流れていったのでした。みなさん一番遊びに来てみてください。（ﾖｼﾄﾐｼﾞｮ）

８３号　２０００・９・１７
・リーフグリーン
くらしの助け合いの活動を始めてから4ヶ月が過ぎようとしていますが、試行錯誤を繰り返しながらの毎日です。そんな中でこの猛暑のなか、1人の男性との出会いがありました。8月のある日曜日（しみんくりーんうぉーく）主催のフリーマーケットにリーフグリーンも参加したときのこと、ボランティアとして長田から須磨の下中島公園まで、炎天下自転車で手伝いに来てくださった。この日は快晴、気温最高。それから店じまいまで4時間あまりも、いくら傘の下とはいえ暑い中椅子にかけての店番をしてくださった。その間、昔の話や日本歴史のことと豊富な話題にビックリ。若い者が暑さでダウンする中で最後までお元気でした。そしていままで座っていた椅子を見て、「この椅子修理したる」と、自転車の荷台にくくりつけ「ほな、さいなら」と帰っていかれた。後でお体の調子はいかばかりかと心配したが、3日後の茶話会には「椅子なおったで」とにこにこと自転車で走ってこられた。手には見事に丈夫になった椅子がありそのお姿をみてほっとしました。９０歳をすぎて尚、かくしゃくとされているＮさん、これからもよろしくね、そしてありがとう。（リーフグリーン、橋本雅子）

８５号　２００１・１・１７
・かんちゃん日記
とうとう２１世紀になった。そして震災６年がたった。神戸の人口は震災前の９８％になったらしい。なのに長田の人口は８割しか戻っていない。復興なんてまだ言えない。しわ寄せはいつも弱いところへということか。社会的にはさまざまに弱い立場の人たちが多い町、長田。でも立場になんか負けてへん。人間的にはたくましくてパワフルな人たちが多い。そんな長田が好きや。それでも・・・２１世紀は社会的にも強くなってゆかなければ。たかとりコミュニティセンターはそんな長田のＮＰＯでありたいです。
〈KANCHAN〉

８７号　２００１・５・１７
・ツールドコミュニケーション
三宅島の噴火による全島避難から、はや８ヵ月が過ぎた。バラバラの避難生活、
地域コミュニティーの崩壊の中で、島民に必要な情報を集める手段、コミュニケーションをとる手段が必要だった。その中でパソコンの活用というものが注目されている。ツールドのリサイクルパソコンも、秋川学校をはじめ４台が活躍している。しかし問題も山積みだ。島民の多くは高齢者である。サポートする体制はどうしていけば良いのか？先日お邪魔したお宅では老夫婦がパソコンを覚えたいと話していた。『島に帰れたら自分のくさやの店のホームページが作れるようになりたいねえ』。
最近、島民の中で同じ島民のパソコン導入を手助けする動きが出てきた。避難生活の中で離れ離れになった人々を繋ぐ道具としてのパソコン、世代を超えた新たなコミュニケーションの形を育てる道具としてのパソコン、
最先端ではないがリサイクルパソコンが活躍する場は数多くある。（ヤマモトヤスヒコ）

８８号　２００１・７・１７
・ＮＧＯ　ＶＮ
私は今まで何度かたきびに文草を載せることがあましたが、今回は『NGOベトナムinKOBE』のスタッフとして、少し違う気持で書いています。活動はもう6月からスタートし、7月1日に正式の事務所開きになりました。活動内容は簡単に説明すると、KFCのベトナム人への支援部分はNGOベトナムinKOBEに移りました。新しく増えた活動は図書館の開設、高齢者の支援、ベトナムについて少しでも理解してもらうため食材（レシピ付き）、雑貨等を展示又販売しています。
さて、NGOという言葉に日本語の意味は皆さんがもう御存知かと思いますが、このngoはベトナム語の記号を加えることによって『面白い』又『見る』等の意味もあります。つまり、ベトナムは面白い！ベトナムを見て！と皆さんの注目も期待しているのです。ぜひ、事務所まで足を運んで見て下さい。新しい発見が見付かるかもしれないよ！
未熟な私達で運営しますが、いろんな面に応援・ご指導していただければ幸いです。
（ハ・ティ・タン・ガ）

９０号　２００１・１１・１７
・アジア女性自立プロジェクト
先月、私の在学する関西学院大学の福祉学科の学生さんがAWEPを訪問しました。最近AWEPでは、大学との交流が増えてきたなと思います。梅花女子のタイスタディツアーや
甲南女子での講演etc…最近は海外に関心のある学生が多いですが、国際的な問題は国内にもたくさんあるんだという事を伝えていくのもAWEPの仕事だと思っています。AWEPとしても、電話相談やセミナーなどの生活支援プログラム、情報発信や外国人女性のネットワークづくりなどなど、国内事業にもこれまで以上に力を入れています。
私は福祉専攻なので特にそういったところに目が行くのですが、ひとりひとりの社会的・現実的な「今ここでの生活」に焦点を当てていくことは人権を考える時にとても大切な事です。今月は大路さんが関学へ講義に来ますが、アジア女性の現実を福祉専攻の学生に伝える機会が持てて本当に良かったと思います。AWEPの活動を、バンバン宣伝して来ます！<オカモトアキコ>

９１号　２００２・１・１７
・リーフグリーン
神戸の街をなぎ倒し焼き尽くしたあの大震災からはや７年が経つんですね。極限状況の中で、「物もお金もいらない生命さえあれば…」と多くの人々が思いました。あの時体験した人々の純粋な優しさを私は決して忘れません。競走社会の中で育ってきた私の視点を変える出来事でした。２年前、あの時の優しさを形にして残したいと「リーフグリーン」を設立し、高齢者・障害者の方々と共に歩んできました。ホームヘルプ・移送・子育て支援・配食・ふれあい茶話会・ミニデイなどのサービスを提供しながら共に支え合うコミュニティを目指していますが、正月休み明けにショッキングな出来事が続きました。５日間の休みが終わって配食を開始したところ２日続けて、一人淋しく亡くなっておられる方を発見したのです。お二人とも男性で、それまでお元気そうだっただけにショックが大きく、また同時に私たちの仕事の大切さを実感させられる出来事でした。１月１７日が来るたび私の原点に戻り、思いを新たにして活動に励んでいます。（ヨシモトカツコ）

・多言語センター"ＦＡＣＩＬ"
震災からもう7年経つのですね。あのとき中学1年生だった息子は今年成人式を迎えます。
私にとって忘れられない光景があります。1993年、近くの大国公園でスペイン・ペンポスタ子ども共和国の子どもたちを招いての夏祭りに、近所のおじちゃんもおばちゃんも子どもも、どこの国の人もみんな一緒に踊った盆踊り。その公園が1995年の地震で壊れてしまったときの悲しさ。でも、そこでいろんなことが始まりました。壊れた家の片づけ、炊き出し、救援物資の提供、仮設住宅の絵描き、引っ越しのお手伝い、そしていろんな人に情報を届けるために立ち上げたラジオ局・・・全国から駆けつけてくれたボランティアのいろんな活動。7年経って、ここは、さまざまな市民活動の拠点になりました。うちの事務所では、いくつもの言語が飛び交い、子どもたちも遊びに来ます。そして、公園は地震の前のようにたくさんの人が集う場所に戻りつつあります。あの光景また見れるかなあ。（ヨシトミシヅヨ）

・かんちゃん日記
7年という月日が経過しました。あの日。。。リュックを背負って遠くから駆けつけて下さったあの人この人は手探りの中私たち被災者を勇気づけてくださいました。たかとり救援基地に関わって活動したボランティアの人たちは数えられるだけでも数千人。一人一人ひとつひとつ明日を作って行ってくださいました。そして。。。たかとり救援基地からたかとりコミュニティセンターへ。非日常の緊急救援から日常へと受け継がれてきました。ＴＣＣは現在９つのＮＧＯで構成されています。そしてそれぞれに関わっている人たちはパートも含め有給スタッフが３８名。ボランティアスタッフは６６０名を数えます。
未来へのまちづくりはまだまだ続きます。

９２号　２００２・３・１７
・ＫＩＤＳ
今年３月３日から　コースＣＢＫを開きました。このコースＣＢＫ（関西ブラジル・コミュニティ）とは、ブラジル人の子どもたちにポルトガル語で小学校から中学校の科目を教え、
その後修学終了資格証認定試験を受けていただくことで、中学校と高校卒業資格を取ることが出来ます。ＣＢＫはこれらを目的として、１５歳以上のブラジル人生徒を集めて資格を目指します。授業は毎週日曜日　９：００-１２：００。５人のスタッフで指導します。
スタッフメンバ：ロベルト、フラービオ、テレジンヤ、セリャ、マリナ。

・かんちゃん日記
台所ボランティア（SKATT）はこの３月でもって解散することになりました。被災者への炊き出し。。。ボランティアたちの日々の食事。。。そして・・・ＴＣＣのスタッフたちの日常をつなぐ食卓づくり。私たちはこれまでここで同じ釜の飯を食い同じ食卓を囲むことで
体の糧と心の糧を頂いてきました。活動を展開してゆく中で・・・時として頭でっかちになったり理屈っぽくなったり仲たがいをしたりして周りが見えなくなり心が荒ぶこともありました。でもいつも昼休みに仕事の手を休め、プレハブの台所でおかあさんたちの温かいご飯をいただき、プレハブの食堂で一緒に楽しく食べているうちに忘れかけていたものを取り戻し、そして何よりも自分自身を取り戻すことができてきました。おかあさんたちはまちづくりの縁の下の力持ちでした。７年間ほんとうにありがとうございました。
この大切なキッチンの空間はかたちを代えて引き継いでゆかなければ・・・。

９３号　２００２・５・１７
・キッチンハウス　ママレター
三月末で解散した食事作り。SAKTTではありませんが、一ヶ月のお休みの後５月より再スタートいたしました。毎週は月、火、土曜日です。月１回の水曜日は基地に来ている人達が代わり合って作る各国料理。たかとり基地の台所は各団体の人達が各々忙しく仕事をしていても、昼食時には台所、食堂で顔を合わせて食事をする。大切な時間空間だと改めて思いました。その食事作りですからおいしく、そしておもしろく作りたいと思います。
基地の皆さんお待たせしましたね。元気な顔で食べに来てください。待ってます。
（むらかみかよ）

９４号　２００２・７・１７
・ツールドコミュニケーション
たかとりコミュニティセンターとその中の６団体、そしてNGO神戸外国人救援ネットが
共同で取り組む、新しい事業が始まります。その名も『生き生き多文化コミュニティづくり事業』。兵庫県に企画を提案して公開審査会で採択された委託事業で、１０名が『仕事』としてこの事業に半年間従事することができます。震災以降、一貫して取り組んできた
『多様性の重視』『少数者への理解と尊重』を柱にしたまちづくり、ひとづくりをさらに進めていくために、様々な出会い・触れ合いの場をつくり、そこに孤立しがちな人達が渡ってこれる橋を架けていく。そんなイメージの事業です。具体的には、多言語による移動生活相談会、エスニック料理の講習会、日本語教室、生活用品のリーフォーム講習会、パソコンサロンなどなど。そして秋には多文化カーニバル！の開催も予定しています。
お楽しみに（^^）
〈ヒビノ ジュンイチ〉

９５号　２００２・９・１７
・リーフグリーン
あの震災の時、もう物は何も要らない、必要最低限の物さえあれば生活できる…と思ったのに、いつのまにか私の周りはまた物で溢れ返っている。気が付くたび整理を心がけてはいるが、なかなか捨てられなくて困ってしまう。人間は皆同じな様で高齢者の方々からも
不用品の処分をよく依頼される。山のように溢れかえった不用品を前に、何とかこれらを生かす方法はないものかと常々思案していたところ、手先が器用で小物を作るのが大好きなご夫婦に巡り会うことが出来た。そこで、新事業としてリサイクル講座を月１回開催することにした。豊富なアイデアを生かした企画で、着物や帯をリサイクルして生活に役立つ素敵なものが出来上がりそうだ。先日、新聞でリサイクル品のレシピを編集した本を紹介しているのを見つけて問い合わせたところ、『ボランティアで活動されている所だから無料で送りましょう』と言ってくださり、届くのを心待ちにしている。皆さんも何かアイデアがあればお知らせください。
＜ヨシモトカツコ＞

・キッチンハウス　ママレター
今年の夏は、地球温暖化とかで気温37度.38度と体温を超えるような暑さが続きましたが、
9月に入り朝夕は少し涼しく、秋の気配を感じるようになりました。キッチンハウスもお休みが終わり、又新しい気持ちでお互いに教えられたり教えたりし乍ら、私達が出来る小さな協力がコミュニティセンターの皆さんに喜んでいただけるように、楽しく頑張っています。震災後ずっと続けられているのは皆が同じ思いで、気の合い仲間だからではないでしょうか。
<ミヤザキミチコ>

９７号　２００３・１・１７
・かんちゃん日記
たかとりコミュニティセンターは今年度の「国際交流基金地域交流振興賞」をいただくことになりました。私たちからみなさまへお祝いの言葉を贈らせていただきます。この８年間たかとりに関わって下さったみなさんが受けられた賞ですから。おめでとうございます。
年賀状やクリスマスカードを送ってくださったみなさま。ありがとうございました。今年もよろしくお願いします。さぁ９年目が始まるぞ！

９８号　２００３・３・１７
・リーフグリーン
身性障害者の方を支援しています。今まではボランティアの活動として支援してくださる方の協力に大いに助けられながら２年余りが過ぎました。
利用者さんも、私たちの活動に、
少なからず喜んでおられると感じています。しかしながら、この４月より支援費制度が始まるということで、利用者さんは、今まで通りのサービスが受けることが出来るかどうか、
不安な思いをしている。そこで、市に問い合わせたところ、リーフグリーンも、今までと同じサービスを提供するためには、支援費制度の指定事業者となる必要があると知り、あたふたとその準備をしています。
〈ハシモトマサコ〉

・ＫＦＣ
KFCは、4月からおおきく体制が変更する予定です。「たきび」に活動を載せている団体の中でひとつだけたかとり教会から拠点が移った団体として、新年度からは、たかとりコミュニティセンター（ＴＣＣ）から卒業させてもらって活動を進めていくよう準備をすすめています。ただ「たきび」には今後も活動報告させてもらう予定ですのでよろしく願いします。また従前別組織として活動をすすめてきた在日コリアン高齢者の居場所づくり事業「ＫＯＢＥハナの会」を「ＫＦＣＫＯＢＥハナの会」として統合して、もっと在日コリアンの高齢者ニーズにあった活動を展望したいと考えています。そのほかにも、会員制度や理事会の創設などＮＧＯとしてより開かれた運営をめざし準備を進めていますが、思ったようにいかず四苦八苦の状態です。
気に入らない者を力でねじ伏せればよいというような風潮が、大国でも大国に敵視されている国でも、大国におもねる国でも蔓延しているような悲しい時代ですが、日本の中の小さな地域（ローカル）から違いのある者といかに平和に暮らすのかを地に足のついた活動から考えられるＫＦＣになれるよう頑張りたいとおもっています。
〈キムソンギル〉

９９号　２００３・５・１７
・ＮＧＯ　ＶＮ
今月の５月１０日より、ベトナム語母語教室が開講します。日本で育ち、ベトナム語を知らない在日ベトナム人の子どもたちを対象とし、毎週土曜日１５時半から１６時半の１時間の授業を行ないます。日本のベトナム人家庭では、ベトナム語を知らない子どもと日本語を知らない親との間のコミュニケーションがとれないことがあるそうです。週一回の１時間の授業では、そのような深刻な問題を解決できることはできません。しかし、日本で生まれたベトナム人の子どもたちが、自らの文化を深く理解するには、母語を学ぶこと以上に良い方法はないように思います。たとえば、ベトナム語は、年齢、性別よって人称代名詞が変わります。そこから、ベトナム文化では、年齢、性別がとても重要なものであるということがわかります。つまり、母語教室１年目の目標は、母語を学ぶことを通して、ベトナム文化に親しむことにあります。
<タニグチミチヒロ>

• ツールドコミュニケーション
昨年スタートした、多文化な背景を持つ子ども達による映像を使った表現活動『Re：C（レック）』。この度、このRe:Cの2002年度活動報告集『わたし・体温・セカイ』が完成しました。Re:Cでは自分でテーマを考えて作品にすることで、子ども達に「表現」を体得してほしいと、TCC内の団体が連携して活動を進めています。2002年度は５つの作品が完成しました。子ども達は制作過程や作品上映会から、作品を通して自分の考えを人に伝えることを経験し、ひとつの大きな成長をとげました。また、制作をサポートしたスタッフは、子ども達との関わりの中に生まれた感情から、自分の心を深める経験をしました。この報告集はそんな子ども達やスタッフの一年間を、多くの方と共有したいと思い制作しました。みなさんにぜひご一読いただきたいと思います。詳細につきましてはツール・ド・コミュニケーション大川までお問い合わせください。
<オオカワタエコ>

１００号　２００３・７・１７
・ＫＩＤＳ
ワールドキッズコミュニティではペルーなど南米の外国人コミュニティ支援のために「兵庫ラティーノ」という月刊誌を発行しています。「兵庫ラティーノ」は地域でのニュース、生活情報、音楽やダンスのイベントを紹介したり、ペルーについてや日本についての読み物を扱っています。私はその中で日本の家庭料理の記事を書いています。というのも食べ物はそれぞれの国の生活に根ざしていつつも、とっつきやすい事柄だと思うからです。もっとも記事を書いているといっても学校でかじっただけのスペイン語はペルー人には「わけがわからん」といわれ、スペイン語に長けた日本人には「私は日本人だから言いたい事はわかる。」と妙ななぐさめかたをされ、日本語で提出するこのごろです。今後の私の、とりあえずの目標は「わけのわかる記事を書く」という事と、「やる時はやる、やらん時はやらんぞボランティア」という精神を持つことかな。
<ナカヤマヒサエ>

・かんちゃん日記
公衆電話が今日（17日）撤去される。基地内のボランティアたちのために特別に敷地内に設置されたもの。遠くから駆けつけて来てくれた人たちが家族や恋人との連絡などに使ってきた。そうやって見守られながら活動を続けてきてくれた多くの人たちの心の支えの電話でもあった。震災8年半。たきびは100号になった。

１０１号　２００３・９・１７
・ＦＭわぃわぃ
阪神・淡路大震災で被災した外国人住民に市民の手で震災情報を母語で伝えることからスタートしたＦＭわぃわぃは、数えきれないほど多くの人に支えられ、これまで活動を続けてくることができた。多様性の重視と住民自治を基本とした震災復興のまちづくり活動を担い、この７年９ヶ月、多文化共生、ボランティア、防災、市民メディア、そんな枕詞で実に多くの新聞、雑誌、テレビに取り上げられ、ある種、TCCの顔にもなってきた。しかしよく考えてみると、マスメディアが伝えるのは「そうあって欲しい」「そうありたい」というＦＭわぃわぃの理想像だったのではなかろうか。一方、中身を問われると、言葉に詰まってしまう現実がある。たかとり救援基地（現TCC）にあふれるほどの人が集まる中で開局した1996年1月17日正午から、ＦＭわぃわぃの時計の針は、動いているように見えてきただけだったのかもしれない。震災救援活動の"神話"から脱皮すべく、10月から半年をめどにＦＭわぃわぃの建て直しに入る。来春には新生わぃわぃがスタートする。
<ヒビノジュンイチ>

・アジア女性自立プロジェクト
このたび、生産者をそれぞれインドネシア・フィリピンより日本に招いて文化交流を図るという念願のプロジェクトを９月７・８・１０日に無事行なうことが出来ました。特に１０日は鷹取教会敷地内で地域の方々と一緒に和気あいあいとインドネシアからの生産者の指導のもと、バティック(ロウケツ染め)体験をしました。また、染物が乾く間に希望者には糸紡ぎ体験をする機会もありました。参加された方は、子供のように好奇心いっぱいに一生懸命、とても嬉しそうにされていました。その後、参加者全員で一緒にインドネシア・フィリピンのお菓子をつまみながらのお茶会が始まり、誰からともなく生産者の方々と語らう機会もあり、とっても思い出深い一日になりました。フェアトレードとは何か、と定義を持って考えていくことも勿論大切なことと思いますが、こうやって穏やかに心の交流を深めていくことも大事なことだと痛感した一日でした。
<ヤマモトアキコ>

・ＮＧＯ　ＶＮ
中秋節は4日も早く行われたため（本当は9月11日）お月さんはまだ真ん丸になってない時に行いました。

今回は多くの日本人も含んで約150人が集まりました。提灯にロウソクを灯し、近隣へ歩きながら、歌を歌いました。皆に注目されたのは紙芝居でベトナム民話の「月の物語」でした。月にウサギがいると言うのは日本説ですが、中国ではカニだそうです。しかし、ベトナムでは、なんとCUOIと言う青年がいるのです。他の国は何んだろうなぁ、知りたいですね。同じことでも立場や民族によって見方、受け方は違うだと改めて実感しました。緊急雇用で新プログラムが9月16日からはじまります。名は「高齢者巡回健康相談」です。多くのベトナム人高齢者は日本語が出来ないため、受診時はきちんと話せず、健康や体に対しての不安は抱えています。今回は高齢者の家に通訳と看護士とで訪問し、健康についての悩み等の相談を受けたり、病院の付き添い等の支援です。少しでも高齢者方々に手伝えればと思っています。
<ハティタンガ>

１０２号　２００３・１１・１７
・ＫＩＤＳ
ワールドキッズコミュニティの活動の中に、地域住民との協働による中南米スペイン語圏の子どもの教育環境整備事業があります。今回は、１０月から取り組んでいる３つの活動をご紹介します。ひとつめは、教育に関するQ&A集の作成です。よくある教育相談の内容をわかりやすくQ&A形式にまとめた冊子をスペイン語・日本語で作成します。常に手元において活用していただける誌面づくりを目指しています。つぎに、スポーツを通した子どもたちの多文化教育・交流の促進です。サッカーチームを結成し、２００４年３月の交流試合を目標に、毎月２回の練習を行います。さいごに、民族舞踊を通した子どもたちの多文化教育・交流の促進です。日本でペルーの民族舞踊を紹介する活動をしているペルー人グループと協力して、月１回の練習を行います。
〈ナガタキヨミ〉

１０３号　２００４・１・１７
・ツールドコミュニェーション
この１月でもう震災９年、そしてツール・ド・コミュニケーション設立から４年半が経ちました。この間、ツールドも　最初に主力を注いでいた、パソコンリサイクル・パソコンメンテナンス事業から、家庭用ビデオなどの情報機器やインターネットを使った多文化な情報発信支援へと軸が変わってきました。また昨年10月からFMわぃわぃとの事務所が同じになり、活動の融合もはじまりつつあります。そして、この春、ツールドが事務局をつとめるHYOGON（兵庫市民活動協議会）技術支援ワーキンググループが、ツールドの経験を引き継ぎ、さらに多くの人の力を借りてパソコンリサイクル・メンテナンス事業を開始します。さまざまな変化はあるものの、技術を"道具"として活用し、市民活動・地域活動・マイノリティ支援に役立てていくという、ツールドの名前の由来でもある理念に変わりはありません。この原点に戻って、この一年も活動を深めていきたいと思っています。
<ヨシノ　タロウ>

たかとりのおいしいご飯

ポイント★★★
焦げやすいので、よく混ぜること！

大きな鍋を使って湯せんで暖めると、焦げにくいので、おいしく食べていただけます

100人分のカレーの作り方

材料　100人分

ごはん150カップ
牛モモ肉（塊）7500ｇ
ニンジン 25本
ジャガイモ 50コ
タマネギ50コ
塩 少々
コショウ 少々
カレールウ（市販品）１２０ｇ
バター 500ｇ
サラダ油適量

１・通常よりやや固めのごはんを用意しましょう。（ごはんの炊き方参照）
２・肉を一口大に切り、塩、コショウをふります。
３・玉ネギは縦２つに割って、くし型に切ります。
４・ジャガイモは皮をむいて２つに割り、２～４の乱切りにします。
５・ニンジンはジャガイモと同じぐらいの乱切りにします。
６・厚手の深鍋にバターと油をひいて火にかけます。
７・肉を入れて、表面に焼き色をつけます。
８・玉ネギを加えて透きとおるまで炒めます。
９・ジャガイモ、ニンジンの順に入れて炒め、材料によく油がなじんだら、水を加えます。
10・煮立ってきたらアクをすくい野菜が柔らかくなるまで煮ます。
11・一旦火を止めてカレールゥを小さく割り入れます。
12・再び火にかけて弱火でひと煮立ちさせ、ルゥを溶かします。
13・ごはんを皿に盛り、カレーをかけていただきます。

100人分のぜんざいの作り方

材料　100人分

小豆　５０００ｇ
砂糖　4000ｇ（お好みで分量調整可）
塩　少々
お餅　100個

１・小豆を煮ます。さっと洗った小豆5000ｇとたっぷりの水を鍋に入れ火にかけます。沸騰したらアクをとるために一度お湯を捨てます。この作業を３～４回繰り返してください。
２・１の小豆をたっぷりの水に入れ火にかけ、今度は弱火でことことと約１時間程度煮ます。小豆が手で簡単につぶれる程度にやわらかくなります。

火からおろし、煮汁を小豆が浸かる程度までに減らします。（ただしこの煮汁はあとで足すことがありますので捨てないで下さい。）
３・砂糖4000ｇと塩少々を加え、さらに２０～３０分程度煮ればできあがりです。このとき煮汁が少なくなるようでしたら、とっておいた煮汁を足しながら煮つめてください。
４・餅を焼きます。餅はやっぱり、網で少しこがしたほうが美味しいぜんざいになります。

リーフグリーン

リーフグリーン

突然大地が揺れ、家も道路も崩れ落ち、街は炎に飲み込まれた。
余震が続く中、隣近所声を掛け合い助け合いながら避難所へと逃れた。

瓦礫と化した街で茫然自失の状態で震える私達に、
親族・友人・全国から駆け付けたボランティア達の
優しい救いの手が次々と差し伸べられた。
嬉しくて、あったかくて、やっと我に返った。

前日までヘルプに伺っていた利用者宅が気にかかり、
避難所で配られたたった１個のりんごを持って訪ねた。

ガスも水道も使えない中、
自宅で淡々と介護に励む奥さんの姿に、
私は自分のなすべきことを教えられ、
りんごのお返しに前に進む大きな力を頂いて帰った。

街が復興するまで蒔き続けられたボランティア達の優しさの種が、
５年の時を経て芽を出したのが「リーフグリーン」。

「街の保健室」の活動を引き継ぎ、震災を通して見えてきた、
助けを必要としている高齢者・障害者・育児中の親子と
共に歩みたいと活動を開始した。

私達がヘルプに出かけていく自立支援活動と、
地域の方々に寄っていただく為のふれあい活動の２本柱。

１人と１人の繋がりが周りの人を巻き込んで輪を広げ、
設立５周年をむかえた今、
３５０名の会員・５０名の賛助会員登録を超えて地域に根付いてきた。

人と人とが出会い、共に尊重し合いながら助け合う時、
お互いにとても幸せな気分に包まれる。

震災１０年の節目を迎え、
そんなほんわかした「リーフグリーン」であり続けたいとあらためて思う。

最後に一言、
私達の活動を陰で支えてくれたそれぞれの家族に感謝したい。
家族の理解と応援が無ければ、今の私達の活動は成り立たない。
本当に有難う。そしてこれからもよろしくお願いします。

＜ヨシモトカツコ＞

NGOベトナム in KOBE

たかとり教会との縁。
私とたかとり教会の出会いは日本に来てから２年目、２１年前だった。
私の家族は姫路定住促進センターを出て、主人の就職先の香川県へ住み始めた。周りの人々はとても優しかった。
特に丸亀教会で出会ったある家族は大変お世話になった。
しかし、当時言葉が全然出来ないし、仲間もいないためベトナム人がいる神戸に移り住むことにした。

たかとり教会に通うようになった。
驚く事に丸亀で私の家族を世話してくれた人は、この教会の出身者だった。
偶然か縁かなぁと思った。

阪神・淡路大震災の一瞬は多くの人の人生が変わった。
普通の暮らしは普通に出来なくなった。
言葉の壁・文化の壁・価値観の違いは外国人の私達の避難生活に影響が出た。
普段の生活は周りの人々は外国人とほとんど接したことがないため、理解してもらうには苦労した。

震災直後はなぜか私はすぐ教会を見に走った。（ここで他のベトナム人何人かも見えた）しかし目の前は、大好きな教会は姿がなくぺったんこになっちゃったのだ。思わず涙が零した。
たかとり教会はすぐに救援基地として動いた。
建物はほとんど焼けてしまったが、全国のボランティアが大勢集まり、テント一個プレハブ一個ずつ増え、救援してきた。

私は震災前は靴関係の仕事をしていた。被災者の私は、ボランティアの方々の支援を受けるだけでは良いのだろうかと思い始めた。それで当時、食堂の一日ボランティアの食事は何百食も必要だったため私は月一回のベトナム料理作りをお手伝いするようになった。そのささやかなきっかけがこんにちまで大きくつなぐとは思いもしなかった。震災がなかったらたぶん今も靴の仕事をしているにちがいない。。。

たきびは今回で最後になってしまったが、最初のへんから見るとベトナム人についての記事がとても多かった。なんだか、たかとり救援基地はベトナム人のためにあったのだと思ってしまう。救援基地は必要さによって今の形になっている。たかとりコミュニティセンター（ＴＣＣ）は私にとって縁であり、懐かしく、とても大切な場所である。今のぼろい建物やプレハブでもとても使いごちゃ暖かみがある。もう壊されてしまうかと、悲しいです。いつかこの日が来るのだと分かっても、なかなか受けづらいです。
NGOベトナムinKOBEの出発は遅かったが。。。でも、もう５年目に入った。とても忙しい毎日です。さきさき考えたらしんどくなったしまうので、あまり深く考えずに活動している。これからも一日一日精一杯やって行こうと思っている。

<ハ　ティ　タン　ガ>

World Kids Community

ワールドキッズコミュニティ

現在，日本の社会では、犯罪の低年齢化、不登校、いじめなどの問題があり、
日々教育改革の議論を生みながらも、
実際には対症療法的な方策に追われているのが現実のように見えます。
私たちの子どもが、みんなと「同じであること」を気にしながら、
学校に通っている様子を、何とかしなければと考えている大人たちは多いのだと思います。

また、外国人の子どもを取り巻く環境は、
その子どもたちにとって大変厳しい状況です。
縁があって本に住み始めた子どもたちが、
ことばの問題や，文化・習慣の違いなどによって
自分に自信がもてないで、能力が活かされない、
さらに最低限の教育すら受けられずにいる場合も増えています。

ワールドキッズコミュニティは、すべての子どもが互いに理解、尊重しながら
自分らしく過ごせる教育環境をめざして、
違うことや多様なことがとても楽しいのだということを伝えるため，
1998年4月に設立されました。

地域社会の大人として、
まず、自分たちの子どもの教育にあたり前に関われる環境は大変大事ですが，
日本に住み始めてまだ何年かしか経っていない人たちにとっては、
情報が伝わっていなかったり，生活に精一杯で
子どもの教を考える余裕がなかったりする場合があります。
キッズは、そのためにエスニックマイノリティのコミュニティ自立支援も含めた
地道なとりくみを行ってきました。

1998年から4年間一緒に活動をしたブラジル人たちは、
「関西ブラジル人コミュニティ」として自立し、現在もキッズやたかとりともつながりながら、
当事者ならではの活動を繰り広げています。
また、今も一緒に活動しているひょうごラティーノというスペイン語圏の人たちのグループも、
ペルー人たちが中心になって、
自分たちの子どものためのアイデンティティを大切にする活動、
自分たちのコミュニティのための情報発信、
地域との架け橋となるさまざま活動を展開していて、
キッズのメンバーもたくさんのことに気づかされてきました。

少数者の視点で、多様な価値観を認めあい、その地域に住んでいることが、
国籍よりも優先される豊かな社会をめざすために、子どもの教育環境の改善は不可欠です。
多様な文化背景を持つ子どもたちと一緒に学習できる教育環境を考えることこそが、
私たちの子どものためにも、地域の教育環境を変えるチャンスだと捉え、
ひとりでも多くの人たちにこの共感を伝え、
どんな子どもも夢を持っていきいきと遊んでいる地域にしていきたいと思っています。

＜ヨシトミ　シヅヨ＞

アジア女性自立プロジェクト

アジア女性自立プロジェクトは、
日本に出稼ぎに来たアジア女性たちの帰国後の仕事作りに協力するため、
震災の1年前に設立されたグループです。
当時フィリピンやタイから女性たちが興行（エンターティナー）という在留資格で来日し、
日本人の男性と知り合い、だまされて
日本人男性との間にできた子どもとフィリピンに帰されるということが起きていました。
私たちの活動は、帰国した女性たちがフィリピンで作る服やカバンや小物を
神戸で販売して資金を送るというものでした。

震災をきっかけに神戸周辺にも
日本人と結婚しているフィリピン女性たちがいるということがわかりました。
彼女たちの中には地域からも、夫や夫の家族からも歓迎されず孤立している人もいました。
物資の提供や相談に関わっていくうちにアジア女性とのつながりができ、
事務所を手伝ってもらったりして協働してきました。

たかとり救援基地とのかかわりは、震災後
在日外国人の支援を共にやってきた神戸外国人救援ネットの活動から生まれてきました。

当時事務所がなかった私たちに
1997年、神田神父が「ここ使っていいよ」とやさしい声をかけてくださったときは、
本当にうれしかったです。
拠点ができたことによって日本語教室や電話相談ができ、
アジア女性やメンバーたちが集う場所作りが実現し、
私たちも含めてそれぞれのエンパワーメントになっていきました。

お昼の交流やイベント、お祭などだけでなく、
日常の活動でも他のNGOに助けてもらいました。
「アジア女性自立プロジェクト」じゃなくて、
「アジア女性依存プロジェクト」ちゃうかなどと言われたこともありました。

現在は、フィリピン、インドネシア、タイ、ネパールの女性たちの製品も販売し、
スタッフを確保してフェアートレード(公正な取引)による
「コミュニティ・ビジネス」をしています。
事務所の前にワゴンを置いて、ここでも販売させていただいています。
たかとり救援基地からTCCに移行した現在、
あたらしいニーズや時代にあったNGOが生まれ、またあらたな刺激をもらっています。
ここでは老若男女、多くの人が行き交い、
私たちが販売するアジア女性の手作りシャツや小物を買ってくださる常連客もいます。

TCCはFMわいわいの多言語放送だけでなく、日常的に多言語がとびかう小コミュニティです。
ここに来る多文化な子どもたちは生き生きし、
おとなまでもここに自分たちの居場所を見つけているのかもしれません。

また次の新しい年を迎える節目でもあり、気持ちをひきしめなければならないのですが、
これからこういったネットワークがどのような広がりをみせるのかも楽しみです。

＜モリキカズミ＞

キッチンハウス ママレター

キッチンハウス

あの日あの(1.17)時地球は悲鳴をあげた。あの出来事は人類に対する問いかけだったのか。

たかとり教会には全国から寄せられた救援物資の山。
そして整理、配布が連日休むことなく続き、被災者の疲労が頂点に達した2月初め、
その人達のために大国公園で炊き出しが始まった。

当時のカトリック神戸地区西ブロックの各教会
(洲本、北須磨、明石、垂水、たかとり＝SKATT：スカット)に
鈴蘭台教会が、そして愛徳カルメル会、愛徳姉妹会のシスターが加わって、
およそ3ヶ月休むことなく毎日300食、カレーライスや丼、豚汁など暖かい食べ物を提供し続けた。

一方たかとり救援基地には連日数百人にのぼるボランティアが全国から集まっていた。
彼らに対する食事作りも平行して始まった。多い日には400食を作りあげていた。

慣れない大鍋と格闘の連続。
決して恵まれていない台所では夏は暑さを冬は寒さを共有する10年だった。

震災から5年、たかとり救援基地は一つの役割を終えて
新たに、地域とともにたかとりコミュニティセンター(TCC)として
これまでのFMわいわいや新たに誕生したリーフグリーンなどのNGOが次々と活動を始めた。

基地での食事作りという私たちの作業は、TCCで活動をする人たちの食事作りに移行していった。いまでは毎日30～40食が作られている。

月曜日から土曜日までボランティアのお母さんたちは
腕によりをかけ、楽しみながら時を忘れ
「お昼楽しみ」「ここへ来ると癒される」「美味しくって肥えちゃった」
そんな声に元気づけられて季節に応じて、1月は正月気分を3月にはお雛さんのちらし寿司に蛤の吸い物、夏は暑さにバテないようにチャーハンと中華スープ、冬は体の温まる献立と、時にはベトナム料理も加わり、経験豊かな主婦の知恵を披露してきた。

神田神父は「50歳だったお母さんは60歳に、60歳だったお母さんは70歳になられた。
人生の6分の1を震災後のたかとりに関わってくださった…」と。

そうなんです通い続けて10年。でも特別なことは何もしてこなかった。
いまは、日頃の経験を生かせた満足感で一杯。
若さも勇気もエネルギーも失いかけていたものに目覚めさせてもらった10年でもあった。

ありがとう。

顔。顔。顔。。。
思い起こせば沢山の人が通り過ぎて行った。人を見る目も養われた。
人間っていいな。すばらしいな。って思う。

たかとり教会は再生に向けて新たな10年へいま出発します。
私たちも、阪神淡路大震災を通して得たたかとり救援基地での人と人との出会い、貴重な体験を忘れずにこれからの10年、生かされた命を大切に生きていく。

＜ミヤケミドリ＞

FMわいわい

ＦＭわいわい

阪神・淡路大震災の直後、言葉や心の壁に苦しんでいた在日外国人に
震災情報を届けた無認可のＦＭ放送から、ＦＭわいわいは始まった。

１０年前のあの時、ラジオ局を私達が自ら立ち上げるなど、
正直言ってまったく考えもしないことだった。
震災情報をベトナム語に翻訳をして、
それを印刷してベトナム人被災者のもとに届けることを、当時、日課のように続けていたが、
テレビやラジオはあくまで見たり、聴いたりするものでしかなかった。
ラジオ放送は国の認可事業で、放送法、電波法で様々な定めのもとで行われる事業である。
多大な初期投資が必要で、私たち市民からは遠い場所にある。

そう勝手に思っていた私の固定観念を覆したのが、ＦＭサランであった。

ＦＭサランとは大阪の生野で在日コリアンが
１９９３年に開局したミニＦＭ放送局である。
３階建てのビルの屋上に立てられた小屋（ペントハウス）に簡単な放送機材があり、
小屋の上に立てられたアンテナから放送が生野のまちに発信されていた。
そこには硝子張りのスタジオも、高価な機材もなく、
「おはよーございまーす♥」とやってくるＤＪもディレクターもいない。
家庭で使われているＣＤデッキ、カセットデッキとマイクから
在日コリアン発の番組が地域に発信されていた。

法律でがんじがらめの隙間を縫って、マイノリティが自らの手で
マイノリティの声を社会に発信していこうとする現場がそこにはあった。

そのサランのメンバーが震災直後に原付バイクに乗って、
被災地の神戸市長田区の在日同胞のもとに送信機とアンテナをかついで駆けつけ、
ＦＭわいわいの前身の一つ、ＦＭヨボセヨの放送が９５年１月３０日に始まった。

地震が起こり在日コリアンの多くの頭に去来したものは、
関東大震災時に発生した自警団などによる朝鮮人虐殺の忌々しい記憶（歴史）だという。

「自らの手で正確な情報を伝えねば」。
その思いがＦＭヨボセヨを、そしてＦＭわいわいを誕生させた。

大阪在住の朝鮮・韓国人、留学生、日本人たちによる手作り放送の蓄積が、
大震災の直後に神戸市長田区に持ち込まれ、
外国人被災者の救援に大きな役割を果たした。

ＦＭわいわいのプレヒストリーである。

あれから１０年。
ＦＭわいわいは今も神戸のまちに、そして世界に向けて
「世界の言葉で長田から、多文化共生のまちづくり」のメッセージを
発信し続けている。

＜ヒビノジュンイチ＞

多言語センターFACIL

震災時には、日本語があまりわからない住民のために、
たくさんの方たちが情報の翻訳・通訳の必要な現場で活躍しました。

多言語センターFACILは、そのネットワークを基盤に、
せっかくできたこの体制をより機能的にし、
専門分野でありながら「ボランティア」の領域であった活動を
NPOのコミュニティビジネスとして展開させるため、
1999年6月に設立されました。

「FACIL」とは、スペイン、フランス、ポルトガル語で、「易しい」を意味します。
また多言語環境を「Facilitate/促進したい」という想いも込められています。

翻訳・通訳は、それぞれの言語の背景にある文化、生活習慣の違いなどの存在があるので、
単なることばの置き換えではなく、
「多様性の重視・少数者の尊重」を見据えたまちづくりにかかわります。
これは、外国人コミュニティの自立を支援し、
外国人コミュニティ同士や地域社会・行政とのコーディネーター役を果たすことでもあります。
そして、外国人コミュニティが壁をつくって地域に棲み分けられるのではなく、
混在しながらも自らのアイデンティティを大事にした
隣人として共生する「まち」をめざしています。

さすがに10年間、「多言語」と言い続けてきた結果、
世論の追い風もあって、多くの情報が多言語化されていきました。
生活ガイドはもとより、ゴミの出し方や市営住宅のルールなどの生活に密着した情報から、
神戸市の広報課や神戸市会のホームページ、各種パンフレットなど分野は多岐に渡ります。
その仕事をFACILのようなNPOが担う形も徐々にできつつあり、
FACIL自身も、対応言語が26言語に増え，コーディネートのノウハウも磨いてきました。

FACILは今後も、まず、
住民として暮らすすべての人に平等に情報を届けるということが当たり前になること、
同時に社会的に弱い立場の少数者として
地域に暮らす外国人の能力を活かしてもらえる機会づくりとしての
雇用の創出を考えることを目指します。

そのために、なによりも
FACILの業務内容そのものへの信頼性 ー社会で通用する専門性としてー を得るための
実績を積んでいくことが必要だと考えています。
FACILは事業自体が社会的な運動性をもちながら、さらにその成果物を使って
社会を変えていくという意味での専門性を磨かなければなりません。

まだまだ、NPOが事業をするということへの理解不足もある中で、
私たちは、地震後に生まれた市民団体の第１世代として、
この10年を節目として検証しながらも、
地道な地域活動に安定的に取り組んでいく基盤をつくっていきたいと思っています。

＜ヨシトミシヅヨ＞

Tour de Communication
パソコンで市民活動をサポート

ツール・ド・コミュニケーション

ツール・ド・コミュニケーションの名前には、
『コミュニケーションの道具（コンピュータ）を使って
コミュニケーションの旅をしよう』という意味が込められている。

１９９９年５月に、
たかとり救援基地の一つのプロジェクトとして団体を７人で立ち上げた。
１９９９年９月発行のたきび７４号にその動機をこう記している。

『ずいぶん前にテレビで、まだ十分使えるパソコンが山のように棄てられていくのを見て、
なんでこれが自分達のところに届かないんだろう、と思ったことがある。
同じ頃に、この号の焚き火に同じく新登場するＡＷＥＰのパソコン教室を覗いた時に、
世代、性別、国籍を越えて数人が和気あいあいと学習しているのを見て、
子供の頃、原っぱで遊んでいるうちに自然と友達が増えていったことを思い出した。
情報化時代の必要なツールとしてパソコンは語られているが、
そんな難しい言葉を使わずに、
仲間を増やしていく玩具を棄てられた山から拾ってきて修理を施し、
コミュニケーションの道具として使っていこう
というのが、私たちが始めようとしていることです』

ツールドの活動が始まってからちょうど6年が経ち、活動内容も
パソコンリサイクルやパソコンのトラブル解消といったハードを扱うものから、
ホームページや映像というメディアを使って
少数者が情報伝達や自己表現をして活動にシフトした。

ある高校生が一本のドキュメンタリー映像を制作した。
映像、音声のクオリティは未熟だが、
自分が心から伝えたいテーマゆえに強烈なメッセージを放ち、
作品を見た多くの人が１０分足らずの映像に釘付けになった。

そしてインターネットでも放送され、
それを見たり評価を伝え聞いた人たちが様々な地域で上映会を催し、
初映から２年以上たった今もそれは続いている。

１０年前に誰がこれを予想しただろうか。

撮影に必要な機材やテープは高価で、編集技術も誰もができるものではなかった。
その一部の所有物であったものを私達が手軽に使いこなせるようになったのは、
技術の進歩によるところが大きい。
パソコンとデジタルビデオさえあればインターネットテレビ局が開設でき、
世界中に番組を配信することだってできてしまう。

ただ、
市民メディアの発達を促したのは技術だけではないことは忘れてはいけない。
それは明らかに社会の要請だと実感している。
多文化なまちづくりを技術で支えるツールドの活動はこれからも続く。

<ヒビノジュンイチ>

ひょうごんテック HYOGO NPO Information and Communication Technology Empowerment Network

ひょうごNPO情報通信技術支援ネットワーク

ひょうごんテック

ときどき、『なぜボランティア活動をしているのですか？』
と聞かれることがある。

私が市民活動のIT(情報技術)支援にかかわりだして13年、たかとりに居着いて6年がたつ。

ゆっくり考え『月並みだけど、人との出会いですかねぇ』と答えていた。

たかとりに巡りあったのも、東京でのIT支援活動仲間のHさん、大阪で在日外国人支援をおこなっているTさんからツール・ド・コミュニケーションのHさんを紹介されたことがきっかけだ。

絵がたくさん書かれた壁、居心地のよいプレハブ、おいしい昼ご飯、
そしてかざらずいいたいことを言う仲間と地域の人々がここにいて、
ふと気がつくとここが活動の中心になっていた。

震災後の神戸の活動をあらためてなぞりながら活動を続け、
昨年6月市民活動のICT(情報通信技術)支援を行うひょうごんテックが
多くの協力をえて立ち上がった。

日々NPO団体をスタッフと訪問し、人の育成を考えながらIT支援を行っていると
さまざまなことに気づく。
技術的なトラブルであっても
そこのスタッフと一緒に解決する方法を探していくことが
実は一番の近道であることが多い。
現場の眼からは近すぎて見えにくくなっている解決策を、
少しのIT技術を手がかりに整理することも私たちの役目だ。

昨年7月、東京の中古パソコンを提供しているNPOイーパーツと連携し
京阪神で団体にリユースパソコンを提供する事業をはじめた。
昨年末には豊岡などのひょうごの台風被災地の団体に向けた提供がはじまり、
地域でリユースパソコン提供を行う団体が山形に、伊勢に、ひろがっている。

IT支援という共通点で団体と団体、人と人がつながっていく。
ITはただの道具だけど、それにかかわる人をつなぐ道具にもなっていく。

私がIT支援の活動をはじめたのは、1990年に黎明期のインターネットに出会い、
離れたところに住む人々と議論し共同作業をおこなっているのをみたことがきっかけだ。
それから15年間、インーターネットは一部の専門家がつかうものから
ごく普通の人が使う便利なものとなり、コンピュータも使えないと困るものにもなってしまった。
詐欺からコンピュータウイルス、すべての人が情報にしっかりアクセスできないこと、
さまざまな問題がインターネットの普及にあわせて広まっている。
トラブルの種はなかなかなくなりそうにもなく、市民活動へのIT支援はまだまだ必要だ。

このたかとりにいる様々な人々に役立つITを考えることは、
このような問題の解決の近道かもしれないと思う。
たかとりもこれから建て替わり、紙で伝えるたきびもこれが最後になる。
新しい場所・器でよい活動を続けていきたい。

＜ヨシノタロウ＞

❦たかとり土曜学校❦

たかとり土曜学校は２５年前からベトナム人を支援していたシスター石戸(愛徳姉妹会)が
ベトナム人父兄から子ども達の学習指導の依頼要請受けて、創設を思案していた時、
正に摂理的に一人の日本語教師鈴木正明氏(現在９０歳)との出会いでスタートしました。

子どもたちの学習、宿題を親にかわって教えるのが主な目的で、
１９８７年、閉園になった鷹取教会内の幼稚園舎が空いていたこのことも土曜学校にとって都合よく、そこをお借りして小学生、中学生に日本語の基礎学力をたかめる補習学習を始めることが出来ました。
低学年（現在OL）のスワンちゃんが
「鷹取土曜学校という名前がええ。」と言って命名されたいきさつもあります。

教会敷地内に建つ平屋二教室、机・椅子も揃っていて、
２０００冊の本がある図書室など、土曜学校としてはとても恵まれた環境でした。

大震災時にテント村、避難所など、４ヶ所に分かれての学習活動の時もありました。
今では数々の行事記録、アルバムなども大震災の時に灰と化して、震災まえの様子を知る手掛かりはありませんが、このような歴史を築いた土曜学校は、神様の恵みによって震災後も
父兄からの強い要望とたくさんのボランテイア達の援助のお蔭で、こどもの館で再開、
震災後10年経った現在も教会周辺のあちこちの小学校の子ども達が集まって学習を続けている事は神様に感謝というほかはありません。

通学してくる児童・生徒達は……
長田南小学校、御蔵小学校、真野小学校、真陽小学校
若宮小学校、長楽小学校、蓮池小学校、だいち小学校、
鷹取中学校、西台中学校　太田中学校、長田中学校と
広域にわたって鷹取教会周辺から、徒歩または自転車などで通ってきます。

遠方でしかも低学年の兄弟については、男性ボランテイアが送迎を続けておられます。
在籍数は３２名ですが、登校数は顔ぶれが入れ替わりながら
常時２２、３名前後といったところでしょうか……

ボランテイア先生は……
土曜学校の先輩大学生・会社員・家庭の主婦・定年退職された方、シルバーカレッジの方たちが
〝今をしっかり良く生きていくために〟を目標に生活指導も心がけながら
学習のみに限らず、日本文化の指導につながるよう折り紙、民話の読み聞かせ、手品、あやとり、工作、なども指導し、野外活動、クリスマス会など、子ども達が出来るだけ多くの体験が出来るようなプログラムを立てています。

土曜学校卒業生の青年が、
『今日あるのは、土曜学校が支えだったから……』と話してくれたことは
「本当に、こどもたちの自立に役立っているのか、いつも試行錯誤の活動の中で
この青年の一言は、これからも土曜学校を続けていく勇気を与えてくれました。

活動歴１０年以上の方々、シルバーカレッジ卒業生の方々と共に、
ささやかな協力活動ですが、これからも神様に見守られながら続けていこうと思っていますと同時にこどもたちがベトナムで、日本で生まれたよりも
世界で生まれたこの世界で生きるグローバルな子どもに成長していくように願っています。

今後とも土曜学校のためのご支援をよろしくお願い致します。

<イナノブコ>

神戸定住外国人支援センター

１０年を振り返って。

一瞬にして六千数百名の命が奪われ、
拾数万軒の家屋が倒壊・焼失したあの阪神淡路大震災は
もう二度と体験したくありません。
思い出すだけでも身の毛がよだつ思いです。

しかし、あの当時、寒い中、寝食を忘れて
支援活動に没頭していた仲間たちや自分のことを思うとき、
『火事場の馬鹿力』とでも言うのでしょうか、
よくやったものだと感慨深いものがあります。
そして、当時は『多文化共生』という言葉が珍しく感じられたのに、
いまではしっかり市民の中に根付いてきたことを
うれしく思わずにいられません。

当時、マイノリティたちは
『火を点けている』とか『窃盗をしている』、『強姦している』とか
全く出鱈目な噂を流され、
歯軋りを噛む思いで毎日を過ごしていました。
避難所に行っても、『あんた達の来るところではない』と締め出され、
公園に避難しても、数々の冷たい仕打ちを受けて苦労していました。

とりわけベトナムの人たちは
自分たちの互助組織もなく、孤立していました。

そうした中で、
全国からボランテイアが駆けつけ、援助の手を差し伸べてくれました。
物資の援助に始まって、言葉が不自由な人たちに通訳や翻訳、
日本語学習支援、ＦＭ放送、住宅や仕事の確保、役所との交渉、生活支援などなど、
数えればきりがありません。

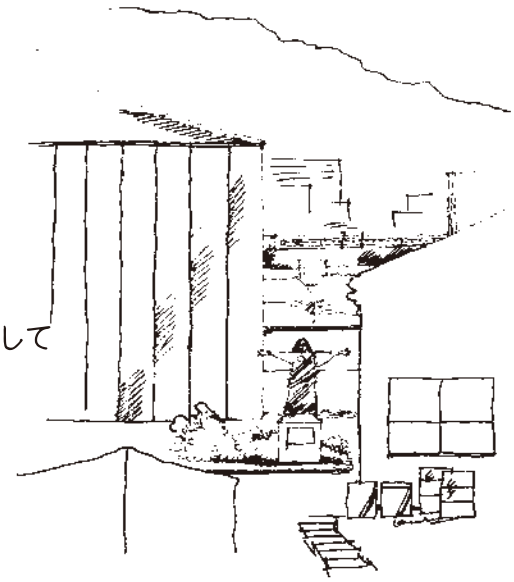
こうした支援活動は震災時だけでなく、長期に必要なものであることから二年後に
被災ベトナム人救援連絡会と兵庫県定住外国人生活復興センターが合併して
神戸定住外国人支援センター（ＫＦＣ）が生まれました。
そして、様々な相談活動と共に、日本語学習支援活動、韓国・朝鮮人高齢者の居場所つくり（ハナの会）、ベトナム人の互助組織（ＮＧＯベトナムin KOBE）の設立へと発展してきました。

昨年はＮＰＯ法人格を取得し、その基盤を強固にし ましたが、
今年六月には新長田駅南に恒久的な新事務所に移ります。

この機会に、これまでの活動を再点検し、
日本人と外国人が真に共生できる街づくりを目指して
頑張って行きたいと思うこの頃です。

＜ナカムラミチヒロ＞

かんちゃん日記



たきび１１１号を迎え、
郵送物での配信は今号で終了させていただきます。

読者のみなさま、長い間たかとりを応援してくださいまして
ほんとうにありがとうございました。

１０年の間
みなさまからいただいた優しさを糧にして
末長い活動を続けてまいります。
これからもどうぞ見守っていてください。

今は引越しの準備で大忙しです。

広い場所を見つけることが出来まして、
教会の事務所も含めてみなで隣町へ一緒に移転することとなりました。

しばらくはまだ仮設の状態が続きますが、移転地での新しい出会いも楽しみです。

まちづくりの集まりやイベント、
そして日曜日のミサにも使ってきたペーパードームは
台湾の被災地へ移設されることとなりました。

被災地同士の交流のシンボルとして
生かされ続けてゆくことができ嬉しく思っています。

そのほかの建物はすべて解体されます。

ボロボロの建物達でしたが
１０年間私たちをずっと包んでいてくれてました。とても名残惜しいです。

すべてが新しく変わってゆきます。
しかしただ一つ変わらないものがあります。

１９９２年６月に多文化共生のシンボルとしてたてられたあのキリスト像です。

除幕当時も、地震の時も、救援活動の時も、
今も、そして新しい建物が出来てからも、
あの同じ場所に手を広げて立ち続けています。

嬉しい時も悲しい時も、楽しい時も辛い時も、
いつも同じところに立ち続けていました。

私たちも震災の中で少しずつ掴んで来た、
国籍や宗教の違い、地域や家族の違い、
そしてひとりひとりの違いを越えて
つながり合うことの豊かさを、決して忘れることなく、
いつも同じ場所に立ち続けて行くことが出来ますように、
これからもどうぞ応援してください。

ほんとうにどうもありがとうございました。

かんだひろし

たかとりのおいしいご飯

100人分のフォーの作り方

お米の麺を
おいしいスープでいた
だきます！ベトナム風うどん
とでもいいましょうか？
それともうどんが日本風フォー
なのかしら…

材料　100人分

スープ用
牛骨　15キロ
鳥の骨　5キロ
大根　　2本
しょうが　4パック
八角　１００ｇ
砂糖　適量
塩　適量
味の素　適量

ライススティック　２０袋
牛しゃぶしゃぶ　２．５キロ
もやし中細　小10袋（さっと洗う）
玉ねぎ　中5個（薄く切って水につけて辛味を取る）
青ねぎ　50本
レモン　少々
玉ねぎのフライ　少々（無くても結構）
こしょう、オイスターソース、チリソース、
あればバジル

作り方

１・鍋に牛骨、鳥の骨、水を入れて3～４時間炊く
２・大根を食べたい場合は、角切りにして（食べやすい大きさ）①に入れる。大根を食べない場合は①に入れて骨と一緒に炊く。
３・スープが透明になった後、生姜を網で焼き、こげを洗い落としたあとに②に入れる。
４・③に八角、砂糖、塩、味の素を入れる。
５・丼に生のもやし、ライススティック（さっと湯がく）、肉、玉ねぎのフライ、青ねぎ、玉ねぎの順番に乗せ、熱いスープをかける。
６・食べる直前にオイスターソース、ちりソース、レモン、バジルなど好みの量でかけ、よくかき混ぜて召し上がれ！

ポイント★★★

★牛骨、鳥の骨、を洗濯ネットにいれて炊くと、中身がばらばらにならなくて便利

★物足りない場合は、ウエイパーを入れる。絶対にしょう油、コンソメを入れないこと！

★牛骨などが手に入りにくい、手間がかかる場合は、フォーの素を使用すると便利。

材料はNGOベトナム in KOBEでも購入できます。

「たかとり」の歩みをつないだもの

この10年の「たかとり」の歩みをつないだものは何だったのだろうか。何分にも「たかとり」に関わって3年足らずの人間が、あたかもすべてを見たようにして書くなどはできそうにもない。従って、このコラムでは「つながり」という視座から震災という非日常のなかで「たかとり」がいかにしてその歩みを進めていったのか考えてみたい。

結論を先取りすれば、「たかとり」には変わらぬ原理があって、それにこだわって「たかとり」がバウムクーヘンのような分厚くて無数のネットワークを築いていったこと、このことが「たかとり」の10年の歩みをつないだ大きな要因の1つだと考える。

特に、ここでは震災という非日常のなかで創られていった2つの「つながり」に焦点を当てたい。それは、実際に現場で救援活動にあたった「たかとり」の内の「つながり」と、それを外から応援した「つながり」である。

「たかとり」でその活動に参加したボランティアは4,000人を超す。話は逸れるが、震災時に被災地に駆けつけたボランティアは、その7割が専門技術を持たない素人で、土地勘や人脈もなく、加えて組織的に働くことに慣れていない若者が多かったといわれている。ある人は「たかとり」に駆けつけたボランティアたちを「ズブの素人の集まり」と表現した。そんな「たかとり」で初めて会った彼らが協同で救援活動を展開していったわけであるが、彼らのほどけやすい一体感をつなぎ止めたものは何だったのだろうか。その明確な答えは見つからないが、当時活動に参加したひとたちに話を伺うと、多くのひとたちの語りのなかに「不謹慎かもしれへんけど楽しかった」という言葉があった。被災地での救援活動という文脈の中で彼らが「楽しかった」のは、「たかとり」に不思議な一体感があったからではないだろうか。当時のボランティアたちは全員「ゴリラネーム」と呼ばれる名前(ニックネーム)を持っていた。他者に名前を付けるということは、他者に重要性を認めることでもある。名前をもらったボランティアたちは、「たかとり」という固有名詞性の強い世界のなかでしんどい作業に一緒になって汗を流すことで一体感を生成させていったと想像する。その一体感はボランティアたちの「楽しさ」の源泉であり、「つながり」意識と言い換えてもよいだろう。ほどけやすい一体感をなんとかつなぎ止めようとするボランティアたちの努力が、小さな活動の積み重ねとなって「たかとり」にエネルギーを生み出していった。当時「たかとり」で活躍したボランティアのみっちゃんはその「つながり」意識を「家族」という言葉で表現してくれた。

次に、「たかとり」を外から応援した「つながり」を考えてみたい。「たかとり」を外から応援してくれたひと・グループは「星の数ほど」あるという。この「つながり」を「たかとり」が10年間発行し続けてきた「たきび」を通して考えてみたい。「たかとり」の今を伝えた「たきび」の発行が始まったのは震災から2ヶ月が経った3月22日である。その頃の「たかとり」の周辺は建物が焼け落ち、焼け焦げた瓦礫がそのままの状態であった。そんな時期に「たかとり」は一見被災者の直接的な支援になるとは考えにくいニューズレターの発行を行なった。それも発行数は約4,000通である。郵送の作業だけでも多くの労力がかかったに違いない。結果的にこの「たきび」の発行が「たかとり」にいろんな大きな意味をもたらしたと想像する。その1つが外部との「つながり」である。通常、他者との交流は対面することが条件になるが、「たきび」を発行することで文書を介した交流が可能になった。それに伴い、「たきび」を通した交流が時間的にも空間的にも飛躍的に広がっていった。その結果生じた外部との「つながり」は「たかとり」内のそれと比べてけっして強いものではなかっただろう。しかし、ヒト・モノ・カネすべてが限られていた「たかとり」にとってその弱い「つながり」は大きなエネルギー源になり、時には思いがけない「出会い」を生み出していったのではないだろうか。

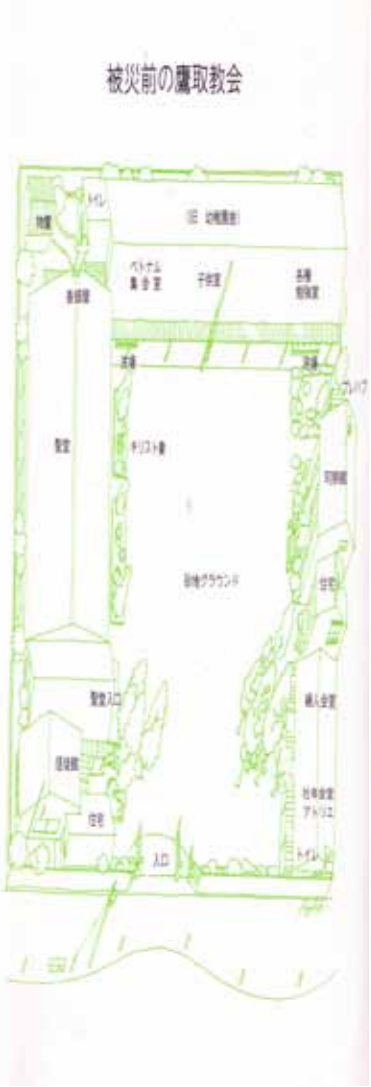
当然「たかとり」を支える「つながり」はこれだけではない。被災者との「つながり」もあれば、地域から支えられている面もあるだろう。カトリック(教会)の支援もきわめて大きかった。また、多くの市民活動団体との「つながり」も重要であろう。「たかとり」はこれらの「つながり」を大切にすることで、今では多文化共生のまちづくりをめざす8つのNGOが活

動を行なうNPOセンターへと発展していった。「たかとり」の活動に参加するメンバーもこの10年で大きく変わっている。団体も同様だ。しかしながら「たかとり」には変わらぬ原理がある。その原理こそがこのコラムでもっとも述べたかった「「たかとり」は「つながり」をきわめて大切にする」ということである。

この「たかとり」の姿勢は2005年5月28日に開催される「たかとり10年感謝祭」にも表れているように思われる。このイベントのなかに「たかとり10年を振り返って」という記念フォーラムが企画されていて、そのフォーラムには4人のパネラーが出演する予定になっている。そのパネラーの人選がいかにも「たかとり」らしい。「たかとりの中にいたひと、ボランティアで関わり続けてくださったひと、すぐそばで見守ってくださったひと、遠くから応援し続けてくださったひとに「たかとり」の10年を語ってもらう」というのがそのフォーラムの趣旨で、それに沿ってパネラーの人選が行なわれた。このパネラーの人選からもこの10年の「たかとり」の姿勢を読み取ることができるだろう。

以上のことからも推測できるように、「たかとり」には変わらぬ原理があってそれにこだわってきたこと、そうすることで「たかとり」がバウムクーヘンのような分厚くて無数のネットワークを築いていったこと、このことによって「たかとり」が10年の歩みを進めることができたと考えるのはあながち見当違いではないだろう。

かなじひろし



たかとりでの10年

阪神大震災の突然の揺れ、悲惨な状況で人間の力の弱さ、人間の無力さ、自然には勝てないと建物が燃える火の前で思いました。ところが一夜明けた翌日、教会の建物の片付けをはじめると同時に、多くの人達が心配して来てくれました。多くの人の愛の火が燃えているのを感じ、人間の持っている素晴らしさを感じることができました。また、震災直後おにぎりがたくさん届き、壊れた建物の間を自転車を押しながら配った時、おにぎりを二つ渡すと「ひとつで結構です、他の人にあげてください」と言われたことがずっと心に残って忘れられません。皆被災者、皆同じ人間、同じ位置に立てたのは非日常の時だったからでしょうか。同じ位置に立つことを教わった気がします。

たかとりに来てくれたボランティアは小学生から70歳の高齢者、学者、登校拒否の子、先生、医者、野宿者、アルコール・薬物依存症者、また彼氏・彼女との出会いを求めて来た人、「ボランティアって何」と論文のテーマで実際にボランティアをしながら勉強した人、散髪・自転車パンク修理・マッサージ・包丁磨ぎ等特技を提供してくれた人、様々な人が来てくれました。あ、思い出しました幼稚園児も励ましに炊き出しの所で唄を歌ってくれました。

半日・1日だけの人、何度も何度も来てくれたリピーターの人、学校を休学してずっと救援活動してくれた人、ほんとに大勢の方に出会いました。毎晩夕食後ミーティングをしたり、焚火を囲んで話をしたり一生かかっても出会うことのない多くの様々な人に出会い、話をすることができました。

一人一人のボランティアがそれぞれの目、鼻、口、耳、手、足、心で被災者と出会い、今何が必要かニーズをキャッチし、みんなで分かち合い、出てきたことを次々と実行していけたことが不思議です。仮設住宅でバザーや、誕生会をするのに準備だけして帰る人、当日被災者と出会う人、後片付けだけする人、ひとつのことを大勢の人の協力で実行できました。

水が出なかった時、トラックで水を運んできた人。ガスの出ないとき大きなガスボンベを運んできた人。広島、岡山各地からの食材を運んだ人。ライフラインの提供を受け、食材の提供を受けて、ボランティアのためのボランティアである料理を作る人のお陰でいろいろな活動が生まれ、実行できました。自発的な思いで集ったひとたちの関りで活動できたのだと思います。

また、被災者との出会いで、様々な立場の人の事を知りました。視覚障害の人との文通は録音テープで行っていた人もあります。全国、世界の人に援助を受け活動できたこと感謝、感謝、かんしゃ、……です。

助け合うことの喜び、まちづくりの基礎を学ぶことができたこともありがとうございました。

鈴木迪子

たかとりと私

私と鷹取教会の出会いは、震災の2年前に遡る。市民団体のネットワークが、スペインで子どもたちがサーカスをしながら世界に平和のメッセージを伝えて暮らしている共同体「ベンポスタ子ども共和国」を招き、鷹取教会とこの地域の人たちが、神戸でのサーカス公演にやってくるベンポスタのメンバーの受け入れをした。私はそのときに、スペイン語通訳のボランティアとして、ここを訪れたのである。

いきいきと誇らしげにサーカスをする子どもたちに魅せられて、その後も日本の子どもたちにその姿を伝えようと、スタディツアーを重ねていた。サーカス公演の最後の夜、鷹取教会のすぐそばにある大国公園で行われた、夏祭りを兼ねたベンポスタの子どもたちの送別会の光景が忘れられなかった。ベトナム人も韓国人もスペイン人も日本人も、大人も子どももお年寄りも、男の人も女の人も、みんなで一緒に踊った盆踊りの感動を何度も味わいたかった。

そして1995年1月、あの震災で、被災のひどかった鷹取教会が心配で駆けつけた。教会はほとんどが破壊され、燃えていた。救援基地となった鷹取教会で、救援物資の仕分けや、続々とやってくるいろんな善意の人たちの対応に追われた。南米の人が体の不調で相談にきたら診療所で通訳もしたし、スペイン語に翻訳した情報を避難所や、南米の人たちが集まる他の教会にも配った。3月には、敷地内で多言語のラジオ局「FMユーメン」をたちあげることになり、スペイン語と日本語の放送も始めた。ここに集まる人たちは、それぞれ何か役割があり、子どもたちも一生懸命働いた。そこは、まるで「ベンポスタ共和国」のようだった。

それからの10年の私は、8言語で地域に声を届け続けているラジオ局「FMわぃわぃ」に関わり、当時活躍した日本語と外国語のできる人たちを核にできてきた多言語のネットワークを活かして「多言語センターFACIL」という翻訳・通訳センターを立ち上げて、コミュニティビジネスを展開してきた。また、どんな子どもも夢を抱いて楽しく暮らせる地域社会をめざして、「ワールドキッズコミュニティ」という団体も立ち上げ、特に厳しい状況に置かれている外国から親に連れられてやってきた子どもが守られるよう、またその子どもこそが多くの問題を抱える私たちの子どもの教育環境を変えるチャンスを作ってくれることを期待して、その子どもの親たちのコミュニティ自立も見据えたさまざまな活動も続けてきた。そして、活動は私の生業にもなっていった。

さらに、「FMわぃわぃ」たちあげに一緒に関わった人が、今は人生の伴侶となり、今の活動を、もっと説得力のある発進力で伝えたいという目的で、大学院の博士課程の学生もしている。

今の私のこの原動力は、震災時に見た、たかとりに集まる活気あふれる人たちとの人間どうしのふれあいだった。10年続けられたのは、この場所があったこと、ここにいることが楽しかったからだった。

「たかとり」との出会いがなければ、私の人生は充実していただろうか、とふと思う。これからの10年もきっと、あの夏祭りの光景が日常になるよう、何かを続けているだろう。その確信は、この出会いを本当に大切にしたいということの証である感じていることを、ここに記しておこうと思う。

吉富　志津代

震災の出会いから生まれたコミュニケーションの豊かさ

神田裕

[プロローグ]

あの阪神大震災で、いたるところで街がまるごと火災で焼け尽くされ、カトリック鷹取教会の一帯も一面の焼け野原になった。しかし、ここではそんな中でお互いに助け合って、この痛みを乗り切ろうという思いが多くの人に湧き起こった。そして誰もが分け隔てなく、知り合いができた。

震災で多くのものを失ったが、その間に多くの人との出会いが生まれ、新しい仲間をつくった。こうして鷹取教会救援基地が生まれた。そしてたくさんのグループが生まれた。「FMわぃわぃ」もその一つである。

たくさんの出会いの中で、外国人と日本人の出会いはほとんどなかったことがわかった。「FMわぃわぃ」は多言語の放送局で、今も外国人が普通に参加して放送を続けている。

救援基地は、2000年5月には「たかとりコミュニティセンター」に発展した。国籍、年齢、障害などによって疎外されることのない「人づくり」、「まちづくり」は、今も生き続いている。

周辺は新しい住宅が建ってきているのに、教会だけは焼け跡を整理したままである。その中に太い紙の筒で作った円柱で支えられているコミュニティホール（ペーパードーム）がある。神田神父は、「教会の再建は、まちがすべて復興してからだ」という。

彼の話をみんなでじっくり聞いてみよう。そして自分たちに何ができるか、一緒に語り合いましょう。それが今回の案内です。

はじめに

本日は呼んでいただいて喜んでやってまいりました。今日は自由に話をさせていただくつもりです。

救援基地は、長田区の西の端にあるカトリック鷹取教会が拠点になっていて、今はたかとりコミュニケーションセンターと呼んでいます。

震災後7年ですが、これまで震災後の救援活動を歩んでいくなかで、いろいろな出会いがあって、いろいろなものが生み出されて、現在のたかとりコミュニティセンターがあります。

正式には「特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター」といいますが、たかとりコミュニティセンターが特定非営利法人をとって何をしているかというと、はっきり言って何もしていません。何もしていないから、逆にいいのかもしれません。

なぜ何もしていなくていいのかということを、最後にわかっていただければいいと思います。

私の自己紹介

神田裕（かんだひろし）といいます。出身は兵庫県の尼崎市です。その家にいながら大学まで行ったのですが、そのあと神父になるために、東京の神学校へ行きました。そこで6年間生活をして戻ってきました。その後3年間大阪の教会をもっていました。その後いまの鷹取教会に1991年に赴任してきました。それでまもなく11年になります。

私は1958年生まれで、43歳です。神父になってほぼ14年になるのですが、そのほとんどがこの鷹取です。

カトリックの神父の場合は、普通5、6年で紙一枚で人事異動があって飛ばされていってしまうのですが、地震があったせいで出るに出られなくなってしまって、いまだに出られない状況です。個人的にはあの教会に神父として赴任していって、今も神父ですが、自分史のなかでは、一つの教会に赴任した先での出来事の一つです。とくに震災前まではNGOの活動をしていたのではなく、神父の活動だけをしていました。

その教会がつぶれ、燃えてしまった

震災のあった1995年の1月17日に、教会もつぶれて、燃えてしまいました。その教会がつぶれて、燃えた次の日ぐらいから、もうすでにいろいろなところから、ボランティアといわれる見知らぬ人たちが、たくさん被災地にやってきてくださいました。その中で鷹取教会にも顔を出してくださった人がいました。

正直に言いますと、今の「たかとりコミュニティセンター」というたいそうな名前で活動が続けられていますが、震災の前もそうですし、震災が起こってしばらくもそうですが、あの教会を救援基地にしようなどとはさらさら考えてはいませんでした。

ただつぶれてしまったので、その跡片づけと、今後教会をどうするのかを思っていただけです。ところが震災後に何人かいっしょに住んでいた人間がいましたので、炊き出しをして食事をし、毎日を過ごしていました。

ボランティアの人たちが被災地へたくさんやってきたうちの何人かが鷹取教会にも顔を出してくれました。最初は私たちも被災者でしたから、避難所以外のあそこにも人がいるぞと駆けつけてくださって、水やおにぎり、懐中電灯などを持ってきていただいた出会いから始まりました。

それがしだいに、明日までいたらということで、いっしょに泊まるようになっていきました。それがしだいにふくらんでいって、ボランティアの人たちがたくさん集まることのできる場所になっていきました。

［教会は幸いといっていいかわかりませんが、つぶれて無くなってしまいましたので、何かの救援活動をしようという思いをもってきた人たちの受け皿の場所に自然になっていきました。ボランティアの活動拠点が教会以外には、このあたりでは南駒栄公園、新湊川公園などがボランティアの人たちの拠点になっていました。公園は震災まもなくのころから、まだくすぶりも残り、がれきも片付いていないのに、ボランティアの人たちは公園から出て行くように、行政から言われていました。いろいろな活動が続けられなければならないのに、活動の拠点を失っていくボランティアの人たちがいたのです。

その後、このNGO協働センターの前身の場所などのように、民間の人たちの協力もあって、ボランティアの人たちの思いが少しずつ具体化していく場所づくりが長田ではいくつかありました。その一つに鷹取の教会もあったのです。

教会自体はもともと、信者さんが日曜日の祈りのミサに来るための場所です。幸か不幸か、信者さん以外の人は、なかなか足を踏み入れる場所ではないのですが、震災後つぶれたということもあって、ボランティアの人たちが自由に出入りをして、そこを拠点にしながら活動を展開する場所になりました。

やはり場所があったということが、大きなことだったと思います。鷹取教会だけのことではないのですが、災害があって、多くの思いをもったボランティアの人たちが集まってくるのですが、彼らが活動する拠点づくりは多く考えさせられることでした。

行政がそれを提供することはなかったし、結局は民間でするしかなかったのです。

私はカトリックの神父で宗教者の一人でもありますが、震災の時も思ったし、今も思いますが、地域社会のなかで何かあったとき、大きなスペースは公園か寺か教会ですが、宗教団体が活動するとおかしくなるのでしないほうがいいとも思いますが、地域の住民が災害から立ち上がっていくときに集まることのできる場所が必要だと思います。

ボランティアの人たちも力を結集して、何かのアイデアを出していくためには、一つのところに集まって、そこから何かを生み出していくことが大切です。それは鷹取でもありましたので、大地主の宗教団体は、口は出さずに土地は出せということです。それに非課税であるというのは、それは国民の皆が利用できる場所ではないかと、私はは理屈ではそう思っています。

その時はそう思っていたのではないが、この場所がうまく利用されていったらいいなという思いはありました。

思いだけでは何も実現しませんが、ほんとうに多くのボランティアの人たちが、鷹取の教会に来てくださいました。教会関係では、のちのち信者さんの青年たちが来た時期もありましたが、それだけではなくて、ほんとうに見知らない人たちがたくさん教会へ来てくださいました。

登録している人だけでも、4、5千人です。登録していない人もたくさんいますので、おそらく1万人ほどの人が、あそこを拠点にして活動してきたのだと思います。

教会の敷地は650坪です。今は区画整理で削られて600坪、2000㎡弱になっていますが、そこに最初はがれきだけでしたが、ボランティアの人たちが来て、活動するのと同時に、自分たちの拠点づくりも始めました。

最初の拠点活動

周りのつぶれている家の柱を集めてきて、その柱を集めて、ボランティアの宿泊所を最初に作りました。最初の年の夏は、あの敷地のなかに180人ぐらいのボランティアの人たちが寝泊まりをしながら、活動を展開していました。

最初の活動は、まず拠点をつくって、そこで寝泊まりもしながら、周辺からいろいろ情報を入手していくということでした。

当時は学校などが避難所になっていましたが、その公設の避難所以外のところには、災害救助法の関係からか弁当などが届かなかったのです。その1つが南駒栄公園で、そこには400人近くの人がいたにもかかわらず、公設の避難所ではないからということで最初は弁当が届けられなかったのです。

しかしあまりに人が多いので、準公設の避難所として、行政はそこへ弁当を配るようになりました。

それでも小さいところはだめでした。

そういうところを見つけて、そこで出会いがあって、いろいろな物資をもっていったり、炊き出しをしていったのが、最初のスタートでした。

それも教会が何かの組織をして、大変な人たちがいるから、皆がチームを組んでしましょうと動き出したのではありませんでした。それぞれ個々に集まってきたボランティアの人たちが何かができないかということで、自分たちで判断して、それを具体化して、情報も集めて、少しずつこうしたらいいのではないかと考えながら最初は始まったのです。だから最初は鷹取教会救援基地といいましたが、その基地という名前になったのは、だいぶ後からの

ことだと思います。基地らしくなってきて、そんな名前になってきて、組織的に取り組み始めたのです。
　そのように大きな動きは避難所支援から始まって、仮設支援へと住民たちが避難しているところへ具体的な支援が始まっていきます。

鷹取木工所と言われた
　それが震災後3年ぐらいは、たかとり救援基地のころは、鷹取木工所と言われていたほどに、たくさんのグッズづくりをしていました。そのなかでもっとも目立ったのは、仮設住宅に引っ越しの手伝いでボランティアの人たちが行って、そこをぱっと見たときに、仮設住宅は人の住むところではないという思いをもって帰りました。
　それなら自分たちは何をするのかというとき、踏み台がいる、手すりがいるということで、実際に自分たちが見て、それに必要なものを作りだしていこうと、いろいろなアイデアを出していきました。それで仮設グッズづくりを皆が一生懸命していて、そのときに鷹取木工所と言われました。
　それを始めると、全国からたくさんの木材が送られてきて、桧の産地である長野県の南木曽町が、町をあげて鷹取教会に木材支援に3回ほど来てくれました。皆で神戸にどんな支援をしたらいいかというときに、木材の町だから木材を神戸に送ろうと送り先を探していたのです。ちょうどそのときわれわれは木材のグッズづくりをしていたので、それに応えることができました。
　それでいざとなったら、10トントラックが10何台かでやってきました。山積みになってしまいました。ガソリン代は町内のガソリンスタンドが応援し、町をあげて持ってきていただきました。
　それを鷹取教会に全部置けないので、地域の人たちのまだ片付いていない土地を拝借して、そこへ山積みしながらグッズづくりが始まりました。
　それは手すりから、踏み台からということでしたが、犬小屋まで作りました。ベンチも作りました。
　その時の道具の残りが教会の中にはいろいろあって、今は使われなくなってしまいましたが、その時は使われていたんだなという思いがあります。
　区画整理があって、鷹取教会が削られることになりました。せっかく作ったボランティアの人たちの宿泊所を移動させないといけない時期がありました。それは3年目ぐらいの時でしたが、それを期にグッズづくりは少しずつ下火になってきました。
　仮設住宅が全部解消したのは5年目の正月でしたが、仮設がなくなった時点で仮設支援も終わりました。それまでたかとり支援基地はそれが主な仕事でした。

まちの保健室
　それと同時に違った面では、震災の1週間たった後に、カトリックの組織が動きました。カトリック系の病院が全国にたくさんあって、カトリック医療協という組織がありました。その医療協議会の支援で、被災地である鷹取教会にプレハブの臨時診療所をつくりました。これは組織だった仕組みで、全国から延べ4、5百人の医者と看護婦が交代で来てくれて、そこを拠点に3ヶ月間無料診療をしました。
　その3ヶ月間は地域の病院が復興するまでということで診療をしていました。4月の16日に終わりましたから、ちょうど3ヶ月間診療を続けました。
　その診療が終わった後、それで多くの人のつながりができていて、地域のお年寄りの顔が見えはじめてきていました。それでこのまま終わってもいいのか、続けないといけないのではないのかとなりました。
　もう医者は来ないが、看護婦のシスターを一人が常駐して、名前も臨時診療所ではなくて、「まちの保健室」として、仮設支援のグッズづくりと、片やコミュニケーションづくりを同時にすることになりました。
　まちの保健室は、つい1年8ヶ月前まで（震災後5年間）ずっと仮設のおじいちゃんやおばあちゃんに、いろいろなプログラムを考えた活動が続けられてきました。
　それから仮設がなくなった時点で、まちの保健室は閉じて、今度そこから立ち上がってきたのが、「リーフグリーン」というNGOです。これは老人介護のセクションの一つで、きちっとしたNGOとして立ち上げました。今は有料で輸送サービスなどをしていますが、いろいろ試行錯誤をしながらきています。
　もう一つ、グッズづくりのような実際に若い人たちが体を使って活動した部分と、長田は過疎高齢化の町でもありましたから一人暮しの人が多く、お年寄りとの出合いやかかわりの活動の部分がありました。

被災ベトナム人救援連絡会
　また鷹取教会にはベトナムの人たちがたくさんいましたので、震災後の外国人の救援活動の1つの拠点にもなっていきました。

震災後2週間ほどたった1995年の1月末頃に、教会へ来てくださるボランティアのなかにベトナム人はどうなっていますと言って訪ねて来た人たちがいました。

それは日越友好協会や大阪外大のベトナム語学科の先生や学生たちが被災地へ来て、神戸にベトナム人がたくさんいると聞いているが、ベトナム人はどうなっているかと訪ね歩いていたのです。

鷹取教会にたくさんのベトナム人がいるというので訪ねてきてくださいました。そのときはまだ姫路に難民定住センターがありましたから、そこは少し遠いですが彼らもここへ様子を見にきていました。

そこにもまた出会いがありました。鷹取の敷地の中で外大の学生たちや友好協会や定住センターの人たちとの出会いがあって、ばらばらに行動するのではなくて、一つになって行動しましょうということで立ち上げたのが「被災ベトナム人救援連絡会」という会でした。

湊川公園や南駒栄公園には、ベトナムの人がたくさんテント生活をしていましたので、行政から流されてくる情報を、ベトナム語に翻訳して、その人たちに情報提供をする。また行政の説明会は行政の人を呼んで、通訳付きで行いました。そのほかは日常のケアです。そのような活動が、そこを拠点にしながら生まれていきました。

被災ベトナム人救援連絡会は、実はたかとりコミュニティセンターの中に、「FMわぃわぃ」をはじめ、たくさんの外国人にかかわりのある、まちづくりのNGOが立ち上がっていますが、これらのすべての原点は、被災ベトナム人救援連絡会です。

FMわぃわぃ

被災ベトナム人救援連絡会が立ち上がって活動していく流れは、1月30日頃に立ち上がったミニラジオ放送局から始まります。

それは韓国語放送です。無許可で出してもいい電波の範囲での放送局を、新長田駅の北側にある民団の事務所の4階でスタートしていました。

それは大阪の生野区の猪飼野には在日の韓国の人がたくさんいますが、そこにミニFM局がありまして、そこのスタッフが長田へ来て、情報はほとんどが日本語でしたから、それを外国語で情報を流すことを目的で被災地にメディアをつくったのです。

いままでは情報提供といえば、拡声器を使うか、プリントを配ることでしたが、電波を使うというアイデアが震災のなかで生まれました。

そこから1ヵ月後に鷹取へ呼びかけがあって、われわれはベトナム人への支援をしているから、ベトナム人への情報をベトナム語で流さないかというアイデアをもらいました。

それまではプリントアウトの活動でしたが、電波が使えるという、新しい出会いがありました。

それでも最初は何がラジオだと、本気で相手にしていませんでした。そのときはまず体を動かしてという状態でしたから、そのことを理解できませんでした。

しかしまた何日か経って呼びかけられたときは、少し落ち着いてきていまして、3月に入ったころに、それならベトナム語で放送をということになりました。それで私たちが民団の事務所へ出かけていきました。

その結果、そこの民団の事務所の中からベトナム語の放送を流すのではなく、そこでは韓国語を流して、もう1つ、鷹取の教会にもう1つスタジオをもってベトナム語の放送をすることになりました。

そのように2つあったほうが、機械の故障などがあっても緊急の時にはもっと融通がつくのではないかということで、別々にスタートしました。

それが4月16日にミニFMとしてスタートしました。それは最初は違法電波として怒られてしまいました。ミニはミニでも電波の強いミニで、六甲山の頂上まで届いていたのです。近畿電波管理局から再三注意を受けました。

そのころコミュニティFMを郵政省が奨励していましたので、それに乗って株式会社にすれば認可をとってFM局にすることができるという提示を受けました。それには最初は断りました。ボランティア活動をしているのに、なぜ株式会社なのかということでした。

それを検討しているなかで、震災の年から少しずつ日常を見据えた緊急活動が考えられていました。緊急救援で皆が集まったのであるが、緊急のなかで見えてくる問題は、実は外国人の問題はとくにそうであるが、日常の問題が表面にでているだけであることに気がつきました。日常に震災という問題意識がなくなっても、このことは残るだろうと思う。それで少しずつ日常にターゲットを向けて、教会の中の組織が動き出しました。FMもちょうど震災一年たった1996年1月17日に、「株式会社FMわぃわぃ」として正式に発足しました。

それが現在は8言語で情報が提供されています。これが1つの流れです。被災ベトナム人救援連絡会がそのように1つ分派していきました。

兵庫県定住外国人生活復興センター

もう一つは、長田の別の場所にあった兵庫県定住外国人生活復興センターですが、在日の韓国や朝鮮の人たちの震災後のケアをするためにやってきた1人の人センターを長田のある場所で立ち上げましたが、何ヵ月か活動しているときに、家賃などの活動資金の問題もあって移動しなければならなくなった。

そこで彼に出会って、それなら鷹取でということになりました。そこで問題がアジアにテーマが絞られていきました。私たちはベトナム人の問題をしていましたし、彼は韓国の問題をしていましたから、長田に住んでいる外国人ということでテーマは同じだと、同じ場所で別々に活動をしていましたが、そのうち一つになって、神戸定住外国人支援センターになっていきました。それも一つの被災ベトナム人救援連絡会からの流れです。それも出会いがあって、次のステップへいったのです。

神戸アジアタウン推進協議会

もう一つは、名前だけ残って活動はしていませんが、神戸アジアタウン推進協議会があります。

これは新長田の北側の細田地区のあたりの区画整理の事業のなかで、 まちをつくっていくのなら、こんどはここは「アジアのまち」だということでした。もともとここは在日外国人の人が多い町でした。だから最初はコリアのまちをつくろうという思いは、震災前からあったようですが、震災があってコリアタウンをつくろうという動きがあったのですが、ここはコリアだけではない、中国人もベトナム人もたくさんいるし、実は28ヶ国の人がいる。

だから震災後に名前が一つ進展して、コリアではなくアジアということになった。コリアにすると、こんどは北朝鮮とも問題もあります。それも乗り越えるためにアジアになって、アジアタウンをつくろうとなりました。

そこを開発するまちづくりをねらって、神戸アジアタウン推進協議会を立ちあげて、住民もいっしょになって始まったのですが、ちょっとした人間関係からうまくいかなくなってしまいました。

当初は水笠公園のあたりを半年ほど借り切って、そこにアジアバザールをつくって、食べ物やいろいろな物資を売って、外国の人たちが生活する基盤づくりと、アジアの文化を伝える基盤づくりをしようとしました。

それも半年計画であるていど進んでいたのですが、周辺住民の反対にあい、その調整がうまくいかなくて、2日だけのイベントで終わってしまいました。結局そこがアジアタウンの拠点になることができなくなってしまった。

こちらで韓国やベトナムの人たちへの支援活動をするなかで、救援活動はいつまでが救援なのかという問題があります。だから、そこから日常へと進みます。アジアタウンをつくるというのは、自分たちの活動の次のステップへいけるのではないかという思いもあって、アジアタウンへの思いは、新長田の北での動きを、こんどは鷹取へもってきました。

そこで少し違ったかたちで、まちの多言語の看板づくりとか情報を多言語で提供していくという少し質の違う活動が続けられていきました。

たかとり救援基地

しばらくその体制で進みますが、最初鷹取教会救援基地と言っていましたが、震災後1000日が経ったとき、たかとり救援基地と言って、「教会」をはずしました。最初になぜ教会がついていたかよくわかりませんが、場所が教会だから仕方がないのですが、たかとり救援基地として再スタートをはかりました。

まちの保健室がリーフグリーンに変わるとか、アジアタウンが一つの役割を終えていく。アジアタウンの延長上で、その中から分かれてくるのがツール・ド・コミュニケーションとか多言語センターFACILとかWorld Kids Community（キッズ）などの、次の細分化された活動へ分かれていきます。

コンピューターを使ったいろいろな情報提供の一つのセクション、多言語の翻訳を専門にするセクション、それに震災以後あまりテーマにしてこなかった子ども、とくに外国の人たちの子どもをテーマにしたキッズなどができあがってきました。

たかとりコミュニティセンター

昨年の4月（2000年4月）にたかとり救援基地から、たかとりコミュニティセンターに名前を変えました。それで8月に法人格がおりていまにいたっています。

たかとりコミュニティセンターは、1つの単体で何かをしているのではなくて、いま鷹取の教会の中に9つのNGOがありますが、それぞれが1つのルーツをもってできあがってきています。それらがともすれば、細分化されてしまってばらばらになってしまう。それらを1つにまとめるということと、これから芽生えていく動きをサポートするために、縁の下の力持ちになればということで、たかとりコミュニティセンターを法人格としてつくりました。

実はたかとりコミュニティセンターをつくったもう1つの理由は、私ごとですが私は教会の神父で、いますでに11年もいますが、いつどこへ転任していってしまうかもしれない。そのとき、こんど次の神父が来たとき、教会は宗教法人の土地ですし、宗教法人のものですから、これは何だといって解散になってしまうかもしれない。

私がもっとも関心のあることは、宗教法人のなかで宗教法人にかかわらなくて活動を続けていけるかということです。それでNPO法人という法人が、ちょうどタイムリーにできあがってきていて、活動の内容は別の法人格をもって、そこに私がかかわっていれば、宗教法人上で人事で動かされても、NPO法人上でこれまでの活動を継続できるという、私個人の将来への思いも正直なところありました。

教会の組織としても、たかとりコミュニティセンターはこれからも存続するということは合意を得ていますので、誰が来てもつぶされることはないのですが。NPO法人は、そのための仕組みづくり、形づくりだったのです。

まとめ

これまで出会いもふくめて、いままでの流れを話してきましたが、たかとりコミュニティセンターが多様な活動を続けていますが、そのルーツはすべて同じで、原点は1月17日です。

そこからいろいろな人たちが駆けつけてくださって、そこに出会いがあって、出会いがあればエネルギーがあって、エネルギーがあればアイデアも生まれてという、細胞分裂のような繰り返しでした。そういう繰り返しでいままで歩んできました。これからもきっと細胞分裂を続けていくだろうと思っています。

（終り）

休憩後の自由討論

ーあれほどの活動をしていると、かなり神父さんが仕切っていたのではないか、そうでないとあれほどの活動ができないのではないかと思っていました。ほんとうはそうではなくて、多くの人たちがうまく育っている。そのとき神父さんはいつもどういう位置におられたのですか。

どういう位置かといわれれば、神父ですとしか言いようがありません。それぞれの組織の立ち上げの時は、FMわぃわぃはいまだにそうですが、代表になっています。それが少しずつ移行していきます。もともと自分自身の問題ですが、教会が嫌いだったのです。

何が嫌いかというと、教会には大きな敷地があって、日曜日にはたくさんの人が礼拝にやってきます。日曜日に1時間ミサをして、そのまま帰って、あとの6日間はほとんど何もないのです。こんなに大きな場所はもったいないと思っていました。

震災前は地域と何かのかかわりをもてないかと思っていました。それを神父が呼びかけては誰も来るはずがないのです。洗礼を無理やりさせられるのではないかと思ってしまうでしょう。日本では宗教というと怪しいというイメージがあって、宗教は切口になりません。それでも1回チャンスがあったのです。

私が鷹取に来る前に、教会の広報部にいましたとき、スペインの教会の神父がやっている子どもたちのサーカス団を呼ぶことになりました。そのドキュメンタリーを青池監督が撮影して、その上映会をすることになって、その宣伝を依頼されたのが最初のきっかけでした。

それで1990年に彼らを神戸に呼ぶことになり、実行委員会が立ち上がりました。そこに私も入って、多くの出会いがありました。そのとき教会の周辺の地域を巻きこみました。教会を拠点にするが地域の人たちにも参加してもらって、外国からたくさんの子どもたちが来るから皆で盛り上げようということになって、教会の北側にある公園で、歓迎会と送迎会をすることができました。

それで何かをしたいという第1歩を踏むことができました。しかしそれが終わると、また何もなくなってしまったのです。それであきらめていたのですが、結局地震もあって、出会いもあって、個人的にはごじゃごじゃ人がいることが好きなだけで、皆がいてくれてうれしいなという位置にいるだけです。

なかでは人が集まるからトラブルはいっぱいありますが、救援基地の中でのトラブルでSOSの時には出ていきます。

それにボランティアの人たちもありがたい人ばかりが来るのでなく、ややこしい人も来るし、一風変わった人も来ます。それでもめたりしたときに出番です。そういう位置に今もいます。

ー普通に神父さんというと、もっとおごそかな服装をしておられると思っていたら、およそ神父さんらしくないのですが、それは自然ですか。

ミサの時は祭りごとですからきちっと着ますが、日常生活でその必要はないのです。法律上は教会法というのがあって、日常もきちっとしないといけないのです。その必要はないとも思うし、またあんな格好をしていると何にも出会えないです。

たかとり救援基地は出会いを大切にしてきましたが、それはどんな人に出会うかしれないのでこわいことです。しかし面白い人とも出会います。出会いを大切にしてきたこともあって、出会いを大切にするためには、あの服は大きな障害です。普通に話してくれないのです。何か神父様という話し方になってしまうし、そんな中では何のふれあいももてないのです。別にタオルまでまく必要はないのですが、普通の格好でいることは、ある意味であの服を着たくない、着ると友達ができないというだけのことです。

ー私はたかとりコミュニティセンターから出されている通信の挿し絵に、名前があってその横に、タオルを巻いて、めがねをかけている人がいて、これは誰なんだろうと思っていました。それが神田さんだと言われても頭の中で結びつかなかったのです。きょうお会いして神田さんということで納得しました

南駒栄にいるときは魚屋といわれていました。

NGOやNPOの経営は

ー最近NGOとかNPOといわれて、それらはコミュニティビジネスというかたちで行われていますが、それらができていくプロセスはボランティアから、そのような事業体を模索していく過程にあると思う。そこで問題になるのは経営である。個々の団体が直面する問題は採算だと思いますが、その現状や苦労していることなどを話してほしい。

神父は金に関係のない世界で生きているから、個人的にはお金の問題は苦手です。しかしお金無くして生きていけないことを、自分の感想でしか言えないのです。

いま9つの団体がありますが、それぞれに経営方針が違っています。FMは株式会社ですから、その収入源はコマーシャルです。いかに多くコマーシャルをとるかということと、イベント事業を続けていくことです。それは小さい地域FMにとっては、地域の経済の復興ぐあいに影響を受けます。

コマーシャルを流すとき、どこそこの肉屋がきょうは安売りですよと流す。それを地域の地元の人が聞いて、きょうは安売りなんだということを知るということで、コマーシャルがとれるのがいいのです。コミュニティFMは大きなものを10とるより、小口を100とるほうがいいのです。

ところが街がまだ復興しないのです。コマーシャルを出すまでになっていないのです。FMわぃわぃは立ちあげたときから、いつも窮地に陥っています。

コミュニティFMはいま全国で150ぐらいありますが、単体で考えたら街が復興していないから難しい。しかしそのうち長田が盛り上がってきて、皆が元気になって、経済も復興してきて余裕ができるようになればいいのです。しかしまだそのようになってきていない。

FMわぃわぃは、経営が安定するのは街が復興するのに正比例している。でもいまそれがだめだからといってつぶすわけにはいかない。

いろいろ方策があって、コミュニティFMが全国に150散らばっているから、コマーシャルをとるときも大きなのをコマーシャル協議会でとります。それを小分けするのです。それは地域に密着しますという戦法でいっています。あとの団体は株式会社でないから、悲しいかな助成金頼りです。いかに新しいアイデアを出して、それを拾ってくれるところを探し出すことです。そうして短期プロジェクトでお金をもらいます。だから来年、再来年の先が見えないことをつなぎながら続けています。

しかしそれはすべてマイナスだとは思いません。助成金をえるためにアイデアを生み出すという仕組みそのものが、組織の活性化になっています。つねに斬新なアイデアを生み出そうと活動が活性化するから、自動的に行政から定期的にお金が下りてくることは安定するけれど、中で働いている人たちにとっては大きな刺激になる。それは裏腹の関係です。安定はしない、しかし何か新しいものが生まれる。すべてそのようにして生きています。

そのほかは商売（？）を始めています。アジア女性自立プロジェクトという組織がありますが、これはもともとはアジアの女性の人たちの自立の支援をしているところです。これは震災とは関係がないのです。

最初のきっかけは、日本人と結婚したフィリピン人やインドネシア人で、すぐに離婚させられて子ども連れで本国に帰された女性たちの支援から始まっています。彼女らの仕事づくりから始まって、今は彼女らが自分たちの仕事づくりをして、彼女らがポシェットや服などを作っていく仕組みづくりをして

いる。それの材料も別の国から取り寄せる仕組みづくりをする。
その一部を彼女らが販売の窓口をつくり、教会などに店を開いている。その他にも外へ営業にいきます。
そのようにして物を売る。それを本国へ送り返して、彼女らの生活支援にあてています。

NGOベトナム in KOBE
被災ベトナム人救援連絡会がいろいろ分派しましたが、その中で個人的にいちばんうれしいのは、NGOベトナム in KOBEです。
それは今年の6月に発足しましたが、それはベトナム人の問題をベトナム人が解決していくことです。自立支援であるから、いつまでも日本人が支援する外国人の団体は早くなくなったほうがいいのです。
それでできたのがNGOベトナム in KOBEです。ベトナム人が自分たちのことを自分たちの問題として抱えていくNGOをつくるのです。そこも助成金で、そのほか主な収入源は、翻訳や通訳です。
ベトナム人がどこかの警察に捕まったとき、その通訳に行ったり（今は受けていない）、行政の案内をベトナム語に翻訳して配っていくとかです。翻訳業が主な収入源になっていきます。しかしそれだけではやっていけないのです。
それでベトナム物産展を始めました。ベトナムの食材とか物産を1つのプレハブで販売しています。
鷹取教会には実は250人のベトナム人がいて、神戸にはいま800人います。食は中国系だから南京街に物を買いに行くのですが、長田にはベトナム人が多いので教会で買っていただいたらちょっとした収入になります。
それをベトナム人本人が買うのと、ベトナム料理の講習会をするのです。お祭りとかイベントには屋台でベトナム料理を出していくのです。それで長田の人たちが少しずつベトナム料理のファンになってきています。これは震災7年の成果です。
するとベトナム料理を自分でつくりたいとなって、ベトナム料理の教室を開こうとなります。そのためには食材が要ります。それは教会で買ってもらうようにしています。
それはお金を稼ぐと同時に、文化も紹介できる。こうなると単なる商売ではないのです。

コロンビアの話
以前にコロンビアの地震の救援に行ったことがあります。そのときプロジェクトを探していきついたところが、家を造るというNGOにあたりました。それを受けて、神戸の支援金をもってそこへ行きましたが、そこのNGOの人たちは本体はチリにあるのですが、家を造るNGOなのです。自分たちのところには倉庫まであって、そこには家を造る道具や材料があって、家を造りに行くのです。
ただ家を造るだけでなく、家を造るためにはお金が要る。そのNGOはお金を貸しつける銀行までしている。返済のチケットを販売していて、毎月返済するたびに1枚1枚ちぎれるようなものを発行している。そのように被災した人たちに融資ができるようにしている。それはもともと地震から始まったのではなくて、貧しい国だから貧しい人のための家づくりから始めた企業ではなくてNGOです。しかし、倉庫まで持っているし実際にやっていることは企業です。
何が違うのか。そこへ行ったときに最初に聞いたことは、そこでしていることは企業のようであるが、企業と何が違うのかということでした。
すると一言、ハートが違います、ということで逃げられました。やはりそこで働いている人もいるから稼がないといけない。働いている人も仕事づくりのために働いているのです。
そこでわかったことは、家づくりをするのが原点ではなくて、貧しい人にいかにして住居を提供するかということでありました。
それで週にに1回か2回は、専門家たちのミーティングがあって、住宅建築から心理学まで学者たちが集まって、そのプロジェクトをどうしたら貧しい人たちに提供できるかを学問的にも話し合われている。
しかし、それを実行していくが、彼らはただでは提供しない。必ず稼がすし、それを稼ぐための彼らの仕事づくりまで考えていく。稼いで家を買ってもらった収入は、そのために働いてもらった人たちに還元されていく。そういう仕組みづくりをずっとやっているグループがあってすごい刺激を受けました。ボランティアはただで、金と暇のなる人間しかかかわれないということが日本ではあって、それでは金持ちしかできないことです。金持ちの婦人がボランティアをしているかぎりは何もできない。
あのコロンビアの活動を見たときは、プロだなと思いました。ただ彼らがいうには、企業と何が違うかといえば、ハートが違うといって胸をたたかれたときは、すごいものを感じました。
それに刺激されたわけではないが、リーフグリーンを立ち上げましたが、まちの保健室は完全なボランティアでした。しかしリーフグリーンはお金を稼がないといけない。だから送迎をするにも、お年寄りからタクシー代よりも安いお金をもらって送迎を

することにしました。
　例えば、まだ実現できていないが、ベトナムの人たちは車が好きなのです。それで彼らが運転手をする、それも彼らのわずかで小遣い程度しかならないが収入になる。
　それで生きていけるほどにはなっていないが、1つの方向は見えている。金持ちで暇な人がただでボランティアを慈善事業だという中途半端なものでなく、やはり稼いでいかないとどうしようもないのです。
　それでは企業と何が違うのかという問題は、神戸でも今後闘っていかないといけないと思います。

ー結局顔の見える関係でないと何もできないということでしょうか。

ー京都の消防団でも、自治会連合会の総会になったら飲まないと始まらない。

　飲まないと始まらないというと、飲めない人から文句が出ます。それは飲む飲まないの問題ではなく、そういう場がいるということです。それが出会いです。
　震災前までは地域とはほとんど関わりはなかったのです。震災後に会長さんがいっしょにまちづくりをしようと呼びかけてくれて、それから毎回会議に出るようになりました。会議そのものはつらいことで、血みどろでした。行政の人がきたらどうしてくれるんかと喧嘩ばかりでした。
　私はそういうのが苦手ですが行かないといけないのです。耳をふさいでいるときもありましたが、その会議のあとに皆が飲み始めるのです。
　いま地域で「かんちゃん」と呼ばれているのですが、そう呼ばれるようになったときに、自分が柵を越えられたと思っています。
　飲んでいるときも本当につらいときは飲んでいても、皆が暗いのです。調子のいいときは下ねたがでます。そのときは皆が元気で、それはその時皆に余裕があるかどうかの状況のバロメーターです。それが感じられるかどうかが、NGOが地域といっしょにやっていけるかの目安です。
　市民活動といえば、60年代、70年代のイメージがあって、住民とは関係なく右手を挙げている姿しか見えない。今はそうではなくて、住民といっしょになってつくっていくことが課題で、たかとりコミュニケーションセンターは地元なくして、1つのサティアンをつくってしまったらいけないと思っています。
　カトリック鷹取教会はもともとサティアンです。救援基地の時もサティアン的でした。地域の人たちといっしょにしてきて、ようやくサティアンは払拭できましたが、最初はオームの事件もあって、サティアンと言われていました。
　救援基地とかNGO団体というと、地元の住民にとっては何かわからないことをしているサティアンなのです。

地元との葛藤
　地元の人といっしょにといっても、それに流されてはよくないのですが、ときどき対立があります。
　1つの例として、FMの放送局に地元の人たちの番組があったのです。5月3日でしたが、その放送の中で外国人にたいする問題発言があったのです。それにクレームがきたのです。その対応を検討して、地域の人に言っていくことになった。言うということは地域とケンカすることになる。
　私が行って、代表の人たちにあれは問題発言だといったら、真っ向から反対されてしまいました。
　こちらはまちの人たちといっしょにしたいが、譲りたくない部分があります。まちは大事にしないといけないが、まちは保守的なところがあります。だからNGOがまちといっしょにやっていくことには悩みます。いっしょにやることで、自分たちの思いや主張をなくすことになってしまう。
　それでまちの人たちといっしょに酒を飲むことはなくなったわけではないのです。 今も飲んでいます。それは自分の主張をいっても縁が切れないように酒を飲んでいます。地域と仲良しこよしをするのではなく、自分たちはこういう思いでやっているということを、地元とはほとんどのことが正反対ですが、自分たちの思いを主張して、かついっしょに酒が飲めるような関係を保つということを模索してきました。

ローカルとグローバル
ー鷹取という街は人が減っているとか、失業者が増えているとかという状況と、コミュニティセンターの果たしている役割はどうなっていますか。

　その質問の前に言わないといけないのは、活動の方針そのものがローカルだけれどグローバルだということです。
　ローカルな活動だけど、ローカルのことをしているのではない、やはりグローバルのことをしているのが、われわれの方針です。しかし、グローバルを語っているときは、ローカルをないがしろにしてしまう。足元ができていないのにグローバルというの

は無意味だともいわれるが、相反していますが、ローカルだけれどグローバルだということです。だからまちがどうであれ、思いは変わりません。

ローカルな面で鷹取の周辺を見ていると、確かに家はきれいになりました。しかし近くにある鷹取商店街はまだまだだめです。神戸市全体で人口が98％に戻ってきたといいますが、まだ長田は80％ぐらいだから、格差ができてきたように思います。

しかし鷹取の周辺は復興住宅も建ってきていますから、人は戻ってきているのと、震災前に比べると子どもが増えています。

盆おどりの夏祭りのとき、一昨年からテントを張って、「駄菓子屋かんちゃん」をしています。私は尼崎の下町の育ちですから、駄菓子屋へはよく行っていました。

その祭りの駄菓子屋に子どもがいっぱい来るのです。だから震災前の過疎高齢化の街から若いカップルが入ってきているのだと思います。まだ経済的にはまだ変化はないのですが、子どもは未来だから、これから10年もすれば街に大きな変化をもたらすのではないかという予測ができます。

もともと鷹取という街は長田でもない、西に須磨が控えているので中途半端です。須磨でもないし、長田でもないという街です。

ーたかとり救援基地からいまになってきて、変なNPOだと思います。グローバルに走るNPOが多いなかで、グローバルもしながら地域にしっかり密着するというのは理想のかたちではないかと思う。

それは絶対に忘れたくないことです。神父になる学校があって、そこでは寮生活をします。神父は夢をもっている人間が多くて、問題意識をもっているのが多くて、変な人間も多いのです。

それでインドがどうだこうだと言っている。しかしそういうのに限って、食事を作ってくれるおばさんたちには目をむけない。結局インドへ行ってもそこで食事を作っているおばさんとのかかわりが大事だということを忘れている。

自分の寮生活のそういう部分のおばちゃんとのコミュニケーションのできる人間は、インドへ行ってもフィリピンへ行ってもしっかりやっている。ローカルとグローバルというのは離れていることではなくて、同じだと神学校のときにそう思いました。

たかとりコミュニティセンターのNGOもそこを逸脱すると、いくら夢を語ってもたんなる夢になってしまう。

地元に密着するどころか、あわよくば地元を巻き込みたい。地元の人たちが活動をしてくれるようなものになっていけばいいなと思います。

たかとりコミュニケーションセンターの利点は、たかとりコミュニケーションセンターという単体ではなくて、9つに細分化されていて切口がいっぱいあるので、いろいろな切口に入ってきてくれるので助かっています。外国人のことばかりしていたら、地元の人は入ってこないけれど、リーフグリーンという高齢者といっしょにやっていくグループがあるから切れないのです。まさにチームプレイです。一人で何もかもするのは無理だということは,NPOでも言えることです。

たかとりコミュニティセンターそのものは何もできなくても、それぞれの集合体だという意味の大きさもそこにあると思います。

ーFMわぃわぃ1つとっても、そう簡単にやろうと思ってもできないところが多いのに、なぜそこでできたのですか。

やろうと思ったらできないでしょう。なぜできたのか尋ねられても答えられないことです。できてしまったのだから。まさに「できちゃった結婚」です。

私見ですが、計画してつくっていく子どもよりは、計画外でできてきた子どもを1人の人間として、かかわっていっしょに生きていくということです。

おもろいことが一番

ー会社には金儲けいう大義名分があるが、金儲けではないといいながら生活をしていかないといけない。それは難しいことで、会社の経営以上に経営能力が必要で、低空飛行は難しいことです。先の9つの組織の中で、経営上苦しくて破産の危機に陥ったことはないですか。

一番の経営危機はFMわぃわぃです。株式会社だから。他も似たり寄ったりです。たぶん収入が0になってもつぶれないだろうという予感がします。なぜかといえば、おもしろいからです。もちろん生きていくために金も要るし、生活もしていかねばならない。

しかし、そのもっと原点に、なぜお前はここに来ているだということに対して、稼ぐためにきているのではないし、未来の社会づくりとかと肩を張っている人間もいない。なぜかといえばやはり、おもろいからです。ここおもろいとか、おれこれやってることがおもろい、「おもろい」ということが第1義だと思います。おもしろさの魅力が経済的なことに勝って

いるのです。だから、たかとりコミュニティセンターだと思います。

ただそれだけでは皆は生活があって、いっしょにやっていけないから、一生懸命お金を儲ける手法を考えているが、それでも一番は「おもろい」です。ほんとうにおもろいのです。

昼食の話

何がおもろいかというと、昼食の時間です。それぞれが9つに分割されていますので、いつもは出会うことはないのです。いつも事務所に閉じこもっていて出会わないが、昼飯は皆が出てくるのです。

その昼飯をつくってくれるのはお母さんたちです。それだけは教会の仕組みを使っています。何曜日は〇〇教会というように。水曜日は多文化食事です。これは震災の時に教会が仕組みをつくって、周辺の教会の婦人たちに、輪番制でボランティアの人たちの炊き出しと食事をつくってもらうことにしました。それが7年も続いているのです。

震災で被災者がいなくなったのに、なぜ炊き出しかと言って辞めていった人もいますが、今もなぜ活動が続けられてきて、スタッフの人がいるかを理解してくれている人たちが、今も続けてくれています。

それは完全なボランティアで、交通費だけは2年前から出すようになりました。

そのお昼ごはんがたかとりコミュニケーションの心臓だと思っています。お母さんたちにつくってもらって、毎日30人ほどの人が同じご飯を食べます。食事の話をしながら、あれやこれや雑談をしています。

たかとりコミュニケーションのすべての原動力は、あの昼食だと思います。やはりおもしろいです。そこは自分が今しようとしている理想とか、まちづくりへの情熱を語る場です。

しかし基本的におもしろいと思っていなかったら、そこにはおれないでしょう。これからも経営的な危機はおとずれるかもしれない。その内容は大部分が人件費で、一人一人の生活費は確保しないといけない。しかし目的はそこではないという思いをもっているから続けられていると思う。

そういう思いをもっていれば、金は入ってくるものです。金が目標になったら金は入ってこないけれど、金が目標でなかったら、お金は何とかなるというかたちで、この何年かをやってきました。それで何とかなってきました。

市民セミナー"寺子屋・市民防災"第5回神田裕「震災の出会いから生まれたコミュニケーションの豊かさ」(カトリック鷹取教会神父) より引用

50代女性
[人生に影響]
手紙のﾎﾞﾗﾝﾃｲｱとの方法を知り、家に居ても出来るﾎﾞﾗﾝﾃｲｱを知りました、たきび　を送付して貰い、ニュースでは分らない実態を知りました 。手紙に返事が来る事があり、ささやかな行動が喜ばれる事を知りました、でも継続が難しい事を知りました。逢った事の無い人への手紙は相手を思いやる言葉、生活を想像しなければならない難しさ、好意だけでは継続できない事を知りました。こうした経験は日常の対人関係にも通じることです。手紙を書く話題選びに日常の生活を見直し、再発見しています。

30代女性
[人生に影響]
文通ボランティアを通して心の交流をすることができたこと。中学生だった自分でも'何かできることはある'ということを信じ、達成し、現在も続いていること。そのことはいろんな面ではかりしれない影響を自分に与えた。
[震災をどう受け止めた]
日常が壊れてしまって信じられない世界が目の前に広がった。でもその中でも希望を持てたこと、一見マイナスに見えること、マイナスに見える出来事もプラスに変えてしまう力。それが人間の力だということを教えてもらった。震災で失ったものもたしかにある。しかし同時に得たものも多かったと今となっては思う。

60代女性
[人生に影響]
朝日新聞でひとり暮しのお年寄との文通ボランティアを知り「たかとり」と関わるようになった。それから阪神大震災は他人事ではなくなった。

40代男性
[活動期待]
「地域福祉」という言葉がありますが、「たかとり」は「福祉」とかいう枠に止まらず、実践して来られたように思います。灯台のような存在ですか？

20代女性
[活動期待]
いろんな国籍の方、背景を持っておられる方が住んでおられることをお伺いして初めて知りました.多文化コミュニティの先進としてあまり頑張りすぎず、息の長い活動を続けていただければ。存在が'あたり前'になったらすごいと思います。
[たかとり体験]
すごい思考の応用力がついたと思う。今まで全く考えることがなかったことを考えさせられたり、新たな価値観を発見したり。「違う価値観・考え方をもつ人々が共存する為には？」社会、共同体のあり方を考える基の一つです。

50代女性
[人生に影響]
それぞれの人生、それぞれの活動というものがあり、自分に無理なくできることをすればいいとと思うようになった。

30代女性
[たかとり体験]
災害の傷跡残る地に立って'ひとごとですませる残酷さ、無責任さを自分も持っていたのだと痛感させられました。ボランティアの意義を改めて考える機会を与えてもたったと思います。'

50代
[人生に影響]
人との会話（被災者の悩み、怒りを聞いて）の中で個人でできるボランティアと国に向けて働きかけることの大切さを知りました。現在ホームレスの方への支援をしております。市や国への要請活動もしています。

20代女性
[人生に影響]
嬉しい思いも、悲しい思いも多く経験し、自分にできること、力が及ばないこともあるのだと感じました。時間があるときに老人ホームを訪れたり、ボランティアに関わるようになりました。

[震災をどう受け止めた]
恐ろしかった。弱い立場の人々（子供・老人など）が苦しんでいるのを見て辛かった。

60代女性
[たかとり体験]
私がたかとりに行った時は、教会のまわりはきれいに平地になって家がポツポツと建ちはじめて、一生懸命立ち上がろうとしている元気をもらいました。
[震災をどう受け止めた]
朝テレビをつけてびっくりしたこと、時間の経過と共に災害の大きさに胸が苦しくなり，何か私で出来ることはないかと考えていました。

50代男性
[人生に影響]
また、ひとつ自分にとっての宝が増えた。まちで人が生きることの意味とそのことに係わる外の人間のありかたを学んだ気がします。
[たかとり体験]
流されかかっていた自分の人生を踏み止まって、もう一度見つめなおせた大切な道標です。

20代女性
[人生に影響]
自分の生き方そのものが大きく変わりました。自分に素直になった、全ての事に感謝するようになった、どんな事にもチャレンジしてみる力がついた、など。又いつも自然と鷹取の事を思い出し、精神的に本当に大きな支えとなっています。鷹取での体験は人生の基盤となっています。
[たかとり体験]
他の何にもかえられない神様からのおくりもの。 人生の基盤。精神的な支え。 出発点。帰り着く場所。 本当に大切な宝物。
[震災をどう受け止めた]
テレビで神戸の町が燃えているのを見て、ただ信じられず言葉も涙もでなかった。その日1日、何も手につかなかった。当時中学2年生だった私にとってそのぐらい衝撃的な出来事でした。

20代女性
[人生に影響]
学校のボランティアに入るきっかけになりました。障害のある方のお手伝い等のボランティアをしているうちに、福祉に興味を持ち、現在は介護福祉士として働いています。
[たかとり体験]
現在の職業につくきっかけになりました。高校時代特にやりたいこともなく過ごし大学に入学しましたが、大学でたかとりと関わらせてもらったおかげで何か人の役に立ちたいという気持ちが大きくなり、現在に至っていると思います。ありがとうございました。
[震災をどう受け止めた]
高校3年生で受験勉強をしていた時で、テレビを見て衝撃を受けました。同じような受験生の人が避難所の暗いあかりのもと参考書をひらいていた姿をなぜか鮮明に覚えています。あの混乱のなかでよく気丈にと思いました。受験を理由にすぐにボランティアに行けなかった事が心残りだったので、大学に入学後生活が落ち着いてからボランティアに参加させてもらいました。

[たかとり体験]
TVなどで流れる事件や災害を本当に自分のものとして捉えるようになり、実際に動ける勇気をもらった大きな「きっかけ」作りの場です。
[震災をどう受け止めた]
18歳の私は全てのことに満足できず、何もできない高校生活でした。そんな時、近所のおばあちゃんを毎日見舞い、病院ではなしをしていました。そこでTVで震災を知り、びっくりしました。同じ国でこんなことが起こっているのかととても恐く感じました。

60代男性
[人生に影響]
多くの青年と知り合うことによって新たな生きがいをみつけました。
[活動期待]
人々が忘れつつある善意、良心、そして奉仕の精神の重要性をを全国に発信する基地となって欲しいと思います。
[たかとり体験]
宗派にこだわらず全てを受け入れてくれる寛容さと、みかえりを期待しない奉仕の精神に感服
[震災をどう受け止めた]
世も末、人類の滅亡を想像した。

70代男性
[人生に影響]
災害時被災地でのボランティアコーディネートの役割を感じ、各所でその必要性を話すようになった。外国人や高齢独居者への救援活動、ボランティアコーディネートのありかたを知った。
[震災をどう受け止めた]
私自身は敗戦体験者であり、南海地震の被災者でもありました。長く神戸に住んでいましたから、教会で支援を訴え、1月31日には神戸の被災教会を問安しました。その時たかとり教会の活動を知りました。特に外国人被災者の救援活動に注目しました。

40代男性
[人生に影響]
現地に行って、また現地に行った人の話を聞いて、必要な所に、必要な物を確認して届ける事が大切だとわかった。
[活動期待]
必要と判断される事を、これからも行い、またその情報を発信されるのが良いと思う。
[震災をどう受け止めた]
見ること、聞くこと、どのように受け止めていいか、わからなかった。

40代女性
[人生に影響]
横浜で活動していると自分の地域を中心とした考え方にとらわれがちですが、神戸・たかとりで活動する方々の視点の高さ、目標実現のための意欲的な取り組み、人の心を動かす情熱の深さには絶えず刺激と感銘を受けております。日比野さんと出会えたことで、吉富さん、神田神父さまとお会いすることができました。みなさんはいつもどこかで私の気持ちの支えとなってくださっています。この出会いに心から感謝しています。
[活動期待]
これまでもそうであったように、地域の人々にとって、人への信頼を深め、分かち合う喜びを素直に表現できる場所でありますように。可能性を感じさせ、力を存分に発揮できる場所でありますように。
[たかとり体験]
「たかとり体験」という言葉があるのですね。そのような考え方をしたことはないのですが、たかとりコミュニティーセンターを守り、育ててきた方々の真摯な姿勢とエネルギーには頭が下がります。そのような方々と出会えたことは生涯の宝物です。これからも大事にしていきたいと思います。

30代男性
[人生に影響]
ボランティアが特別な事柄でなく、生活の一部として自然なものになったと思います。

20代男性
[人生に影響]
ボランティアの重要さ。人を助けるという重要性。ボランティアを通じて、将来の職業を決めるための重要なターニングポイントになった。
[活動期待]
地域に根付いた、みんな誰もが利用できる集いの場になってほしい。
[たかとり体験]
本格的なボランティアをするスタートポイントになりました。
[震災をどう受け止めた]
本当に驚いた。あの一瞬でものすごく多くのものが失われてしまった。かけがえのないものが失われてしまった。しかし、人と人との交流の氷河期であったあの時、KOBEにロウソクの灯がついたと思う。

50代男性
[人生に影響]
神戸に行って人々の温かい対応に接し、人間の中にある素晴らしい部分に自信を持てた。
[活動期待]
外国人との共生のモデルになってほしい。
[たかとり体験]
震災の時に実際に神戸と関われて、さまざまなものを得ました。その「神戸体験」の一部です。

30代女性
[活動期待]
私が初めてたかとりに伺ったのはつい昨年のことです。カトリック教会の中にいろいろなNGOが共存したり、地域の中に自然に溶け合っていて、これまで私が知っていた教会の姿とは全く違ったので驚き、そして同時にすばらしいと思いました。 ぜひこれからも年齢・性別・国籍・宗教などの違いを超えていろんなひとに開かれた場所、かかわりやすい場所であってほしいと期待しています。

50代女性
[人生に影響]
震災のことを、自分のできるところで伝えていかねば、と思うようになり、いまだに世田谷で「神戸をわすれない」を続けている。
[活動期待]
日本の他の地域にその経験を伝え、広めていくこと。
[たかとり体験]
大変な状況、環境の中で、人びとが輝き、あったかい空気が流れていた。オモロイ経験でした。
[震災をどう受け止めた]
神戸が、日本のどこにでも起こり得る悲劇を全部引き受けてくれたことへの、申し訳ないような気持ち。だから非被災地の私たちも、そういう「共感」をもって、共に復興の道を歩みたい。非力ではあるけれど、その気持ちは変わらないし、非被災地でその経験を伝えていきたい。

20代女性
[人生に影響]
　これといって、そんなにその後の人生に影響は受けていないが、今までに出会ったことのない国や年齢の人たちと出会い、それぞれの人たちにいろいろな人生があることを知ることができてよかったと思う。
[たかとり体験]
今まで考えていた〝ボランティア〟という、言葉の意味を打ち砕かれた。 人のためとかではなく、自分が本当に楽しく、いろいろな人たちにも出会い、話を聞くことができ貴重な体験だった。

30代女性
[人生に影響]
まだ現在も関わっているため、わからない。
[活動期待]
「たかとりコミュニティセンター」を拠点とし、在日外国人と地域社会そしてゆくゆくは行政にもつながっていくための活動ができればと期待(そのためには行政の理解が必要なのだが)。
[たかとり体験]
まさに現場または現場にもっとも近いところで私が体験した体験そのもの。
[震災をどう受け止めた]
天災というものはいつ何時起こるかわからないと思った。

40代女性
[人生に影響]
人のためにしたが最近自分のためになってきた。
[活動期待]
この調子でいいです。たかとりグランドになりつつ。
[たかとり体験]
震災は大変でしたがありがたい体験です。いろいろなきっかけがあって、人生が豊かになった。
[震災をどう受け止めた]
貴重な体験でこれからも忘れずに活かせるつもりです。

20代男性
[人生に影響]
独居老人のお宅を訪問することで、形の上での復興はなされているもののメンタル面での復興が未だなされていないことを痛感した。
[活動期待]
特に一人暮らしのお年寄りの健康面・金銭面での不安を解消して欲しいです。
[たかとり体験]
この「たかとり教会」でのボランティアの経験が医学部を目指すきっかけとなったので、「たかとり教会」は僕にとって人生の岐路を打開してくれたものです。
[震災をどう受け止めた]
被災当時は中学一年生で、地震そのものが恐かったですし、突然水道・ガスのない生活を強いられ不自由な思いをしました。今、僕は三重県在住で東海地震の恐怖を感じながら生活しています。しかしながら、阪神大震災の経験を生かして突っ張り棒や懐中電灯、非常食などの準備はかなり万全に行っているつもりです。僕は自分の経験を生かしてよく友人に「‥したらいいよ」とアドバイスするのですが、被災した経験がないせいか「はいはい‥」という感じであまり言うことを聞いてくれません。阪神大震災は僕にとって非常に苦い経験ですが、おこがましいとは思いますが、啓蒙活動していきたいと思います。

40代女性
[人生に影響]
ボランテイアをきっかけに高齢者支援の活動を始める。リーフグリーンの設立に携り、今後も高齢者支援の活動を続けていきたい。結果として、子育て後の新しい出発になった。
[活動期待]
*地域の人が気軽に頼れる窓口 *年齢、国籍などにとらわれない交流の場 *声にならないような小さい声を聞くことができ、それに対応できる場 *出会って、友達になって、元気をもらえる場
[たかとり体験]
新しい出発になった。
[震災をどう受け止めた]
びっくりして恐ろしかった。不安と緊張のなか、近所の人たちと顔をあわせ、話ができるとると嬉しかったし、みんな優しく助け合っていた。恐怖感と、緊急時の人の温かさに感激するのとの両面を同時に感じていた。

50代男性
[人生に影響]
継続は力なり

[活動期待]
今まで育まれた活動を世に広く発信し続けて欲しいと思います。
[たかとり体験]
震災を機にボランティアの言葉がクローズアップされましたが、少し被災者として参加し、ともすれば背負いきれない重荷でしたが、少し皆様に勇気をいただき再起の力を蓄えられた体験です。
[震災をどう受け止めた]
目に見えるもの、形あるものを追いかけていた愚かな日常を思い知らされた日々です。

30代男性
[人生に影響]
多少なりとも復興に携われたこと、普通に生活していては出来なかったことを経験できたことが、なんとなしに自分に対する自信になっていると思う。
[活動期待]
今後起こりうる災害でボランティア活動が行われる際の、マニュアルや見本的な存在。
[たかとり体験]
大学生活において一番勉強になったこと、また貴重な経験と思い出。
[震災をどう受け止めた]
日本における、戦争に匹敵する一大事。

30代女性
[人生に影響]
価値観が大きく変わった。家がない人に家与えることができた、喜んでもらえたことで、一人一人が協力することでいろんな喜びが生まれることを知った。すごいと思った。
[活動期待]
いつまでも語り継いでほしい。自然にとりくめるボランティアの窓口であってほしい。
[たかとり体験]
人としての考え方、人とのかかわりの大切さを学んだと思う。紙の家を作ったときに出会ったベトナムの女の子と言葉がわからなくても通じ合えたとおもった時は人は国境を越えて協力できることを実感することができた。
[震災をどう受け止めた]
いのちがあればどうにかなる。ものがあふれていることにあらためて驚いた。少しのものだけで十分生きていけることを学んだ。

20代男性
[人生に影響]
私は被災者のためにボランティアしようとはこれっぽっちも考えないで、友達に誘われてただ楽しそうだからたかとりに行きました。そこで作業をしていると、救援物資を貰いに来た人が「ありがとう」と言ってくれたことにとてもビックリしました。私は「ありがとう」と言ってもらおうなんてまったく考えていなかったからです。私は嬉しくなりとても感謝の気持ちでいっぱいになりました。その経験からボランティアや仕事に対する考え方が変わりました。自分が好きなことをやってるからこそ感謝する気持ちになれるのだと思います。
[活動期待]
今後は行政に頼らない市民の活動の中心になっていってもらいたいと思います。
[たかとり体験]
私にとって「たかとり」は、自分に自信を持たせてくれた場所です。たかとりのみなさんは当時高校2年生の私を一人の大人の人間として扱ってくれました。私は人に認められることで自分に自信が持てました。
[震災をどう受け止めた]
その日は学校を休んでいたのですが、朝テレビをつけると凄まじい光景が映っていました。私は実際に被害にあって苦しんでいる人を見ていません。見たのはテレビに映っている燃えている家、倒れた高速道路、そして実際に自分の目で見たのはたかとりに来る途中で見た潰れた家とたかとり周辺の何も無い野原です。だから私は阪神大震災の怖さというものを今でも実感できていません。

60代男性
[人生に影響]
若者の善意を信じることができるようになりました。

[活動期待]
地域の中で弱い立場におかれた人々を支え、行政にそれを働きかけること。
[たかとり体験]
希望です。
[震災をどう受け止めた]
これで人生が終わりかと思いました。

30代男性
特に働きはじめてから基地での体験を思い出すことが多くなりました。学生、平社員、課長、社長、先生、父親、社会の中で与えられるこうした役割からはずれ「なんでもない自分」になれた、基地はそういう場所だったと思います。
[活動期待]
地域の事情はわかりませんが、そこに住む人たちのニーズにあった活動を期待します。
[たかとり体験]
半年という期間、僕はとても長い長い旅をしていたように思います。そこでいろんな人に出会い、いろんな考えや人生を見ることができました。研究者として関わろうとしましたが、結局僕にはできませんでした。研究者としてはここで一つの挫折を味わいましたが、一人のニンゲンとして、「いろいろな人生がある、そしていろいろな考えがある」ということを学べたことは、大きかったです。「いろいろな人生を背負った、いろいろな考えの人たちと共に生きていくにはどうしたらいいのか」、長い時間をかけて探求していかなければいけない僕の生涯の研究課題です。
[震災をどう受け止めた]
あの瓦礫の光景は「一切は虚しい」、という強烈なインパクトを僕に与えました。とりわけものに対する執着はあれ以来なくなりました。　大勢のボランティアが神戸にかけつける映像を眺めながら正直「他人事」でした。ただ、どうして若者が大挙してボランティアに向うのか（どうして彼らは自分達の住む場所ではなく、あの瓦礫と化した神戸に向うのか）という疑問を一つの若者論として考えたいという気持ちが芽生えました。

20代男性
[人生に影響]
他人を見る目が変わり、また人を見る目が養われ、それが役立ってか今は店頭販売員をしています。
[たかとり体験]
はっきりいって最初は友達に誘われて遊びにいく感覚でしたが、行ってみたらそうではなくなり貴重な時間を過ごせました。

30代男性
[人生に影響]
自分が住んでいるまちを、身近な人達と一緒によりよい方向に変えていくという考え方をもてたことと、それを自分が実践するようになった。
[活動期待]
市民活動とまちづくりの拠点としての役割を末永く継続してほしいと思います。
[たかとり体験]
市民活動を行うことの入り口であった。
[震災をどう受け止めた]
震災当日に、神戸にいなかったので、私自身が震災を体験していないが、家族が一番大事だということを改めて、感じた。
70代女性
[人生に影響]
人間の力を超えた、天災、火災による窮地に落ち込んだ人々を少しでも助けられたららと思い、自分もこうした事が起こったら、どん底から起き上がれるだろうかと、真剣に考えた。現在は、病院を3ヶ所行っている。のどもと過ぎれば、熱さを忘れる諺のように、時間の流れのうちに甘くなっている。しかし、1月17日は、銘記している。
[たかとり体験]
老若男女問わず、一つの目的に向かって、熱厚の中で働いた、あの精神は、異口同音であったと思う。多くの善意の人々が、己を差し置いて、働いたのは、一生忘れ得ない貴重な体験でした。嬉しい体験でした。

40代男性
[人生に影響]
建築家として、独自の方向性が見えてきた。
[活動期待]
地域支援、そして世界化これまでの経験を発信できる場となってほしい。
[たかとり体験]
多くのことを学ぶ場となった。
[震災をどう受け止めた]
今となっては、ニューヨークの「9月11日」同時多発テロ自意的災害と対称的自然災害と理解している。

60代女性
[人生に影響]
外国から来た人（特にアジア）たちや国との距離がより近くなった
[活動期待]
不登校の子供たちが生き生きと活動していたのを何度か見て、ああいう若い（小学生、中学生）人達も受け入れるところもほしいと思うのだが
[たかとり体験]
そろそろ老境に入ってという時だったし、また関西に住んで日が浅かった私を必要としてくれた場所だった。従って50代の私の生活そのものでした。
[震災をどう受け止めた]
当日はぼんやりとしていて、もうひとつ現実感がなかったように思います。

50代女性
[人生に影響]
「共生」について考えるようになった。
[活動期待]
これからも地域に根ざした共生を実践していっていただきたい。
[たかとり体験]
種々さまざまな「共生」（隣近所、地域、民族、国籍、文化等々）の重要性の認識
[震災をどう受け止めた]
煩雑な時代に向かい、「たいせつなことがら」と「削除すべきことがら」の選択が、ますます意味をもってくる時代になったとの認識をもつきっかけになった。

40代男性
[人生に影響]
震災以前は、仕事上、ボランティアの方と関わりがあったが、自ら参加することは、なかった。震災後に中央区ボランティアやたかとりと関わったことで、機会があれば、ボランティアに自ら参加するようになった。その後、市内のボランティア団体や近県で起きた水害のボランティアに参加した。また、一生、ボランティアは続けたいと思っていたところ、近所にボランティアの拠点施設ができたので今の仕事を退職したら、そこを中心に活動したいと考えている。
[活動期待]
近隣の社会的弱者の方々に対するセンター機能や震災での活動を全国に発信し続けること。
[たかとり体験]
自分の一生の宝であり、かけがえのないできごとであった。
[震災をどう受け止めた]
自分が直接見聞きした中で最大の天災であったし、余りの大惨事に言葉を失った。（その時点でボランティアに行こうとは、思わなかった。）

60代男性
[人生に影響]
多くの人々がボランティアとして参加しているのを見て、私も一緒にやろうと決心し、定年前2年でしたが退職し、以後現在までボランティアを続けています。「たかとり救援基地」がなければ決心がつかなかっただろうし、現在のような"楽しみ"はなかっただろうと思います。

[活動期待]
多文化共生のまちづくりの拠点としていつまでもがんばっていただきたいと思います。
[たかとり体験]
人のぬくもり、癒し、多文化共生
[震災をどう受け止めた]
自分の家は幸い難をのがれましたが多くの人々が命を落とし、被災しました。救援活動や復興に自分のできることをして役立ちたいと思った。

30代女性
[人生に影響]
視野が広がりました。
[活動期待]
細くてもいいから、途絶えることなく息のながーーい活動をし続けて欲しいです。
[たかとり体験]
マクロからミクロへ、時々視点を引き戻してくれるもの。
[震災をどう受け止めた]
ちょうど日本にいたので、テレビを見て仰天してしまった。何か私に出来ることはないかと思ったものの、本来が身体が弱い。現地に出向いても風邪でもひいて、余計な迷惑を増やすだけだろうと思ったので、郵便局からとにかく義捐金を送りました。(ちびっとだけど(^^ゞ)

60代女性
[人生に影響]
広報の威力/時期を失しない救援の大切さを改めて知った。
[活動期待]
持続する事 少数民族に対する偏見を無くして今後も助け合う事。
[たかとり体験]
皆が一つの目的の為に力を合わせるとどんな事がやれるかを知った事。災害は大きかったけれども，それから得られた事も小さくなかった事。
[震災をどう受け止めた]
SFでのTV局が放映権の問題で其の日に放映しなかった等のセクショナリズム(其の後の救援の方法に関しても)怒りを覚えた。

[活動期待]
現在迄の継続
[たかとり体験]
たかとり体験という程の何かをさせていただいて居りませんが、他人に係わる事の大切さを教えて頂きました。
[震災をどう受け止めた]
生まれて初めての恐ろしい体験で有ったことは確かで、我が家も屋根が全壊でしたが、生命は救われた自分でした、其の分誰かのために何かを、の思いが湧いてきました。炊き出しのボランティアに1度だけでしたが行かせて頂きました。あれ程の惨事に遭いながらも多くの人達の目は死んでいなくて、其の地区のリーダーらしい人を中心に活き活きとされていた事が印象的です。私がお伺いした地区が何処であったのかは定かではないのですが。

40代男性
[人生に影響]
神戸に就職し、定住するようになった。医療・福祉に関心を持つようになった。
[たかとり体験]
個人が、その特性に応じて出来ることを一生懸命にやれば、その個人の存在意義が認められるということを知った。(それまでの長年の会社勤めでは実感できなかった)
[震災をどう受け止めた]
当日はまだ他人事だった。神戸に知人もおらず、またメディアの情報も不確実だった。

20代女性
[人生に影響]
大学で社会福祉を学ぶきっかけの一つになった。
[たかとり体験]
自分の無力さを痛感させてくれた体験。1週間いるか、いないかだったと思うが、その間ずっと、自分が何かの役に立っているという実感が持てず、悔しかった。たかとりに来るまで、自分はデキル人間だと無意識に思い込んでいたので、そうでもない、と気づく事ができて、良かった。偶然とはいえ、高2というあの時期に行ってラッキーだったと思う。
[震災をどう受け止めた]
大きく揺れて恐かったこと、テレビで倒れた高速道路をみて信じられなかったことぐらいしか憶えていない。

60代女性
[人生に影響]
外国人問題、高齢者問題を考えた。
[活動期待]
年金生活の独居老女でなんの力にもなれず、期待なんてあつかましくて・・・たきびをご送付いただくと増刷して仲間に配っています。編集大変でしょうが続けてください。
[震災をどう受け止めた]
戦争体験者の独居老女でしたので、常々東海大地震といわれていたので深刻でした。

80代男性
[たかとり体験]
きわめて短期間の経験のために、多くのことは言えませんが、机上の多論より実地の体験、他者への配慮の大切さを再確認しました。
[震災をどう受け止めた]
一般庶民、弱者に対する国の冷淡さ

60代女性
[人生に影響]
自分も被災者でしたがが、全国からのボランティアの皆様の支援と自分達よりももっと大切な被災者の実情を知る場を持つことができて何が大切か改めて知ることができた。

たかとりコミュニティセンター10年史

1993		
1/18	野北	野田北部まちづくり協議会発足
5/25	野北	大国公園・付近道路改造を行政に請願
8	基地	ベンポスタ子ども共和国（スペイン）サーカス団の歓送迎会を開催
1994		
8月	AWEP	AWEP設立
10月	AWEP	フィリピンNGOスタッフを迎えて収入向上プログラムの具現化開始
12月	AWEP	「女性と子どもの人権」講演会　共催
12/18	野北	大国公園・コミュニティ道路完成式典
1995		
1/17	基地	神田神父・パウロ神父の指揮のもと、救援の動き始まる。
1/17	野北	PM4：00復興対策本部を鷹取駅前に設置
1/18	基地	カトリック鷹取教会敷地にある司祭舘と西隣の建物を残し、御聖堂など焼ける。
1/19	基地	姉妹教会より届けられたおにぎりやパンを、避難所に向かいながら出会う人々にも手渡す。
1/19	基地	全国各地から物資が夜中に届けられる
1/19	基地	全国各地から集まった老若男女のボランティアの手によってカトリック鷹取教会敷地内の瓦礫の片付けが始まる
1/22	野北	復興まちづくりスタート
1月下旬	基地	和田氏とボランティアによって診療所・炊き出し等の看板作り始まる
1/22	基地	司祭館の屋根にブルーシートを張る。 かんちゃん坊主頭にする。
1/25	基地	基地内に電気がとおる。
1/27	基地	仮診療所開設
1/27	基地	カトリック医療協より医師や看護婦さんが来て病人やけが人の治療に当たる。
1/27	基地	待合室では被災者の方々の相談に応じる。玄関先にサロンを設置し、子供からお年寄りまでくつろげる場を設けた。同時に避難所や個人宅を巡回し診療に当たる。
1/29	基地	ボランティアの手でVIPルーム作り始まる。
1/29	基地	新長田の民団西神戸支部からFMヨボセヨ放送開始。韓国･朝鮮語と日本語で震災情報を届ける。
1月	AWEP	神戸周辺外国人へのサポート開始→兵庫県在住外国人女性とのネットワークづくり
1/30	KFC	被災ﾍﾞﾄﾅﾑ人救援連絡会発足
1/30	YY	「FMヨボセヨ」放送開始（民団西神戸支部から韓国・朝鮮語、日本語で震災情報放送）
1/31	基地	被災ベトナム人救援連絡会発足.
1/31	基地	救援物資配布のお知らせを地域に配る。
2/1	基地	救援物資渡し始まる。　管理責任　明石教会
2/1	基地	炊出しのコーディネート始まる。　管理責任　垂水教会
2/7	GQ	阪神大震災地元NGO救援連絡会議第一回全体会議
2/9	基地	姉妹教会より婦人たちが集まり大国公園において炊き出し始まる。後に、レストランや団体グループが加わる
2/9	基地	ポスターやチラシを作り出会う人々に配って回る
2/10	基地	第１回野田北部まちづくり協議会
2/10	野北	復興活動開始（第１回野田北部まちづくり協議会役員会）
2/14	野北	神戸市長,野田北部まちづくり協議会に来訪,激励
2/16	GQ	第一回外国人救援ネット会議
2/17	野北	野田北部住民避難先調査完了
2/17	野北	震災後のまちづくりニュース第1号発行
2/17	基地	震災後1ヶ月目のミサを行う。
2/20	基地	理容組合より散髪サービスのために基地を訪れる。
2/20	基地	解体・荷物の取りだし等が始まる
2/20	基地	“何か手伝いの必要な時には連絡をして下さい。”というチラシを配る
2/22	野北	野田北部.旭若松地区の区画整理案ｽｹｯﾁ作成開始（-24）
2/23	基地	歯科医師のボランティアグループが週１回木曜日診療に参加。３月１６日まで続く
2/24	野北	住宅修繕ｼｽﾃﾑ=福島県三春町三春大工の支援決定
2/25	基地	炊出しのそばで歌が歌われたり、楽器演奏が行われるようになる

2/25	基地	自転車修理ボランティアが来訪
2/25	基地	救援物資保管のためにテントが基地内にたくさん立つ。
2/27	基地	基地の施設作りが、池田神父を中心に活発になる。
2/27	基地	地域に出かけて雨漏り修理・ブルーシート掛け・荷物の取り出し・小さな解体作業などを行う。
2/27	基地	和田さんを中心とした男性の活動をゴリラ隊・女性の活動をウサギさんと呼ばれるようになる
2/28	野北	都市計画案の縦覧開始
3/1	野北	瓦礫撤去作業の調整開始
3月	基地	基地の整備と共に、解体引越しボランティアの仕事が増えてくる。作業は手で行われ、解体された材木は基地の施設作りに利用された。炊き出しのそばではいろいろな催し物が行われるようになる。
3/3	基地	阪神・淡路大震災NGO地元救援連絡協議会分科会、外国人救援ネット発足（代表神田さん）
3/7	基地	瀬戸物による炊出しがあり　かちゃかちゃという音に懐かしさを感じるひとときを過ごす
3月中旬	基地	青池組　被災地の記録を残すため撮影を開始する。（野田北部）
3/10	野北	野田北部・鷹取東区画整理案作成完了
3/12	野北	福島三春の大工さん到着
3/13	基地	南駒栄公園ボランティア解散
3/15	基地	東洋医学と西洋医学の接点から家庭健康療法で知られる「イトウテルミー親友会のメンバーが被災者のケアーに加わる（～6/23）
3月下旬	基地	和田氏とボランティアによってまちの保健室の看板や基地の塀・地域に出かけて行き壁面に絵を描く。夏過ぎまで続く。
3/22	基地	「たきび」第1号発行　4000通余り。　　週1回発行
3/25	野北	第7回野田北部復興委開催/すまいの再建,共同化等の提案
3/27(28?)	YY	FMユーメン、試験放送開始。　司祭館2階にて
4/2	基地	震災後、初めての結婚式が執り行われた。ボランティアによる手作り結婚式。
4/10	基地	炊き出し終了。
4/14	YY	FMユーメン　スタジオをプレハブに移動
4/16	YY	FMユーメン開局。ベトナム語・スペイン語・タガログ語・英語・日本語で放送開始。
4/16	基地	カトリック医療協の医療班が撤退し、まちの保健室“サロン・デ・タカトリ”として新たな一歩を歩む。避難所・仮設住宅への訪問を続ける。
4/16	基地	炊出しに変わる青空レストラン第1回目を大国公園で開く。
4/17	基地	基地内のグループの集まりが毎週木曜日に連絡会議が開かれるようになる
4/23	基地	野田北部合同慰霊祭執り行われる。　（震災後100日目）
4月	KFC	兵庫県定住外国人生活復興ｾﾝﾀｰ発足
5/1	野北	野田北部/区画整理勉強会/鷹取東まち協準備会発足の件
5/5	基地	救援物資渡し場所を閉じ、その後は必要に応じて対処する
5月上旬	基地	パウロ神父の写真展を、まちの保健室にて開く。
5/13	野北	早稲田大学ボランティア野田北部地区に入る
5/14	YY	神戸わんぱく祭りにFMユーメンがベトナム料理の屋台出店
5/17	YY	第1回災害地FM放送局開局要望委員会→国際ミニFMネットワーク
5/20～21	基地	長田復活祭にベトナム料理・ペルー料理屋台を出店。　水笠公園にて
5/28	基地	野田北部にひまわりの種を巻く
5月末	基地	地域でのお手伝い100件となる。
6月	基地	「たきび」2週間に1回の発行となる。
6/1	野北	夏祭準備委員会(6,09,13,22)
6/3	基地	基地内　仮設水洗トイレ設置。
6/4	基地	神戸地区信徒大会開催。　六甲学院にて
6/10	野北	区画整理事業地域工区を8カ町(JR南側)で行政に要請
6/17	KFC	兵庫県定住外国人生活復興センター開所式
6/23	基地	南駒栄公園にペーパーログハウス設置の説明会。
6月下旬	基地	ラッパハウス建設中
7月	YY	コミュニティ放送の免許取得準備開始
7/1	野北	仮設店舗建設開始
7/2	野北	鷹取東まちづくり協議会設立総会
7/8	基地	被災復興パーティー開く。　教会にて“愛と涙のゴリラたち”出版。

7月上旬	基地	KDD国際電話専用公衆電話設置。
7/16	YY	ミニFMわいわい開局前夜祭。
7/17	YY	ミニFMわいわい開局　FMユーメン、FMヨボセヨと一緒になりベトナム語スペイン語・タガログ語・英語・韓国朝鮮語・日本語で震災情報の放送を開始する。
7/19	基地	第5次の仮設住宅　抽選発表。 ジョイプラザに待機所出来る。
7/23	基地	紙の集会所基礎造りに着工
8月	AWEP	女性自立支援研修事業→比・マニラの女性団体との連携
8/1	野北	大国公園/地蔵像安置法要
8/1-2	GQ	「神戸に住む外国人のための生活ホットライン」実施
8/3	基地	新湊川公園に紙の家6件建設。
8/5	基地	“しぼりだせ”大国公園夏まつり。（FMわぃわぃが司会協力と中継放送）
8/7	基地	南駒栄公園に紙の家10件建設。
8/7	基地	教会内の紙の集会所建設開始。
8/16	基地	心と心の交流を目的とした“からだ心ほぐし隊”来訪。
8/18	野北	18日付帯条件を鷹取東まち協に回答送付（市長名）
8/19	基地	南駒栄公園の紙のログハウス10棟完成。
8/20	基地	ボランティアも加わり、地域の仮設住宅へ本格的な関わり始まる。長楽・友ヶ丘等。すだれ･ドアストッパーの取り付け、ベンチ･棚･踏み台作り、草取り、お年寄りの話し相手等、多くのお手伝いが長期計画のもと始まる。
8月下旬	基地	鷹取商店街のお店が次々と開店していく
8/24～27	基地	由比ヶ浜の中・高生27名ボランティアとしてやって来る。
8/29-9/6	AWEP	北京　世界女性会議・NGOフォーラム参加
8/30	基地	救援基地の活動について記者会見行われる
9/2	基地	“しあわせ湯”の壁画完成。
9/9	基地	子供会　竹で水鉄砲を作って遊ぶ。　大国公園にて
9/10	基地	紙の集会所完成 “ペーパー･ドーム・たかとり”と命名。
9/11	野北	鷹取東/確認書合意（市役所にてﾌﾟﾚｽ発表）
9月中旬	基地	長期ボランティア次々と帰る。大学を一年留年しての活動であった。
9/13	GQ	外国人のための生活相談ホットライン開始
9/15	GQ	NGO外国人救援ネットニュースレター発行開始
9/17	野北	ペーパードーム完成セレモニー
9/17	基地	“ペーパー･ドーム・たかとり”こけら落とし。地域の人々を招いて、テープカット挨拶の後、歌や踊りを楽しむ。今後も多くの人々との交流の場として利用される
9/30	基地	長野県南木曽町より、木材が4t車10台で運ばれる。
9/30	基地	これまでにボランティアの手により、青池組滞在宿泊専用建物建てられる
10月	YY	中国語番組放送スタート
10/5	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第1部完成試写会。ペーパー･ドームにて
10/5	基地	ベトナム人司祭ソン神父が、静岡から来られる。
10/7	YY	FMわぃわぃ井植文化賞・国際交流部門受賞
10/8	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”山形国際映画会に出品。被災地からのメッセージとなった。
10月中旬	基地	文通ボランティア順調に進み、80組余りとなる。
10/12	基地	基地入口横に、兵庫県定住外国人生活復興センターの建設完成。
10/15	KFC	兵庫県定住外国人生活復興ｾﾝﾀｰ、たかとり救援基地に移動。2FにはFMわぃわぃが入る
0/16～17	基地	基地関係者8名長野県南木曽町へ木材のお礼に行く。
10/27	基地	基地に冷蔵庫8台届く。
10/29	基地	神戸地区国際協力の日。教会内でバザー開催。
10/31	基地	「時はかぜのように」実行委員会により辻幹雄さんの11弦ギターリサイタル開く。
10月	KFC	兵庫県定住外国人生活復興ｾﾝﾀｰ、神戸アジアタウン推進協議会の事務局団体となる
11/3	基地	レーナ・マリアさん基地訪問・見学。
11/7	基地	ポルトガルのリスボンよりグレゴリオ聖歌隊16名来訪。真言宗豊山派僧侶16名がかけつけて大震災で亡くなられた人々を偲び永遠の安らぎ（レクイエム）、平和祈願のためのジョイントコンサートが行われた。
11/14	YY	FMわぃわぃ一時放送休止。（正式開局に向けて）
11/16	基地	“長楽ふれあいセンター”オープン。
11/17	野北	地区計画集会/整備計画の制限を住民合意（本庄.長楽町）

11/22	基地	地域型仮設住宅で暮らす方々との間で“楽しく歌を歌う会”開く。長楽仮設住宅にて
11/25	基地	NHK衛星放送 “夢追い人たち” という番組で、基地の壁画隊とアメリカニューヨークの壁画グループそれぞれの絵画がテレビ画面上で一枚の絵となって放映された。
11/25	基地	長野県南木曽町より、柱材･棚板がトラック2台分届く。
11/30	野北	鷹取東第一地区土地区画整理事業の事業計画決定
12月	YY	「株式会社エフエムわいわい」設立
12/11	基地	ママさんうさぎ 第1回黙想会。 垂水教会にて
12/11	野北	海運町2,3,4丁目住民集会/地区計画に住民合意
12/12	野北	本庄町2,3,4丁目住民集会/地区計画に住民合意
12/13	野北	長楽町2,3,4丁目住民集会/地区計画に住民合意
12/19	基地	ゴスペル･ジャズナイトダリル･コーリー･グループのアカペラによるクリスマスコンサート開かれる。
2/19～25	基地	外山ひとみ写真展「ベトナム･ドリーム」。 ペーパー･ドームにて
12/22	基地	下中島仮設住宅もちつき大会。
12/22	基地	スウェーデンと結ぶ子供クリスマス会、TBSニュースステーションで生放送。
12/23	基地	ドリーム･ページェントの一部もちつきに協力。
12/23	基地	富永房枝さんキーボード演奏。
12/24	基地	「めでたや」のもちつきパフォーマンス。
12/26･27	野北	街並み誘導型地区整備計画･計画書手続協議
12/31	基地	年越し深夜ミサ。
1996		
1/1	基地	新春ミサ
1/2	基地	長楽･若松ふれあいセンター正月初顔合わせ。
1/9	YY	FMわぃわぃ予備免許交付
1/11	基地	神戸カリタスのメンバーと共に夜、野宿者や放浪者の発見に努め対応にあたる。春まで週1回木曜日に続ける。
1/14	野北	本庄10軒協調化協議(いこいの家)
1/17	野北	野田北部慰霊祭（大国公園にて）
1/17	YY	FMわぃわぃ正式開局、正午より放送開始。地域･教会･ボランティア･報道関係者を招いて、開局パーティーが盛大に開かれる。
1/20	基地	震災復興長田の会 第1回目開かれる。 神戸医療生協本部にて
1/23	基地	長楽仮設住宅で初めてのお葬式が執り行われた。
1/27	野北	鷹取東/減歩等により、調整つかず事業凍結。
1/30	基地	震災復興長田の会 第2回目開かれる。
1月	Aタウン	神戸アジアンタウン推進協議会設立
2/4	野北	野田北部/海運町2、3丁目住民集会/凍結解除について
2/9	基地	地域住民の乳幼児2名預かる。（ベビーシッター）以降3か月続く。
2/11	基地	めでたやさんによるもちつき。 妙法寺公園にて
2/21	基地	ジョイプラザ待機所で避難生活を送っていた40代男性（アルコール）が孤独死する。
2/26	野北	復興委員会をまちづくり協議会役員会の名に戻す
2/26	基地	市長に要望書を提出。1. 避難者の希望にそって仮設住宅を用意すること。2. 行く先のない避難者を強制的に退去させないこと
3/1	野北	仮設住宅友愛訪問（高塚台～西神）
3/10	基地	バザー開催。 妙法寺川公園にて、
3/21～22	基地	“ 人間のまち 野田北部･鷹取の人びと” 第2部試写会。
3/23	基地	大分県竹田市から送られた“復興の木”を植樹する。
4月	YY	ポルトガル語放送スタート
4/1	GQ	阪神大震災地元NGO救援連絡会議分科会から「NGO外国人救援ネット」として再発足
4/6	基地	保健室主催で献血車来る。 大国公園にて
4/10	野北	鷹取東/区画整理事業凍結解除
4/13	基地	震災復興長田の会 第3回目開かれる。署名運動の輪が広がる。
4/13	基地	からだほぐし隊 来訪。 基地と長楽ふれあいセンターにて
4/13～21	基地	パンフラワーの展示会 。 ペーパードームにて
4/14	野北	仮設住宅友愛訪問（西神、平野地区）

4/16～17	基地	やすらぎ旅行に出かける。　　徳島方面へ
4/21	YY	FMわいわい“長田マダン”に屋台出店。
4月下旬	基地	“阪神・淡路大震災復興まちづくりキャラバンUSA。”
5/5	基地	「‘96遊びんピックin神戸」開かれる（@ペーパードーム ）映画鑑賞とこいのぼり作りを楽しむ。
5/6	基地	震災で結婚式の写真を無くした方の写真撮影会。
5/10	基地	須磨こころのケアーセンターオープンする。
5/10	基地	下中島仮設住宅で、週1回精神科医が診療にあたる。
5/11	基地	「山の人から神戸の人へ」東京編 あきる野市よりトラックで木材運ばれる。
5/13	野北	仮設住宅友愛訪問（西播地区）
5/17	GQ	シンポジュウム「阪神大震災と外国人 ～共生社会を築いていくために」開催
5/25	野北	野田北部まちづくり協議会総会（いこいの家にて）
6月	AWEP	在住外国人女性との復興活動事業「神戸在住外国人女性とのネットワークづくり支援」
6/3	野北	地区計画説明会/街並み誘導型(案)概要/本庄2.3.4丁目
6/4	野北	地区計画説明会/街並み誘導型(案)概要/長楽2.3.4丁目
6/9	基地	子供ミュージカル。　長楽小学校にて
6/10	基地	東京現在座による“うた芝居”。　ペーパードームにて　2回公演
6/15	基地	からだほぐし隊来訪。　基地と長楽ふれあいセンターにて。
6/20	基地	鷹取商店街　被災アーチ撤去。
6/22～23	基地	アジアタウン用木材受取に南木曽にゴリラ隊メンバーが行く。
6/23	基地	日比野・吉富結婚式
6/28	野北	街並み誘導型地区計画説明会/本庄.長楽2.3.4/野田北部住民総会/まちづくり提案(地区計画)の住民合意,承認
7月	YY	「神戸まつり」民族衣装でのパレード参加YY Goods&民族料理屋台出店
7月	基地	各仮設住宅で七夕の行事を行う。
7/8～9	基地	“人間のまち　野田北部の人びと”第3部試写会。
7月中旬	基地	夏休みに入り、ボランティアぞくぞく集まる。
7/13	基地	からだほぐし隊来訪。　　信徒会館と長楽ふれあいセンターにて
7/13	基地	英国BBC放送から被災地の現状報告が放送される。
7/14	基地	垂水教会聖歌隊によるサマーコンサート開催。　ペーパー・ドームにて
7/16	野北	野田北部地区　地区計画素案縦覧開始（～29）
7/22	野北	野田北部/海運町2丁目共同化住宅話し合い（いこいの家）
7/27～28	YY	アジア自由市場開かれる（@JR新長田北側）「まるごとアジア」くつのまち長田のアジアタウンのイベントで賑わう。
7/28	基地	FMわいわい開局記念半年コンサート。
7/29	野北	第1回区画整理審議会
7月	Aタウン	「神戸まつり」に参加
8月	基地	仮設住宅支援　あじさいの会（昼食会）毎週金曜日。　下中島仮設住宅にて
8/3	基地	子供と関わるボランティア　南光町ふれあいキャンプに出かける。
8/5	基地	野田北部夏祭り開催。　大国公園にて
8/10	基地	サックス演奏。　東須磨仮設住宅ふれあいセンターにて
8/11	基地	サックス演奏。　ペーパードームにて
8/28	基地	鷹取教会　仮換地の指定。
8/28	基地	アジア国際交流卓球大会参加者１２ケ国１０～１２才の青少年１２０人が被災地訪問で基地にも立ち寄る。
8/28	野北	震災復興区画整理事業仮換地第1号/海運町3丁目仮換地調印
9/3	基地	東京青梅市の福田さんの呼びかけで、夏休み親子教室で40脚のベンチを作り送られてくる。仮設に早速持って行く。
9/5	基地	海運町2・3丁目に住んでおられた方の集まりで、区画整理による道路工事をの説明を受ける（@ペーパードーム）
9/8	基地	敬老ふれあいコンサート。　小学校の体育館にて
9/8	基地	鷹取救宴喜痴ソフトボール大会開く、チーム名ゴリラーズ。鷹取中学校グランドにて
9/10	基地	大黒小学校における障害児支援。週2回4年間続く。
9/11	野北	野田北部地区地区計画案縦覧開始（～24）
9/14	野北	世界鷹取祭第1回実行委員会
9/20	YY	日比野・吉富がFMわいわい特派員としてユーラシア大陸横断へ（97.3.20まで）。 海外特派員レポート「ユーラシアを越えて」放送開始

9/21	基地	アルコール・薬物依存からの回復と対処方法についてのセミナー。
9/21～22	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第４部試写会。　　ペーパー・ドームにて
9/29	基地	キム・シンさんによるバンブーアンサンブルの演奏会。
9/29	基地	ベトナム料理の屋台やバザー・ワークショップを開く。
10月	Aタウン	「まるごとアジアフェスティバル」開催
10/1	基地	ホームページ開設
10/10	基地	「忘れんとってね1・17」ピアノの生演奏をBGMに被災市民の証言集の朗読を行う。（@ペーパードーム）
10月中旬	基地	区画整理のため基地内大移動。
10/12	基地	ミニ運動会。　　下中島仮設住宅にて
10/14	野北	神戸市都市計画審議会でまちなみ誘導型地区計画の審議
10/18	基地	区画整理のため基地（教会）の東側の塀撤去。
10/22	基地	VIPルーム解体する。
10/27	基地	ミニ運動会。　　東須磨仮設住宅にて
10/31	野北	兵庫県都市計画地方審議会でまちなみ誘導型地区計画の審議
11/3	基地	震災被害者激励の集い開催
11/5	野北	全国に先駆け野田北部地区に【まちなみ誘導型地区計画】告示
11/9	基地	阪神・淡路大震災記録映画上映委員会主催の映画と講演“忘れないで”に参加。
11月中旬	基地	区画整理のため ペーパードーム南側に移動。
1/18～23	基地	まるごとアジアフェスティバルの一環として写真展開く。
1/22～24	基地	地域の有志や色々なグループの応援を受けて、第１回世界鷹取祭開催。
11月	基地	大国公園で「世界鷹取祭」の開催。ベンポスタ子ども共和国からも参加
1/22～24	野北	世界鷹取祭/ｺﾐｭﾆﾃｨ.ﾌｯｺちゃん.回顧.建築.街角.緑化.映画等
12月中旬	基地	旧台所（現あずまや）から新台所に引越し
12/10	基地	救援基地のお金が盗まれる
12/10	野北	道路整備勉強会/本庄町2丁目私道沿道
12/11	野北	道路整備勉強会/長楽3丁目私道沿道
12/14	基地	ボランティアフォーラム開催。　東京経済大学にて
12/16	野北	道路整備勉強会/長楽2丁目東1路線
12/17	野北	道路整備勉強会/長楽町3丁目中1路線
12/20	基地	ペーパードーム南側に移動完了。2階建てプレハブ4戸と平屋1戸完成。保健室　奥の平屋プレハブに引越し。
12/31	YY	年末カウントダウン番組
12月	KFC	兵庫県定住外国人生活復興ｾﾝﾀｰ、さくら共同作業所開設 （在日ﾍﾞﾄﾅﾑ人の作業所などを他団体とｼｪｱﾘﾝｸﾞする事務所で運営）
1997		
1/6	野北	全国初野田北部地区に「街並み誘導型地区計画」条例化
1/11～17	基地	ライオンズクラブの協力を得て、江戸の祭囃子と獅子舞が各仮設や公園で披露される
1/17	基地	震災三年目を迎えて「追悼と新生」のミサ
1/17	基地	ボランティアを引っ張ってきた和田氏が基地を去る。
1/17	YY	震災2周年特別放送・開局1周年特別放送
1/19	YY	FMわぃわぃ開局一周年のセレモニーとパーティー開催。小室等さんをゲストにCD制作発表。
1/20	GQ	中山手カトリック教会内に事務局用のペーパーハウス完成（カトリック鷹取教会から移転）
2/4	野北	野田景観調整委員会/浅山,三輪,辻,佐々木等10名/市役所
2/11	KFC	被災ﾍﾞﾄﾅﾑ人救援連絡会、兵庫県定住外国人生活復興ｾﾝﾀｰが統合し神戸定住外国人支援ｾﾝﾀｰ（KFC）発足（旧正月を祝うつどいテトも同時に開催）→KFC新長田事務所開設
2/14～15	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第５部試写会。　ペーパー・ドームにて
2/19	基地	地元に帰ってきた人々の交流の場として水曜会始まる。 まちの保健室にて
2/19	基地	古典の勉強会・ペン字の講習会へと変わっていく
2/22	YY	NHKラジオジャパンとの共同特番
2/23	AWEP	アジア女性自立プロジェクト事務所を設置。
2月	AWEP	たかとり救援基地内に事務所開設
3/4	野北	第2回野田景観調整委員会/神戸市役所
3/7	基地	震災を生きる宗教者の集い（わるがき会）　発足

3/9	基地	メリノール聖歌隊（中学生）美しい歌声を披露。　ペーパー・ドームにて
3/17	基地	「たきび」発行　今月より月１回とする。
3/19	YY	市民と市長のふれあいトーク特別番組放送
3/19～24	AWEP	第1回　スタディツアー（フィリピン）
3/30	基地	「まちの保健室2周年の集い」を開く
4/18	基地	生活の中のリサイクルの会始まる。 まちの保健室にて
4/19	YY	「第1回アジアまるごと市」 イベント・中継（～20日）
4/20	YY	FMわいわい“長田マダン”に屋台出店。
4/20～21	基地	「野田北部まちづくり」の方々震災当時からのお礼に長野県を訪れる。
4/25	野北	野田北部まちづくり協議会総会
4/27	基地	救援基地の活動お休み　皆で山登り。
4月	Aタウン	「アジアまるごと市」開催
4月	Aタウン	標識の多言語化に関するアンケート調査
5/1	YY	「ゆめひろがれ被災地メーデー」イベント中継・収録番組制作
5/2	野北	第1回野田北部記念誌委員会
5/13	GQ	イラン地震支援活動開始
5/17	GQ	「NGO外国人救援ネット こうべ地球村フェスティバル」開始
5/20	基地	「やすらぎコンサート」日本の調べをヴァイオリン・チェロ・尺八・琵琶に合わせて歌う。
5/20	YY	「長田やすらぎコンサート」公開中継生番組
5/23～24	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第6部試写会。　ペーパー・ドームにて
5/24	野北	第2回野田北部記念誌委員会
6月	AWEP	出稼ぎ女性労働者とともに−帰国後の就業支援と日本での問題提起−
6月上旬	基地	仮設住宅で野良ネコが増え、住民の依頼により4匹の里親探し始める。
6/3	基地	震災ボランティア学習」として岐阜の坂本中学より36名来訪。草抜き・窓拭き・震災当時の話を聞いたり・歌を歌ったりした。（@下中島仮設）
6/5	野北	岩手県から「イチイの木」,野田北部に届く/塚原氏来神（～8）
6/14	KFC	被災ﾍﾞﾄﾅﾑ人救援連絡会の「被災ﾍﾞﾄﾅﾑ人日本語教室」が遅れてKFCの組織内に入り、新たに「KFC 日本語ボランティアの会（仮称）」を結成。
6/20	野北	野田北部地区に街なみ環境整備事業大臣承認を受ける
6/20	基地	蕨市立第一中学校より10名「神戸震災学習」で基地訪問後下中島仮設にて交流。
6/25	基地	大阪市の松原高校より13名　窓や換気扇の掃除をする。　長楽仮設にて
6/27	基地	野田北部自治会の夏祭実行委員会に出席。
6/29	基地	神奈川の大谷中学より30名　体験ボランティアをする。 東須磨仮設にて
7/1	野北	まちなみ協定/住民合意/市に提出
7/2	野北	まちなみ協定承認
7/9	AWEP	フィリピンを知る「フィリピン女性たちとの集い」林田マリトニ氏　子供の館にて
7/10	野北	道路中心線鋲設置式（長楽町2丁目筋）
7/11	野北	仮設住宅友愛訪問（西神方面）
7/18	YY	「神戸まつり　長田フェスティバル」ステージ・中継
7/19～24	基地	仮設の皆さんと草取り。　岩岡第二仮設にて
7/19～21	Aタウン	「神戸まつり」にて「アジアパラダス」開催。アジアの料理や音楽など文化が楽しめるイベントを主催
7/21	YY	「神戸まつり」民族衣装でのパレード参加民族料理屋台出店民族料理屋台出店
8月	Aタウン	多言語標識を鷹取地域に設置
8/2	YY	「大国公園夏まつり」ステージ企画・中継（～3日）
8/2～3	基地	夏祭り　基地の各セクション出店。　大国公園にて
8/2～3	基地	野田北部地域の3か所に多言語案内板を設置
8/13	基地	ペーパー・ドーム前に高さ6メートルのパーゴラ（屋根）完成。
8/13	基地	「忘れません1月17日。さあ　光に向かって　手をつないで」 チベットの琵琶の踊りと琵琶独奏。
8月	YY	「第4回元気アップ長田たなばたまつり」イベント企画・取材番組
8/20	野北	海運町2丁目共同化住宅話合い−地区内受皿住宅建設に向けて
8/21・26	基地	藤沢市から30人以上の中学生が「青春の旅」で仮設訪問。草取りや花火をして楽しむ
9月	基地	今月より精神科の医師が、月1・2回日曜日に定期的に相談・診療に当たってくださる

9月	KFC	（日本語教育）ﾌﾞﾗｯｼｭｱｯﾌﾟ講座開講
9/3	野北	神戸市初野田北部に道路中心線確認書受理通知/長楽2東1路線
9/10～14	AWEP	西宮の市民ギャラリーで扱い製品の初フェア開催
9/11	KFC	KFC　日本語ボランティアの会秋まつり。
9/12～13	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第7部試写会。　ペーパー・ドームにて
9/21	基地	アジアアフリカミュジカルチームによるコンサート「忘れません１月１７日。さあ、光に向かって、手をつないで」。チベットの歌琵琶独奏も。
9/27	AWEP	外国人女性のための日本語ワープロ教室開催
10/1	AWEP	日本人女性のための英会話講座開設
10/7	基地	阿木中学校の２年生１６名が　郊外学習で岩岡第２仮設訪問　安岐太鼓を披露。
10/12	基地	震災１０００日目。たかとり救援基地１０００日目の記念報告会。
10/12	基地	「鷹取救援基地」から「たかとり救援基地」と名称変更。
10/12	基地	パストラルセンターたかとり　（地域支援・台所など）発足
10/13	基地	全国からの善意をいつも忘れないために、基地内の我々も食事のたびに１００円を出すことにする
10/13	基地	下中島仮設住宅に、やっとふれあいルームが出来る。（退出した人の部屋を改良）
10/15･16	基地	桐朋高校修学旅行で来訪
10/23	野北	第4回野田景観調整委員会/まちづくりセンター
10/25	基地	インドネシアのカブミ（踊り）のワークショップ（踊りの指導）。
10/25・26	YY	「第9回兵庫の祭り　ふれあいフェスティバル’97」国際交流ミニステージ企画
10/25・26	Aタウン	兵庫県の祭り「ふれあいの祭典」の国際交流プラザに出店。
11月	Aタウン	「大阪NPOアワード９７」で「地域の共生賞」を受賞
11/3	基地	千葉の柏高校生、修学旅行中に手製のアルプホルンで演奏。　ペーパー･ドームにて
11/17	野北	道路中心線確認書受理通知/本庄2丁目東1路線
11/23	基地	スロヴァキアレディス室内オーケストラによるクラシックコンサート。
11/23	基地	SYAメンバーによる手話。独唱
11/24	基地	ヴァイオリンコンサート。 岩岡仮設住宅にて
11/24	基地	SYAメンバーによる手話。独唱
12月	YY	神戸市役所と災害情報の緊急放送に関する協定締結、
12月	YY	長田警察･長田消防署･神戸市環境局年末年始のインフォメーション
12/3	野北	道路中心線確認書受理通知/長楽3丁目2路線
12/12・13	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第８部試写会。　ペーパー・ドームにて
12/17	AWEP	AWEP交流会「インドネシアについて」ハリミン氏。　子供の館にて
12/28	基地	救援基地お休み。
12/31	YY	年末カウントダウン番組
12月末	基地	年末・年始もボランティアによって、独居老人の安全のため又、家事支援・話し相手にと訪問は続く
1998		
1/5	基地	救援基地仕事再開。。　ペーパー・ドームにて
1/17	野北	野田北部有志黙祷/大国公園
1/17	基地	追悼の祈り(ミサ)。
1/17	基地	「震災を生きる宗教者の集い」神戸メッセージ採択。　湊川公園にて
1/17	YY	震災3周年特別放送と開局２周年記念イベント
1/17	YY	阪神淡路大震災特別番組「あれから3年」を全国のコミュニティ放送局82局をネットして放送
1/17	YY	プログレッシブネットワークの協力によりインターネット放送開始
1/17	YY	サンテレビと共同制作番組「癒し、そして…」をTVとラジオで同時生中継。
1/21	基地	仮設住宅支援　雑炊の会月２回水曜日に始まる。以後２年近く続く。楽仮設住宅にて
1/30	基地	長田区民まちづくり会議開催。　ペーパー・ドームにて
1/31	基地	新年の集い。　シルバーハイツにて
1月	KFC	(媒介言語)ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ語講座開講
2/1	KFC	ベトナム・韓国旧正月祝う。（＠鷹取中学校）同時にベトナム人にアンケートを実施
2/6	野北	第8回野田北部記念誌委員会/神戸大学景観調査中間報告
2/14	AWEP	AWEP交流会「ネパールについて」クンナム・ポカレル氏。　子供の館にて
2/23	野北	第9回野田北部記念誌委員会

3/11	YY	神戸市長から防災功労で感謝状
3/14	AWEP	AWEP交流会「ネパールについて　その2」クンナム・ポカレル氏。 プレハブにて
3/20	基地	バザー開催。　　岩岡第2仮設住宅にて
3/21～22	Aタウン	第2回アジアまるごと市開催、多言語の店舗案内看板（多言語標識）を設置。 丸五市場にて
3/21	YY	「第2回アジアまるごと市」イベント企画・中継
3/22	基地	市立兵庫商業高等学校の25名の方による中国の獅子舞。
3/25	基地	長楽仮設の方々とお花見。
3/25	基地	ママさんうさぎ姫路城へお花見。
3月	YY	送信所を長田区房王寺町に移転
4月上旬	基地	台所に大阪有線（Ｉ―5）が設置される
4月	野北	細街路2路線完成
4/1	基地	シルバーハイツ松風第二で自治会発足
4月	YY	多言語による災害時情報アナウンス制作（神戸アジアタウン推進協議会など3団体と）
4月	Aタウン	災害時の多言語情報発信システムプロジェクト開始
4/11	KFC	KFC研修会開始
4/11	YY	「復興長田元気アップフェスタ　ピフレホールオープンイベント」
4/11	YY	「ながたウォークラリー」参加中継・取材・番組制作グランドフィナーレ ステージ企画（12日）
4/12	YY	「灘区・中央地区　復興ゆめまつり」ステージ企画
4/17	YY	番組大幅改編（震災編成から日常へ移行）
4/17	YY	長田区行政情報生番組「ハローながた」スタート
4/19	YY	FMわぃわぃ“長田マダン”に屋台出店
5/9	GQ	NGO外国人救援ネット主催の「神戸地球村フェスティバル」開催(@三宮サンパル前広場)
5/11・12	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第9部試写会(@ペーパー・ドーム)
5/18	基地	野田北部自治会総会　　ペーパー・ドームにて
5/26	基地	岐阜の坂本中学校の修学旅行で36名来訪。　　東須磨仮設にて交流
5/27	YY	FMわぃわぃ　放送批評懇談会ギャラクシー賞受賞。赤坂プリンスホテルにて
5/30	AWEP	在県外国人のためのパソコン・日本語ワープロ講座開設
5/31	基地	パウロ神父　歓送会。
5/31	基地	隣家の車が壁に激突。フェンス破壊。
6/4	YY	長田区総合防災訓練に参加・緊急割込み放送訓練・多言語での災害情報放送
6月	野北	「まちづくり活動3年の歩み」委員会発足
6月	WKC	多文化共生センター・神戸のプログラムとして活動開始
6月	WKC	外国人の親子の学校生活に関する聞き取り調査実施（～10）
7月	Aタウン	「まるごDEわぃわぃ」放送開始
7月	Aタウン	「神戸まつり」にて「アジアパラダス」開催
7月	KFC	日本語ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ設置
7/3	YY	全国コミュニティ放送協議会『THE　BEST STATION 1998』受賞
7/16～23	AWEP	第2回　スタディツアー（タイ）
7/17～20	基地	神戸まつりに参加
7/19	基地	長田区民まつりに参加
7/19	YY	「神戸まつり メインフェスティバル」屋台参加（～20日）
7/19	YY	「長田フェスティバル」イベント（～20日）
7/25～27	基地	テント洗い大作戦。
7/28	YY	丸五市場にサテライトスタジオ開設。アジアタウン制作で生中継番組開始。
7月	YY	イメージソング「アジアの風」「77.8エフエムわぃわぃにて候」をCDに
7月下旬	基地	ボランティアの手で点字ブロック敷き詰められる。
7/28	AWEP	「アジア移住労働者はいま」シンポジウム開催→フィリピンNGOのメンバー7名を招待
8月	野北	夏祭
8月	Aタウン	新長田駅北地区における多言語標識等サイン施設設置計画を神戸市からの委託事業として開始
8月	YY	ながた便利マップ（タイムテーブルパンフレット）を制作し区内に各戸配布
8/2	YY	須磨海岸から公開生放送

8/6	GQ	「兵庫県地域国際化推進基本方針」カウンターレポート提出
8/8	YY	たかとり駅前サマーフェスティバル　イベント企画・番組中継放送
8月	YY	「第5回元気アップ長田たなばたまつり」 イベント企画・取材番組
8/8	YY	「鷹取駅前商店街夏まつり」をアジアタウンとが企画
8/9・10	基地	野田北部の夏祭り「盆踊り」
8/20	基地	明治中学校生徒による草抜きと花火の夕べ。　学園東第四仮設住宅にて
8/22	基地	住宅周辺住民との交流をはかる納涼会。　西尻池高層住宅にて
8/25	基地	明治中学校生徒による草抜きと花火の夕べ。　友が丘仮説住宅にて
8/30	基地	住民のお別れ会。　下中島仮設住宅にて
9月	野北	民間化借上住宅「シャロン鷹取東」完成
9/9	基地	永六輔氏による神戸マラソントーク開催。　ペーパー・ドームにて
9/19	Aタウン	アジアタウン第5回交流会開催。　基地集会室にて
9/25	基地	コミュニティプラザ発会式。　シルバーハイツ松風第二住宅にて
9/25・26	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第10部試写会。(@ペーパー・ドーム)
9/26	KFC	KFC第四回研修会　テーマ「国際結婚とこどもたち」。(@ペーパー・ドーム)
9月	KFC	日本語ボランティアのためのベトナム語講座開講
10月	KFC	ベトナム語による両親学級開講
10月	KFC	KFC 北米 STUDY TOUR を実施
10月	野北	「神戸景観ポイント賞」特別賞受賞
10/2	基地	野田北部自治会総会。　ペーパー・ドームにて
10/3・4	基地	「ふれあいの祭典」にアジアタウン屋台を出店。　明石公園にて
10/6	YY	兵庫県地域ラジオネットワーク連絡会（地域コミュニティーFM7局とAM1局）による ネットワーク放送「ラジネットひょうご」放送開始
10/6	YY	ラジネットひょうご第1回放送を担当。「神戸・長田の現状:まちづくり協議会・長田区社会福祉協議会」
10/30	GQ	「通訳ボランティア連続講座」開始（全4回）
10/31	GQ	KFC第五回研修会と「北米のNPOによる外国人支援活動」の報告会
10月	Aタウン	「兵庫県ふれあいの祭典」にて「ふれあい大交流プラザ」開催
10月	WKC	外国人の親、子ども、青年などの体験談を聞く会「この人のこんな話し聞きませんか？」の実施（～99. 3）
10月	タウン/KF	アメリカ西海岸のNPO視察旅行
10月～	WKC	ブラジル人、ベトナム人の中・高生によるラジオ番組「多文化子どもワールド」をFMわぃわぃにて放送開始
10月	Aタウン	長田区役所の多言語案内冊子を製作し配布
11月	Aタウン	「大阪NPOアワード98」で「みんなが主役の街づくり賞」を受賞
11月	野北	防災公園ワークショップ（第1回）　下町　情緒・路地フェスタ
11月～	WKC	外国人の家庭に、子どものフォローや過程と学校とのパイプ役として、ボランティア家庭教師の派遣
11月	YY	地域中学校体験学習「トライやるウィーク」受け入れ
11/1	YY	「細田・神楽ふれあい祭り」 イベント企画　取材番組制作放送
11/1	KFC	KFC秋まつり。
1/10～12	基地	市立太田中学生「トライやるウィーク松風第二」でボランティア体験
1/16～20	基地	市立高取台中学生「トライやるウィーク」でボランティア体験。
11/26	基地	「ふれあいなべ」参加。　長楽・若松ふれあいセンターにて
12月	YY	長田警察・長田消防署・神戸市環境局年末年始のインフォメーション
12月	YY	災害時緊急放送割り込み装置を長田区役所に設置
12/3	YY	「第12回宮崎賞・地域経営活動賞」 受賞
12/18	基地	ダリルコーリーコンサート。　ペーパー・ドームにて
12/20	基地	もちつき大会。　大国公園にて
12/23	AWEP	AWEP交流会「インドネシアから日本に来て」高野エレン氏。　子供の館にて
12/28	基地	年末・年始もボランティアによって、独居老人の安全のため又、家事支援・話し相手にと訪問は続く
12/31	YY	年末カウントダウン番組
1999		
？	野北	細街路美装化3路線完成
？	野北	細街路美装化新たに決定

1/6	基地	救援基地仕事始め。
1/16	基地	ボランティア同窓会開
1/17	YY	震災4周年記念事業 「1.17KOBEに灯りをinながた」イベント企画・番組制作・中継
1/17	YY	震災4周年・開局3周年特別放送
1/17	基地	「追悼と新生のための黙祷(ミサ)」。 ペーパー・ドームにて
1/17	基地	事務局ボランティアコーディネータの鈴木迪子さん活動を終えられる
1/29	ﾀｳﾝFAC	シンポジウム「多言語で災害情報を！ ～外国人住民への情報提供を考えるシンポジウム」。ひょうご国際プラザにて
1月	ﾀｳﾝFAC	ドキュメンタリービデオ 「多民族社会の風」を共同製作
1月	YY	神戸市のインターネットによる防災訓練に参加
1月	YY	「1．17KOBEに“灯り”を。」開催
1月	KFC	薬物予防講座(在日ﾍﾞﾄﾅﾑ人向け)開講
2月	KFC	韓国朝鮮語の媒介言語講座開講
2月	WKC	多言語による小学校入学説明会の実施(神戸国際交流教会、兵庫県在日外国人教育研究協議会との共催／英、伯、西、日の4言語で)
2月	基地	住民と地域の方々との交流を深める昼食会を始める。月1回で1年間続く
2/2～4	YY	市立西代中学生「トライやるウィーク」FMわいわい放送局にて体験学習。
2/4	基地	都立晴海総合高等学校の修学旅行生150名来訪、震災・救援活動・まちづくりの話を聞く
2/7	KFC	KFC2周年記念行事 パネルディスカッション開く。
2/11・12	基地	“人間のまち 野田北部・鷹取の人びと”第11部試写会。(@ペーパー・ドーム)
2/14	基地	「旧正月を祝うつどい in 神戸」。 駒ヶ林中学校体育館にて
3/6	基地	南木曽から11名の方が来訪。
3/7	基地	地域の人々から“花の苗”いただく。
3/13	基地	李政美コンサート。 ペーパー・ドームにて
3/13	KFC	NAGATA映像祭。 新長田ピフレホールにて
3/18	YY	特別番組「池田小学校5年1組、2組、3組からのFMわいわいへのエール」放送
3/16	基地	資源再利用のための廃品回収に参加
3/20	基地	東京のフリースクールの生徒15名来訪。
3/21	YY	「野田北部コミュニティ祭」イベント企画・特別番組放送
3/21	基地	受皿住宅の竣工式。 野田北部コミュニティ祭。
3/21～28	AWEP	インドネシア訪問(第3回 スタディツアー)
3/23	YY	特別番組「キッズサポート池田小学校生徒によるふれあい喫茶」放送
3/25	基地	たかとりコミュニティセンター準備委員会発足。
3/27	Aタウン	アジアタウン交流会。 ペーパー・ドームにて
3/30	基地	シルバーハイツの住民と小学生合同の花見遠足。
3/30	YY	第26回ラジネットひょうごFMわいわい担当番組「障害年金の国籍条項撤廃」
3月	野北	海運町2丁目受皿住宅完成
4月	野北	熊本弘照寺お礼の旅
4月	野北	スポット創生事業進む スポット創生事業(森のイベント)
4月	野北	コミュニティープラザ・ふれあい喫茶開始 きんぽうじゅ広場完成式典行なう
4月	YY	ユーゴスラビアの独立ラジオ局「B92」への支援活動を放送とホームページにて開始(～8月)
4/2	基地	お花見雨にて中止 屋内のでパーティーに変更。 長楽仮設住宅にて
4月	KFC	KOBE外国人支援ﾈｯﾄﾜｰｸ発足(幹事団体となる)
4/5	GQ	「移住労働者人権裁判基金」発足
4/10	基地	たかとり自慢の手料理で交流会。 真野ふれあい住宅にて
4/14	基地	お花見同窓会。 下中島仮設
4/22	基地	ママさんうさぎ〔台所ボランティア〕交流会(@北須磨教会)→これ以後SKATTになる
4/26～28	YY	韓国へ研修旅行
4/29	基地	“人間のまち 野田北部・鷹取の人びと”第12部試写会。 ペーパー・ドームにて
4/30	基地	中国語講座 基地に仲間入り。
4月	Aタウン	「第8回コープこうべ生活文化・福祉賞(虹の賞)」受賞
4月	WKC	ブラジル人のスタッフの雇用開始
5/1	KFC	パソコン教室の開設準備に着手。

5/4・5	YY	「キラリながた夢フェスタ」にてFMわぃわぃステージイベント企画。(@新長田駅前広場及びピフレホール)
5/7	基地	交流会。 月2回の割で　長楽仮設住宅にて
5/8	GQ	「こうべ地球村フェスティバル(NGO外国人救援ネット)」 三宮サンパル南広場
5/9	基地	医師による健康相談
5/12	YY	日本ケミカルシューズ工業組合のモニュメント除幕式・特別番組放送(12・13・15日)
5/14	基地	住民と地域との交流会。　真野ふれあい住宅にて
5/18	YY	近畿郵政局より『感謝状』
5/25	YY	兵庫県西財務事務所自動車税納付啓発多言語インフォメーション(～31日)
5/25	YY	第34回ラジネットひょうごFMわぃわぃ担当番組「趙博のビギナーズセミナー近未来落語」
5/29	基地	水道筋商店街のイベントにアジアタウン屋台出参加。
5月	WKC	外国人の子供達に関わる人たちに声をかけてネットワークで活動を促進するため、WKC実行委員会を結成。定期的な会議を持ちながら具体的な活動をより展開する
5月	WKC	多文化子ども大会の開催(鷹取救援基地にて／多文化共生センター・おおさかと共催)ブラジル、ベトナム、ペルー、中国、韓国、日本などの子どもたち約100名が参加。バーベキュー、世界のファッションショー、フェイスペインティング、紙芝居など子どもたちの進行で行う。
5月	TDC	たかとり救援基地内に団体設立
5月	TDC	コンピュータ・メンテナンス事業開始
6/2	基地	下中島仮設住宅全員転居されたので、ふれあいルームやその他の共用の部屋の片付けをする
6/4	YY	神戸市教育委員会よりトライやるウィーク支援協力の功労で「感謝状」
6/4	基地	仮設住宅高齢者支援　昼食会を開く。　長楽仮設住宅にて
6/5	基地	「トライやるウィーク」参加の中学生と草刈をする。　友が丘仮設住宅にて
6/8	YY	長田区総合防災訓練に参加・緊急割込み放送訓練・多言語での災害情報放送
6/6	基地	神戸西ブロック信徒大会。 六甲学院にて
6/7	YY	市立丸山中学生「トライやるウィーク」FMわぃわぃ放送局にて1週間体験学習
6/8	基地	大阪の松原高校から社会体験授業として施設訪問。　真野ふれあい住宅にて
6/12	基地	たかとりコミュニティセンター説明会。　基地集会室にて
6/12・13	基地	名古屋東海高校生50名ボランティア体験学習。
6/14	基地	市立太田中学生「トライやるウィーク」1週間さわやかに活動をしていった
6/15	基地	幻の1．17準備会1(東京SVAにて)
6/18	基地	大阪松原高校生20名ボランティア体験学習
6/26	基地	TCC準備委員会
6/26	AWEP	アジアを知る会「インドネシアの民主化運動と女性たち」集会
6/27・28	基地	在宅障害児支援。
6月	TDC	被災地コミュニティビジネス離陸応援事業に選定
6月	AWEP	被災地コミュニティビジネス離陸応援事業に選定
6月	FACIL	兵庫県被災地コミュニティビジネス離陸応援事業助成金により設立
6月	WKC	ブラジル人の子どもの母語学習教室の開始
7月	WKC	神戸中央教会にて、ブラジルのお祭り、第1回フェスタジュニーナの開催。 約100名のブラジル人を中心とした住民などが参加
7月～8月	WKC	外国人の子どもたちの夏休みの宿題サポート、居場所作りなどのための「夏休み子ども広場の開催」
7/2	YY	特別番組「元日本軍慰安婦が語る歴史の真実・宋神道さんの証言」放送
7/18	基地	AMDA兵庫主催の兵庫県在住のベトナム人を対象に健康相談会。
7/20	YY	第42回ラジネットひょうごFMわぃわぃ担当番組「趙博のビギナーズセミナー日本国旗」
7/20	Aタウン	真陽フェスティバルにアジアタウンが屋台出店
7/20	基地	資源再利用のための廃品回収に参加。
7/20	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第13部試写会。
7/22	基地	幻の1．17キャンセル。
7/23	GQ	「地域振興券の外国人差別を問う」集会開催(@神戸学生青年センター)
7/27	基地	神田神父　コロンビア地震の被災地へ(～8 / 6)
7/30	GQ	ボランティア勉強会開始(全4回)
7/31	基地	小学生とお年寄りの集い。　松風シルバーハイツにて
7/31	基地	TCC準備委員会。
8/15～23	AWEP	第4回　スタディツアー(フィリピン～タイ)

8/3	基地	介護保険の勉強会。
8/7	YY	長田区の七夕祭り。
8/7・8	基地	夏祭り。　大国公園
8/8	YY	「第6回元気アップ長田たなばたまつり」ステージ企画・番組制作
8月	FACIL	翻訳・通訳登録者の公募、レベルチェック、研修などを行う
8月	WKC	シカゴの多文化主義の教育者グループの招聘で、メキシコへの研修旅行の実施
9月～	WKC	ポルトガル語情報誌「A PATOTA」発行開始
9月～	TDC	NPO/NGO向けコンピュータリサイクル活動スタート
ヨ～翌2月	AWEP	被災外国人のための生活相談事例研究会共催事業
9月～	AWEP	在住外国人向けパソコン教室開設アクセサリー再生事業開始
ヨ～翌2月	AWEP	在住外国人女性へのサポートシステムづくり（日本語教室・ヨガ教室）開催
9/11	基地	コロンビア地震の現地報告会。
9/15	基地	この日より祝日は台所お休みとなる。
9/19	YY	「細田・神楽ふれあい祭り」 ステージ企画・番組制作
9/20	YY	特別番組「甲山事件」2カ国語での放送（～28日）
）月～12月	AWEP	在住外国人向けパソコン教室開設
10/1	リーフ	リーフグリーン設立準備会発足。
10/1	基地	外国人高齢者のためのコミュニティーステーション事業。 毎週木曜日
10月	YY	台湾大地震で台湾に住む外国人のために震災情報を6言語でインターネット放送
10/3	GQ	1999年度移動生活相談会開始（全3回）
10/7	TDC	パソコン教室開催
10/7	基地	GONGO解散
10/11	基地	Aタウンの坂田さんとFMわぃわぃの恭子さんの結婚式
10/12・14	基地	桐朋高校の修学旅行生基地見学と震災当時の話を聞く
10/17	TDC	設立パーティー開催
10/22	KFC	第3回地域国際化に対応した幼児教育を考えるセミナー。　KFC主催
10/23・24	Aタウン	「ふれあいの祭典」にアジアタウン屋台を出店。　明石公園にて
10/28	基地	台湾支援検討会
10/29	基地	第4回地域国際化に対応した幼児教育を考えるセミナー。
10月	WKC	市場や公園を舞台に地域を遊ぶワークショップに外国人の子どもたちも参加し、多文化忍者ごっこを実施（垂水おやこ劇場と共催）
11月	WKC	兵庫県主催の外国人県民共生会議が始まり、オールドカマーのコミュニティの中で、ペルー人など南米系のコミュニティの代表者もメンバーになる。2回目の会議から、ベトナム人コミュニティ、ブラジル人コミュニティの代表者もメンバーに参加できるよう要請し、受諾される。
11/7	GQ	「被災者自立支援金の外国人への周知徹底について」要望書提出（兵庫県）
11/9	YY	第58回ラジネットひょうごFMわぃわぃ担当番組「モンゴル民族芸能ホーミー大道芸」
1/11～13	YY	台湾地震支援プロジェクトチームが現地へ。
11/13	KFC	第3回日本語学習支援のための地域活動推進講座。
11/14	YY	「一七市（いちなないち）拡大版'99」イベント・屋台参加・取材番組
11/17	KFC	第3回地域国際化ボランティアのための地域活動推進員講座。
11月	野北	どんぐりフェスタ（きんぽうじゅ広場）
12月	野北	海運双子池公園工事着工決定
12月	YY	長田警察・長田消防署・神戸市環境局年末年始のインフォメーション
12月	TDC	市民向けインターネットステーション開設
12/18	YY	特別番組「中高生の夢チャレンジ」放送
12/25	基地	子ども向けパソコン分解教室開く。　基地集会室にて
12/26	GQ	「龍野に住むペルー人一家5人に在留特別許可を！」署名活動開始
12/27	YY	特別番組「在留許可を求めて」放送(28・29日)
12/29	基地	年末・年始も独居老人の安全のため又、家事支援・話し相手にと訪問は続く
12/30・31	Aタウン	多言語ゴミ出しサイン完成し、設置する。
12/31	YY	年末カウントダウン番組
2000		

？	野北	仮換地確定作業始まる
1月	TDC	外国人向けコンピュータリサイクル活動スタート
1/1	KFC	在日ベトナム人連絡会（関西連絡先：KFC）発足
1/10	基地	在日ベトナム人連絡協議会発足
1/15	基地	“人間のまち　野田北部・鷹取の人びと”第１４部試写会。 ペーパー・ドームにて
1/17	基地	「1・17追悼と新生のミサ」　　ペーパー･ドームにて
1/17	基地	「つどい1・17」　　東遊園地にて
1/17	基地	「市民の集い」　　東遊園地にて
1/17	YY	震災5周年記念事業「第2回　1.17KOBEに灯りをinながた」を開催
1/17	YY	震災5周年・開局4周年特別放送
1/17	YY	「1・17KOBEに灯りを」inながた。 JR新長田ピフレホール前広場にて
2/6	基地	テトの祝い。　マリスト国際学園にて
2/21	基地	神田神父　ベトナムへ視察。
2月	TDC	「市民活動とコンピュータ」をテーマに勉強会
2月	AWEP	神戸市職員研修「NPO体験研修」受け入れ開始
2月	WKC	ブラジルの青少年のためのフットサルサッカーチーム「ピッチブル」結成。 毎週日曜日マリスト国際学校にて練習開始。
2/1	GQ	「NGO外国人救援ネット」の名称を「NGO神戸外国人救援ネット」に改め、略称「GQネット」とする
3/5	基地	第１回野田北部何して遊ぼう会（鷹取教会にて）
3/7	基地	野田北部総会。　ペーパー･ドームにて
3/10	YY	神戸市広報課提供特別番組企画制作放送 夢こうべ～「外国籍住民とまちづくり」を語ろう～ （10日・17日・24日・31日:四回シリーズ）
3/25	基地	TCC（たかとりコミュニティーセンター）設立総会
3/25	TDC	第2回　子ども向けパソコン分解教室開く。　基地集会室にて
3/30	KFC	KOBEハナの会の遠足。
3/31	基地	SKATTの集い。
3月	野北	12路線の美装化完成
3月	WKC	外国人の子どもたちの現状を知ることとその課題の解決のために 活動に関わる活動者のための読本となるように、冊子発行
3月	WKC	多文化共生センターとの方向性の違いから多文化共生センター・神戸の活動を終了
3月	TDC	P&Gから大量のコンピュータ寄贈
4月	TDC	コンピュータの多言語環境構築事業に着手
4月	TDC	GTBからサーバー無償提供
4月	野北	海運双子池公園完成　長楽町2丁目まちなか住宅建設工事着工
4月	KFC	アメリカ NPO 研究会開始
4月	WKC	WKCが団体として独立し、鷹取教会内に事務所を移転。WKC実行委員会はキッズネットというネットワークとして、メンバーを拡大し展開する
4月	WKC	KOBE外国人支援ネットワークに加入
4月	WKC	ペルー人スタッフの雇用開始
4月	WKC	スペイン語番組「Salsa Latina」の制作開始
4/13	GQ	「求職に関するアンケート調査」開始
4月	FACIL	鷹取教会内に事務所を移転
4月	YY	丸五市場のサテライト・スタジオを一時休眠
4/1	基地	多言語センターFACIL、ワールド・キッズ・コミュニティーが基地内に事務所移転。
4/1	基地	海運双子池公園が完成
4/9	KFC	KFCとKOBEハナの会の相互花見。
4/17	基地	“新たきび”発刊。
4/23	基地	救援基地からTCC（たかとりコミュニティーセンター）に移行。
4/23	YY	「新しいまちづくりへの出発！NPO法人たかとりコミュニティセンター設立記念」記念式典中継生番組放送
4/25	YY	第82回ラジネットひょうごFMわいわい担当番組「石原発言の意味する事」
4/30	リーフ	リーフグリーン設立総会
5月	TDC	「市民とコンピュータ」（その２）をテーマに勉強会

5/4	リーフ	ふれあい昼食会　教会　台所 東屋
5/12	YY	特別番組「わたしたちは奴隷ではない」(12日・15日)・・中国人研修生の現状
5/22	リーフ	野点の会 第2・第4水曜日　ふれあい茶話会(手芸講習会付)
5/24	YY	長田区総合防災訓練に参加
5/24	YY	緊急割込み放送訓練・多言語での災害情報放送・防災訓練実況生放送
5月	リーフ	第3日曜日ふれあい茶話会、モーニング 自立支援活動としてホームヘルプサービス・移送サービス・子育て支援サービス開始
5月	リーフ	月1回活動者事例検討会
5/31	GQ	兵庫県弁護士会弁護士と協力体制に関する懇談会
5月	TDC	ホームページ制作事業スタート
5月	WKC	ブラジルの青少年のための義務教育終了認定書合格を目指す母語学習教室開始。10月の試験では3名が合格。
6月	WKC	ペルー人スタッフが編集長となって、スペイン語情報月刊誌「HYOGOLATINO」の発行開始。毎月400部発行
6月	WKC	神戸中央教会にて、第2回フェスタジュニーナの開催。約200名参加
6/13	GQ	2000年度移動生活相談会開始(全6回)
6/13	リーフ	太田中学のトライヤルウイーク受け入れ「高齢者との交流会」
6月	TDC	経済広報センターから大量のコンピュータ寄贈
6月	TDC	コンピュータネットワーク」をテーマに勉強会
7/1	GQ	代表が神田裕から飛田雄一へ
7/1	YY	神戸市教育委員会よりトライやるウィーク支援協力の功労で感謝状
7/8	基地	震災2000日
7/9	リーフ	大国公園フリーマーケット出店
7/20	リーフ	ふれあい昼食会
7月	TDC	コンピュータコンサルタント事業スタート
8月	YY	近畿電気通信管理局へ無線設備等点検実施報告書提出
8/4	YY	「第7回元気アップ長田たなばたまつり」イベント企画・取材番組
8/5	リーフ	野田北部夏祭り参加
8/13	YY	須磨海岸から公開生放送
8/15	YY	第98回ラジネットひょうごFMわいわい担当番組「神戸まつり南北統一パレード」
8/19	GQ	「龍野に住むペルー人一家5人に在留特別許可を！」ニュースレター発行開始
8月	WKC	スペインの子どもたちがサーカスで自立して暮らすコミュニティ「ベンポスタ子ども共和国」へ、 スタディツアーの実施(第9回)
8月	WKC	マリスト国際学校にて、関西ブラジルコミュニティが中心となって第1回フットサル大会の開催。 4カ国10チームが参加。
8/23	KFC	「地域振興券の外国人差別を問う」集会開催
8/31	基地	下山手教会にプレハブ倉庫完成
~01年1月	AWEP	地域推進連続講座6回 「在住外国人と強制のまちづくり」セミナー開催
9月	TDC	ベトナム語環境のパソコン教室スタート
9月	FACIL	神戸市多言語生活ガイド(7言語)ホームページ翻訳事業(神戸国際交流協会)
9月	FACIL	台湾地震支援として多言語地震情報提供活動の翻訳および事業コーディネート
9/9	KFC	外国人高齢者のためのコミュニティステーション事業(現:ハナの会ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ)開始
9/17	YY	国勢調査8言語でのインフォメーション(～10月7日)
9/20	GQ	「在留特別許可一斉行動からアムネスティーへ」東京神戸交流集会開催
9/23	リーフ	敬老のお祝い昼食会
9/30	GQ	「求職に関するアンケート調査」報告書作成
10/11	リーフ	野点の会
10/24	リーフ	池田小学校6年生　福祉体験受入れ「高齢者との交流会」
10/28	リーフ	大国公園フリーマーケット出店
10月	TDC	三宅島火山噴火被災者にリサイクル・コンピュータ提供
10月	TDC	リアルネットワークスからサーバー無償提供
10月	TDC	アメリカNPO視察旅行
11/5	リーフ	ﾋﾟﾌﾚ前フリーマーケット出店
11/8	リーフ	丸山中学のトライやるウイーク受入れ「高齢者との交流会」

11/14	KFC	日本語教室の秋まつり開催
11/14	YY	神戸の市民賞「ロドニー賞」受賞
11/16	リーフ	高取中学のトライやるウイーク受入れ「高齢者との交流会」
11/19	リーフ	活動報告会
11/20	AWEP	「セブ島の地域住民とニッポンのODA」TCC共催
11/24	基地	H-IMAGINEクラブ結成
12/3	リーフ	須磨水族園へ遠足
12/11	リーフ	復興住宅（大田第二住宅）集会所への出張茶話会開始（月１回）
12月	WKC	ブラジルの子どもたちを中心に、クリスマス会の実施
12月	TDC	tcc117.comドメインによるサーバー運用開始
2/10～17	AWEP	第5回　スタディツアー（ネパール）
2001		
1月	YY	５周年誌を発行
1月	KFC	KFC事務所、新長田事務所に統合
1月	TDC	市民版インターネットTV「WebActive.jp」事業に着手
1月～2月	AWEP	法的識字教室　4回シリーズ
2月	TDC	スペイン語環境のパソコン教室開始
2月	リーフ	神戸市配食サービス開始に伴い、川崎食品よりの委託配食開始
2月	リーフ	日本財団より福祉車両（車椅子２台対応）助成される
2月	WKC	ブラジル人スタッフがコーディネートし事務局を担う形で、関西ブラジルコミュニティを設立。定期的な会議開始。
3月	YY	近畿コミュニティ放送協会　第３回関西コミュニティ放送賞「CM部門」『幸せ湯』最優秀作品賞受賞
3/30	YY	「われら学校放送部」新参入神戸市立楠高校（夜間高校）ミキサー講習のため学校放送部に出向
3/31	YY	兵庫県立明石図書館郷土資料室からの依頼により「FMわいわい5周年記念誌」2冊送付
3月	TDC	インターネット技能講習会スタート（6言語対応）
4月	TDC	子ども向けパソコン分解・組立教室
4月	野北	野田北部まちづくりニュース今号をもって休刊
？	野北	野田北かわらばん創刊号発行
？	野北	ふるさとづくり検討会始まる
？	野北	他地区との交流始まる
？	野北	ふるさとづくり検討会（第4回）
？	野北	ふるさとづくり検討会（第5回）
4/6	YY	「われら学校放送部」8校へのミキサー講習を実施
4/11	YY	「ラジネットひょうご」連絡会参加＠AM神戸・・将来的なラジオ放送のデジタル化についての現状
4/13	YY	地域コミュニティ放送局の各地域での連携を活かしたネットセールス開始
4/13	YY	「神戸トヨペットコミュニティFMミュージックネット」兵庫県下神戸トヨペット店から　県下地域コミュニティ放送局8局をネットしての中継放送開始
4/14	DC　FAC	くらしに役立つ多言語情報誌「東西南北」発表会
4/17	YY	青森県弘前市弘前中学校修学旅行生徒フィールドワーク
4/17	YY	(財)阪神淡路大震災記念協会資料室に資料提供 ・・放送同時録音音源、写真、タイムテーブル、キューシート、ちらし、わいわいクラブなど
4/20	YY	郵政記念日特別番組「一日郵便局長」
5月	TDC	在日外国人向け6言語IT技能講習会スタート（～2002.3）
3/30	KFC	ハナの会遠足開始（淡路花博）
4月	KFC	日産NPOラーニング奨学金受け入れ開始
4月	KFC	KFC代表交代（神田裕　→　金宣吉へ）
4/9	KFC	KFC合同花見開始(妙法寺川公園)
4月	WKC	ブックレット／KOBE外国人支援ネットワーク編、「日系南米人の子どもの母語学習」に スタッフ3名が原稿作成、１２月に発行（～9）
4/29	GQ	西日本入国管理センター視察報告会「入管による収容と退去強制を考える」開催
4/30	リーフ	設立１周年記念総会と草笛コンサート
5/1	YY	「国民年金免除制度」のインフォメーション7言語で放送（中国語、ポルトガル語、タガログ語、ベトナム語、スペイン語、英語、韓国/朝鮮語）（～5月10日）
5/2	基地	教会敷地内紙ログ解体

5/3	YY	一七市拡大版'03春参加・・・「われら学校放送部」スタッフが会場の模様を番組制作のため取材
5/7	YY	特別番組「一七市拡大版'03春」放送(担当スタッフ：兵庫県立北須磨高校、私立啓名女学院、神戸市立楠高校、神戸市立鷹取中学校)
5/14	リーフ	加西フラワーセンターへ遠足
5/25	YY	「自動車税」告知スポット4言語で放送（中国語、ベトナム語、韓国/朝鮮語、日本語）（～5月31日）
5/26	TCC	松下電器とCCカレッジをペーパードームで開催
5/26	YY	長田区総合防災訓練に参加　特別番組「防災について」制作
5/28	YY	丸山中学校トライやるウィーク受け入れ（～6月1日）
5/30	YY	神戸定住外国人支援センター制作 「在日ブラジル人のためのFM日本語教室」テキスト&CD3枚組完成（ナレーション・録音FMわぃわぃ）
5月	TDC	NPO/NGOスタッフ向けIT技能講習会スタート（～2002.3）
6/9	YY	オリックスブルウェーブスからの依頼で韓国から入団した投手「がんばれク・デソン応援ディー」に参加
6/11	YY	太田中学校トライやるウィーク受け入れ（～6月1日）
6/22	YY	長田区総合防災訓練広報特別番組「防災について」14：00～　再放送6月23日11：00～
6/30	YY	FMわぃわぃスタッフ全体ミーティング（現在登録スタッフ205名/参加49名）
6月	KFC	やさしい日本語による IT 講習会（外国人対象）開始
6月	KFC	地域に共存する外国人住民と接するケースワーカーのための研修会開始（MISDON主催）
6月	KFC	兵庫県事業「生活復興のためのNPO活動支援事業」委託
6月	WKC	神戸中央教会にて、第3回フェスタジュニーナの開催。約300名参加
6月～	WKC	子どもの母語教室など主にブラジル人の子どものための、全国の活動実施者を訪問しネットワークを構築する事業の開始。国内の母語教室を訪問し、視察とネットワークへの呼びかけ。
7月	WKC	スペイン語情報誌「HYOGOLATINO」発行1周年記念パーティ実施。ペルー人などを中心とした南米のスペイン語圏コミュニティの形が見えてくる。
7月	TDC	地域の子ども達の手によるビデオ制作活動スタート
7月	NGOベ	NGOベトナムinKOBEの事務所開設パーティー
7月	FACIL	外国人児童生徒用、兵庫県学校生活ガイド（7言語）ホームページ翻訳事業（兵庫県教育委員会）
7/8	YY	”日韓共催2002FIFAワールドカッププレイベント” カウントダウンボード除幕式イベントプロデュース
7/12	YY	第10回「コープ神戸生活文化・福祉賞（虹の賞）」受賞
7/19	YY	新番組「ポルトガル語による日本語教室」制作（著作KFC）。入門編・初級編放送開始
7/20	YY	地域のお祭「真陽フェスティバル」参加・取材
7/29	YY	「若宮商店街夏祭り」に、電話中継などで参加
8月	野北	夏祭
8/3	YY	日本、在日、韓国ファーラム2001フィールドワーク受け入れ
8/5	YY	第8回長田たなばたまつり＠長田区役所前ステージコーディネイト
8/11-12	GQ	移住労働者と連帯する全国フォーラム2001関西開催（実行委員参加）
8/17	YY	第148回ラジネットひょうごFMわぃわぃ制作「新しい歴史教科書問題」
8/21	YY	全朝協フィールドワーク来社
8月	TDC	ビデオ制作活動（真陽たんけん隊）スタート
8月	TDC	子ども向けパソコン分解・組立教室
9/12	リーフ	男性のための料理講習と昼食会
9/15～23	YY	兵庫区歴史フェア開催：朝鮮通信使との歴史（電話中継、取材、ゲスト出演）
9/23	YY	JR新長田駅北地域東部ふれあい祭りイベントプロデュース
9月	リーフ	うきうき野田北部ミニディサービス開始（毎週木曜　野田北部集会所）
9月	TDC	障害者向けパソコン体験教室開催
9月	FACIL	ワールドカップ多言語情報提供のための翻訳事業委託（神戸市）
9月	NGOベ	中秋節の開催
/28-10/6	AWEP	「ネパールは今」写真展開催
9月	AWEP	FAXコミュニケーション・相談事業
10/6	YY	「同時多発テロ」市民支援委員会募金の告知5パケ英語版制作（英語番組「SOUND WAVES」で放送開始）
10/6	YY	「アフガニスタン避難民支援委員会」募金告知開始
10/8	YY	第5回天井川公園まつりイベントプロデュース
10/13	YY	第157回ラジネットひょうご”介護・福祉共同募金キャンペーン”クレジット付で放送開始(提供「わかさ生活」) 第一回はFMわぃわぃ制作「同時多発テロ」市民支援委員会募金の告知
10/16	YY	一日体験ボランティア神戸市立池田小学校6年生受け入れ

0/14～28	YY	神戸市市長選挙啓発スポット
10月	TDC	真陽たんけん隊ウェブサイト開設
10月	TDC	米国同時多発テロ・アフガン難民支援ウェブサイト「stop the violence」開設
11月	TDC	神戸市生活ガイド多言語（6言語）ウェブサイト開設
11/12	リーフ	王子動物園・甲南資料館へ遠足
11月	野北	鷹取駅舎を復興の町の顔に（神戸新聞 11/9号）
11/25	GQ	「外国人のための生活情報セミナー」開始（全4回）
11月	WKC	ブラジルへ教育環境の視察のための研修ツアーの実施。7名で6市に3週間滞在
11/5～9	YY	トライやるウィーク飛松中学
11/8	YY	神戸市立千歳小学校3年生見学
11/9	YY	FACILからの依頼により、日系ブラジル人現地調査のための研修旅行で訪問する日系ブラジル人施設への日本の演歌・歌謡曲CD提供
1/12～16	YY	トライやるウィーク高取台中学校
11/14	YY	神戸大学附属明石中学校フィールドワーク
11/17	YY	一七市拡大版　番組電話中継・取材
12月	KFC	KFCｸﾘｽﾏｽﾊﾟｰﾃｨ開催
12月	KFC	「在日マイノリティースタディーズⅠ～日系南米人の子どもの母語教育～」編集・発行
2002		
1/17	YY	「1.17　KOBEに灯りを　inながた」参加
1/17	YY	特別番組「1.17FMわぃわぃ設立記念番組」番組放送中「5元生放送　復興支援　特別番組　ふるさと元気への提言！～コミュニティ放送と一緒に～」
1/17	YY	AM神戸と地域コミュニティ放送局5局による同時生放送に参加
1/17	野北	震災メモリアルデイ　塚ちゃん＆千咲ちゃん 結婚おめでとう
？	野北	メモリアルカンファレンスーin KOBE
？	野北	北区大沢町ふれあいウォーキング
？	野北	路地遊びフェスタ
？	野北	野田北エコタウン スタート
？	野北	第2回復興とまち映像祭（青池監督）
？	野北	ふるさとネット定例会（毎月第3木曜日pm7:30）決定
？	野北	稲刈＆収穫祭in大沢町
？	野北	第5・第6地域活動推進講座（真野・河合）
？	野北	大沢町産新鮮野菜の朝市in大国公園
？	野北	イチゴ・玉ねぎ植付大作戦
1月	TDC	多文化な背景を持つ子ども達による映像表現活動（Re:C）スタート
1月	リーフ	リサイクルショップ開店
1月	リーフ	復興住宅元気アップ支援事業開始（1年間の委託）
1月	リーフ	心と体のリフレッシュ茶話会開始（ツボ体操）
2/6	YY	神戸市立鴨台中学校人権学習「国際理解・震災・防災・福祉・ボランティア活動」フィールドワーク
2月	NGOベ	旧正月を祝うつどい
2月	WKC	ペルーなどスペイン語圏の子どものためのスペイン語母語学習教室開始
2月	WKC	第2回フットサル大会の開催
3月	WKC	ブラジル視察報告書の発行
3/2	YY	KOBE国際交流フェア2002イベントプロデュース
3/28	YY	NHK「ふるさとマイタウン」の生中継
3月	リーフ	手芸作品展開催
4月	AWEP	「地域の仲間としてー在日アジア人女性が地域での子育て、生活について語るー」冊子発行
4/4	リーフ	妙法寺川公園で花見
4/25	GQ	「入管ウォッチャーズ」発足
4月	FACIL	多言語生活ガイドホームページ阪神版／全国版の翻訳事業（兵庫県7市1町）
5月	YY	国土交通近畿地方整備局からの依頼により、国土交通近畿整備局のURLと中学生の教科書「みなとの総合学習」物流編にFMわぃわぃが 掲載
5月	WKC	日本・ブラジル教育サポートセンターの設立。全国の母語教室などのブラジル人活動者を中心にネットワーク賛同者を招いて設立総会を開催する。

5月	KFC	第56回神戸新聞社会賞受賞
5月	KFC	KFC事務所隣に「生きがいしごとｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰ（わーす）」開設
5/12	リーフ	「しあわせの村」へ総会を兼ねて遠足
5/17～31	YY	「国民年金免除制度告知」中国語、ポルトガル語、タガログ語、ベトナム語、スペイン語、英語、韓国・朝鮮語で放送
5/21	YY	地域コミュニティ放送局近畿連絡会
5/25～31	YY	県税務事務所からの依頼「自動車税告知」日本語、韓国・朝鮮語、中国語、ベトナム語で放送
6月	リーフ	手芸グループ「すみれグループ」設立
6月	TCC	兵庫県委託事業「生き生き多文化コミュニティづくり事業」（TCC）
6月	WKC	旧神戸移住センターにて、第4回フェスタジュニーナの開催。約350名参加
6/1	GQ	生活相談ホットラインを夜間の時間帯へシフト
6/14～16	YY	コープこうべ「日韓交流ファッションショー」プロデュース
6/25	YY	自治体国際化協会フィールドワーク
6/29	YY	FMみしま防災特別番組電話中継依頼
7/3	YY	FMとよはし防災特別番組電話中継
7/22	YY	豊中在日コリアン夏季学校のフィールドワーク
7/28～30	YY	豊中市在日コリアン夏季学校フィールドワーク
7/28～30	YY	音楽のまち長田LIVE会場司会派遣年間契約での派遣
7月	WKC	スペイン語情報誌「HYOGOLATINO」発行2周年記念パーティ実施。（姫路と大阪で）
7/20・21	AWEP	神戸100年映画祭「神の子たち」ほか上映会共催
/28－8/4	AWEP	第6回　スタディツアー（インドネシア）
8月	野北	夏祭り
8月	TCC	「生活復興のためのNPO多文化イキイキ復興事業」開始
8/2	YY	長田神社前商店街振興組合からの依頼　新湊川　川開きに司会者派遣と電話中継
8/4	YY	第9回長田たなばたまつり参加　特別番組制作　番組提供「長田コミュニティビルダーズ4社」
8/12	GQ	「移住労働者に対する医療諸制度利用に関する政府見解をめぐって」要望書提出（兵庫県）
8/31	GQ	2002年度移動生活相談会開始（全5回、たかとりコミュニティーセンターと共同実施）
8月	FACIL	多文化共生調査報告書「神戸らしいグローカルな魅力づくり」作成（兵庫県神戸県民局）
8月	NGOベ	移動相談会（～2003. 2）
8/30	YY	NHKとの同時中継番組「ふるさとマイタウン」中継
9月	NGOベ	中秋節
9月	YY	番組「ねたのタネ」で「こうべっ子情報局」放送開始
9/8	YY	長田区総合防災訓練参加・特別番組「京都大学防災研究所巨大災害防災センターからの提言」
9/20	GQ	「相談窓口担当者のための実践講習会」開始（全5回）
9/29	YY	ガガガSP・LIVEコンサート「長田行進曲in長田神社」司会
10/5	AWEP	「聞きたい海外子育て事情」パネルディスカッション開催
10/14	YY	第6回天井川公園まつりイベントをプロデュース
10/16	リーフ	野点の会
10/20	YY	新番組「バーサムトレイス」放送開始
10月	TDC	NPO/NGO向けビデオ制作セミナー開講
10月	TDC	ITサロン「ToCo」開設
0月～1月	AWEP	アジアの料理教室4回「私の知らないアジア-聞いてみようアジアの生活シリーズ-」社会保障セミナー開催
10月	WKC	第3回フットサル大会の開催
10月	WKC	関西ブラジルコミュニティの独立に向けた準備が始まる。
11月	NGOベ	ベトナムコミュニティ理解講座（神戸市パートナーシップ、～2003.1）
2003		
1月	TCC	国際交流基金・地域交流振興賞を受賞
1月	野北	1.17震災メモリアルデイ
1/17	YY	「KOBEに灯りをinながた」ステージ担当
1/17	YY	解説記念特別番組放送
2月	野北	そばめし交流会（大沢町子供会・町民のみなさん）
2月	NGOベ	旧正月を祝うつどい

2/12	リーフ	男性のためのふれあいクッキング
2月～	リーフ	リサイクル手芸講座　月1回始める
2/21	KFC	ｾﾐﾅｰ 外国人にはじめて投票資格を認めた住民投票とその後～米原町村西町長をお招きして開催
3月	AWEP	アジア女性自立支援基金（スモールバンク）開始
3月	FACIL	多文化共生調査報告書「神戸らしいグローカルな魅力づくり」作成（兵庫県神戸県民局）
3月	野北	木造密集市街地都市再生
3月	リーフ	日本財団より軽トラックの福祉車両助成される
3月	TDC	神戸市北区社会福祉協議会のHP制作
3月	TDC	在日外国人のための多言語生活情報HP制作（14言語対応）
3月	TCC	Re:C活動報告「わたし・体温・セカイ」を発行
3月	AWEP	「アジアのお料理レシピとおはなし」冊子発行
3月	WKC	南米コミュニティHYOGOLATINOが中心になって、第１回プチワールドカップの実施。明石公園競技場で予選、神戸総合運動公園競技場で決勝戦。4カ国１０チームが参加。
3/21-30	AWEP	AWEPフェア（宮崎県・都城：N.Aギャラリー）
4月	WKC	関西ブラジルコミュニティが「関西ブラジル人コミュニティ」に改称し独立して旧神戸移民センターに事務所を設置。
4月	WKC	CBK、HYOGOLATINO、NGOベトナムin KOBEの３つの在日外国人コミュニティとTCCと兵庫県国際交流協会の３者で在日外国人コミュニティ自立支援「外国人県民サポート事業」の開始。各コミュニティに、72万円／年の活動費の支給。
4月	NGOベ	母語教室、ベトナム紙芝居事業開始（日本財団）
4月	KFC	KFC組織変更会員制導入、理事会設定
4/19	GQ	NGO神戸外国人救援ネットの集い2003開催
4/28～5/	AWEP	AWEPフェア（神戸：ふれあい工房）
4/30	GQ	カトリック中山手教会再建工事に伴い、事務所を下山手カトリック教会跡地に一時移転
4月	野北	長田コンベンション協議会 スタート
4月	リーフ	支援費・居宅介護事業開始
5月	リーフ	ホームページ開設
5月	YY	FMわいわい役員会開催（FMわいわい再建案が提案される）
5/18	リーフ	３周年総会
5月	FACIL	神戸市観光ガイド多言語（4言語）ホームページ作成（神戸市観光局）
5/24-25	GQ	「移住労働者と連帯する第4回ワークショップ」開催（実行委員会参加）
5/31	YY	役員会で再建案の討議開始
6/1	リーフ	みとろフルーツパーク・鶴林寺へ遠足
6月	TCC	兵庫県委託事業「在日外国人の自助活動を・・・事業」（TCC）
6月	TCC	多文化な背景を持つ子ども達によるアニメ制作活動スタート
6月	テック	ひょうご市民活動協議会の技術支援ワーキンググループとして活動開始
6月	テック	ITに関する情報交換やITサポートを開始
6/14	AWEP	AWEPセミナー「伝統織物のフィリピン現代女性の仕事」
/22～7/2	AWEP	インドネシアに出張
6/27	AWEP	シアトル・USAのNPO団体（中・高生10名）の訪問
7月	KIDS	ペルー民族ダンス教室を開始
7/12	AWEP	映画「平塚らいてうの生涯」神戸新聞松方ﾎｰﾙ　ロビーにて出店
8/1	YY	再建に向け再建委員会の設立。運営は再建委員会に移行
8月	TDC	FMわいわいに経営参画
/27～9/3	AWEP	AWEPフェア（神戸：ふれあい工房）
8/30	YY	再建に向けての説明会をペーパードームで開催
9月	TDC	市民メディアセミナー（電子・電波編）を開講
9/2-12	AWEP	「アジアの美―織物や布を通して見えてくる女性たちの仕事展」 フェアートレード製品展開催
9/3～12	AWEP	AWEPフェア（神戸：神戸学生青年センター）
9/5-12	AWEP	「アジアの布と手しごと展」セミナー＆ワークショップ開催→フィリピン・インドネシアより6名招待
9月-11月	AWEP	サバイバルセミナー（6回講座）
9/7	NGOベ	中秋節
10月	野北	美しいまちワークショップ（第1回）

10月	YY/TDC	ツール・ド・コミュニケーションとFMわいわいの事務所を統合
10月	YY	「天井川公園まつり」のステージをプロデュース
10月	FACIL	兵庫県内の医療通訳システム構築事業に着手
10/1	NGOベ	在日ベトナム人サッカーチーム支援（NTTドコモ）
10/5	GQ	「外国人のための労働セミナー」開始（全3回、3言語コース）
10月	テック	Jcafe主催「市民社会とネットワーキング」（神戸)運営ボランティア担当
10/11	NGOベ	青少年サッカー支援事業
10/12	GQ	2003年度移動生活相談会開始（全6回）
10/12	リーフ	野点の会（外国籍の方に着物体験）
10/17	YY	放送時間を正午～21時に短縮
11月	KFC	保育付き日本語教室開始
11月	TDC	NPO/NGOビデオ制作ワークショップ開催
11/16	AWEP	AWEPフェア（神戸：ふれあい工房）
11/30	TCC	たかとりコミュニティセンター多文化まつり（大国公園）
12月	リーフ	アメリカ・サラトガディケアセンターとの交流開始
12月	TDC	武庫川の治水を考える連絡協議会のHP作成
12/3	AWEP	HATこうべ国際プラザ　イベント参加
12/8	AWEP	JICA国際協力　フェスティバルinひょうご2003
12/11	リーフ	千歳保育所園児と高齢者・障害者との交流クリスマス会
12/23	NGOベ	高齢者のちまき作り
2004		
1/1	AWEP	関西日米婦人会バザー参加（ポートピアホテル）
1/17	NGOベ	震災記念日にフォーの炊き出し
1/17	YY	「1.17KOBEに灯りを in ながた」のステージをプロデュース
1/17	YY	震災9年特別番組
1月	TCC	FACILとツールドが兵庫県7市1町との協働で作成した多言語生活情報ホームページ（13言語、14種類）が「地域に開かれた町　総務大臣賞」を受賞
	TDC/YY	「HYOGONコミュニケーション祭」から公開生放送
2月	テック	「HYOGONコミュニケーション祭」で技術相談ブースを出展
2月	TDC	第2回アメリカNPO視察旅行
2月	YY	KOBE国際交流フェア2004をプロデュース
2/1	AWEP	兵庫県外国人教育協議会　講演会　物販参加
2/9～29	AWEP	AWEPフェア（神戸：神戸学生青年センター）
2/13	NGOベ	旧正月を祝うつどい
2/14	AWEP	NGO縦断フォーラム（三重/名古屋）AWEP活動紹介
3月	テック	アクセシビリテイー勉強会をコーディネート
3月	FACIL	西宮市国際交流協会の多言語ホームページの作成
3月	FACIL/YY	国立民族学博物館特別展「多みんぞくニホンー在日外国人のくらし展ー」へ協力（公開ラジオ放送など）
3月	KIDS	子どもたちのプチワールドカップ2004の開催（マリスト国際学校にて）
3月	KIDS	「教育現場のQ&A集」（スペイン語、日本語）の発行
3月	TDC	在日外国人の生活情報サーチエンジン「ZURARI」開発
3月	TDC	真陽たんけん隊の映像作品上映会を開催
3月	TDC	西宮市多言語生活ガイドのホームページ制作
3月	YY	国立民族学博物館の特別展「在日外国人のくらし」会場から公開生放送（～2004年6月）
3/24-4/7	AWEP	AWEPフェア（神戸：ふれあい工房）
4月	テック	事務所開設
4月	YY	ステーションキャンペーン「人の命は地球より重い」開始
4/25	NGOベ	日曜健康相談会開催（カトリック鷹取教会敷地内にて）
5月	FACIL	神戸市観光誘致事業の一環として神戸市観光ガイドブックの多言語化（3言語、4種類）
5月	KIDS	国立民族学博物館特別展特設スタジオで子どもたちのペルーダンス披露
5月	KIDS	同　　世界の親たちの教育座談会開催
5/8	AWEP	KOBE発国際フェアトレードDay　ーフェアトレードフェアinひょうごー（神戸北野工房講堂）

5/11	AWEP	やってみよう,国際協力！連続セミナー①「タイ移住女性の日本での生活と帰国後の支援」
5/23	リーフ	淡路･夢舞台へ遠足（4周年総会）
5/29	YY	再建にﾒﾄﾞ。新しい役員体制スタート
5/29	YY	エフエムわいわい友の会を解散し、新サポート組織「わぃわぃクラブ」発足
6月	TDC	神戸市西区社会福祉協議会のHP制作
6月	YY	FMわいわぃのHPを全面リニューアル
6/4	テック	団体設立総会を開き「ひょうごんテック」として活動開始
6/16	リーフ	野点の会（太田中学トライやる･常盤女子高福祉体験）
6/19	AWEP	やってみよう,国際協力！連続セミナー②「ﾌｨﾘﾋﾟﾝ･ネグロスの人びとは今」
7/1	AWEP	やってみよう,国際協力！連続セミナー③「ｱﾌｶﾞﾆｽﾀﾝのぶどうの木を育てる」
7月	テック	ひょうごんテックのホームページ完成
7月	テック	東京のNPO「eparts」との連携によりリユースPC配布事業開始
7月	YY	長田神社地域の夏越ゆかた祭をプロデュース
7月	TCC	兵庫県から生活復興のためのNPO支援事業を受託
7月	TCC	Re:Cの新作「My Memory」上映会を開催
7/11	NGOベ	ベトナム青少年サマーサッカー大会（姫路にて）
8月	テック	第一回地域型リユースPC配布事業締切　5団体6台配布決定
8月	YY	KOBEユニバーサルデザインフェア2004をプロデュース
８月～	リーフ	復興住宅元気アップ活動支援事業委託開始
8/25	NGOベ	ベトナム人高齢者のぶどう狩り遠足
9月	テック	コミュニティビジネス離陸応援事業に選定
9月	テック	わーすとの共催でパソコン講座開始
9月	テック	定期メンテナンス事業開始
9/13	AWEP	多文化保育「手作りお弁当を食べながら」
9/26	NGOベ	中秋節のつどい
10月	YY	新潟中越地震の被災外国人に情報提供活動を展開
10月	YY	台風23号の被災外国人に情報提供活動を展開
10月	TDC	越木岩神社相撲大会の記録ビデオ作成
10月	YY	「天井川公園まつり」のステージをプロデュース
10/2	リーフ	特定非営利活動法人リーフグリーン設立総会
10/9	AWEP	やってみよう,国際協力！連続セミナー④「お買い物で国際交流」
10/16	NGOベ	ベトナム人高齢者の遠足（神戸市シルバーカレッジへ）
10/23	NGOベ	ベトナム文化体験セミナー（～2004/11）
10/25	YY	台風23号の被災外国人に情報提供活動を展開
10/25	YY	新潟県中越地震の被災外国人に多言語で災害情報提供
10/30	AWEP	多文化共生フィールドトリップ①：TCC→須磨浦水族園
11月	テック	台風23号25号被災地向けリリーフPCプロジェクト公募開始
11月	テック	地域活動推進講座「市民のためのインターネット」開催
11月	TCC	Re:Cの新作「レモン」上映会を開催
11月	TDC	滋賀県人権活動団体群の活動記録ビデオ作成
11月	TDC	HYOGONコミュニケーション祭2004の記録ビデオ作成
11月	TDC	神戸医療生活協同組合「健康まつり」をプロデュース
11/4	NGOベ	ベトナム人高齢者とシルバーカレッジの学生と交流会
11/7	リーフ	フルーツフラワーパークへ遠足
11/13	AWEP	やってみよう,国際協力！連続セミナー⑤「平和な世界を築くには」
11/13	AWEP	多文化共生フィールドトリップ②：TCC→須磨浦水族園
11/12	リーフ	野点の会
11/16	AWEP	AWEPフェア（神戸：ふれあい工房）
11/19-24	AWEP	AWEP第7回スタディツアー（フィリピン）
12/3	AWEP	HATこうべ国際プラザ　イベント参加
12/8	AWEP	JICA国際協力　フェスティバルinひょうご2003

12/10	リーフ	3世代交流クリスマス会
12/11	NGOベ	在日ベトナム人世代別ワークショップ（～2005/3）
2/13～14	YY	新潟県中越地震の被災地（長岡市、十日町市）の外国人支援団体訪問
2/22～23	NGOベ	高齢者のちまき作り

2005

1月	NGOベ	ベトナム出前キッチン事業開始（夢基金）
1月	テック	リリーフPCプロジェクト第一期締切　6団体12台配布決定
1月	テック	外国人研修生向けPC研修開始
1/17	YY	「1.17KOBEに灯りを in ながた」のステージをプロデュース
1/17	YY	震災10年特別番組
1/17	NGOベ	震災１０周年のためフォーの炊き出し
1/22	AWEP	震災10年　追悼と共生・共栄の集い　物販参加（新長田ピフレ）
1/27	リーフ	NPO法人格取得
2月	テック	リリーフPCプロジェクト第二期締切　5団体6台配布決定
2月	TDC	東灘地域助け合いネットの活動記録ビデオ作成
2月	TCC	Re:Cの新作「在日でいることの意味」上映会を開催
2/3	AWEP	兵庫県外国人教育協議会　講演会　物販参加
2/14	AWEP	NGO縦断フォーラム（三重/名古屋）AWEP活動紹介
2/9-2/29	AWEP	AWEPフェア（神戸：神戸学生青年センター）
2/13	NGOベ	旧正月を祝うつどい
3月	NGOベ	麻薬防止キャンペーン事業開始（ファイザープログラム）
3月	テック	山形の地域型リユースPC視察
3月	テック	甲南女子大学でホームページ作成講座開催
3月	テック	台風23号で被害を受けた豊岡を視察
3月	YY&TDC	映像ポータルサイト「わぃわぃTV」オープン
3月	TDC	真陽たんけん隊の映像作品の新作上映会を開催
3月	TDC	市民による追悼行事を考える会のビデオ作成
3月	TDC	神戸市のホームページを多言語化
3月	FACIL	神戸市広報課ホームページの多言語化（7言語）
3月	FACIL	医療通訳ガイド派遣のモデル事業に着手
3月	TDC	自治体国際化協会と協働で全国の自治体の多言語ホームページリンク集を作成
3月	KIDS	母子保健ガイド（スペイン語）、日本の伝統行事・習慣ガイド（スペイン語、日本語）、ペルーと日本の家庭料理レシピ集（日本語、スペイン語）を発行
3月	KIDS	子どもたちのプチワールドカップ2005の開催
3/3	AWEP	AWEP10年を迎えて「アジア・女性・神戸・震災」開催（神戸学生青年センター）
3/20	YY	KOBE国際交流フェア2005をプロデュース
3/20	NGOベ	神戸国際交流フェアに参加
4月	FACIL	「世界の食とおもてなしの出前サービス」事業に着手
4月	TCC	たかとり教会再建中の事務所をアスタ4番館2階に決定。各団体が順次、事務所を移転へ
4月	テック	リリーフPCプロジェクト第三期締切　3団体4台配布決定
4月	YY	「バリアフリー2005」で公開ラジオ放送
4/30	リーフ	特定非営利活動法人リーフグリーン第１回定時総会開催
5月	FACIL	NPO法人申請の準備へ
5月	FACIL	たかとりの10年誌「たきび」の発行、10年記念フォーラム開催のための事務局を担う）
5月	テック	第二回総会
5/15	YY	第0回わぃわぃクラブ大賞
５月	TDC	長田区社会福祉協議会「社会福祉・ボランティア学習の手引き」CDを作成
5/14-15	AWEP	「KOBE発　国際フェアトレードディ」開催　（北野工房）
5/28-29	TCC	たかとり10年感謝祭

5月28、29日　たかとり10年感謝祭
ペーパードーム、台湾に移築・新たな使命

たかとり教会　速水晴子

五月二十八日、二十九日の両日、たかとり教会で「たかとり十年感謝祭」が行われた。教会と「たかとりコミュニティセンター」（以下、ＴＣＣという）は、地域の人々とともに多文化共生のまちづくりの拠点として活動してきた。震災から十年を経て、教会の再建を前に、台湾に移築されるペーパードームで最後の多文化的な催しとしてこの感謝祭が計画された。

＜記念フォーラム＞

会場のペーパードームには、正面左に、燃える聖堂を背にしたキリスト像の大きなパネルが置かれ、紙の支柱には震災後のたかとりを写した写真や油絵が展示された。

二十八日午前十一時三十分、ＴＣＣ代表でたかとり教会の神田裕神父は「震災後多くの出会いの中で歩んできた。新たな一歩をふみ出す前に感謝の一日をもちたい。今までの出会いを振り返るとともに今後について語り合っていこう」とあいさつ。第一部記念フォーラム「たかとり十年をふりかえって」（写真上）の幕は上がった。

ＴＣＣ常務理事の吉富志津代さんをコーディネータに各パネラーが紹介された。ウッディクリエイト南木曽の会長松瀬博敏さんは、「グループの若手メンバーらが神戸の木材不足や救援基地の話を聞いて支援を決意。十トントラック十数台に原木を積み、被災地に提供した。南木曽の人々の熱い思いを代行したが、被災地のボランティアの熱意に感動した」と語った。

坂茂（ペーパードーム設計者）建築設計事務所のスタッフで、震災後、学生ボランティアとペーパードームや紙のログハウスを建設し、現在、新しいたかとり教会の設計にも関わっている石田摩美子さんは「十年前の八月、何もないひまわりだけが咲いている場所でこれから何ができるか考え、立ちつくした。でも実際は、教会の敷地内は別世界で、夜も会議をする熱気にあふれていた」と当時をなつかしんだ。野田北部まちづくり協議会事務局長の河合節二さんは「私は教会の幼稚園の卒園生だが、震災後、夜回りをしていて、灯りを求めてたき火に来ると、幼稚園の先輩たちがいた。その後、地域の仲間と十年間まちづくりに関わってきたが、幅広い年令層のボランティアとの出会いは大きないやしになった。地域の区画整理の最終合意をこのペーパードームでえられたことは思い出深い」と述べた。

＜歴史をかみしめて＞

神田神父は、「十年ではなく、もっと長いスパンで振り返ってみたい。一九二七年に教会ができた。司祭館は、その昔、外国人居留地で銀行として使われていた建物を移設したもので、築百年くらいが経ち、フランス人の神父たちが見守ってきてくれた。教会は在日韓国人の力でスタートし、五〇年スイス人のフロドボー神父が、教会と地域との交流を考えて幼稚園をつくった。八七年の閉園まで多くの卒園生を数え、彼らがここに戻ってきて、震災後のまちづくりに関わってくれた。五月三日、リーフグリーンがＴＣＣ最初の引っ越しで新たな出発をした日に、フロドボー神父は帰天した。神父の思いが今こそ生かされて

いると感じる。
　私は九一年、たかとり教会に赴任したが、当初教会は会員制クラブのような閉じられた世界に見えた。スペインの子どもサーカス『ベンポスタ』との交流が、地域における外国人との共生のきっかけになった。さらに震災後、神戸の外国人とともにまちづくりをする中で、教会はしだいに大衆酒場のように開かれたものになってきた。たかとりはここを知る、ここにつながるすべての人のたかとりであり、その方々に多くのやさしさをありがとうと言いたい。大きくつながった皆が一年後に新たにこの地に戻ってこられるように祈っている」と語った。
　これからも人とのネットワークを広げていくことを願って、百余人の参加者の拍手でシンポジウムの幕は閉じられた。

＜野外でイベント＞

　午後一時、会場をペーパードームの外に移し、青空の下、紹興酒の鏡割りで第二部「たかとりコミュニティセンター感謝祭」（多文化、多民族、地域融合、食と音楽の祭典）の幕が切って落とされた。
乾杯のあと南木曽から贈られた臼でついた餅が振舞われた。特設ステージでは南木曽出身の栗山真治さんのライブ、ベトナム青年ナムさんのライブ、ひばりそっくりさんの歌謡ショウや復興隊の歌が披露。屋台ではインドネシア、タイ、フィリピン、ペルー、ベトナム、韓国、中国、日本の各国料理が振舞われ、参加者は三時過ぎまでイベントを楽しんだ。

＜最後のミサ＞

　二十九日午前九時三十分、約三百人の参加者を迎え、ペーパードームでの最後のミサが、神田神父とパオロ・スック神父(聖サベリオ宣教会／震災時たかとり教会に居住)によってベトナム語と日本語で捧げられた。
　神田神父は「今日は十年をともに歩んでこられたことに感謝し、一年後、もう一度ここに戻ってくる約束のミサである。この一日をしっかり心に刻もう」と話した。フランスからかけつけた坂さんは、たかとりとの出会いによって建築家としての生き方に目覚めたと述べた。また台湾の寥嘉展さんは、五年前の台湾中部地震の後、神戸との交流が始まり、その中でペーパードームの移築が決まった経緯を説明、「多くの愛のつまったペーパードームを台湾にもち帰り、日本の地震の経験を生かしたい。来年台湾のペーパードームを見に来てください」と熱く語った。パオロ神父はたかとりを船長にたとえ、「たかとりは皆のことをまっ先に考え、地域を見守ってきたが、今再建に移ろうとしている。たいへんだったけれど、また楽しい十年でもあった。これからも前を向いて、たかとりらしく歩んでほしい」と述べた。最後に全員で大きな声で「ありがとう」と叫んで、祝福のうちにミサを終えた。

生活感と自由な空気に魅了されて

鷹取は豊かで楽しいところだ。10年前も5年前の3年前も、そして今もそう思う。私は結局、阪神・淡路大震災から10年のほとんどの時間を鷹取で過ごした。「結局」というのは、何度か「ここまでかな」と思ったことがあったからだ。でも、なぜか残った。

震災直後からのボランティア活動の場だった鷹取は、まちづくり活動を深めていくとともに私にとって仕事場になっていった。そしてさらに仕事場から生活の場になっていった。生活の場にはいつも多種多様な仲間達がいた。老若男女、国籍も多様な仲間達と一緒に働き、学び、遊び、語り、飲み、食事をし、実に楽しい10年を私は鷹取で過ごさせてもらった。

でも、それだけの理由で10年は続かなかったはずだ。その答えがみつからないまま10年感謝祭を終え、8つの活動場所は鷹取教会から隣町の商店街ビルに移った。ペーパードームがなくなり、プレハブ群も次々と解体されていく鷹取を、少しだけ遠くから感じるようになって、私はやっと答えを見つけることができた。

それは「自由な空気」。

多文化共生のコミュニティセンターをつくりあげたのは、市民活動をする者達の創造力を育む自由な空気がそこにあったからだ。でもその自由は、授かり物ではなく、また元からあったものでもなく、陰に日向に市民活動を支えてきてくれた人達によってもたらされたものであることを、忘れてはならない。

世界各地から行政、メディア、NPOなどのさまざまな分野の人達が鷹取を訪れ、繰り返されて来た質問とその答え。

「どうしたらこんなセンターができるんですか？」
「気がついたらこうなってたんです」

なかなかそうは言えない。

日比野 純一

かんちゃん日記 asutaiten編

〔asutaiten〕は、たかとり教会及びTCC再建に係る新長田のアスタくにづかへの引越作業のために用意された、各団体や協力者のみなさんの連絡用メーリングリストです。2005年5月に無事引越を終えた後も引き続きそれぞれからの報告お知らせの場として利用されています。ここからはその〔asutaiten〕に投稿された神田さんのたかとり解体作業報告を抜粋してお届けいたします。

[asutaiten 103] ゴミのこと　2005/05/20

神田＠たかとり教会内　です。

一昨日とは打って変わって紫外線一杯の好天気。
昨日は9時半から作業が始まりました。
釘を除くための新兵器は実は磁石だったのですが
なんとステンレスの釘がたくさんあって完全には吸いとらず
手作業は免れません。

いつものメンバーに池田の節ちゃん、須永さん、ヴィンさん参加で始まりましたが
途中千秋さんが立ち寄ったついでに作業に参加。
高木さんの「千秋さん、釘踏んで空気が抜けないように。。。」
の言葉に励まされて化粧もはげ落としながら一仕事。
残念ながら釘を踏むことがなく
空気が抜けてしぼむことはありませんでした。
しかし化粧がはげた分小さくなったかも。
友だちを神戸で案内をしていてたまたま教会に来たフン君も手伝ってくれました。

午前中にトラック一杯になり昼食後にグエン・池田ペアで第1便出発。
昼食はさすがにカップラーメンは飽きてきたので
川福さんがスパゲッティを作ってくれました。
焼きそば風スパゲッティは美味。
それにツェットが作ってくれた手あか付のおにぎり。

昼からはエプロンほっかぶり姿の吉冨隊長率いるファシル特殊部隊3人が参加。
釘拾いぐらいと思いきや何の何の。。。。
一人10馬力の特異体質？を活かしてあっというまに裏手の廃材が片付いてゆきました。
そういえば大学時代に女子プロレスに誘われてたと言ってたなぁ。
空手をしていた妙ちゃんもいたなぁ。
知らんかったけど津川さんって重量挙げでもしてたんやろかぁ。
煎餅屋の山本さんもみんなのマスクを持ってきてくれてヘルメットをかぶって参加。
重たい荒ゴミもあっという間に仕分けされてゆきました。
たくさんの大工道具も新しい場所に移動されました。

そうそうファシル特殊部隊の陰に隠れて言いそびれたが
YYのK太郎、TCC金治くんの普通部隊も参加。
ファシル特殊部隊の下請け？をしっかり担ってくれました。

作業的には黒板などの化粧板剥がしが大変なことでした。
4時半にはトラックがまた4メートルの山盛りになり
ヴィン・池田ペアで第2便が出発。
後半高山君が今日は葛餅を持ってきてくれました。

これでほぼ大きなゴミは片付けられました。
先週土曜日の解体前作業から約1週間。
たくさんのみなさんの協力で大きな仕事が出来ました。
どうもありがとうございます。

しかしこれで終わったわけではなくまだまだ続きます。
仕事の合間にまた教会のほうに顔を出してくださいませ。

[asutaiten 139] テント大作戦　物語　2005/05/25

神田＠たかとり教会内　です。

震災直後はたかとり教会の敷地はテントで張り巡らされていた。
「阿倍野教会」「玉造教会」「愛徳学園」などの名前の書いたテントが
それぞれから支給されてきた。
それらのテントは現在は12張マリスト学園に保管されている。

テントは金曜日に張る予定だったが急きょ今日張ることに。
きっかけは兵庫教会からの連絡だった。
今度の日曜日にバザーがあるのでテントを貸してほしいとのこと。
じゃ先にたかとりの分を取りにいこうと
軽トラに乗って川福さん、池田さん、高木さん、須永さんの5人でテントを取りに出動。
Br.ラモンに連絡がつかずマリスト学園に連絡してOKをとる。

たかとりで買った新しい簡易テントと鈴蘭台教会から借りた簡易テントがあるので
マリストテントを3張だけ持って帰ることに。
たかとりに戻って張り出したのだがいつもの通りテントの骨組みが数本足りず。

ここで昼食。
ローソクを取りに来た長谷部くんも一緒にツェット特製のサラダとうどんを食べて
再び作業開始。
まずはローソクを車に積み込んで長谷部くんは出発。
そのあと足りない骨組みを取りに川福さん、高木さん、須永さん、金治くんの５人で
今度は2tトラックに乗ってマリストへ。

この間、教会では田辺さんは発泡スチロールの荒ゴミを軽トラで運び出し。
岡村さん夫婦はたくさんの廃棄波板をロープで束ねてくれた。
ヴィンさんは軽トラでクーラー、冷蔵庫をリサイクル店へ運び出し。

マリストへは兵庫教会の分も持っていくつもりで行ったのだが
なんせどれがどの骨組みか分からず
結局は全部のテントを持っていこうということに。
積み込むのに大変だったことといったら。。。ふぅ。
この時点で応援部隊を電話でトミちゃんに要請。

たかとりに戻りすべてを庭にひろげて作業開始。
関さん、吉野さん、水野さんが応援に参加。
テントを立てている内にだんだんと波に乗ってきて
もう全部のテントを張ってしまおうということに。。。

兵庫教会に渡すにしても骨組みを合わすために一度組んで見なければならず
そこまでするんならいっそのこと兵庫には鈴蘭台からの新しい簡易テントを渡そうということに。
簡易テントはアルミ製でワンタッチで開いてくれる優れもの。

それに比べマリストテントは手を挟んで怪我をしながら力づくで立てねばならない。
それでもたかとりではこのテントは一緒に震災を乗り切ってきた大切な「仲間」だ。
たたまれたテントを開いてゆくと独特のにおいがする。
銀杏の実ををつぶしたような酸っぱいような何ともいえないにおいだ。
あの時のにおいだ。
古いテントは作られてから２０年以上も経っている。

旧ファシル跡に2張。これはピッタリとハマった。
旧印刷室前に1張。受付に使えばいいのでは。
旧こどもの館跡に2張。1張はちょうどトイレの前に立ててトイレの目隠しにもなった。
この前では食べ物系が来るかもしれないが少なくてもカレーは避けたほうがよさそうだ。
旧NGOベトナム前に1張。これはステージのPA用か？
旧リーフグリーン前に2張。これは奥の荒ゴミの目隠しにもなる。

全部で8張が立ち並んだ。
何となくタイムスリップしそうな気分になってきた。

終わってみれば6時を回っていた。
1時間のつもりで手伝いに来てくれた応援部隊のみなさん、
どうもすんません。
今日も一日大変な作業でした。

作業を終えてみなでホッと一息休んでいると Br.ラモンから電話が。。。
「全部張ってしまったのですか？
今度の日曜日に別のNGOが8張使用予約が入っているのに」
「え～っ！ぎぇ～っ！ほんまですか～。
な、な、なんと言うこと。。。」
こちらから先方に直接電話して、、、
「すみません。実は。。。」
「それは困ります。こちらは大分前から予約していたのです。」
「・・・・・・・」

折角一日かけて立てたテントをたたまなければならないのか。。。。
それはなんとしても避けたいなぁ。。。。

電話をして結局鈴蘭台教会のあった別の旧式テント6張があることを突き止め
なんとかそれを使ってもらうことに。。
助かったぁぁぁ～。

グエンさんは奥さんと一緒に教会内の荒ゴミを軽トラに積んで運んでくれた。
彼らと池田さん、川福さんとで事務所で色々片付けのことなど話し
9時過ぎに一段落してそろそろ解散。。。とその時。。。
アメリカから帰国してきた橋本くんから電話が入った。
「あと40分でそこに行けるけどいますか？」
「みんな待ってるからおいでぇ」
ということで、川福さん、池田さんの3人で待つことに。

それからがちょっと大変！？
連日の作業で遅くなり、また飲んで帰るものだから奥さん方はオカンムリ。
まずは池田さんが奥さんに電話。
受話器の向こうの声がこちらまで聞こえてくる。
なかなか埒があきそうもない。
私が電話を変わって事情を説明。
お酒を飲まないことと今日中に帰ることを約束して許可をゲット！
川福さんの奥さんには池田さんが電話して許可をゲット！

そう考えるとグェンさんは偉い！
連日教会の手伝いをして内職の仕事をおろそかにして奥さんはオカンムリ。

でも今日はちゃんと奥さんと一緒に作業をして私たちとも話して
ちゃんと教会の仕事をしていることをアピール！

みんなここ1ヶ月ほど毎日コツコツと仕事をしてくれてるけど
ボランティアをするってことはいろんな意味でもたいへんなんだなぁ。
個人の気持ちだけじゃなくて家族の理解があって初めてできることやなぁ。
涙ぐましいなぁ。

懐かしい橋本くんが教会へやってきて
日比野さん、吉富さん、千秋さんも夜中の１１時ごろやってきた。
話が盛り上がって盛り上がって気がついたら1時をすっかり回っていた。
もうすぐ丑三つ時やん。。。。で解散。
もう最終電車もすんでるし、どうやってみんな帰ったんやろかぁ。

たかとりは昔も今も不夜城だぁなぁ。

ところで今日も川福さんと池田さんは家でしぼられるんやろなぁ。

みんなここ1ヶ月ほど毎日コツコツと仕事をしてくれてるけど
ボランティアをするってことはいろんな意味でもたいへんなんだなぁ。
個人の気持ちだけじゃなくて家族の理解があって始めてできることやなぁ。
涙ぐましいなぁ。

懐かしい橋本くんが教会へやってきて
日比野さん、吉富さん、千秋さんも夜中の１１時ごろやってきた。
話しが盛り上がって盛り上がって気がついたら1時をすっかり回っていた。
もうすぐ丑三つ時やん。。。。で解散。
もう最終電車もすんでるし、どうやってみんな帰ったんやろかぁ。

たかとりは昔も今も不夜城だぁなぁ。

ところで今日も川福さんと池田さんは家でしぼられるんやろなぁ。
ご愁傷さま様ぁ。

[asutaiten 167] 最後のカレー　2005/06/01

神田＠たかとり教会内　です。

たかとり教会は震災後10年間ガスは止まったままでした。
その代わりプロパンで10年を過ごしてきました。
そのプロパンを今日の12時に業者が引き取りに来ました。
ちょうど台所では作業をする私たちのためにお昼のカレーを作っている最中。
業者の人もカレーが出来上がるまでは待っていてくれました。
明日からは台所で料理をすることができず
文字通り、最後のカレーとなりました。
かよさん、大見夫妻、ごちそうさまでした。

今日は9時過ぎにはグエンさんが来て作業開始。
いつものメンバーもぞくぞく出勤。
１０張のテントをトラックでマリストに運びました。
テントの荷降ろしはたいへ～ん。
巨大机や舞台、典礼用品、会計関係事務用品もマリストへ運びました。

ひびちゃんとK太郎くんはイベントで借りていた餅つきセットを地域へ返しに。
ペーパードームの椅子も片付けてくれました。
高木さんにペーパードームの電気を止めてもらいました。

昼からは私は会議に出かけたので進捗具合は分かりません。

ずっと暑い日が続いています。
紫外線が強く顔や手が日焼けでだんだん黒くなってきました。
そろそろみんなも疲れがピークに来ているところですね。
私は今日は力が出ませんでした。

ps：
教会の庭にあったケーブルテレビの電源の電柱が撤去されました。
震災以来只で土地を使われていたんですよ。
まぁいいけどね。
ついでにYYのアンテナの電柱も持って行ってくれたらいいのにと
みんなが思ったのでしたがだめでした。(>_<)

では明日も続きをやりましょう！

[asutaiten 168] ペーパードーム解体前作業　2005/06/02

神田＠たかとり教会内　です。

今日も9時半にグエンさんが一番に来て作業開始。
池田さん、高木さん、川福さん、大見さん、須永さん、ルアンさん、ツェットも次々出勤。
そろそろ出勤カードを作らないといけませんねぇ。(^_-)

ペーパードームの祭壇、書見台、小聖堂の祭壇、聖櫃
そしてブロックを30ヶ、クーラーを3台　兵庫教会で使ってもらうため
グエンさんと川福さんがトラックで移動。
ペーパードーム内の照明器具をすべて撤去。
椅子も倉庫へ運ぶ。

倉庫に置かれているFMYY、ツールド、ファシルの保存資料を再整理。

旧FMユーメン放送室上の部屋（ひびちゃんとソンちゃんの愛の巣）
に入っているものをすべて取り出し、アルミサッシやドアを撤去。
震災直後にもらった緊急災害用の毛布などが出土？

今日の昼ご飯は海老とトンカツのホカ弁。
昼からは兵庫の吉岡神父も出動。

印刷室の印刷機と紙折り機をこれでもかぁと完全解体。アルミサッシと扉を撤去。
印刷室にFMYYのポスターがまだ2，3千枚ほどあるのを発見。
K太郎くんが倉庫へ移動。
しかし開局当時に作ったポスターはいつになったらなくなるのだろう。
使っても使ってもなくならない。
もしかして増殖してるのだろうかぁ。怖ぁ～。。。
その横の倉庫もすべて取り出し、扉を撤去。

作業終盤、とみちゃんが工事中の多言語の移転先案内を持ってくる。
ついでにアスタ用にゴミ箱を取りにきましたが只では帰りません。
ビールを召し上がってからアスタへお戻りになられました。

明日は雨の予定なので
ペーパードームの床ブロックをはずす作業をします。

・・曰く、、、
「普通の工務店は雨が降ったら仕事は休みやでぇ。カンダ工務店はキツイなぁ。明日はパチンコやぁ。」
「その代わり明日はスイカとアイスクリームが食べれるでぇ。」
「ほな行くわぁ。」

ps：
明日は午前9時に兵庫県知事がペーパードーム訪問。
もっちゃんは明朝はやしさんとこで散髪してからアメリカへ戻ります。

ps：
ペーパードーム解体開始予定は6月6日（月）。

[asutaiten 189] ペーパードーム解体始まる　2005/06/09

神田＠たかとり教会内　です。

大きなクレーン車が入っていた。
どうやってここまで入ってきたんだろう。
現場監督は7時には来ていた。
早いなぁ。

作業が始まる前についでにFMYYのアンテナを撤去してもらった。
ほんの30分ほどで横倒しになった。
あっと言う間のことだ。
取った後には2メートルほどの穴があいていた。
下には水がたまって井戸のようだ。
子どもだったらおぼれそう。
危ない危ない。

ペーパードームの枠の鉄骨がひとつひとつはずし始められる。
グェンさんが登場。片づけが始まった。

台湾プロジェクト関係者もぞくぞく登場。
今日はプロジェクトの会議だ。
実行委員会のメンバー、建築関係者、コンテナ関係者、
台湾からの業者、、、
持って行くものの最終確認が行われた。
結局ペーパードームの床に敷かれていたブロックは持っていかないことになった。

高木さん、グェンさん、須永さんは今日も何やら工作に励みだした。
ツェットは通訳の仕事で外出。
コウチョウは今日はビールを差し入れてくれた。

昼にカップラーメンを食べて私は本建築の業者を決める打ち合わせに司教館へ。
なかなか決まりそうにもない。
はじめだけ参加して3時にたかとりに戻る。
帰ればペーパードームはほとんど紙管だけのむき出しになっていた。

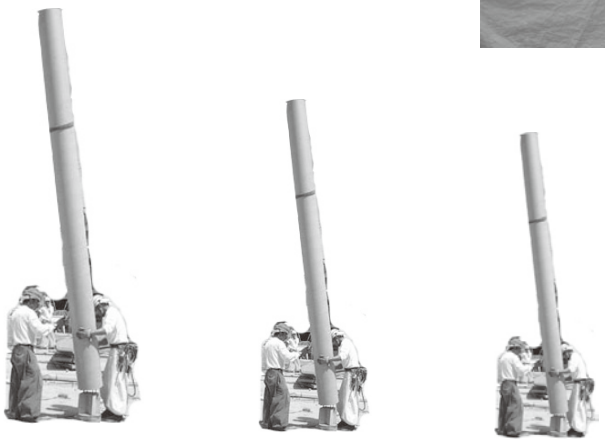
片付け隊は荒ゴミ作業の真っ最中。
川福さん、高木さん、池田さん、佐藤さん、須永さん、田辺さん、グェンさんご苦労さ～ん。
例の荒ゴミ入れは満杯になった。
さすがに今日はみんな疲れてた。

CD庫の片付けに来たK太郎くんも素通りするわけにはいかない。
片付けに参戦（させられる）。
グェンさんは敷地内のフォークリフトをチョイ借りして
みんなでペーパードーム奥の小プレハブを移設。
台所横の大きな湯沸かし機も取り外される。

一日の終わりしなに堤さんが最後を見ようと立ち寄った。
みんなのためにお菓子とパンを持ってきてくれた。

夜中に2階から庭を見た。。。なんかシーンとしてる。。。
明日はほんまにペーパードームなくなってしまうんやなぁ。

写真でつづる
”ペーパードーム、台湾へ”
その1　「解体」



[asutaiten 195] ペーパードーム解体後　2005/06/11

神田＠たかとり教会内　です。

「すみませ～ん」
朝の早くから呼びかける声が聞こえる。
また苦情か？？？
昨日のことがトラウマになっている。

「先ほど電話したものですが、トイレと家具を引き取りに来ました。」

リサイクル業者は敷地内を物色し、持って帰れるものを探し始めた。
私たちもこれまで使えるものをだいぶ確保していたのであまり持って帰れるものもない。
それでも。。。
電気器具、換気扇、椅子、机、餅臼、そして外のトイレの箱ごと。。。などなど。

「おっちゃんら、どこから来たん？」
「岡山やで」
「え～、そんな遠いところからきましたん」
「そやでぇ、連絡もろて朝早くからきたんや」
「岡山のどこですか？」
「津山の近くの山奥や」
「そうなんですか。実は私のおじいちゃんの住んでた田舎も津山の近くの勝田郡ってとこですねん」
「え～そうかいなぁ。わしらも勝田郡や」
「え～そうですかぁ。勝田郡の勝央町ってとこですねん」
「え～わしらも勝央町から来とんやで。それでどこや？」
「植月東ってとこです。周りはほとんで神田ばっかりですわ」
「植月東の散髪屋は神田っていうけど知ってるか？」
「知ってます。あの左に緩やかにカーブする手前のとこでしょ。
直接に縁はないけど、遠～い遠～い親戚かもしれません」
「そうかぁ。あそこのヤツはわしの同級生や」
「え～そうですのん。奇遇ですねぇ」
「ほんま不思議やなぁ。僕らのとこが神父さんと関係あるなんて。
いやぁ～、ほんま不思議やなぁ。これも何かの縁やでぇ。」

ほんまにビックリした。
こんなとこで田舎のローカルな話をするとは思わんかった。
勝央リサイクルセンターと言うところからきた3人だった。
その内の一人は生まれは岡山だけど震災のときは板宿に住んでて被災したらしい。
神戸に住み続けたかったけど仕事がなくて知り合いのおる
岡山へ行ったらしい。
しばらく震災の話になった。

私が田舎へ最近行ったときの写真を見せた。
滝川という川が写っていて、小さい時ヤギを散歩にここま
で連れて行った話などをした。
この川で泳いでいたときに岩で足の親指を切って今も
傷が残っていると話した。
そしたらそのおっちゃんもその川で泳いでいて足の指を切ったと言った。

昨日とは打って変わって今日は気持ちのいい午前やった。

何か毎日ドラマを見てるみたいや。
何でこんなに色んなことが起こるんやろ。
変なとこやで。このたかとりは。

たかとりリサイクルセンターのスタッフは今日も元気だ。
川福さん、高木さん、須永さん、大見夫妻、ルアンさん、
トゥオンさん、ツェット。
台所横の大きな給湯機が倉庫へ運ばれた。
以前たかとりのベトナム人たちが毎日仕事が終われば
教会に来て
庭でバレーボールをしてた時があった。
その時のネットが出てきた。
そのもつれを直してしまおうとする写真を見てると
今度はここは漁師小屋になったような感じだ。
何でも絵になるたかとりやなぁ。
ツェットは久しぶりに銀行回りと区役所へ行った。
日常業務もこなさなければならんからなぁ。
アスタで日常業務に励んでるみなさんもご苦労さん。

明日からは雨かな？

[asutaiten 200] たかとりは建物の解体だけに止まらなかった　2005/06/14

神田＠たかとり教会内　です。

日曜日はなんとブタも解体された。

朝5時にベトナム人たちはトラックで姫路に向かい
生きた大人のブタを仕入れてきた。

9時前にマリストでのミサに向かおうとして門のところまで行くと
すでに血の付いたトラックをヴィンさんが水で洗い流していた。
ブタ解体隊長はニャーさん。ハンマーで額を一撃。
首をかき切って血を出す。その血は後で料理に使われる。
えげつない話だが普段食べている肉類はみな同じで直接見ていないだけだ。

聞けばおとなしいブタで鳴きもしなかったそうだ。
ホッと一安心。（それだけが気になっていた）

勇気を持って解体現場（FMYY収録室）を覗いてみた。
仰向けになったブタのお腹が切り裂かれて腸を出しているところだった。
「うわぁ～～(>_<)」の一言だけはいて私はマリストへ向かった。

昼からは建物解体チームとブタ解体チームの二手に分かれた。
台所の2階のガールズの内装が解体された。
台所内に残っていたすべての家具も解体された。

ブタは見事に部品部品に解体された。
肉は大きく切られて味付けられ焼肉用に
肝などは事前に煮込まれた。
腸をきれいに洗って腸詰も作られた。
耳などは細かく刻まれて血と混ぜ合わされゼリー状のピザ？に。

それぞれが働いて、4時から焼肉パーティだ。
結局50人近くは来てくれた。
解体されたブタもほとんど食べつくされた。
うまかった。

虹が出た。
夕日がきれかった。
三日月も輝いていた。

締めくくりのいい記念の日になった。

月曜日も建物解体片付けは続く。

大見さん夫婦は一番乗り。
日曜日は体調を崩してブタパーティに参加できなかった。
川福さん、高木さん、須永さんも昼から参加した。
K太郎くんはCD庫の整理に来た。
千秋ちゃんも手伝っていた。

3時ごろから会議室でペーパードーム実行委員会の打ち合わせ。

何やら庭がやかましい。話ができひん。
「ガンガンガンガァ～ン！ドンドンドンドォーン！。。。。。。」
庭を見れば業者が掘削機を持ってきてパーゴラ柱の基礎部分のコンクリを砕いていた。
「お～がんばってるんやぁ。でも始める前にちゃんと言えよなぁ。」

今日のすべての作業が終わってから庭を見てみた。
コンクリの基礎は12ヶ。ほとんどがそのままだ。
よく見れば一つだけ虫歯が欠けたようになっていた。
あれだけ長いことやってこれだけ？
まぁー生懸命やってはったし。。。手ごわかったんやなぁ。。。

ps：
今日は朝の9時半から野田北部の集会所で
「うつくしいまち」パートナーシップ締結調印式が行われた。
神戸市で第一号だ。
代表のサンパツ屋の林さんと神戸市長が調印した。
その後大国公園で記念植樹が行われた。
私もTCC代表として出席した。
FMYYの取材で千秋さんも来てた。

[asutaiten 210] たかとり木材産業？ 2005/06/20

神田＠たかとり教会　です。

日曜日はマリストで3回目のミサ。
「かんちゃん、今日は作業は何するの？」とベトナム人。
「今日は特にすることはないよ」
「そんなん寂しいわぁ」
で、お知らせのときに、、、
「じゃ来れる人は片付けをしに来て下さい」

昼ごろ10人ほどが集まった。
プレハブのアルミの枠をはがす作業をした。
「庭のイチョウの木はどうするの？切らないの？」
「まだそのままにしておくよ。でも枝ぐらいは切ろうか。
じゃノコギリを買ってくる。」

アグロまでノコギリを買いに行って枝をはらうことにした。
木に登っていると、
「かんちゃん危ないでぇ。僕がやったる。」
「そうかぁ」
「あっ、かんちゃん、この木は中が腐ってるでぇ」
「え～っ？！」

イチョウの木はパッとみはきれいに葉っぱをつけていた
が木の中は腐ってパスパスになっていた。
これは危ない！

「もうこれあかんでぇ。切り倒そうか？」
「そうやなぁ」

というわけで、イチョウの木を切り倒すことになった。
片付けどころか大仕事になってしまった。
ノリがいいというか、、、計画性がないというか、、、
まぁ、たかとりらしいと言うことにしときましょう。
今日は南木曽にも負けないぐらいにみんながんばった。

震災の10年、いやそれどころか、
このたかとり教会をずっと見守ってきたイチョウの木。
片側は焼けただれて3年は葉をつけなかったが見事に復活していた。
でもやっぱり中はガタガタやったんや。
それでも私たちが再建するまで元気な姿を見せてくれてたんや。

工事が始まるとどうせ切り倒されてしまう。
せめて私たち自らの手で最後を見届けることを選んだ。
ありがとう！

そして、
先週はブタの解体だったが、今日は、、、
スッポンの解体だ！

一日の労働を終え、スッポンの鍋を囲んだ。

オタマがない、、、と思ったら、、、即席のオタマ。
コーヒーカップに割り箸を輪ゴムでくくって、
はい出来上がり。
ここは何でも手作りでできてしまうなぁ。

スッポンの血を回し飲みした。
夜寝れなかった。

[asutaiten 214] イチョウの木の妖精？　2005/06/21

神田＠たかとり教会内　です。

出席を取りますぅ、、、

川福さ～ん、、、「はぁ」
高木さ～ん、、、「へぃ」
大見さ～ん、、、「ほぃ」
須永さ～ん、、、「はい」
ツェットさ～ん、、、「アホぉ」

今日は夏至。みんなは元気に出勤だ。
比較的のんびりムードで作業は始まった。
司祭館横にあった木切れはすっかりきれいに処分された。

私は午前中はクーラーの事務所の中で久しぶりの事務仕事。
みなさんごめんね。

昼からはみんな揃ってアスタへ行った。
ツェットは印刷、高木さんと須永さんは天井に入りながらテレビの配線。
川福さんと大見さんは何してたっけ？
私はこないだのすだれが不評だったので張り直し。

居た居たぁ、ガちゃんだ。
うん？何か今日は静かやなぁ。
「かんちゃんすぐ書くから今日はしゃべれへん」

千秋ちゃんにスイカを切ってもらってみんなでおいしく頂いた。

リーフグリーンの樫村さんはキュウリを配ってた。
須永さんはキュウリをもらった、、、が、袋に入れたまま忘れてしまった。
教会に戻ってから須永さんはガちゃんに探してもらおうと電話したらしい。

しばらくしてガちゃんから私に電話がかかってきた。
「須永さんに頼まれたけど見つからないよ」
「何を探すように頼まれたの？」
「キュウリョウの入った袋らしい」
「給料？？？ちゃうよ、ガちゃん、それキュウリだよ」
「えっ？なんやぁ」

教会に長崎の人から手作り野菜がたくさん届けられた。
みんなで分けて持って帰った。
夕方高木ママが夕食を持ってきてくれた。
豆腐、鰹、ご飯に味付けめかぶ。ありがとう。

午前中は仕事しなかったので
6時からイチョウの根の掘り出し作業をした。

薄暗くなってきたとき、、、コツコツコツ、、、
門からキリスト像へ歩いて行くパンプスの音が背中で聞こえた。
キリスト像の前でしばらく立ち止まってから、、、またコツコツコツ、、、

作業をしている私の背中で音が止まった。

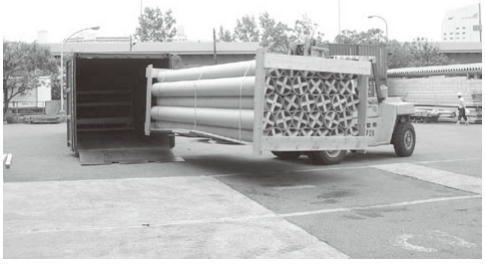
「その木をどうされるのですか？」
振り向くと黒いレースのワンピースを着た気品のある見知らぬ女性だ。
「ここにイチョウの木があったのですが切り倒したので根を取っているところです」
「えっ？そんなぁ、、、」
「もう腐っていてだめだったのです。せめてキッチリと手で取り除こうと思って」
「そうなのですか。大事にして下さっているのですね」
「はぁ、まぁ、そんなとこですけど、、、」
「ご苦労さまぁ」
「いいえぇ、どういたしましてぇ」
コツコツコツ、、、その女性は門を出て行った。

雨が降ってきたがしばらくまた作業を続けていると、
また背中で、、、コツコツコツ、、、さっきの女性だ。
「これどうぞ」。。。と言ってペットボトルの緑茶をくれた。
「がんばってください！」
「ありがとう！」

イチョウの木の妖精が降りてきたのかと思った。

ps：
明日１１時ペーパードームはコンテナに積み込まれる。
場所はポーアイ。

写真でつづる
″ペーパードーム、台湾へ″
その2　「旅立ち」



[asutaiten 320] 蟻んこ　2005/08/01

神田＠司教館　です。

昨日解体したプレハブの廃材は
今日さっそく整理され始められたそうだ。

何かテレビで見た記憶があるけど、、、
アフリカかどこかで、、
ライオンの餌食になったシマウマが、
ハイエナにも食べられ、ハゲタカにも食べられ、、、
最後に小さな蟻んこに食べつくされる。。。

何だか私たち、、そんな蟻んこになった気分だなぁ。
大きな重機には全く負けるけど、
最後までコツコツ食べ尽くす、、
そんな自然の中の一員になった気分だ。

駄菓子屋かんちゃんの準備が始まった。

（たかとり写真 by ツェット）

あとがき

たくさんの方の思いが詰まった10年誌になりました。みなさんご協力ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。たかとりで出会えたすべての人に「ありがとう！！」

おおじゆかり

10年誌の作成に携わらせていただいたおかげで、「たかとり」の歴史を知ることができました。今はこの10年誌が新しい「出会い」と「つながり」の機会になることを楽しみにしています。

かなじひろし

10年間これまで共にいて下さってほんとうにありがとうございました。みなさまの優しさが私たちの大きなエネルギー源であったことは言うまでもありません。震災で始まった「たかとりから世界へ」を大切に育ててゆくことでお世話になったみなさまのお返しとしたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

かんだひろし

この10年誌編集に関わることで、10年を振り返り、懐かしさだけでなく、多くの方への感謝の念とこれからの私の生き方を見出すことができました。

すずきみちこ

TCCに出会うまでのTCCの活動のことは、知りませんでした。今回の10周年誌のメンバーに入れさせて頂いた事で、いろんな事を知ることが出来ました。「ボランティアの皆様尊敬をしますの一言です。。。」

ツエット

たきびのセレクトをした以外はほとんど幽霊編集委員でしたが、たかとりで十年活動を続けてきた一人として、多くの人々の復興に向けた営みが記憶から記録となって伝承される喜びを感じています。

ひびのじゅんいち

取材開始は1年以上前。なのに、締め切り間際まで動かない習性ゆえ、結局、どたばたしてしまいました。登場人物に偏りがあるとすれば、私の怠惰の結果。申しわけありません。お会いした方々に伝言を託された気がしています。感謝。

みやざわしゆう

信者さん以外では、敷地内に通う中で一番古株になってしまいました。でも自分の知らないたかとりでのさまざまな出来事を、この10年誌作成で知りました。

よしとみしづよ

ありがとうございました。
10年誌編集委員一同

たかとりコミュニティセンターは、1995年の阪神・淡路大震災の際にボランティア活動の拠点となったカトリック鷹取教会内の「鷹取教会救援基地」がその前身である。

1995年1月17日、阪神・淡路大震災は、突然起こった。神戸には地震が来ないと言われていたので、多くの住民はいったい何が起きたのか、どうしたらいいのか戸惑った。この地域は外国籍の住民が全体の10%を占めている。日本語のわかる私たちでさえそうだったのだから、言葉のわからない外国人の住民の不安はおしてしるべしである。

当初、必要とされた非日常の救援活動の拠点としての役割は、震災から時間が経過するにつれて、日常的な多文化共生のまちづくりをめざして活動を展開する団体の拠点へと移り変わっていった。2000年に現在の名称「たかとりコミュニティセンター」となり、特定非営利活動法人格を取得した。

ことば、文化、民族、国籍などが違っていても、この地域で同じ住民としていっしょに新しいまちをつくることをめざし、敷地内の8つの独立した団体と、地域、教会などがネットワークを組んでセンターを構成している。このそれぞれの団体が、多言語での情報提供、教育、IT関係、高齢者・障害者の自立支援、外国人コミュニティ活動（当事者たちの自助組織として）などの独自の活動を行っているが、同時に団体同士が知恵と人材を提供し合い、協働でひとつのプロジェクトを実施する例も増えてきている。

NPO/NGOが自立した活動を展開しながら、ひとつのネットワーク組織として柔軟に機能しているたかとりコミュニティセンターのあり方は、それぞれの特徴を生かした連携活動をより発展させる形態として、活動に関わってきたメンバーたちで作り出したものである。

吉富志津代

たきび

たかとりの10年誌

ーともに生きるまちづくりのあゆみー

2005年5月28日発行
2005年9月30日改訂

編集・発行　特定非営利活動法人　たかとりコミュニティセンター
たかとり10年誌編集委員会

連絡先　多言語センターFACIL
神戸市長田区海運町3-3-8
〒653-0052
Phone. 078-736-3040
Fax. 078-731-6927
E-Mail. facil@tcc117.org

印刷・製本　㈱遊文舎

阪神・淡路大震災
10
周年記念事業

たきび

たかとりの10年誌

ーともに生きるまちづくりのあゆみー

特定非営利活動法人　たかとりコミュニティセンター